Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

【論　文】

ショナ語ゼズル方言の名詞の音調分析*

加賀谷　良　平
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

Tonal Analysis of Nouns of the Zezuru Dialect of Shona

KAGAYA, Ryohei
Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa

Shona language belongs to the Bantu languages and is spoken in the most part of Zimbabwe. The Zezuru dialect is spoken in the area around Harare.

Tonal analyses of the Shona verbs have been discussed by the author (Kagaya, 1998a & b). They resulted in that there were two types of tonal changes, i. e., one occurs on verb stems when they concatenate a sequence of prefixes, and the other on prefixes when they concatenate each other. The latter tonal changes are caused by the principle of tonal polarization.

In the case of nons, the tonal pattern of a noun stem in isolation is changed in particular contexts, depending on its underlying tonal structure. The tonal pattern of a sequence of prefixes is also changed when it concatenates its stem, but the change may not be caused by tonal polarization.

In Chapter 2 of this text, underlying forms of nouns are discussed and assumed at first. Depending on the underlying form, tonal changes of noun stems are discussed in Chapters 3 and 4. Tonal changes of noun prefixes are discussed in Chapter 5. In Chapter 6, tonal changes of complex nouns are briefly discussed. Fortune showed three types of tonal changes and called them Tonal declension I, II and III. These three types are principally the same and are discussed in this text.

In this article, two different sets of data are quoted. One was collected by Fortune before 1955 (Fortune, 1955, 1984a & 1984b) and the other by the author in 1996 and 1998 in Harare. Since the time difference between the two data is over forty years, there are some differences in their surface tonal patterns. However, there is a consistent relationship between the two sets of data. That is, surface tonal patterns of the contemporary Zezuru data are obtained by a set of tonal rules

Keywords: the Zezuru dialect of the Shona language, tonal pattens of nouns, polarity phenomenon in nouns, tonal rules, tonal changes in various circumsatances

キーワード：ショナ語ゼズル方言，名詞音調形，名詞中のポラリティー現象，音調変化規則，様々な環境

* 本稿の資料は，著者を研究代表者とする文部省科学研究費補助金国際学術研究（学術調査）による「南部アフリカ地域の諸言語の言語学的記述・比較研究」(1994–1996) の一環として収集した。文部省はじめ関係各位に謝意を表する。

"A+α", where A is a set of tonal rules found in the Fortune data and "α" is a set of diachronic rules between two sets of data (Kagaya, 1998a & b).

1. はじめに
2. 名詞の孤立環境での音調形
3. 繫辞文での名詞の音調変化
3.1. Fortune 資料の再検討
3.1.1. ゼロ接辞名詞の音調変化
3.1.2. 有接辞名詞の音調変化
3.2. 現代ゼズル方言資料の分析
3.2.1. ゼロ接辞名詞の音調変化
3.2.2. 有接辞名詞の音調変化
4. 名詞語幹の音調変化の起生条件
4.1. クラス接辞以外の前接辞
4.2. 語幹が高音調型の場合
4.3. 語幹が低音調型の場合
4.3.1. ゼロ接辞名詞の場合
4.3.2. 有接辞名詞の場合
5. 前接辞の音調変化
5.1. 名詞クラス接辞
5.2. 所有接辞
5.3. 所有者接辞
6. 複合名詞の音調形
7. まとめと議論
7.1. 音調規則のまとめ
7.2. 音調変化と残された問題

略 号

(C)V́ : 高平ら音調
(C)V : 低平ら音調
(C)V : アクセント音節
o : 音節
o : アクセント音節
[_]$^{\text{N. Stem}}$: 名詞語幹
cop : 繫辞
N. Cl. Pre : 名詞クラス接辞
cl : 名詞クラス接辞
pos : 所有接辞
zeronoun : ゼロ接辞名詞
stem : 名詞語幹
ow : 所有者接辞
sth : something

1. はじめに

ショナ語はバントゥ諸語に属し，南部アフリカのジンバブェ国で話されている。そのゼズル方言は首都ハラレを中心としたジンバブェ国中部の方言である。ショナ語ゼズル方言の動詞の音調形についてはこれまで幾つかの議論がなされてきたが，名詞の音調形についてはほとんど議論されていない。本稿ではその名詞の基底形を論じ，それに基づいて名詞の音調変化を論ずる。

名詞は名詞クラスを示す前接辞（以降，クラス（前）接辞と呼ぶ）と語幹からなる。クラス接辞にはそのセグメントがゼロであるものとゼロでないものがある。本稿では前者をゼロ接辞名詞，後者を有接辞名詞と呼ぶ事にする。繫辞文は，繫辞を示す前接辞（繫辞接辞）が名詞に前接して造られる。また，クラス前接辞の前に，繫辞以外の接辞が前接する事がある。これらの接辞には，「クラス接辞–名詞語幹」に前接し，「クラス接辞–名詞語幹」が所有するものを表わす接辞がある。本稿ではこれを所有接辞と呼ぶ事にする。他にも，「クラス接辞–名詞語幹」を所有するものを表わす接辞があり，本稿ではこれを所有者接辞と呼ぶ事にする。これらの繫辞，所有接辞と所有者接辞の一部はその基底音調として高平ら音調（H）を持ち，それに直続

する名詞の表面音調形を変化させる。

名詞語幹に複数の接辞が前接する場合に，名詞の音調変化に加え，幾つかの前接辞もその音調を変化させることがある。複数の要素から成る動詞前接辞も，その語幹に対して“extra tonality”（Pulleyblank, 1986）であり，その音調列は主としてポラリティ規則によって決定されていた（加賀谷, 1998a & b)。名詞の場合も，その複数から成る前接辞要素の音調列はポラリティ現象を考慮しながらその音調変化を考えねばならない。

本稿では二つの資料を用いる。その一つは1955年以前に収集されたと思われるFortuneによるゼズル方言資料（以降Fortune資料と呼ぶ）（Fortune; 1984a & b）であり，もう一つは筆者が1999年にハラレ市を中心に収集した現代ゼズル方言資料である。現代ゼズル資料のインフォーマントはMr. Jewakim Fotiで，母語であるショナ語ゼズル方言以外に英語を話す。彼は1976年にハラレ市の西南60Km程のMashonalannd West Province, Chegutu distcict, Mhondoro村で生まれ，1994年までこの村で過ごし，1995年以降ハラレ市に滞在している。彼の両親は各々異なるトーテムに属するが，この地域で生まれ育ったショナ語ゼズル方言の話し手である。Fortune資料のインフォーマント及びその出身地域などは不明である。

動詞音調形の分析において明らかになったように（加賀谷, 1998a & b)，名詞の場合にも両資料の表面音調形には“A>A+α”の関係が存在すると仮定する。ここで“A”はFortune資料での表面音調形であり，それに経年変化分“α”が加わり，現代ゼズル方言の表面音調形“A+α”が生じた考える。

以降2章では，まずFortune資料での名詞音調形の基底形を議論する。ゼズル方言の名詞の表面音調形は，語幹が1音節からなる場合には異なる2音調形が現れ，語幹が2音節では4音調形，3音節では8音調形が現れ（Fortune, 1984a)，一見いわゆる非限定型に見える（Pike, 1948; Voorhoeve, 1973)。しかし，ショナ語の特徴であるポラリティ現象を導入して，これらを少数の基底音調とアクセントの位置から捉えなおすことにより，いわゆる限定型と解釈できることを示す。その基底形を基にして，名詞語幹の音調変化を3章と4章で論ずる。5章では，前接辞の音調変化，具体的には様々な環境での前接辞の音調変化をポラリティ現象を考慮しながら論ずる。

2.　名詞の孤立環境での音調形

ショナ語ゼズル方言の名詞は，他のバントゥ諸語と同じように，「(名詞）クラス前接辞-語幹」からなる。名詞クラス前接辞の音調形は名詞クラスによらず低音調で現われ[1]，語幹の音調形は様々である。孤立環境での，語幹が4音節までの名詞音調形を（1）に示す。なお，語幹が2音節からなる名詞が圧倒的に多く，また語幹が4音節以上の名詞は極めて少数である。（1）の表のなかで，“？”はその存在が期待される音調形であるが，見つかっていないものを示す。

1)　所有者前接辞の内nyaはLであり，またsaはHである。

(1) 孤立環境での普通名詞の音調形

高音調型

H1:	mu-shá	mu-sóró	chi-píkírí	ma-péndékété
	(village)	(head)	(nail)	(shoulders)
H2:		chi-púnu	chi-kwéreti	ma-fáfitera
		(spoon)	(debt)	(windows)
H3:			mu-pímbíri	?
			(shin)	
H4:				mu-túngámíri
				(leader)
HL1:			mu-shénjeré	?
			(bamboo)	
HL2:				mu-tútángoró
				(dung-beetle)

低音調型

L1:	mu-nhu	mu-romo	chi-bhakera	-mhiripiri
	(person)	(mouth)	(fist)	(pepper)
L2:		mu-shongá	-hukwáná	?
		(medicine)	(chicken)	
L3:			chi-gondorá	?
			(heifer)	
L4:				?
LH1:			ma-gokóra	ma-zongóroro
			(elbows)	(millipedes)
LH2:				ma-kotapeya
				(avogados)

上の語幹の音調形を見ると，人によって様々な基底形を考えるだろう。いわゆる非限定型の音調形と考え（Pike, 1948; Voorhoeve, 1973），分析を放棄する人もいるだろうし，アクセントと六つの型の基底音調（ベーシックトーン（BTs））から考える人もいるだろう。しかし，本稿ではアクセントの位置（以降，アクセントの有る音節を本稿ではアクセント音節と呼ぶ事にする）と基底音調の型に加え，ショナ語の特徴をなす音調的ポラリティ現象（Fortune, 1984a & b; 加賀谷, 1998a & b, 1999）を考慮して次のように考えることにする。まず，基底音調として，H，L，HL，LH の四つを仮定する。これらの基底音調はその要素（形態素）に指定され，次のようにその要素内のトーンベアリングユニット（TBU）と連結する。

(2) 基底音調と TBU との連結に関する仮定（Association Convention）

2a. 基底音調の最初のトーンはアクセント音節に連結する。

2b. 基底音調が二つのトーンからなる場合には，二番目のトーンはアクセントのある音節の次の音節と連結する。

2c. アクセント音節以前の音節には最初の基底音調が連結する。

2d.　最後のトーンと連結した音節の後に更に音節が有る場合，それらの音節は，最後のトーンの直後に新たに導入される最後のトーンと反対のトーンと連結する。

上の 2c は基底音調のその要素内（形態素内）での左への拡張（spreading）であり，2d はポラリティ現象を導入した部分であり，この導入により，HLH や LHL のトーンメロディは不要となり，四つの BT で説明できる（なお，以降（2）を Association Convention と呼び，“AC”と簡略表記することがある）。

次に，語幹の基底音調とアクセントの位置を示す。なお，(?) は現在のところ見つかってはいないが，その存在が期待される音調形である。また，BT の列は基底音調を示す。

(3) 名詞語幹の基底音調とアクセントの位置

	BT				
高音調型					
H1:	H	-o	-oo	-ooo	-oooo
H2:	H		-oo	-ooo	-oooo
H3:	H			-ooo	?
H4:	H				-oooo
HL1:	HL			-ooo	?
HL2:	HL				-oooo
低音調型					
L1:	L	-o	-oo	-ooo	-oooo
L2:	L		-oo	-ooo	?
L3:	L			-ooo	?
L4:	L				?
LH1:	LH			-ooo	-oooo
LH2:	LH				-oooo

次に（2）を用いて，幾つかの孤立形音調形の誘導例を示す。なお，“>”の後の括弧内はその変化を起こした規則類を示す。

(4) AC を用いた孤立音調形の誘導例

高音調型

H1:　chi-pikiri > (2a, 2c) chi-píkírí (nail)
　　L　H

H3:　chi-kwereti > (2a) chi-kwereti > (2d) chi-kwereti = chi-kwéreti (debt)
　　L H　　L H　　L H L

HL1:　mu-shenjere > (2a) mu-shenjere > (2d) mu-shenjere = mu-shénjeré (bamboo)
　　L H L　　L H L　　L H LH

低音調型

L1: chi-bhakera＞(2a, 2c) chi-bhakera＝chi-bhakera (fist)
L L　　L L

L2: chi-shonga＞(2a, 2d) chi-shonga＝mu-shongá (medicine)
L L　　L L H

LH1: ma-gokora＞(2a, 2d) ma-gokora＝ma-gokóra (elbows)
L L H　　L LHL

LH2: ma-zongororo＞(2a, 2d) ma-zongororo＝ma-zongóroro (millipede)
L L H　　L L H L

3. 繫辞文での名詞の音調変化

3.1. Fortune 資料の再検討

ショナ語の繫辞文は「繫辞–名詞」で表わされる。繫辞の音形は名詞クラスにより異なり，クラス 1a の名詞では“ndi”，クラス 5，9，10では“i”をとる。即ちゼロ接辞名詞の場合では(C)V であり，その基底音調は H である。その他のクラスの名詞，即ちクラス接辞が“CV”からなる有接辞名詞では，繫辞のセグメントはゼロであるがその基底音調は H である。

(5) 繫辞

名詞クラス 1a	ndi (H)[2]
名詞クラス 5，9，10	i (H)
その他の名詞クラス	ϕ (H)

現象論的観点から，Fortune (1984a) は ndi (H) によるクラス 1a の名詞の音調変化を Tonal declension I (TDI) と呼び，それ以外のクラスの名詞の音調変化を Tonal declension II (TDII) と呼んで区別しているが，音調変化はそのものは同質である (Fortune, 1984a, pp.136～140)。更に言えば，Fortune (1984a) はこれらの音調変化に対する音調論的な分析を行っていない。

Fortune (ibid) は名詞の語幹音調が L，LL，LLL，LLH である音調形，即ち L だけからのもの，また語幹頭と語幹次頭音調が LL であるものを L tonal pattern と呼び，これら以外のもの全てを H-tonal pattern と呼んだ。そして，その分類にしたがって資料を記述しているが，この分類に基づく分析は妥当であるとは言い難く，むしろ音調分析をミスリードしがちである。本稿では Fortune の定義とは異なり，「語幹が L で始まる音調形を低音調型」，また「語幹が H で始まる音調形を高音調型」と呼ぶこととし，この新たな分類に従って音調変化を提示す

2) Fortune はこれらの異音形として / ha (H)，nda (L)，nda (H)，nde (H)，nde (L)，ndo (H)，ndo (L)/ なども記述している。

ることにする。なお，繋辞文での名詞の音調変化は高音調型と低音調型では異なる。

3.1.1.　ゼロ接辞名詞の音調変化

(6) に Fortune 資料での前接辞を持たない名詞の場合の「繋辞＋名詞」の音調形を示す。“＞”の左が繋辞と名詞各々の孤立音調形であり，“＞”の右が繋辞文でのそれらの音調変化形である（Fortune, 1984a, pp.136–140)。“＋”記号の前の H は繋辞“ngi, i”の基底音調の H であり，“＋”以降が名詞語幹の音調形である。

(6) 名詞クラス 1a，5，9，10（前接辞 CV- を持たない名詞）での音調変化

高音調型：

6a. H＋H＞H＋L, H＋HH＞H＋LL, H＋HHH＞H＋LLL

6b. H＋HL＞H＋LL, H＋HHL＞H＋LLL

6c. H＋HLL＞H＋LLL

6d. H＋HLH＞H＋LLH

低音調型：

6e. H＋L＞H＋H, H＋LL＞H＋HL, H＋LLL＞H＋HLL

6f. H＋LH＞H＋LH, H＋LLH＞H＋HLH

6g. H＋LHH＞H＋LHH

6h. H＋LHL＞H＋LHL

始めに高音調型の音調変化について述べる事にする。高音調型では，(2) に仮定した語幹の基底形を用いると，次に示す二つの現象即ち基底音調のポラリティ的変化とアクセント移動により，各々の音調変化を説明できる。

まず，ポラリティ的変化について言えば，繋辞 ndi，i の基底音調 H に対して名詞語幹の基底音調がポラリティ的に変化を受けたと考えられる。即ち，H＞L，HL＞LH と語幹の基底音調が変化する。アクセント移動についていえば，名詞語幹のアクセントの位置は，その基底音調が一つならば語幹末音節へ，基底音調が二つからなる場合には語幹次末音節まで移動する。この音調変化を（7）にその起生環境を（8）に表わしておく。

(7) 繋辞による高音調型名詞語幹の音調変化

7a. $H > L \ / \ [\_]^{N.\ Stem}$

7b. $HL > LH \ / \ [\_]^{N.\ Stem}$

また，語末音節以外の位置にアクセントが有れば，アクセントを語末音節に移動。

(8) 高音調型名詞語幹の音調変化の起生環境

高音調型名詞語幹の音調変化（7）は次の環境で起こる。

$\#[H]^{X}+[\_]^{N.\ Stem}\#$，但し X＝Cop。

（7）を用いて，(6) の音調変化の例を以下に示しておく。なお，要素が 1 音節からなる場合のアクセントの位置は定まっているので，本稿の例文からは省略することにする。また，以下の例文は Fortune（1984a, pp.136–140）からのものである。

(9) ゼロ接辞名詞の高音調型の音調形誘導

9a. 基底形が H1 の場合

ndi-Mvura＞(7a) ndi-Mvura＞(AC) ndí-Mvura (he is Mr. Water)
H H H L

9b. 基底形が H2 の場合

ndi-tezvara＞(7a) ndi-tezvara＞(AC) ndí-tezvara (he is my father-in-law)
H H H L

9c. 基底形が HL1 の場合

ndi-nevanje＞(7b) ndi-nevanje＞(AC) ndí-nevanjé (he is the first-borne)
H H L H L H

上の例から明らかなように，名詞語幹の基底音調が H で始まる場合，その前に位置する繋辞の基底音調 H により名詞語幹の基底音調はそれ以前とは反対の音調をとると同時に，基底音調の数によって特定の音節へのアクセント移動が起こる。

低音調型の場合の音調変化は高音調型より少し複雑のようである。まず，語幹が 2 音節以上で，アクセントが語幹頭音節に位置する場合，即ち L2 型，LH1 型では如何なる音調変化も起こらず，(2) に従ってその音調形が定まる。例を示す。

(10) ゼロ接辞名詞の低音調型で語幹頭音節がアクセント音節の場合の音調誘導

10a. ndi-baba＞(2a, 2d) ndí-babá (he is my father)
H L

10b. ndi-Dengwana＞(2a, 2d) ndí-Dengwáná (he is Mr. Basket)
H L

10c. ndi-Karoi＞(2a, 2d) ndí-Karói (it is the Karoi river)
H L H

(10) 以外の低音調型，即ち語幹が 1 音節（その音節に必ずアクセントがある）の場合と，アクセントが語幹頭音節にない場合には (9)，(10) には異なる次のような音調変化が起こる。例を示す。

(11) 語幹 1 音節語を除くアクセントが語幹頭音節に位置しない場合

11a. ndi-Go＞ndí-Gó (he is Mr. Hornet)
H L

11b. ndi-mambo＞ndí-mámbo (he is a chief)
H L

11c. ndi-Harahwa＞ndí-Hárahwa (he is Mr. old man)
H L

11d. ndi-chiremba＞ndí-chírembá (he is a doctor)
H L

(11) に起きている音調変化は，“ndí-” の H が語幹頭へ拡がったと見ることも出来る。筆

者はこの考えに反する資料を Fortune 資料の中に見つけていないが，この語幹頭が H になる現象は，後に示すように（4.3. 参照），名詞前接辞が L である場合にも起こるので，“ndí-” の H の右への拡がり（H-spreading）では説明できない。

そこで，その表面音調形に対応する基底音調形とアクセント音節を考えると，次のような変化が起こって，その音調表面形が誘導されたと考える事が出来る。

(12) 語幹 1 音節語を除くアクセントが語幹頭音節に位置しない場合の音調変化

12a. ndi-Go > ndi-Go > ndí-Gó (he is Mr. Hornet)
H L H H

12b. ndi-mambo > ndi-mambo > ndí-mámbo (he is a chief)
H L H H

12c. ndi-Harahwa > ndi-Harahwa > ndí-Hárahwa (he is Mr. old man)
H L H H

12d. ndi-chiremba > ndi-chiremba > ndí-chírembá (he is a doctor)
H L H H L

(7) の基底音調の変化は dissimilation 的変化であるが，上の音調変化はその反対の assimilation 的変化である。また，この音調変化と同時に起こるアクセントの移動は (7) と反対の方向，即ち左方向へ移動する。この変化を次のように記しておく。なお，(13) が起生する環境も高音調型と同じ (8) である。

(13) 繋辞による低音調型名詞語幹の音調変化

13a. $[(o^n)\ o] > [o\ (o^n)]\ /\ [\_]^{N.\ Stem}$
[L] [H]

但し，但し，$n \geqq 0$

または

13b. $[o^m\ o\ o^n] > [o\ o^{m+n}]\ /\ [\_]^{N.\ Stem}$
[L] [HL]

但し，$m, n \geqq 1$

式 (13) を用いた例 (12) の誘導例を以下に示す。

(14) 低音調型での音調変化

14a. ndi-Go > (13a) ndi-Go > (AC) ndí-Gó (he is Mr. Hornet)
H L H H

14b. ndi-mambo > (13a) ndi-mambo > (AC) ndí-mámbo (he is a chief)
H L H H

14c. ndi-Harahwa > (13a) ndi-Harahwa > (AC) ndí-Hárahwa (he is Mr. old man)
H L H H

14d. ndi-chiremba > (13b) ndi-chiremba > (AC) ndí-chírembá (he is a doctor)
H L H H L

3.1.2. 有接辞名詞の音調変化

有接辞名詞の場合の繋辞は“ϕ (H)”であり，セグメントはゼロだが基底音調Hを持つ。この場合に起こる音調変化は，まず基底音調Lを持つクラス接辞の音調がHに変わる。名詞語幹にも音調変化が起こるが，この音調変化はゼロ接辞名詞での音調変化（7）と完全に同一である（Fortune, 1984a, p.139)。

クラス接辞の音調変化は，そのセグメントに繋辞のフローティングトーンHが連結し，その結果，もともとそれに連結していた基底音調Lが消失して，結果的にクラス接辞がHとなると考える。さらに，ゼロ接辞名詞の場合と同じように，この語幹直前のHが語幹の音調を変化させると考える。即ち，語間が高音調型では（7)，低音調型では（13）の音調変化が起こったと考えられる。

繋辞のフローティングトーンHによって起こる前接辞の基底音調の消失を次のように表わしておく。

(15) 繋辞のフローティングトーンHによるクラス接辞の音調変化

$$\underset{\underline{H}[L]}{[o]^{N.\,Pre}} > \underset{[H]}{[o]^{N.\,Pre}} \;/\; \#\#\_$$

ここで（7）と（13）が起生する，これまでの環境条件を次のようにまとめておく。

(16) 高音調型語幹の音調変化の起生環境

高音調型名詞語幹の音調変化（7）は次の環境で起こる。

$\#[H]^{X}+[\_]^{N.\,Stem}\#$，但しX＝Cop / N. Cl. Pre。

(17) 低音調型語幹の音調変化の起生環境

低音調型名詞語幹の音調変化（13）は次の環境で起こる。

$\#[H]^{X}+[\_]^{N.\,Stem}\#$，但しX＝Cop / N. Cl. Pre。

以下に（7)，（13)，（15）による有前接辞名詞の音調変化の誘導例の幾つかを示す（参照，Fortune, 1984a, pp.139–140)。

(18) 有前接辞名詞の（7)，（13)，（15）による誘導例

高音調型

18a. ϕ-ma-zvi＞(15) ma-zvi＞(7a) ma-zvi＝má-zvi (they are words)
H L H　H H　H L

18b. ϕ-mu-rume＞(15) mu-rume＞(7a) mu-rume＝mú-rume (he is a man)
H L H　H H　H L

18c. ϕ-mu-sikana＞(15) mu-siana＞(7b) mu-sikana＝mú-sikaná (she is a girl)
H L H L　H H L　H L H

18d. ϕ-mu-tugungoro＞(15) mu-tugungoro＞(7b) mu-tugungoro＝mú-tugungoró
H L H L　H H L　H L H

(it is a dung-beetle)

低音調型

18e. ϕ-mu-nhu > (15) mu-nhu > (13a) mu-nhu = mú-nhú (it is a person)
H L L　　H L　　H H

18f. ϕ-mu-tauro > (15) mu-tauro > (13a) mu-tauro > mú-táuro (it is a speech)
H L L　　H L　　H H

18g. ϕ-zi-ndarama > (15) zi-ndarama > (13b) zi-ndarama = zí-ndáramá
H L L　　H L　　H HL

(it is a big piece of gold)

18h. ϕ-mu-Zezuru > (15) mu-Zezuru = mú-Zezúru (it is a Zezuru person)
H L L H　　H L H

以上のように，これまでに述べたFortune資料での名詞の音調変化は，動詞の前接辞の場合と同じように，(7) と (13) の語幹の音調変化及び (15) の繋辞の音調により説明できるのものである。

3.2. 現代ゼズル方言資料の分析

現代ゼズル方言の名詞音調形はFortune資料のそれらと基本的には同一であるが，(a) Fortune資料では明記されていないのだが，現代ゼズル方言にはデプレッサー子音の音調への影響が明瞭に起きている。具体的にいえば，音韻レベルでの高音調を持つ非デプレッサー子音で始まる音節（非デプレッサー音節）は音声レベルでは高平ら調で現れ，デプレッサー子音で始る音節（デプレッサー音節）は音声レベルでは低からの上昇調で現れる。(b) 現代ゼズル方言はFortune資料より40年以上経ているので，その間の経年変化が起きている。これらの経年変化は動詞活用形で論じており（加賀谷 1998b, 1999），そのうちの名詞に関するものは主として次の三つの音調変化である。

(19) 現代ゼズル方言での経年変化

H spreading

P1: $\$ \rightarrow \acute{\$} \,/\, \acute{\$}\_\acute{\$}$; $\$$=syllable; $\$$=[-d]

Initial H deleating

P2: $\mathrm{H} \rightarrow \mathrm{L} \,/\, \#(\mathrm{L})^{n}\,[\_]+[^{\mathrm{N.\ Stem}}\ \mathrm{H}$; n=0, 1, 2, 3, ...
[-d]

H spreading to left (p1aと3bは相補的規則)

p1a: $\mu \rightarrow \acute{\mu} \,/\, [\acute{\mu}][\_][\mu]$;
[-d][-d][-d]

P3b: $[\ \check{\mu}\ ][\mathrm{X}] \rightarrow \mu\acute{\mu} \,/\, \_\ \ldots$; $\mathrm{X}=\acute{\mu} \,/\, \mu$
[+d][-d]

但し，μ=mora, +d=depressor, -d=nondepressor

Fortune資料で論じた音調論的規則群 (7)，(13) のアウトプットを音調論的アウトプットと呼び，音調論的アウトプットをインプットとする経年変化の規則群 (19) のアウトプットを表面音調形と呼ぶことにする。名詞語幹の基底形は (3) であり，またクラス接辞の基底音調

はLで，現代ゼズル方言の名詞基底形もFortune資料での名詞基底形と完全に同一である。

繋辞は（5）に示したとおりであり，現代ゼズル方言でもクラス接辞の有無と名詞クラスにより異なっている。

3.2.1. ゼロ接辞名詞の音調変化

以下に（7），（13），（15）と（19）による現代ゼズル方言の表面音調形の幾つかの誘導例を示す。但し，（a）語幹音節数が3以上のH1型，即ち語幹末音節がアクセント音節であるもの（孤立音調形に於て語幹の全音節がHで現れるもの），（b）語幹音節数が3以上で基底音調がHであり，かつ語幹頭音節がアクセント音節であるもの（即ち，孤立音調形に於て語幹頭音節だけがHで他は全てLであらわれるの）はFortune資料とは異なる音調変化を起こすので，次の誘導例からは除いておく。また，現代ゼズル方言での繋辞“ndi-”は，Fortune資料とは異なり，デプレッサー音節である。なお，以降デプレッサー音節はイタリックで示すことにする。更に，低音調型のL2型とLH1型では，経年変化（19）は起こるが，その定義より音調変化（13）が起こらないので，本文からはその誘導を省いておく[3]。

（20）現代ゼズル方言のゼロ接辞名詞の表面音調形の誘導（但し，上の（a），（b）を除く）

高音調型

20a. *ndi*-she＞(7a) *ndi*-she＝ndǐ-she (he is a chief)
H H　　H L

20b. *ndi*-tenzi＞(7a) *ndi*-tenzi＝ndǐ-tenzi＞(P3b) ndi-ténzi (it is Load)
H H　　H L

20c. i-jira＞(7a) i-jira＝í-jira (it is a cloth)
H H　　H L

20d. *ndi*-nevanji＞(7b) *ndi*-nevanji＝ndǐ-nevanjí＞(P3b) ndi-névanjí (it is a first-born)
H H L　　H L H

20e. i-gunguwo＞(7a) i-gunguwo＝í-gunguwo (it is a crow)
H H　　H L

20f. i-shirikazi＞(7a) i-shirikazi＝í-shirikazi (it is a widow)
H H　　H L

低音調型

20g. i-n'a＞(13a) i-n'a＝í-n'á (it is a crack)
H L　　H H

---

3) 低音調型のL2型ではその定義より音調変化（13）が起こらないが，経年変化（19）が起こる事もある。以下にL2型の誘導例を示す。

ndi-baba＝ndǐ-babá＞(P3b) ndi-bábá (he is a father)
H L

i-hwiriti＝í-hwirítí (it is the green pigeon)
H L

ndi-sekeru＝ndǐ-sekéru＞(P3b) ndi-sékéru (it is an uncle)
H L H

i-*zo*ngororo＝í-zongóroro (it is the millepede)
H L H

20i. ndi-mambo＞(13a) ndi-mambo＝ndǐ-mámbo＞(P3b) ndi-mámbo (it is a chief)
H L H H

20k. i-dendere＞(13b) i-dendere＝í-dénderé＞(P2) i-dénderé＞(P1) i-déndéré (it is a nest)
H L H H L

20l. i-mbereko＞(13a) i-mbereko＝í-mbéreko＞(P2) i-mbéreko (it is a baby sling)
H L H H

20n. i-mbambaira＞(13a) i-mbambaira＝í-mbámbaira＞(P2) i-mbámbaira (it is a sweet potato)
H L H H

H1 型即ち孤立環境で語幹音節が全て高く現われる型（参照（1））は，Fortune 資料では“HHH＞LLL”と現われるが，現代ゼズル方言では“HHH＞LLH, HHHH＞LLLH”の音調形で現われる（なお，Fortune 資料には語幹が 4 音節以上の例は示されていない）。これは現代ゼズルでもその基底音調の変化は（7a）と同一であるが，アクセント移動が Fortune 資料のそれとは少し異なっているためと考えられる。以下にその変化の例を示す。

(21) 現代ゼズル方言のゼロ接辞名詞高音調型の H1 型でのアクセント移動

21a. i-bakatwa＞(X) i-bakatwa＝í-bakatwá (it is a sword)
H H H L

21b. *ndi-Gu*nyana＞(X) *ndi-Gu*nyana＝ndǐ-Gunyaná (it is September)
H H H L

21c. i-bendekete＞(X) i-bendekete＝í-bendeketé (it is a shoulder)
H H H L

上のアクセント移動“X”は語幹が 2 音節以下では決して起こらない。また，複合語（後述）の第一語幹が 3 音節以上の H1 型の場合にも決して起こらない。例を示す。

(22) ゼロ接辞名詞高音調型の H1 型でのアクセント移動が起こらない場合

22a. i-jira＞(7a) i-jira＝í-jira (it is a cloth)
H H H L

22b. i-kokota-*ha*ni＞(7a) i-kokota-*ha*ni＝í-kokota-hání (it is a thumb)
H H H H L H

(21) と (22) より，アクセント移動“X”は「ゼロ接辞名詞高音調型の H1 型で，その語幹が 2 音節以上からなる場合には，アクセントは次末音節に移動する」と記述できる。これを考慮して，(7a) のアクセント移動を次のように表わしておく。

(23) 現代ゼズル方言の場合の (7a) のアクセント移動

語末音節以外の位置にアクセントが有れば，アクセントを語末音節に移動。但し，語幹音節数が 3 以上の H1 型（基底音調が H で，かつ語幹末音節がアクセント音節）の場合には，次末音節にアクセントを移動する。

語幹音節数が3以上のH2型（基底音調がHで，かつ語幹頭音節がアクセント音節）即ち孤立環境で“HLL, HLLL, ...”の音調形をとる語幹（参照（1））だけは二つの音調形で現われることがある。例えば，“komichi”（cup）は“í-komichi～i-kómichi”と，また“fafitera”（window）は，“í-fafitera～i-fáfitera”等と現われる。これは，このような基底形に対して（7a）の適用が任意であり，さらに現代ゼズルの経年変化“P2”が適用されていると考えれば理解できる（参照（19））。これらの誘導例を次に示す。

(24) ゼロ接辞名詞での（7a）適用の任意性の例

24a. i-komichi＞(7a) i-komichi＝í-komichi (it is a cup)
H H　　H L

24b. i-komichi＝í-kómichi＞(P2) i-kómichi (it is a cup)
H H

24c. i-fafitera＞(7a) i-fafitera＝í-fafitera (it is a window)
H H　　H L

24d. i-fafitera＝í-fáfitera＞(P2) i-fáfitera (it is a window)
H H

上の例で示した（7）の適用の任意性を次のように表しておく。なお，これは後述するように有接辞名詞でも成立するので，特にゼロ接辞名詞とは断らないでおく。

(25) 語幹音調変化（7）の適用の任意性

現代ゼズルでは語幹音節数が3以上のH2型（基底音調がH，かつ語幹頭音節がアクセント音節）に対してのみ（7）の適用は任意である。

3.2.2. 有接辞名詞の音調変化

零前接辞名詞の音調変化と同一で，基本的にはFortune資料の音調形に（19）に示した経年変化が加わるだけである。

(26) 有接辞名詞高音調型の音調誘導例

26a. φ-*dzi*-mba＞(15) *dzi*-mba＞(7a) *dzi*-mba＝dzǐ-mba (they are houses)
H L H　　H H　　H L

26b. φ-ma-chira＞(15) ma-chira＞(7a) ma-chira＝má-chira (they are clothes)
H L H　　H H　　H L

26c. φ-mu-tsago＞(15) mu-tsago＞(7a) mu-tsago＝mú-tsago (it is a pillow)
H L H　　H H　　H L

26d. φ-mu-pimbiri＞(15) mu-pimbiri＞(7a) mu-pimbiri＝mú-pimbiri (it is a shin)
H L H　　H H　　H L

26e. φ-tu-mbudzana＞(15) tu-mbudzana＞(7b) tu-mbudzana＝tú-mbudzaná (they are young goats)
H L HL　　H HL　　H LH

ゼロ接辞名詞の場合と同じように，H1型すなわち孤立形でその名詞語幹が“HHH,

HHHH”の場合の音調変化は，Fortune 資料とは異なるアクセント移動，即ち（23）の移動を起こす。

（27）現代ゼズル方言のゼロ接辞名詞 H1 型のアクセント移動

27a. *ϕ*-chi-pikiri＞(15) chi-pikiri＞(7a) chi-pikiri＝chí-pikirí (it is a nail)
H L H　H H　H L

27b. *ϕ*-ma-pendekete＞(15) ma-pendekete＞(7a) ma-pendekete＝má-pendeketé (they are shoulders)
H L H　H H　H L

語幹音節数が 3 以上の H2 型（基底音調が H で語幹頭音節がアクセント音節）である場合，即ち“HLL, HLLL, ...”の孤立音調形を持つ語幹には，（25）に示したように，（7）の適用が任意であり，従って二つの音調形が現われる。

（28）有接辞名詞での（25）の有効例

28a. *ϕ*-ma-tapiri＞(15) ma-tapiri＞(7a) ma-tapiri＝má-tapiri (they are Irish-potatos)
H L H　H H　H L

28b. *ϕ*-ma-tapiri＞(15) ma-tapiri＝má-tápiri (they are Irish-potatos)
H L H　H H

28c. *ϕ*-*zvi*-kwereti＞(15) *zvi*-kwereti＞(7a) *zvi*-kwereti＝zvǐ-kwereti (they are debt)
H L H　H H　H L

28d. *ϕ*-*zvi*-kwereti＞(15) *zvi*-kwereti＝zvǐ-kwéreti (they are debt)
H L H　H H

上の（28b），（28d）の各々で P2，P3b 現象が決して起こらない。ここで，もし P2，P3b 現象が起これば，その音調形は孤立環境での名詞自身の音調形“ma-tápiri, zvi-kwéreti”と同一となるであろう。従って，繋辞文であることを示すために，発話者が意識的に P2，P3b 現象を起こさせなかったと解釈する。

低音調型でも基本的に Fortune 資料での音調変化と同一である。以下に幾つかの誘導例を示す。

（29）有接辞名詞低音調型の音調誘導例

29a. *ϕ*-mu-*nhu*＞(15) mu-*nhu*＞(13a) mu-*nhu*＝mú-nhǔ (he is a person)
H L L　H L　H H

29b. *ϕ*-ma-dandadzi＞(15) ma-dandadzi＞(13a) ma-dandadzi＝má-dándadzi＞(P2) ma-dándadz
H L L　H L　H H
(they are cobwebs)

29c. *ϕ*-mu-shonga＞(15) mu-shonga＝mú-shongá＞(P1) mú-shóngá (it is a medicine)
H L L　H L

29d. *ϕ*-ma-rerero＞(15) ma-rerero＝má-reréró＞(P1) má-réréró (it is a way of rearing)
H L L　H L

29e. ϕ-mu-farinya＞(15) mu-farinya＝mú-farínya＞(P1) mú-fárínya (it is a cassava)
H L LH H LH

4. 名詞語幹の音調変化の起生条件

動詞では，その語幹の前に多くの接辞が前接する。この場合，前接辞の音調形は主としてポラリティ規則で決定され，前接辞群と動詞語幹の結合に際しては特殊な音調変化が起こる。名詞の場合も，動詞と同じように音調形が決定されると考える。即ち，前接辞群と名詞語幹の結合に際して特殊な音調変化が起こると考える。もちろん，名詞でのこの特殊な音調変化とはこれまで述べてきた（7）と（13）である。従って，ここではまず（a）様々な環境での名詞語幹の音調変化（7），（13）の起生条件を見つける事と（b）前接辞のポラリティ現象を考慮しながら，様々な環境での各前接辞の音調変化を見つける事をせねばならない。Fortune 資料には系統だった資料が見つからないので，始めに現代ゼズル資料でその検討を行い，その結果を Fortune 資料でも吟味することにする。

4.1. クラス接辞以外の前接辞

名詞クラス前接辞や繋辞以外にも名詞語幹に前接する接辞がある。このうち，音調変化に関して Fortune が特に記している所有接辞と所有者接辞を取り上げることにする。

他のバントゥ諸語と同じく，ゼズル方言の所有接辞は「所有接辞 -a」からなり，所有接辞は「持っているもの」の名詞クラスと文法的に呼応する。例えば，名詞クラス 8 のものが所有されていれば，所有接辞は“zv-á”で，これが名詞に前接されるとその名詞が持つものの意味となる。例を示すと，“mambo”（王，族長）に“zv-á”が前接した“zvá-mámbo”は「王（族長）が持つもの」，「王（族長）に所属するもの」の意味を表わす。この接合で，名詞語幹に音調変化が起こる。この音調変化は繋辞に直続する名詞語幹の音調変化と同一の音調変化である。

所有者「～を持つ者」を表わす接辞を本稿では所有者接辞（ownership affix）と呼ぶ事にする。例えば，“chi-guro”（椅子）に所有者接辞の“sa（H）”が前接すると，「椅子を持つもの」即ち「議長（chairman）」の意となる。このような接辞には“sa（H）”の他に“ne（H），nya（L）”等がある。なお，括弧内の H 又は L はその基底音調を示す。これらの内，H を持つ接辞“sa, ne”がゼロ接辞名詞の直前にに前接すると，繋辞が前接した場合と同一の（7），（13）の音調変化がゼロ接辞名詞に起こる。

4.2. 語幹が高音調型の場合

高音調型の名詞語幹の直前が H であれば（7）の音調変化が起こり，その直前が L ならば音調変化は起らない。以下に所有接辞がゼロ接辞名詞に前接する例を示す。なお，以下の例では途中の音調論的誘導過程を省略し，“＞”の左が基底音調形であり，“＞”の右が音調論的アウトプットである。また，その具体的な音調形を“＝”で示してある。更に“＝”以降の変化は Fortune 資料から現代ゼズルにいたる経年変化である。

(30) 現代ゼズル方言での所有接辞による高音調型の音調変化

30a. cha-she＞cha-she＝chá-she (sth of the chief)
H H H L

30b. re-nyoka＞re-nyoka＝ré-nyoka (sth of the snake)
H H H L

30c. che-bakatwa＞che-bakatwa＝ché-bakatwá (sth of the sword)
H H H L

30d. re-gunguro＞re-gunguro＝ré-gunguro (sth of the crow)
H H H L

30e. che-mbudzana＞che-mbudzana＝ché-mbudzaná (sth of the young goat)
H H L H L H

30f. ye-mbure＝yé-mbúre＞ye-mbúre (sth of the net)
H H

30g. che-tafura＝ché-táfura＞che-táfura (sth of the table)
H H

30h. che-fafitera＝ché-fáfitera＞che-fáfitera (sth of the window)
H H

上の（30f），（30g），（30h）では音調変化（7）が起きていない。これは現代ゼズルでは（7）の適用が（25）に記述したように任意であるためであり，従って一般的にはあるいはFortune資料では（7）が起こると考えて良いだろう。実際，同一の基底形を持つ語で音調変化（7）の起こっている例も見つかっている[4]。

一方，名詞語幹の直前がLであれば，そのLを持つ接辞がクラス接辞であっても，音調変化の結果Lを持つにいたった所有接辞であっても（7）は起こらない。以下に幾つかの例を示す。

（31）Lに直続する高音調型

cl(L)-stem(H)：　（参照（1））

pos-cl(L)-stem(H)

31a. che-mu-sha＝ché-mu-shá＞(P1) ché-mú-shá (sth of the village)
H L H

31b. che-ma-bakatwa＝ché-ma-bákátwá＞(P1) ché-má-bákátwá (sth of the sword)
H L H

31c. *zve*-ma-*bhodhoro*＝*zvě*-ma-*bhŏdhoró*＞(P3b) *zve*-má-*bhŏdhoró* (sth of the bottle)
H L H L

cl(L＞H)-cl(L)-stem(H)

31d. *φ*-ku-ma-kuva＞(15) ku-ma-kuva＝kú-ma-kúbá＞(P1) kú-má-kúbá (it is a place of grave)
H L L H H L H

---

4) 現代ゼズル方言ではmbúre（net）は，その直前に基底音調Hを持つ所有接辞yeが前接すると，ye-mbúre（one of the net）となる。この表面音調形は（7）が適用されなかったため音調形yé-mbúreに現代ゼズル方言の経年変化P2が加わった結果である。但し，これは（7）の適用された形即ちyé-mbureはまだ確認されていない。一方，同一の基底形を持つ語で，（7）の適用された語も見つかっている。これでは，（7）が適用されていない音調形を確認していない。
cha-tenzi＞cha-tenzi＝chá-tenzi (one of lord)
H H H L

31e. *ϕ*-pa-mu-soro＞(15) pa-mu-soro＝pá-mu-sóró＞(P1) pá-mú-sóró (it is the top)
H L L H H L H

31f. *ϕ*-ma-ru-ku*vhu*te＞(15) ma-ru-ku*vhu*te＝má-ru-kú*vhŭ*te＞(P1) má-rú-kú*vhŭ*te
H L L H H L H

(they are umbilical cords)

cop-pos(L)-zeronoun(H)

31g. *nde*-che-mbwa＞*nde*-che-mbwa＝ndĕ-che-mbwá＞nde-ché-mbwá (it belongs to the village)
H H H H L H

31h. *nde*-che-bakatwa＞*nde*-che-bakatwa＝ndĕ-che-bákátwá＞(P3b) nde-ché-bákátwá
H H H H L H

(it belongs to the sword)

31i. *nde*-che-gunguwo＞*nde*-che-gunguwo＝ndĕ-che-gúngúwo＞(P3b) nde-ché-gúngúwo
H H H H L H

(it belongs to the crow)

31j. *nde*-che-mbudzana＞*nde*-che-mbudzana＝ndĕ-che-mbúdzaná＞(P3b) nde-ché-mbúdzaná
H H HL H L HL

(it belongs to the young goat)

以上をまとめると，音調変化（7）の起生条件を次のように表わす事ができる。

(32) 高音調型語幹の音調変化（7）の起生環境

高音調型名詞語幹の音調変化（7）は次の環境で起る。

[H, X]-[_ , stem(H)]

但し，stem（H）はゼロ接辞名詞，有接辞名詞語幹。またX＝Cop（H）/ N. Cl. pre（L＞H）/ Pos（H），Ow（H）。

これまで現代ゼズル方言で述べてきた事はFortune資料でも成立する。Fortune資料には系統だった例はないのだが，散見される幾つかの例では，名詞語幹の直前がHであれば（7）の音調変化が起こり，その直前がLならば音調変化は起らない（Fortune, 1984a, pp.138, 141)。

(33) Fortune資料での語幹が高音調型の音調変化の有無

a. 音調変化あり

sa(H)-zeronoun(H＞**L**)

33a. sa-zita＞sa-zita＝**sá-zita (my namesake)**
H H H L

pos(H)-zeronoun(H＞**L**)

33b. zve-hama＞zve-hama＝zvé-hama (sths of relatives)
H H H L

33c. zva-tezvara＞zva-tezvara＝zvá-tezvara (sths of father-in-law)
H H H L

cop(H)-sa(H)-zeronoun(H>L)

33d. ndi-sa-zita>ndi-sa-zita=ndí-sá-zita (it is my namesake)
H H H H H L

b. 音調変化なし

sa(H)-cl(L)-stem(H)

33e. sa-mu-sha=sá-mu-shá (Village head)
H L H

cop(H)-sa(H)-cl(L)-stem(H)

33f. ndi-sa-mu-sha=ndí-sá-mu-shá (it is the Village head)
H H L H

cop(H)-pos(H)-cl(L)-stem(H)

33g. nde-zve-chi-mwe=ndé-zve-chi-mwé (it is of the single ones)
H H L H

nya(L)-zeronoun(H)

33h. nya-denga=nya-dénga (Heavenly One)
L H

cop(H)-nya(L)-zeronoun(H)

33i. ndi-nya-denga=ndí-nya-dénga (it is the Heavenly One)
H L H

cop(H)-pos(H)-zeronoun(H)

33j. nde-zva-tezvara>nde-zva-tezvara=ndé-zva-tézvára (it is of father-in-law)
H H H H L H

33k. nde-zve-hama>nde-zve-hama=ndé-zve-hámá (it is of the relatives)
H H H H L H

4.3. 語幹が低音調型の場合

語幹が低音調型の場合には音調変化（13）が起こる事がある。但し，その起生条件は高音調型の音調変化（7）のそれよりやや複雑である。Fortune 資料には系統だった例がないために，ここでもまず現代ゼズル資料から示す事にする。

4.3.1. ゼロ接辞名詞の場合

繋辞が名詞に前接する時，その起生条件を満足すれば，（13）の音調変化が起きた。所有接辞が語幹に前接する場合にも，その起生条件も含めて繋辞の場合と完全に同一な音調変化が起こる。但し，L2 型，LH1 型即ち語幹頭音節がアクセント音節である語では（13）が適用できないのでその音調変化は起こらないが，経年変化はその条件を満足すれば起こる。

（34）所有接辞による現代ゼズル方言の低音調型の音調変化

pos(H)-zeronoun(L>H)

34a. che-ngwe>che-ngwe=ché-ngwé (sth of the cheatah)
H L H H

34b. che-mambo > che-mambo = ché-mámbo > (P2) che-mámbo (sth of the chief)
H L H H

34c. che-dendere > che-dendere = ché-dénderé > (P2) che-dénderé > (P1) che-déndéré (sth of the nest)
H L H H L

34d. che-ngururе > che-ngurure = ché-ngúrure (sth of a pig)
H L H H

pos(H)-zeronoun(L)

34e. che-baba = ché-babá > (P1) ché-bábá (sth of the father)
H L

34f. re-*hwi*riti = ré-*hwi*rítí (sth of the green pigeon)
H L

34g. che-tseketsa = ché-tsekésa > (P1) ché-tsékésa (sth of the hen)
H L H

34h. che-*zo*ngororo > ché-*zo*ngóroro (sth of the millepede)
H L H

以上の場合にはゼロ接辞名詞の直前に前接する繋辞または所有接辞の音調はHであったが，(それに到るまでの音調変化によって）そのHがLに変化している場合でも音調変化（13）が起こる。

(35) 現代ゼズル方言での所有接辞を前接する低音調型

cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(L>H)

35a. *nde*-che-ngwe > *nde*-che-ngwe = ndě-che-ngwé > (P3b) nde-ché-ngwé (it belongs to the cheatah)
H H L H L H

35b. *nde*-che-mambo > *nde*-che-mambo = ndě-che-mámbo > (P3b) nde-ché-mámbo
H H L H L H

(it belongs to the chief)

35c. *nde*-che-dendere > *nde*-che-dendere = ndě-che-dénderé > (P3b) nde-ché-dénderé
H H L H L H L

> (P1) nde-ché-déndéré (it belongs to the nest)

35d. *nde*-che-nguruve > *nde*-che-nguruve = ndě-che-ngúruve > (P3b) nde-ché-ngúruve
H H L H L H

(it belongs to the pig)

35e. *nde*-cha-baba > *nde*-cha-baba = ndě-cha-babá > (P3b) nde-chá-babá (it belongs to the father)
H H L H L L

cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(L)

35f. *nde*-cha-*hwi*riti > *nde*-cha-*hwi*riti = ndě-che-hwirítí > (P3b) nde-ché-hwirítí
H H L H L L

(it belongs to the green pigeon)

35g. *nde*-che-tseketsa＞*nde*-che-tseketsa＝ndě-che-tsekétsa＞(P3b) nde-ché-tsekétsa
H H LH　　H L LH

(it belongs to the hen)

35h. *nde*-che-*zo*ngororo＞*nde*-che-*zo*ngororo＝ndě-che-*zo*ngóroro＞nde-ché-*zo*ngóroro
H H L H　　H L L H

(it belongs to the millepede)

これらの例より，低音調型ではその直前の音調がHだから音調変化（13）が起こるのではなく，その直前の要素が繋辞または所有接辞であるから，その音調のHまたはLに関わらず，音調変化（13）が起こると言える。

Fortune資料は現代ゼズルほど系統だってはいないが，現代ゼズル方言で述べた起生条件が成立する。即ち，これらでもその直前の音調がLであってもHであっても，それが所有接辞であれば音調変化（13）は起こる。

(36) Fortune資料の低音調型ゼロ接辞名詞の例

cop(H)-pos(H＞L)-zeronoun(L＞H)

36a. nde-zva-mambo＞nde-zva-mambo＝ndé-zva-mámbo (it is of the chief)
H H L　　H L H

36b. nde-zva-ngu＞nde-zva-ngu＝ndé-zva-ngú (it is those of mine)
H H L　　H L H

pos(H)-zeronoun(L＞H)

36c. zva-mambo＞zva-mambo＝zvá-mámbo (sths of the chief)
H L　　H H

L2型とLH1型，即ち基底音調がHでアクセント音節が語幹頭音節にある場合には音調変化（13）は勿論起こらない[5]。しかし，これら以外でも，ゼロ接辞名詞の直前の音調がHであるにも関わらず（13）が起こらない例が見つかっている。即ち，所有者接辞がゼロ接辞名詞の直前に位置する場合には音調変化（13）が起こらない[6]。以下の資料は現代ゼズル方言には無かったものである。

---

5) Fortune資料でL2型，LH1型なので（13）が適用されない例を示しておく。

L2:　pos(H)-zerostem(H)

we-mhuka＝wé-mhuká (animals' one)
H L

pos(L)-zerostem(H)

zve-we-mukha＞zve-we-mukha＝zvé-we-mukhá (these ones of the animal's one)
H H L　　H L L

6) 現代ゼズル資料には，音調変化（13）が起こらない例が見つかっている。この例では，（13）の起こらない理由としてアクセント音節が語幹頭音節である為だとも言えるが，Fortucn資料との整合性を考えるならば，所有者接辞“sa”が前接する為と考えた方が良いであろう。

pos-sa-stem(L)

cha-sa-dombo＝chá-sá-dombó＞(P1) chá-sá-dómbó＞(P2) cha-sá-dómbó (one of the go-between)
H H L

(37) Fortune 資料の所有者接辞

cop(H)-ow(H>L)-zeronoun(L)

37a. ndi-ne-vena>ndi-ne-vena=ndí-ne-vená (it is a spirit medium)
H H L H L L

ow(L)-zeronoun(L)

37b. nya-vanga=nya-vanga (one with a scar)
L L

cop(H)-ow(L>H)-zeronoun(L)

37c. ndi-nya-vanga>ndi-nya-vanga=ndí-nyá-vanga (it is one with a scar)
H L L H H L

以上から，低音調型ゼロ接辞名詞の音調変化（13）の起生環境を次のようにまとめておく。

(38) 低音調型ゼロ接辞名詞での音調変化（13）の起生条件

低音調型ゼロ接辞名詞の音調変化（13）は次の環境で起こる。

[X]-[_ , Zeronoun (L)]

X=Cop (H / L) / Pos (H / L)。

4.3.2. 有接辞名詞の場合

有接辞名詞では，クラス接辞直前の音調が L の場合にはクラス接辞にも語幹にも音調変化は起こらない。また，音調変化の結果，クラス接辞が H となった場合では語幹が 2 音節以上の L1 型（アクセント音節が語末音節）の時だけ音調変化（13）が起こる。以下に現代ゼズル資料での例を示す。

(39) 現代ゼズル資料の有接辞名詞低音調型での音調変化

a. 音調変化（13）が起こらない場合

cl(L)-cl(L)-stem(L)

39a. ku-ma-rinda=ku-ma-rinda (graveside)
L L L

pos(H)-cl(L>H)-stem(L)

39b. che-mu-*nhu*>che-mu-*nhu*=ché-mú-nhu (sth of the person)
H L L H H L

39c. che-mu-tumbi>che-mu-tumbi=ché-mú-tumbí>(P2) che-mú-tumbí>(P1) che-mú-túmbí
H L L H H L

(sth of the corpse)

39d. che-mu-kuwasha>che-mu-kuwasha=ché-mú-kuwásha>(P2) che-mú-kuwásha
H L L H H H L H

>(P1) che-mú-kúwásha (sth of the son-in-low)

39e. che-chi-gondora>che-chi-gondora=ché-chí-gondorá>(P2) che-chí-gondorá (sth of the heifer)
H L L H H L

b.　音調変化（13）が起こる場合

pos(H)-cl(L>H)-stem(L>H)

39f.　che-mu-shika>che-mu-shia=ché-mú-shíka>(P2) che-mú-shíka (sth of the market)
　　H L　L　H H H

39g.　che-mu-bereki>che-mu-bereki=ché-mú-béreki>che-mú-béreki (sth of the parent)
　　H L　L　H H H

39h.　ϕ-ku-ma-rinda>ku-ma-rinda=kú-má-rínda (it is the grave-side)
　　H L L　L　H H H

現代ゼズル方言で述べた（13）の起生条件は Fortune 資料でも成立する。例を示す。

(40) Fortune 資料の有接辞名詞低音調型での音調変化

a.　音調変化（13）が起こらない場合

pos(L)-cl(L)-stem(L)

40a.　nya-ku-wana=nya-ku-wana (bridegroom)
　　L L　L

pos(H)-cl(L>H)-stem(L)

40b.　we-va-nhu>we-va-nhu=wé-vá-nhu (people's one)
　　H L L　H H L

40c.　zve-we-va-nhu>zve-we-va-nhu=zvé-we-vá-nhu (these ones of the peoples's one)
　　H H L L　H L H L

b.　音調変化（13）が起こる場合

cop(H)-cl(L>H)-stem(L>H)

40d.　ndi-chi-garo>ndi-chi-garo>ndí-chí-gáro (he is Mr. Chair)
　　H L　L　H H H

以上から，低音調型有接辞名詞の音調変化を次のようにまとめておくことにする。

(41) 低音調型有接辞名詞での（13）起生の環境条件

低音調型有接辞名詞の音調変化（13）は次の環境で起こる。

[X]-[_ , Stem(L)]

但し，stem(L)≧2。stem(L) は L1 型（アクセントが語末音節）。

また X=cl (H)。

5.　前接辞の音調変化

動詞の場合には，各前接辞の音調は語頭の音調を起点として右方向へ向かうポラリティ規則に従って決定された[7]。即ち，次頭音節の音調は語頭音節の音調と反対の音調をとり，またそ

7) 動詞前接辞の音調列を誘導するポラリティ規則は次のようなものである（加賀谷, 1998a & b)。
a.　"+specified" なら，最初の要素の基底音調が消失し，その代わりに動詞前接辞に指定され ↗

の次の音節は次頭音節の音調と反対の音調をとる。名詞前接辞群の音調も，ポラリティ現象を考慮しながら，（もしあれば）各前接辞がどのような環境でポラリティ規則に従い，またどのような環境では（もしあれば）その固有の基底音調を維持するかを分析せねばならない。結果としていえば，名詞前接辞の音調はポラリティ現象に強く依存すると考えるよりも，むしろ単純な環境での単純な音調変化と考えた方がよさそうである。これから，名詞前接辞群の“extra-tonality”の度合いは低いと考えられる。

5.1. 名詞クラス接辞

名詞クラス接辞の基底音調はLと仮定される。その現れる環境とその音調を以下に示す。これらはFortune資料に於て筆者の気がついたものと筆者の収集した現代ゼズル資料を合わせたものである。

(42) 名詞クラス接辞の環境とその音調

a. 音調がLからHへ変化：

a1. Fortune資料

a11. …pos- _ -

pos(H)-cl(L>H)-stem(L)

42a. we-va-nhu>we-va-nhu=wé-vá-nhu (people's one)
H L L H H L

pos(H)-pos(H>L)-cl(L>H)-stem(L)

42b. zve-we-va-nhu>zve-we-va-nhu=zvé-we-vá-nhu (these ones of the peoples's one)
H H L L H L H L

cop(H)-pos(H>L)-pos(H>L)-cl(L>H)-stem(L)

42c. nde-zve-we-va-nhu>nde-zve-we-va-nhu=ndé-zve-we-vá-nhu (it is of the people's one)
H H H L L H L L H H

a12. …cop- _ -

cop(H)-cl(L>H)-stem(L)

42d. ndi-chi-garo>ndi-chi-garo=ndí+chí-gáro (he is Mr. Chair)
H L L H H H

a2. 現代ゼズル方言資料

a21. …pos- _ -

pos(H)-cl(L>H)-stem(L)

42e. che-mu-*nhu*>che-mu-*nhu*=ché-mú-nhu (sth of the village)
H L L H H L

↗ ている音調が最初の要素の音調となる。

b. 最初の母音の音調を基準として，ポラリティ規則が2番目以降の要素にその直前の音調と反対の音調を順次付与する。ポラリティ規則の適用は，もしあれば，基底音調をもつ音節の直前まで続く。

c. 動詞前接辞頭以外の位置の音節が基底音調をもつ場合，その音節の音調を基準として，新たなにポラリティ規則が適用される。

42f. che-mu-tumbi＞che-mu-tumbi＝ché-mú-tumbí＞(P2) che-mú-tumbí＞(P1) che-mú-túmbí
H L L　H H L

(sth of the corpse)

42g. che-mu-*zu*kuru＞che-mu-*zu*kuru＝ché-mú-zukúru＞(P2) che-mú-zukúru (sth of the grandchild)
H L L H　H H L H

pos(H)-cl(L＞H)-stem(L＞H)

42h. che-mu-shika＞che-mu-shika＝ché-mú-shíka＞(P2) che-mú-shíka (sth of the market)
H L　L　H H H

42i. che-mu-bereki＞che-mu-bereki＝ché-mú-béreki＞(P2) che-mú-béreki (sth of the parent)
H L　L　H H H

a22. …cl-_-

cl(L＞H)-cl(L＞H)-stem(L＞H)

42j. ϕ-ku-ma-rinda＞ku-ma-rinda＝kú-má-rínda (it is the grave-side)
H L L　L　H H H

b. 音調不変：

b1. Fortune 資料

b11. …nya-_-

nya(L)-cl(L)-stem(L)

42k. nya-ku-wana＝nya-ku-wana (bridegroom)
L L　L

b12. …sa-_-

sa(H)-cl(L)-stem(H)：例文 33e を参照

cop(H)-sa(H)-cl(L)-stem(H)：例文 33f を参照

b13. …pos-_-

cop(H)-pos(H＞L)-cl(L)-stem(H)：例文 33g を参照

b2. 現代ゼズル方言資料

b21. …pos-_-

pos(H)-cl(L)-stem(H)：例文 31a, 31b, 31c を参照

b22. …cl-_-

cl(L＞H)-cl(L)-stem(H)：例文 31d, 31e, 31f を参照

以上の資料から，名詞クラス接辞の基底音調 L が H に変わる場合は，(a) その直後の語幹の基底音調が低音調型である場合だけである。更に，(b) これらの中でクラス接辞の直前が所有接辞の場合には，それらの音調が H であれ L であれ，必ずクラス接辞の音調が変わる。また，(c) クラス接辞の直前が H を持つ別のクラス接辞か繋辞である場合には音調変化が起こる。これらの音調変化を合わせて次のように表わしておく。

(43) クラス接辞の基底音調の変化

R1a. L＞H /{＜[pos]＞, ＜[H, cop]＞, ＜[H, cl]＞} [_, cl][stem(L)]

5.2. 所有接辞

所有接辞の基底音調はHと仮定する。その現れる環境とその音調を以下に示す。これらはクラス接辞と同様にFortune資料に於て筆者の気がついたものと筆者の収集した現代ゼズル資料を合わせたものである。

(44) 所有接辞の環境とその音調

a. 音調不変：

a1. Fortune資料

a11. …pos-_-

cop(H)-pos(H>L)-pos(H)-zeronoun(L)

44a. nde-zve-we-mhuka>nde-zve-we-mhuka—ndé-zve-wé-mhuká (it is of the animal's sth)
H H H L H L H L

b. 音調がHからLへ変化

b1. 接辞現代ゼズル資料

b11. …cop-_-

cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(L>H)

44b. *nde*-che-*ho*romba>*nde*-che-*ho*romba=ndě-che-hŏrombá>(P3b) nde-ché-hŏrombá
H H L H L H L

>(P3b) nde-ché-horómbá (it belongs to the boss of baboon)

cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(H)：例文31g, 31h, 31i, 31j参照

cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(L)：例文35a, 35d, 35g参照

b2. Fortune資料

b21. …pos-_-

pos(H)-pos(H>L)-zeronoun(L)[8]

44c. zve-we-mukha>zve-we-mukha=zvé-we-mukhá (these ones of the animal's one)
H H L H L L

pos(H)-pos(H>L)-cl(L>H)-stem(L)

44d. zve-we-va-nhu>zve-we-va-nhu=zvé-we-vá-nhu[9] (these ones of the peoples's one)
H H L L H L H L

---

8) 現代ゼズル方言のインフォーマントによれば，所有接辞が連続する用法はショナ語として認め難いといい，彼自身は決して用いないし，また聞いた記憶も定かではないと言う。

9) Fortuneによって Tonal Declension IIIに分類された変化である。TC IIIについては，Fortuneは次のように述べている (Fortune, 1984a, p.141)。
"We have here an inflection of an inflection. ...
Possessives with H on the possessive affix undergo a change of tone pattern. These are possessives with the following nuclei—
(1) primitive pronominal stems;
(2) cl. 1a nouns;
(3) common nouns with H tone patterns;
(4) adjectives with H tone patterns;
(5) enumeratives with high stems;
(6) quantitatives;
(7) relatives and
(8) possessives constructions."

cop(H)-pos(H>L)-pos(H>L)-cl(L>H)-stem(L)：例文 43c 参照
b22.　…cop-_-
cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(H)：例文 33j, 33k 参照
cop(H)-pos(H>L)-zeronoun(L)：例文 36a, 36b 参照
cop(H)-pos(H>L)-cl(L)-stem(H)：例文 33g 参照
cop(H)-pos(H>L)-pos(H>L)-cl(L>H)-stem(L)：例文 42c 参照
cop(H)-pos(H>L)-pos(H)-ZeroNoun(L)：例文 44a 参照

以上の資料から，所有接辞が語頭音節の H に直続する場合は，その基底音調 H が L に変わる。これは基底音調を消失して，ポラリティ規則により L になると考えても良いであろうし，また単にこの環境では“H>L”の音調変化が起るとしても良いだろう。問題は，次の例に示すように，音調 L に続く所有接辞の音調である。この場合，次に示すように，当該所有接辞以前の接辞（具体的には #cop-pos）はその音調も含めて同一であるにもかかわらず，所有接辞の音調が一方では H で，他方では L である（Fortune, 1984a, p.141）。

(45) 所有接辞の対立する音調変化
a.　音調不変：
cop(H)-pos(H>L)-_-zeronoun(L)
45a.　nde-zve-we-mhuka>nde-zve-we-mhuka=ndé-zve-wé-mhuká (it is of the animal's one)
　　H H H L　　H L H L
b.　音調変化：
cop(H)-pos(H>L)-_-cl(L>H)-stem(L)
45b.　nde-zve-we-va-nhu>nde-zve-we-va-nhu=ndé-zve-we-vá-nhu (it is of the people's one)
　　H H H L L　　H L L H H

この理由は多少複雑なポラリティ現象にあるようにも見えるが，本稿では資料の不足もあるので，簡単に所有接辞の直後の要素の違いから生じたと仮定しておく。即ち，所有接辞の直後がクラス接辞なら所有接辞の基底音調が H から L に変わると仮定しておく。これらの所有接辞の音調変化を次のように表わしておく。

(46) 所有接辞の基底音調の変化
R2a.　H>L / [pos][_, pos][cl]
R2b.　H>L / {<[H, cop]>, <[H, pos]>}[_, pos]

5.3.　所有者接辞

所有者接辞を含む資料は極めて少ないが，以下に示す。なお，所有者接辞の基底音調は sa, ne が H で，nya は L である。

(47) 所有者接辞の音調変化とその起生環境

a. sa

現代ゼズル資料

47a. cha-sa-dombo＝chá-sá-dombó＞(P2) cha-sá-dombó＞(P1) cha-sá-dómbó
H H L

(sth of the go-between)

Fortune 資料

47b. ndi-sa-mu-sha＝ndí-sá-mu-shá (it is the Village head)
H H L H

47c. ndi-sa-zita＞ndi-sa-zita＝ndí-sá-zita (it is my namesake)
H H H H H L

47d. ndi-sa-chi-garo＞ndi-sa-chi-garo＞ndí-sá-chí-gáro (it is the chairman)
H H L L H H H H

b. nya

Fortune 資料

47e. ndi-nya-denga＝ndí-nya-dénga (it is the Heavenly One)
H L H

47f. ndi-nya-vanga＞ndi-nya-vanga＝ndí-nyá-vanga (it is the one with a scar)
H L L H H L

c. ne

Fortune 資料

47g. ndi-ne-vena＞ndi-ne-vena＝ndí-ne-vená (it is a spirit medium)
H H L H L L

まず，“sa”についていえば，これは如何なる環境でもその基底音調を維持するようである。“nya”は繋辞の直後ではその基底音調がLからHへ変化する。これはクラス接辞の音調変化と同一であり，その起生条件もクラス接辞の起生条件の一部分と考えられる。更に，その基底音調もクラス接辞と同じLであるので，クラス接辞の音調変化と同じ変化とかんがえ，次のように表わしておく。

(48)

R1b. L＞H / [H, cop][_ , nya][stem(L)]

“ne”に関する資料は上の1例しかない。この音調変化もポラリティ現象或いは単純な“H＞L”の音調変化のどちらでも考えられるが，その誘導の簡便さと他にポラリティ現象だけでしか説明のつかない音調現象が他の接辞の音調も含めて現われないので，ここでは単純に次のように表わしておく。

(49) 所有者接辞“ne”の基底音調の変化

R3. H＞L / [H, cop][_ , ne]

6. 複合名詞の音調形

これまでは動詞語幹が複数の語幹からなる複合名詞については取り扱ってこなかった。ここで，資料は多くはないのだが幾つかの複合名詞の音調形について述べる事にする。なお，Fortune 資料では複合名詞か否かの判定が出来かねるものもあるので，資料は全て現代ゼズル方言である。

複合名詞では，名詞語幹の音調変化は第一語幹だけに起こる。この複合名詞での音調変化が起こる位置を次のように表わしておく。

(50) 現代ゼズル方言の複合名詞での音調変化の起こる位置
複合名詞では第一語幹だけに音調変化が起こる。

以下に例を示す。例中の複合名詞は [　] で示す。また，以下の複合名詞の資料は全て現代ゼズルからのものである。

(51) 現代ゼズル方言の複合名詞語幹の音調変化

a. 第一語幹が高音調型

51a. *ndi*-[mai-*gu*ru] > (7a) *ndi*-[mai-*gu*ru] = ndǐ-[mai-gŭrú] > (P3b) ndi-mái-gŭrú
H H H　H L H
(it is an elder sister-in-law)

51b. φ-chi-[kokota-*ha*ri] > (15) chi-[kokota-*ha*ri] > (7a) chi-[kokota-*ha*ri] = chí-kokota-hărí
H L H H　H H H　L H
(it is a thumb)

51c. *nde*-*dze*-[chi-kokota-*ha*ri] > (R2b) *nde*-*dze*-[chi-kokota-*ha*ri] = ndĕ-dze-chi-kókótá-hărí
H H L H H　H L L H H
(they belong to a thumb)

51d. φ-mu-[remwa-remwa] > (15) mu-[remwa-remwa] > (7a) mu-[remwa-remwa] = mú-remwa-rémwa
H L H H　H H H　H L H
(it is a bat)

51e. che-[tsvimbu-rume] > (7a) che-[tsvimbu-rume] = ché-tsvimbu-rúme (it is a widower)
H H H　H L H

51f. *nde*-che-[tsvimbu-rume] > (R2b) *nde*-che-[tsvimbu-rume] = ndĕ-che-tsvímbú-rúme
H H H H　H L H H
> (P3b) nde-ché-tsvímbú-rúme (it belongs to the widower)

b. 第一語幹が低音調型

51g. i-[tsamba-kodzi] > (13a) i-[tsamba-kodzi] = í-tsámba-kódzi > (P2) í-tsámbá-kódzi
H L H　H H H
> (P2) i-tsámbá-kódzi (it is a cooking pot)

51h. *nde*-che-[tsamba-kodzi]＞(R2b) *nde*-che-[tsamba-kodzi]＞(13a) *nde*-che-[tsamba-kodzi]
H H L H H L L H H L H H
＝ndĕ-che-tsámba-kódzi＞(P1) ndĕ-che-tsámbá-kódzi＞(P3b) nde-ché-tsámbá-kódzi
(it is a cooking pot)

51i. i-[putu-gadzĭke]＝í-putú-gadzĭke＞(P1) í-pútú-gadzĭke (it is a tea)
H L L H

7. まとめと議論

動詞の場合と同じように，名詞の場合にも音調規則は二層からなる。一つはほぼ40年前に収集されたFortune資料の表面音調形を誘導する音調規則であり，もう一つFortune資料から現代ゼズル方言資料までの経年変化に関する音調規則である。動詞の場合には，Fortune資料の規則群“A”と経年変化分を表わす音調規則群“α”を除いた現代ゼズル方言の規則群“A'”はわずかではあるが異なる部分も有ったが，名詞の場合にも，規則適用の任意性やアクセント移動に関し“A＝A'”はわずかに異なる（参照（23），(25)）。ここで“α”は（19）である。また，名詞の基底形はFortune資料と現代ゼズル資料共に依然として同一のシステムを用いていると考えられる（参照（3））。

以下に経年変化分（参照（19））を除くFortune資料と現代ゼズル方言の共通の音調規則群“A, A'”を示しておく。

7.1. 音調規則のまとめ

(a) 接辞の基底音調の変化

R1a. L＞H / {＜[cop]＞, ＜[pos]＞, ＜[cl, H]＞} [_, cl][stem(L)]

R1b. L＞H / [cop][_, nya][stem(L)]

R2a. H＞L / [pos][_, pos][cl]

R2b. H＞L / {＜[H, cop]＞, ＜[H, pos]＞} [_, pos]

R3. H＞zero / [cop][_, ne]

(b) 繋辞のフローティングトーンHによるクラス接辞の音調変化（15）

$[o]^{N.\ Pre}$＞$[o]^{N.\ Pre}$ / ##_
H L H

(c) 名詞語幹の音調変化（7），(13）と各々の起生環境

c1. 高音調型語幹の音調変化（7）の起生環境

高音調型名詞語幹の音調変化（7）は次の環境で起こる。

[H, X]-[_, stem(H)]

但し，stem（H）はゼロ接辞名詞，有接辞名詞語幹。またX＝Cop（H）/ N. Cl. pre（L＞H）/ Pos（H），Ow（H）。

但し，現代ゼズル方言では次のような違いが有る。

c11. 現代ゼズル方言固有のアクセント移動（23）

語末音節以外の位置にアクセントが有れば，アクセントを語末音節に移動。

但し，語幹音節数が3以上のH1型（基底音調がHで，かつ語幹末音節がアクセント音節）の場合には，次末音節にアクセントを移動する。

c12.　現代ゼズル固有の（7）の適用の任意性（25）

現代ゼズルでは語幹音節数が3以上のH2型（基底音調がH，かつ語幹頭音節がアクセント音節）に対してのみ（7）の適用は任意である。

c2.　低音調型語幹の音調変化（13）の起生環境

c21.　低音調型ゼロ接辞名詞での音調変化（13）の起生条件

低音調型ゼロ接辞名詞の音調変化（13）は次の環境で起こる。

[X]-[_ , Zeronoun (L)]

X＝Cop (H/L) / Pos (H/L)。

c22.　低音調型有接辞名詞での（13）起生の環境条件

低音調型有接辞名詞の音調変化（13）は次の環境で起こる。

[X]-[_ , Stem(L)]

但し，stem(L)≧2。stem（L）のアクセントは語末音節。

またX＝cl（H）。

(d) 基底音調を持たない，あるいはそれを消失した接辞の音調はポラリティ規則によって決定される。

なお，これらの音調規則を用いた幾つかの音調誘導例を付表に示しておく。

7.2.　音調変化と残された問題

動詞の場合とは異なり，名詞前接辞群の音調列を考える際にポラリティ現象を考慮する必要がないようである。これは，名詞前接辞群の要素の数が動詞のそれにくらべて若干少ないためかも知れない。即ち，前接辞群のセグメントの数が多ければ多いほど，その音調列の“extra-tonality”の度合いが高まり，従って個々の音調を正確に発話する必要性がなくなり，その音調列はなんらかの方法（ショナ語ゼズル方言の動詞の場合はポラリティ現象）で自動的に定まると一般的には考えられる。一方，名詞語幹の音調変化規則は動詞語幹の音調変化にも有効かも知れない。

本稿で取り上げなかった問題に（a）複合名詞の基底形とその表面音調形の誘導，(b) 繋辞や所有接辞に後接する関係名詞節，形容詞語幹からの派生名詞などの表面音調形の誘導がある。前者についていえば，その理由の一つは筆者の収集した現代ゼズル方言資料には複合名詞に関する資料がほとんどないからである。実際，その表面音調形から複合語であろうと推測されるものが見つかっても，その構成要素である語を正確に知るインフォーマントは極めて少ない事も事実である。複合語の資料収集は今後の課題である。後者についての資料も筆者はほとんど有していない。Fortune資料には“ndé-zve-vasíngazíve (it is of those who do not know), ndé-zve-vasíná (it is of those who have not), ndé-zve-dzósé (it is of them all)”等の資料が見つかる。これらでの語幹に相当する“vasíngazíve (those who do not know), vasíná (those who have not), dzósé (them all)”では名詞語幹の音調変化（7）または（13）に相当する音調変化が起こらないと仮定すれば，これらの音調形は容易に誘導できる。

(52)

52a. nde-zve-vasingazive > (R2b) nde-zve-vasingazive = ndé-zve-vasíngazíve
H H L H L H L H L L H L H L

(it is of those who do not know)

52b. nde-zve-vasina > (R2b) nde-zve-vasina = ndé-zve-vasíná (it is of those who have not)
H H L H H H L L H H

52c. nde-zve-dzo-se > (R2b) nde-zve-dzo-se = ndé-zve-dzó-sé (it is of them all)
H H H H H L H H

しかし，資料の例数があまりに少ないので，ここではその一般化をさけておく。これら資料収集も今後の課題である。

参 考 文 献

Fortune, George. 1955. *An Analytical Grammar of Shona*, London: Longman.

———. 1984a. *SHONA GRAMMATICAL CONSTRUCTIONS VOLUME 1*, Harare: Mercury Press. (This is the third edition. The first edition is published by Dept. of African Languages, University of Rhodesia, 1977.)

———. 1984b. *SHONA GRAMMATICAL CONSTRUCTIONS VOLUME 2*, Harare: Mercury Press. (This is the third edition. The first edition is published by Dept. of African Languages, University of Rhodesia, 1977.)

Pike, K.L. 1948. *Tone Languages*. University of Michigan Press.

Pulleyblank, Douglas. 1986. *Tone in Lexical Phonology*. Dordrecht / Boston / Lancaster / Tokyo: D. Reidel Publishing Company.

Voorhoeve, J. 1973. "Safwa as a Restricted Tone System". *Studies in African Linguistics Vol.4*, pp.1–21.

加賀谷良平 1998a 「ショナ語（ゼズル方言）の Fortune 資料の音調分析とそれに基づく音調システム (Tonal Analysis of Fortune's Data and the Constructed Shona Tonal System(the Zezuru dialect))」『アジア・アフリカ言語文化研究55号』pp.1–43, アジア・アフリカ言語文化研究所。

——— 1998b 「ショナ語ゼズル方言の動詞音調形とその通時的変化—高音調の低音調への被さりと見かけ上の右方向への移動—（Tonal Patterns of the Contemporary Zezuru Dialect of the Shona Language and its Diachronic Changes—The High Tone Covering on the Next Low Tone and its Shifting to the Right—)」『アジア・アフリカ言語文化研究56号』pp.211–247, アジア・アフリカ言語文化研究所。

——— 1999 「ショナ語ゼズル方言の動詞音調形の通時的変化—目的接辞のある場合—（Diachronic Tonal Changes of the Zezuru Dialect of the Shona Language—In the Case of Verbs with Object Prefixes—)」『アジア・アフリカ言語文化研究57号』pp.157–194, アジア・アフリカ言語文化研究所。

——— 1999 「ショナ語マニィカ方言の動詞音調形（Tonal Analysis of the Manyika Verbs—Two layers of Tonal Phenomena—)」『アジア・アフリカ言語文化研究59号』pp.139–170, アジア・アフリカ言語文化研究所。

付　表：

名詞の幾つかの代表的な音調変化の誘導例を示す。

(1) 現代ゼズル方言の誘導例

a. che-mu-shika > (R1a) che-mu-shika > (13) che-mu-shika = ché-mú-shíka > (P2) che-mú-shíka
H L L　　H H L　　H H H

(one of the market)

b. cha-sa-dombo = chá-sá-dombó > (P2) cha-sá-dombó > (P1) cha-sá-dómbó (one of the go-between)
H H L

c. *nde*-che-bakatwa > (R2b) *nde*-che-bakatwa = ndě-che-bákátwá > (P3b) nde-ché-bákátwá
H H　　H　　H L　　H

(it belongs to the sword)

d. *nde*-che-mbu*dza*na > (R2b) *nde*-che-mbu*dza*na = ndě-che-mbú*dza*ná > (P3b) nde-ché-mbú*dza*ná
H H H L　　H L H L

(it belongs to the young goat)

e. *nde*-che-nguruve > (R2b) *nde*-che-nguruve > (13) *nde*-che-nguruve = ndě-che-ngúruve
H H　　L　　H H　　L　　H L H

> (P3b) nde-ché-ngúruve (it belongs to the pig)

f. *nde*-che-tseketsa > (R1b) *nde*-che-tsekctsa = ndě-che-tsekétsa > (P3b) nde-ché-tsekétsa
H H L H　　H L L H

(it belongs to the hen)

(2) Fortune 資料の幾つかの誘導例

a. we-va-nhu > (R1a) we-va-nhu = wé-vá-nhu (people's one)
H L L　　H H L

b. ndi-nya-vanga > (R1b) ndi-nya-vanga = ndí-nyá-vanga (it is the one with a scar)
H L L　　H H L

c. ndi-chi-garo > (R1a) ndi-chi-garo > (13) ndi-chi-garo = ndí-chí-gáro (he is Mr. Chair)
H L L　　H H L　　H H H

d. ndi-sa-chi-garo > (R1a) ndi-sa-chi-garo > (13) ndi-sa-chi-garo = ndí-sá-chí-gáro (it is the chairman)
H H L L　　H H H L　　H H H H

e. zve-we-va-nhu > (R2a) zve-we-va-nhu > (R1a) zve-we-va-nhu = zvé-we-vá-nhu
H H L L　　H L L L　　H L H L

(these ones of the peoples's one)

f. ndi-sa-zita > (7a) ndi-sa-zita = ndí-sá-zita (it is my namesake)
H H H　　H H L

g. nde-zve-hama > (R2b) nde-zve-hama = ndé-zve-hámá (it is of the relatives)[9)]
H H H　　H L H

h. nde-zva-mambo > (R2b) nde-zva-mambo > (13) nde-zva-mambo = ndé-zva-mámbo
H H L　　H L L　　H L H

(it is of the chief)[9)]

i. nde-zve-chi-mwe > (R2b) nde-zve-chi-mwe = ndé-zve-chi-mwé (it is of the single ones)[9]
H H L H H L L H

j. nde-zve-we-va-nhu > (R2b) nde-zve-we-va-nhu > (R2a) nde-zve-we-va-nhu
H H H L L H L H L L H L L L L

> (R1a) nde-zve-we-va-nhu = ndé-zve-we-vá-nhu (it is of the people's one)[9]
H L L H L

k. nde-zve-we-mhuka > (R2b) nde-zve-we-mhuka > = ndé-zve-wé-mhuká (it is of the animal's one)[9]
H H H L H L H L

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

【Article】

A Sketch of the Syntactic Structures of Nadrau Fijian*

KIKUSAWA, Ritsuko**
Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa

This paper provides a sketch of the syntactic structures of Nadrau Fijian, an Eastern Fijian language with various "Western-Fijian" morphosyntactic characteristics. An outline of clause strustures is presented, followed by a summary of verb-derivation and casemarking systems.

0. Introduction
0.1. An Overview
0.2. Terms and Definitions Applied in This Study
1. An Outline of Sentence and Phrase Structures
1.1. The Equational Sentence and Its Constituents
1.1.1. Pronominal Nouns
1.1.1.1. Independent pronouns
1.1.1.2. Dative pronouns
1.1.2. Non-pronominal Nouns and Determiners
1.1.2.1. Proper and non-proper nouns and determiners
1.1.2.2. Possessed and non-possessed nouns
1.1.2.2.1. Possessed general nouns
1.1.2.2.2. Possessed non-general nouns
1.1.2.2.3. Non-possessed nouns and the expression of possession
1.1.3. Noun Modifiers
1.2. Verbal Clauses and Their Constituents
1.2.1. Agreement Markings
1.2.1.1. Actor agreement on the clause initial verb
1.2.1.2. Patient agreement on the transitive verb

Keywords: Nadrau Fijian, morphosyntactic description, clause structure, transitivity, casemarking system

* I would like to thank Ratu Semione Vusonitokalau, and his family, Sereana, Jonemanu and Makelesi Vusonitokalau for sharing their home with me and helping me learn their language. Many other villagers, including Ratu Sairusi Nalewadonu, also helped me in one way or another. I would also like to acknowledge Dr. Paul Geraghty at the Institute for the Study of Fijian Languages and Cultures (*Na Tabana ni Vosa kei na Itovo Vakaviti*) without whose help the research itself would not have taken place, and Laurie Reid for comments and suggestions on an earlier version of this paper.

** Visiting Research Fellow, Research School of Pacific and Asian Studies, the Australian National University (on JSPS Postdoctoral Fellowships for Research Abroad, March 2000–February 2002).

1.2.2. Auxiliary Verbs
1.2.2.1. General features
1.2.2.2. Auxiliary verbs that always occur as clause initial verbs
1.2.3. Adverbs
1.3. Topicalization
1.4. Other Clause Structures
1.4.1. Relative Clauses
1.4.2. Clauses Introduced by Prepositions
1.4.3. Nominalization
2. Transitivity and Verb Forms in NDR
2.1. Transitivity
2.2. Syntactic Derivations
2.2.1. Transitive Endings and Forms Commonly Found on Intransitive Verbs
2.2.2. "Noun Incorporation"
2.3. Semantic Derivations
2.3.1. Verb Forms Implying "Direct" Patient ([−trns] or [+trns])
2.3.2. Verb Forms Implying "Instrumental" Patient ([−trns] or [+trns])
2.3.3. Verb Forms with "Causative" Meaning ([−trns] or [+trns])
2.3.4. *vei...i*: Reciprocal, or Human-goal Action ([−trns])
2.3.5. Reduplication: Repeated Activity, Action without Specific Goal ([−trns])
2.3.6. *vei...axi*: Activity of 'Going Around' ([−trns])
2.4. A Summary
3. Casemarking System
3.1. Marking on the Noun Phrases: Patient and Agent
3.2. No Formal Making on the Noun Phrase: Referent of Ditransitive Verbs and Correspondent
3.3. Dative Referents
3.4. Genitive Preposition *ni*: Correspondent
3.5. Locative Preposition *i*~*e* and Ablative Preposition *mai*: Locus and Means

0. Introduction

0.1. An Overview

The Nadrau language of Fijian (hereafter NDR) is spoken in Nadrau Province[1], which is located in the mountain area in the northwest of Viti Levu island in Fiji.[2] As

1) Nadrau Province consists of the following four villages: Nadrau, Nabāwaqa (referred to as Nabouwaqa in Geraghty 1983), Qalinasavu and Vanualevu.

2) Nadrau is recognized by people in the surrounding area as a place where a language is spoken which "contains every aspect found in all the communalects of Fijian". People believe that the place was named "Nadrau", *na* 'determiner, non-proper' and *drau* 'hundred', due to the fact that "there are hundreds of languages spoken there".

far as I am aware, there is no description that specifically focuses on the morphosyntactic structures of this particular dialect.[3] In this paper, a sketch of the morphosyntactic aspects of NDR, based on the research I conducted in Nadrau village from June 3 to 14, 1999, is presented in the following order. In the rest of this section, the definitions of the basic notions and the terms that appear in this paper are described. Section 1 provides an outline of the phrase and sentence structures of NDR. Transitivity and verb forms, and the casemarking system are described in Section 2 and 3 respectively.

NDR has various morphosyntactic aspects that are different from those observed in some relatively well-documented Fijian languages, such as Standard Fijian (cf. Schütz 1985 and its bibliography), Boumaa Fijian (cf. Dixon 1988), Kadavu Fijian (cf. Pawley and Sayaba 1982) and Wayan (cf. Pawley and Sayaba n.d.). Some of these differences are discussed in Kikusawa 2000a, 2001, In press.

0.2. Terms and Definitions Applied in This Study

The original analysis was conducted applying a version of the Word and Paradigm model, or "whole word morphology"[4], and Lexicase Dependency Grammar[5]. Some (but not all) of the terms and notions used in this paper follow those in Lexicase.

1) Word Categories

Words are treated as the basic unit of the syntactic structure, and each word is described as belonging to a Word Category according its syntactic distribution. There are eight Word Categories, namely, Noun, Verb, Pre-/post-position, Determiner, Adverb, Adjective, Conjunction, and Sentence Particle.

2) Transitivity

The judgement of the transitivity of a verb in this study is based on the number of noun phrases that agree with the verb(s).[6] For details, see 2.1.

3) Caseforms

Caseforms are labels that describe the morphological forms and/or marking on nouns and prepositions by the relative position with the verb. Nouns or prepositions with the same marking are always labelled with the same term. The total number of caseforms in each language differs depending on the language. Table 1 shows those that appear in this description.

---

3) The sound system and some lexical forms, in comparison with those in other dialects of Fijian, are described in Geraghty (1983, especially pp.28, 43–46, 49–50, 53, 96, 170, 174–176, 198, 202, 210, 228, 250, 262) and Schütz 1963, and lists of pronouns along with those of other dialects are given in Capell (1991: Appendix).

4) For a recent summary and interpretation of this model, see Bender 2000.

5) For details of the parts of this theory that are relevant to this study, see Chapter 2 of Kikusawa In press. For a general introduction, see Starosta 1988.

6) The traditional transitive and intransitive classifications of Fijian verbs are often based on verb morphology, and do not always match the judgement of syntactic transitivity in this study. See Section 2, and also Kikusawa 2000b for a discussion of transitivity in Standard Fijian.

Table 1: NDR Caseforms

Caseform	Marking in NDR	Sections discussed
Nominative	(unmarked)	1.2, 2.1, 3.1
Accusative	(unmarked)	1.2, 2.1, 3.1
Dative	Dative pronoun set	1.1.1.2, 3.3
Genitive	Genitive preposition *ni*	3.4
Locative	Locative preposition *i* and *mai*	3.5
Ablative	Ablative preposition *mai*	3.5

4) Semantic Relations[7)]

Semantic Relations indicate the semantic relationship between the predicate and the noun/prepositional phrases in the sentence. Each Semantic Relation is expressed by a fixed (set of) Caseform(s),[8)] and thus reflect how the actual event perceived by the speaker is linguistically encoded. The Semantic Relations that are relevant in this study are as follows. The "actor" of transitive verbs is labelled as Agent ([AGT])[9)], while the "undergoer" that is the single core noun phrase in intransitive sentences and the patient of transitive verbs is labelled as Patient ([PAT]). The "undergoer" that is expressed as a non-core complement phrase in intransitive sentences is labelled as Referent ([REF]). Nouns indicating possession are labelled as Correspondent ([COR]), and those expressing place and time are labelled as Locus ([LOC]), while instruments or accompanying elements of an activity are labelled as Means ([MNS]). Table 2 shows a list of Semantic Relations and their abbreviations, and the Caseform(s) that express each Semantic Relation in NDR. The Semantic Relation is a phrase-level feature and is assigned to either a prepositional phrase or a noun phrase.

Table 2: Semantic Relations and Caseform(s) Expressing each Semantic Relation

Semantic Relation	Realization in NDR
Patient ([PAT])	Unmarked noun phrase
Agent ([AGT])	Unmarked noun phrase
Referent ([REF])	Unmarked noun phrase (Referent of ditransitive), Dative (pronouns only)
Means ([MNS])	Locative
Locus ([LOC])	Locative, Ablative
Correspondent ([COR])	Genitive, unmarked noun phrase

7) Some of the terms used to describe Semantic Relations follow those used to describe Case Relations in Lexicase. However, the two differ in that the former are defined by both their semantic properties as well as by how they are encoded (=Caseform), while Lexicase tries to define them based on purely formal criteria.

8) Which Semantic Relation is expressed by which Caseform(s) is language specific.

9) A list of abbreviations and symbols is given at the end of this paper.

5) The actor ([actr])

The term "actor" is used to refer to the Patient of intransitive sentences and the Agent of transitive sentences. It roughly corresponds to what is often referred to as "subject". Cross-linguistically, in an accusative language, the actor is expressed by Nominative, while in an ergative language, the actor corresponds to the occurrence of Nominative (in intransitive) and Ergative/Genitive/Instrumental (in transitive).

6) Agreement marking on the verb

Agreement marking on the verb is considered to be a separate morphosyntactic feature from casemarking on the noun. A form is analyzed as an agreement-marking entity when it meets the following conditions: i) it is obligatory and has a fixed position in relation to the verb, and ii) it co-occurs with a full noun phrase. Pronouns cannot co-occur with a coreferential full pronoun phrase, while agreement-marking forms may. Agreement-marking forms imply a fixed set of feature(s) of the referring element, such as the person and number. However, the form that appears to be third person singular is neutral as to number.

1. An Outline of Sentence and Phrase Structures

NDR is a right branching (or "left-headed") language with an [actr] (or "accusative pattern") agreement system. There are two basic sentence structures, namely, equational sentences and verbal sentences. In this section, each sentence structure and its constituents are described.

1.1. The Equational Sentence and Its Constituents

An equational sentence consists of two noun phrases. The first noun phrase is a predicate and the second noun phrase is a Patient, and thus an equational sentence indicates the meaning 'B (second noun phrase) is A (first noun phrase)'. In example (1), *o Malekesi* 'M. (personal name)' is the Patient and *na gonevuli* is the predicate, and thus the sentence means 'Makelesi is a student'. Likewise in example (2), *na gonevuli* 'student' is the Patient and *ixwaya* 's/he' is the predicate, and thus the sentence means '(Pointing at someone passing,) the student is s/he'.

(1)

Na	*gonevuli*	*o*	*Makelesi.*[10]
na	ŋoneβuli	o	makelesi
−prpr	student	+prpr	M.
Det	N	Det	N
	prdc		PAT

'Makelesi is a student.'

(2) (Pointing at someone passing by)

Ixwaya	*na*	*gonevuli.*
ixaya	na	ŋoneβuli
3Sg	−prpr	student
N	Det	N
prdc		PAT

'The student is s/he.'

Nouns are subcategorized into pronominal nouns and non-pronominal nouns. Both pronominal and non-pronominal nouns are further subcategorized depending on either their forms and/or syntactic environment. Figure 1 shows the NDR noun subcategorization based on their morphosyntactic characteristics. Details are described in the following subsections.

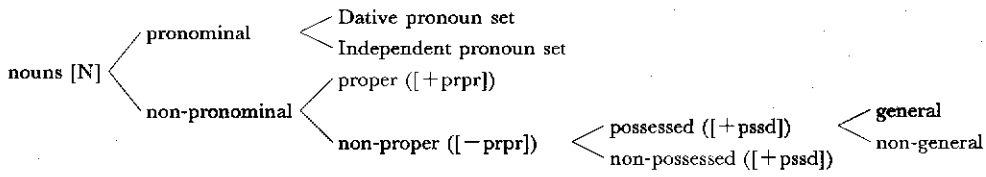


Figure 1: NDR Noun Subcategorization

1.1.1. Pronominal Nouns

Pronouns are classified into two sets, which are referred to as independent pronouns and Dative pronouns.[11] An independent pronoun and its corresponding Dative pronoun differ in both form and syntactic distribution, as shown below. Each pronominal set distinguishes three persons (plus inclusive and exclusive for the first person non-singulars) and four numbers, that is, singular, dual, paucal and plural. The paucal number indicates a group of people that consists of more than two. The

10) In example sentences in Section 1, the first line indicates language data using the local orthography, while the second line indicates the same sentence showing my analysis using phonemic transcription. Phonemes in NDR are as follows: a, e, i, o, u, b [^{m}b], v [β~ɸ], m, w, d [^{n}d], c [ð], dr [^{n}r], r, l, n, q [^{ŋ}g], k~x~xw, g [ŋ], y. /t/=[j] before /i/, elsewhere [t]. /d/=[^{n}dʒ] before /i/, elsewhere /^{n}d/. /x/=corresponds to /k/ in Standard Fijian, and thus personal names with this sound are spelled with the letter "k". /q/, /x/=often realized as labial velars, namely [^{ŋ}gw] and [xw] respectively, before /a/ and often also before /o/.

11) Forms that correspond to what are often described as "subject pronouns" and "object pronouns" in Standard Fijian are analyzed as agreement marking forms in this study. See 1.2.1.

plural indicates a group of people with a bigger number, but the boundary between paucal and plural is not always clear.

1.1.1.1. Independent pronouns

An independent pronoun may occur either in a predicative noun phrase, as *ixwaya* in sentence (2), or in a non-predicative noun phrase as *ixwaya* in sentence (3). The forms of independent pronouns are given in Table 3.

(3)	*Vā*	*mai*	*iyagudatou*	*ixwaya.*
	βā	mai	iyaŋu^{n}datou	ixaya
	3Sg.go	hither	Dtv.1inPc	3Sg
	V	Adv	N	N
	−trns		REF	PAT
				actr

'He came to us/our place.'

Table 3: Independent Pronouns

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*oiau*	*oxexo*	*ix(w)aya*
Dl	*ixitaruxa*	*xairau*	*odrau*	*ixirau*
Pc	*ixitatou*	*xaitou*	*(x)odou*	*ixiratou*
Pl	*ixita*	*xaimamu*	*oniu*	*ixira*

1.1.1.2. Dative pronouns

A Dative pronoun indicates the meaning 'for..., to..., at...' as *iyagudatou* in (3) and *yagumu* in (4). It may also be preceded by a preposition *mai* to indicate 'from...' as in (5). When a Dative pronoun appears in a sentence, it usually occurs immediately after the Verb (or Adverbs if any) and thus, in a position closer to the verb than any other arguments in the sentence. The forms of Dative pronouns are given in Table 4a.[12] Some variant forms of the Dative pronouns either lack the initial [*ya*... of the forms in Table 4a, and/or have an additional [*i*... in the initial position. These are shown in Table 4b.

(4)	*Me*	*soli*	*yagumu*	*na*	*ivola*	*qoi.*
	me	soli	yaŋumu	na	iβola	^{n}goi
	3Sg.should	be.given	Dtv.2Sg	−prpr	book	this
	V	V	N	Det	N	N
	Aux	−trns	REF		PAT	
					actr	

'This book should be given to you./This book is for you.'

12) Note that the ending of each Dative form is identical to the one which is found in the corresponding directly possessed nouns. See Table 6 and Table 7 in 1.1.2.2.1 and 1.1.2.2.2.

(5)	*Drau sā*	*somu yaqona*	*jixo*	*mai*	*yaguna*	*o*	*Turaga ni Xoro?*
	ⁿrau.sā	somu.yaᵑgona	tixo	mai	yaŋuna	o	turaŋanixoro
	3Dl.already	kava.drinking	PROG	Lcv	Dtv.3Sg	−prpr	village-chief
	V	V	Adv	P	N	Det	N
	Aux	−trns			LOC		COR

'Are they two drinking kava at the village-chief's place?'

Table 4a: Dative Pronouns

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*yaguqu*	*yagumu*	*yaguna*
Dl	*yagudaru*	*yaguirau*	*yagumudrau*	*yagudrau*
Pc	*yagudatou*	*yaguitou*	*yagumudou*	*yagudratou*
Pl	*yaguda*	*yaguimamu*	*yagumuniu*	*yagudra*

Table 4b: Dative Pronouns (variants)

	1in	1ex	2	3
Sg	—	—	*gumu*	*guna*
Dl	*gudaru*	—	*gumudrau*	*gudrau*
Pc	*gudatou, iyagudatou*	—	*gumudou*	*gudratou*
Pl	*(i)guda*	*iguimamu*	*gumuniu*	*(i)yagudra, igudra*

A Dative pronoun may have a noun phrase following it specifying the goal. Examples are given in (6) and (7). In example (6), the third person singular Dative pronoun *yaguna* is followed by a dependent noun phrase, *o vuniwai* 'Doctor', specifying the goal of the action. Likewise, in example (7), the Dative pronoun *(ya)guna* is followed by a dependent noun phrase *o cei* 'who', and the phrase as a whole means 'to whom'.

(6)	*Xaitou xadataxe*	*yaguna*	*o*	*vuniwai.*[13]
	xaitouxaⁿdataxe	yaŋuna	o	βuniwai
	1exPc.run.with.3Gn	Dtv.3Sg	+prpr	doctor
	V	N	Det	N
	+trns	REF		COR

'We ran (with him) to the doctor.
(Lit. We ran (with him) to him who is the doctor.)'

13) Another reading is possible with this sentence as shown below.

Xaitou xadataxe	*yaguna*	*o*	*vuniwai.*
1exPc.run.with.3Gn	Dtv.3Sg	+prpr	doctor
V.+trns	REF		PAT

'We ran with the doctor to him.'

This is due to the fact that the Patient of the transitive verb and the Correspndent that modifies the preceding noun are not formally marked. See 3.1 and 3.2 for relevant descriptions.

(7)	*Me*	*yazi*	*(ya)guna*	*o*	*cei*	*na*	*ivola?*
	me	ya^{n}di	yaŋuna	o	ðei	na	iβola
	3Sg.should	be.brought	Dtv.3Sg	+prpr	who	−prpr	book
	V	V	N	Det	N	Det	N
	Aux	−trns	REF		COR		PAT
							actr

'To whom should the letter be brought?'

1.1.2. Non-pronominal Nouns and Determiners

1.1.2.1. Proper and non-proper nouns and determiners

Non-pronominal nouns are subcategorized into proper nouns that carry the feature [+prpr] (plus proper) and non-proper nouns that carry the feature [−prpr] (minus proper).[14] The syntactic difference between proper and non-proper nouns is that they are preceded by different Determiners, that is, a proper noun is preceded by the Determiner *o*, while a non-proper noun may be preceded by the Determiner *na* or a numeric Determiner indicating numbers. A proper noun preceeded by the Determiner *o* (*o Makelesi* in example (8)), a non-proper noun preceeded by the determiner *na* (*na gonevuli* 'student' in example (9)) and by a numeric Determiner (example (10)) are shown below. Semantically, proper nouns include personal names, place names, and titles such as *Ratu* 'Chief', *Qasenivuli* 'Teacher' and *Vuniwai* 'Doctor', while non-proper nouns include the names of general objects.

(8)	*Na*	*gonevuli*	*o*	*Makelesi.* (=(1))
	na	ŋoneβuli	o	makelesi
	−prpr	student	+prpr	M.
	Det	N	Det	N
		prdc		PAT

'Makelesi is a student.'

(9) (Pointing at someone passing by)

Ixwaya	*na*	*gonevuli.* (=(2))
ixaya	na	ŋoneβuli
3Sg	−prpr	student
N	Det	N
prdc		PAT

'The student is s/he.'

14) Non-pronominal non-proper nouns correspond to what are often referred to as "common nouns" in the description of Fijian languages.

(10) *i rua na* *xā* *vou*
iruana xā βou
Det.two thing new
'two new ones'

A numeric determiner has the form [*i*...~[*e*...[15] in the initial position and ends with ...*na*]. The form that occurs in between is the same as the form of cardinal numbers, e.g., *dua* 'one', *rua* 'two', *tolu* 'three', etc., and expresses the number of the object indicated by the following noun. Forms that indicate quantity, such as *levu* 'many', *sō* 'some', may also occur as a part of a numeric Determiner. Some of the forms of numeric Determiners, along with the corresponding forms for the cardinal number, are given in Table 5. The subcategorization of determiners is summarized in Figure 2.

Table 5: Forms of Some Numeric Determiners

Numeric Determiners	Corresponding Cardinal Number	
i dua na	*dua*	'one'
i rua na	*rua*	'two'
i tolu na	*tolu*	'three'
i tini na	*tini*	'ten'
i tini xa dua na	*tini xa dua*	'eleven'
i levu na	*levu*	'many'
i sō na	*sō*	'some'

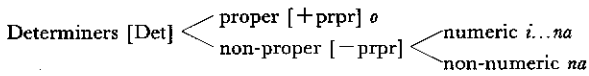


Figure 2: NDR Determiner Subcategorization

1.1.2.2. Possessed and non-possessed nouns

Non-proper nouns are further subcategorized into two classes, namely, possessed nouns and non-possessed nouns. Which of these two classes a noun belongs to is lexically determined.

A possessed noun carries information about the possessed entity and the person and number of the possessor. In examples (11) and (12), the nouns have the ending ...*qu*/, implying a first person singular possessor.

15) The use of the form [*e*... may be the result of influence from Standard Fijian.

(11) *mequ* 'my drink, mine to drink/take'
me^{ŋ}gu

xequ 'my food, mine to eat'
xe^{ŋ}gu

noqu 'my thing, mine (general possession)'
no^{ŋ}gu

(12) *suxuqu* 'my hand(s)'
suxu^{ŋ}gu

duaqu 'my foot/feet, my leg(s)'
^{n}dua^{ŋ}gu

Possessed nouns are further subcategorized into possessed general nouns (those shown in (11) above) and possessed non-general nouns (shown in (12)).

Unlike possessed nouns, non-possesed nouns do not carry information about the possessor in their form. Examples are given in (13).

(13) *rārā* 'village'
rārā

qau 'taro'
^{ŋ}gau

In the rest of this subsection, morphosyntactic features of non-proper nouns along with the structure of possessive expressions are described.

1.1.2.2.1. Possessed general nouns

A possessed general noun semantically indicates '(someone)'s thing', and when what is possessed is overtly expressed, a noun which indicates the specific possessee immediately follows it. This is shown in (14).

(14)

a.	*mequ*	*jī*	'my tea (lit. my drink which is tea)'
	me^{ŋ}gu	tī	
	my.drink	tea	
b.	*xequ*	*qau*	'my taro (lit. my food which is taro)'
	xe^{ŋ}gu	^{ŋ}gau	
	my.food	taro	
c.	*noqu*	*rārā*	'my village (lit. my thing which is a village)'
	no^{ŋ}gu	rārā	
	my.thing	village	

A possessor may be specified by a following noun phrase such as *o Ratu* in (15a) and *o Manu* in (15b).

(15)

a.	*na*	*mena*	*moli*	*o*	*Ratu*	'the chief's orange (for eating)'
	na	mena	moli	o	ratu	
	−prpr	his.drink	orange	+prpr	Chief	
b.	*nodratou*	*vale*	*o*	*Manu*		'the house of Manu (and his family)'
	no^{n}ratou	βale	o	manu		
	their.thing	house	+prpr	M.		

There are three sets of possessed general nouns, each of which indicates the nature of the relationship between the possessor and the possessee along with the person and the number of the possessor. The three sets are as follows:

i) Forms that start with [*me*... These indicate that the thing possessed is something to drink (cf. *some* 'drink (it)'). Examples are given in (16). Note that things for "drinking" do not always correspond to those which are "drunk" in English.

(16)

a.	*mena*	*jī*	'his tea for drinking (lit. his drink which is tea)"
	mena	tī	
	his.drink	tea	
b.	*medra*	*libu*	'their leaf vegetables for eating
	me^{n}ra	li^{m}bu	(lit. their drink which is leaf vegetable)'
	their(two).drink	leaf.vegetable	

ii) Forms that start with [*xe*. When the possessor is animate, they indicate that the thing possessed is something to eat (cf. *xane* 'eat (it)'), as in (17). When the possessor is non-animate, they indicate that the thing which is possessed is the nature of or a part of something, as in (18).

(17)

a.	*xena*	*qau*	'his taro for eating (lit. his food which is taro)'
	xena	ᵑgau	
	his.food	taro	
b.	*xena*	*madrai*	'his bread for eating (lit. his food which is bread)'
	xena	maⁿrai	
	his.food	bread	

(18)

a. (Responding to the noise of a car outside,)

Tamane	*na*	*xena*	*tatama?*	*Au sā*	*tamane.*
tamane	na	xena	tatama	ausā	tamane
hear.3Gn	−prpr	its.thing	speed	1Sg.already	hear.3Gn
V	Det	N	N	V	V
+trns		PAT		Aux	+trns

'(Did you) hear how fast it is?' '(Yes,) I did.'

b.

Na	*loxā*	*vaxaNadrau,*	*na*	*xena*	*isema*	*taucoxo*	*na*	*loxā*	*vaxaViji.*
na	loxā	βaxanaⁿrau	na	xena	isema	tauðoxo	na	loxā	βaxaβiti
−prpr	language	Nadrau.style	−prpr	its.thing	to.be.met	all	−prpr	language	Fijian
Det	N	Adv	Det	N	N	Adv	Det	N	N
	topic.PAT			prdc				COR	

'As for the Nadrau language, (it is) where all the Fijian languages meet.'

c.

Au na	*vaxayade*	*mai*	*na*	*itaba.*	*Me*	*tolu*	*na*	*xena*	*xopi.*
auna	βaxayaⁿde	mai	na	itaᵐba	me	tolu	na	xena	xopi
1Sg.future	send.3Gn	hither	−prpr	photo	3Sg.should	be.three	−prpr	its.thing	copy
V	V	Adv	Det	N	V	V	Det	N	N
Aux	+trns			PAT	Aux	−trns		PAT	

'I will send (you) the photos. Should be three copies.'

iii) Forms that start with [*no* or [*ne*. These indicate that the thing possessed is general, and not for eating or drinking. Examples are given in (19). These forms are also used to express nominalized events where the "possessor" is the actor.[16] Sentence examples are given in (20).

(19) *nona* *vale* 'his house'
nona βale

16) According to Geraghty, the actor and the undergoer of an event can be contrasted by the use of the [*ke*... form and the [*no*... form, for example, SF *kena ivacu* 'the punch he was given' and *nona ivacu* 'the punch he gave' (1983). To answer the question if this applies to NDR and if so, to what extent, further research is necessary.

(20)

a.	*E loxāvaxi*	*xexo*	*na*	*nona*	*yazi*	*ni*	*matailoilo*	*o*	*Manu.*
	e.loxāvaxi	xexo	na	nona	ya^{n}di	ni	matailoilo	o	manu
	talk.about.3Sg	2Sg	−prpr	his	carrying	of	glass	+prpr	M.
	V	Det	N	N	P	N	Det	N	

'Manu told you that he carries glasses (at his work).
(Lit. Manu told you about his carrying of glasses.)'

b.	*Riqariqa*	*na*	*nomu*	*xilā*	*na*	*loxā*	*vaxaNadrau.*
	ri^{ŋ}gari^{ŋ}ga	na	nomu	xilā	na	loxā	βaxana^{n}rau
	fast	−prpr	your.thing	learning	−prpr	language	Nandrauan
	V	Det	N	N	Det	N	N

'Your learning (how to speak) the Nadrau language is fast.'

The forms of possessed general nouns are given in Table 6.

Table 6: Possessed General Nouns

[*me*... forms

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*mequ*	*memu*	*mena*
Dl	*medaru*	*meirau*	*memudrau*	*medrau*
Pc	*medatou*	*meitou*	*memudou*	*medratou*
Pl	*meda*	*meimamu*	*memuniu*	*medra*

[*xe*... forms

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*xequ*	*xemu*	*xena*
Dl	*xedaru*	*xeirau*	*xemudrau*	*xedrau*
Pc	*xedatou*	*xeitou*	*xemudou*	*xedratou*
Pl	*xeda*	*xeimamu*	*xemuniu*	*xedra*

[*no*/[*ne*... forms

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*noqu*	*nomu*	*nona*
Dl	*nodaru*	*neirau*	*nomudrau*	*nodrau*
Pc	*nodatou*	*neitou*	*nomudou*	*nodratou*
Pl	*noda*	*neimamu*	*nomuniu*	*nodra*

1.1.2.2.2. Possessed non-general nouns

Possessed non-general nouns correspond to so-called "inalienably possessed" nouns, that is, a part of something including some body parts and kinship terms.[17] Examples are given in (21). Like possessed general nouns, the possessor of a possessed noun may be expressed by a following noun phrase (a Noun preceded by a Determiner), as shown

17) It should be noted, however, that not all nouns that indicate a part of something nor all nouns that indicate a kinship relation occur as directly possessed nouns.

in (22).[18] The endings of the possessed non-general nouns are shown in Table 7.

(21)

a. *suxuna* 'his hand(s)'
suxuna

b. *duadra* 'their foot/feet, their leg(s)'
ⁿduaⁿra

(22)

a.	*na*	*suxuna*	*o*	*Manu*	'Manu's hand(s)'
	na	suxuna	o	manu	
	Det	his.hand	Det	M.	
b.	*na*	*duadra*	*na*	*gone*	'children's foot/feet, children's leg(s)'
	na	ⁿduaⁿra	na	ŋone	
	Det	their.foot	Det	child	
c.	*na*	*damana*	*na*	*moli*	'the skin of an orange'
	na	ⁿdamana	na	moli	
	Det	its.skin	Det	orange	

Table 7: Possessed Non-general Noun Endings

	1in	1ex	2	3
Sg	—	...*qu*]	...*mu*]	...*na*]
Dl	...*daru*]	...*irau*]	...*mudrau*]	...*drau*]
Pc	...*datou*]	...*itou*]	...*mudou*]	...*dratou*]
Pl	...*da*]	...*imamu*]	...*muniu*]	...*dra*]

18) There are two examples in the data that appear not to follow this pattern. The form *rautana* is a possessed noun with a third person singular possessor ending, meaning 'its leaves'. In (i), the noun phrases *na vuzi* 'plantain', *na niu* 'coconut' and *na jaina* 'banana' follow the form *drautana* indicating the posessor, following the structure described in this section.

(i) *Na livono e caxa e na drautana na vuzi, na niu, na jaina.*
-prpr screen 3Sg.be.made with -prpr its.leaf -prpr plantain -prpr coconut -prpr banana
'As for the entrance screen (of a Fijian tranditional house), it is made of the leaves of plantain, coconut and banana.'

However, the following are also observed.

(ii.a) *na drautana ulumu* 'your hair'
-prpr its.leaf your.head

(ii.b) *drautana jaina madua* 'brown banana leaves'
its.leaf banana mature

In these sentences, it is possible to analyze the ending of the form *drautana* as simply a part of the word rather than a possessor ending, and consider the following words as (general) modifying elements. Thus,

(iii.a) *na drautana ulumu* 'your hair'
Det leaves your.head

(iii.b) *drautana jaina madua* 'brown banana leaves'
leaves banana mature

1.1.2.2.3. Non-possessed nouns and the expression of possession

Unlike possessed nouns, non-possessed nouns do not carry features which indicate the possessor. This is shown in (23). Their possession may be expressed by a preceding general possessed noun (optionally with the following noun phrase specifying the possessor) as has been described in 1.1.2.2.1, (see especially *jī* 'tea', *qau* 'taro', and *rārā* 'village' in examples (14)). The possession of a non-possessed noun may also be expressed by the Genitive preposition *ni* 'of', as shown in (24).

(23)

a.	*rārā*	'village'
	*rārāqu	'I.M. my village'
b.	*qau*	'taro'
	*qauqu	'I.M. my taro'
c.	*libu*	'leafy vegetables'
	*libuqu	'I.M. my leafy vegetables'

(24)

a.

na	*loma*	*ni*	*vale*
na	loma	ni	βale
−prpr	inside	of	house

'the inside of the house'

b.

i	*na*	*qwaqwa*	*ni*	*cagi*
i	na	ᵑgaᵑga	ni	ðaŋi
Loc	−prpr	strength	of	wind

'with the strong wind
(lit. in the strength of the wind)'

c.

Na	*ibalebale*	*ni*	*Taxō,*	*oxira*	*na*	*Tama.*
na	iᵐbaleᵐbale	ni	taxō	oxira	na	tama
−prpr	meaning	of	Taxō	they.Pl	−prpr	T.

'As for the meaning of *taxō*, (it is) those who are (/belong to the group of) *Tama*.'

There are a few examples of possessive expressions that follow neither of the structures described above. They are shown in (25). In (25a), the word *lawa maxawa* 'old law' is preceded by a possessed general noun *xena* 'its thing'. However, insteaded of *na vanua* 'the land', which is the expected form, *ni vanua* 'of land', with the preposition *ni* 'of' occurs. In (25b), the words *na moli* 'lemon' follow and appear to express the possessor of *na vuto* 'thorn', the phrase as a whole meaning 'a thorn of a lemon'. Simlilarly, *na niu* 'coconut' occurs following *na vu* 'trunk', the whole phrase meaning 'the tree of coconut, a coconut tree' in (25c). A remnant of the same structure is observed in (25d), the word for 'door', *matanadarava*, appears to be a sequence of two noun phrases, *na darava* modifying the preceding phrase *na mata*.[19] A similar example is *bajinawai* 'beach

(lit. the edge of water, SF *bāravi*)'[20] in (25e).

(25)

a.

Na	*xena*	*lawa*	*maxawa*	*ni*	*vanua.*
na	xena	lawa	maxawa	ni	βanua
−prpr	its	law	old	of	place

'(It used to be) the custom of the place.
(Lit. Its old law of the place.)'

b.

E late	*na*	*vuto*	*na*	*moli.*
elate	na	βuto	na	moli
3Sg.sting.3Gn	−prpr	thorn	−prpr	lemon
V.+trns		AGT		COR

'The thorn of a lemon stung (it).'

c.

na	*vu*	*na*	*niu*
na	βu	na	niu
−prpr	trunk	−prpr	coconut

'the tree of coconut, coconut tree'

d.

Sogote	*na*	*matanadarava!*
soŋote	na	mata.na.ⁿdaraβa
2Im.close.3Gn	−prpr	door
V.+trns		PAT

'Close the door!'

e.

Xira sā	*lai*	*vaxataxāxana*	*i*	*bajinawai*	*mai*	*Deuba.*
xirasā	lai	vaxataxāxana	i	ᵐbatinawai	mai	ⁿdeuᵐba
3Pl.already	go.to	go.for.picnic	Lcv	beach	Lcv	D.
V.Aux	V.Aux	−trns	LOC		LOC	

'They went for a picnic on the beach in Deuba.'

1.1.3. Noun Modifiers

In addition to Genitive phrases described above, a non-pronominal noun may be followed by one or more adjectives and/or a relative clause to modify it. Adjectives and relative clauses follow the modifying noun as in (26) and (27).

(26)

na	*isulu*	*lūlū*
na	isulu	lūlū
−prpr	clothes	wet

'wet clothes'

19) The corresponding word in Standard Fijian is *na mata ni kātuba* 'door'.
20) Cf. SF *bati ni wai* 'river bank, on a pond'.

(27) *E dua* *na* *vanua* *au* *samaxe,* *me* *tei* *xine* *na* *tavioxa.*[21]
e^{n}dua na βanua ausamaxe me tei xine na taβioxa
3Sg.be.one −prpr land 1Sg.clear.3Gn 3Sg.should be.planted there −prpr cassava
'There is a piece of land from which I cleared (the grass) so that cassava will be planted there.'

When a possessed noun is followed by a noun phrase that indicates the possessor, adjectives occur between the modified noun and the noun phrase that indicates the possessor. In (28), the noun *damana* 'its pith (white fiber strips on the segments of an orange)' is followed by an adjective *vāvaxu* 'thick', and the noun phrase *na moli* 'orange' that indicates the specific possessor of *damana* follows the adjective *vāvaxu.*

(28) *na* *damana* *vāvaxu* *na* *moli* 'the thick skin of an orange'
na ^{n}damana βāβaxu na moli
−prpr its.skin thick −prpr orange

Finally, the preposition *balete*~*baleji* 'concerning, about'[22] introduces a phrase modifying the preceding noun as well. Examples are given in (29).

(29)
a. *na* *ituxutuxu* *(me)balete* *na* *veizigizigī*
na ituxutuxu me^{m}balete na βei^{n}diŋi^{n}diŋī
−prpr news about −prpr election
'news about the election'
b. *na* *italanoa* *baleji* *Sakiusa*
na italanoa ^{m}baleti sakiusa
−prpr story about S.
'a story about Sakiusa'

1.2. Verbal Clauses and Their Constituents

A verbal clause must consist of one and only one non-auxiliary verb, which determines the transitivity of the clause. This verb, which hereafter will be referred to as the main verb[23], is the minimum requirement of a verbal clause. A sentence example with only one main verb is given in (30a). A main verb may be preceded by an auxiliary verb(s) and followed by an Adverb(s). A sentence example with an auxiliary verb and an Adverb is shown in (30b). Verb subcategorization is summarized

21) It should be noted that the form *dua* 'be one' in this clause is analyzed as a predicate, with the sequence *e dua* meaning 'there is one...'. It is different from the Determiner *e dua na.*

22) The form *balete* occurs before non-pronominal non-proper nouns, while *baleji* occurs before pronominal and proper nouns.

23) The morphology of non-auxiliary verbs and how it corresponds to transitivity is described in Section 2.

in Figure 3.

(30)

a. *Zive!*
ⁿdiβe
2Im.look.at.3Gn
V
+trns
'Look at it!/Listen!'

b.

Lai	*zive*	*rā!*
lai	ⁿdiβe	rā
2Im.go.to	look.at.3Gn	please
V	V	Adv
Aux	+trns	

'Go to look at it!'

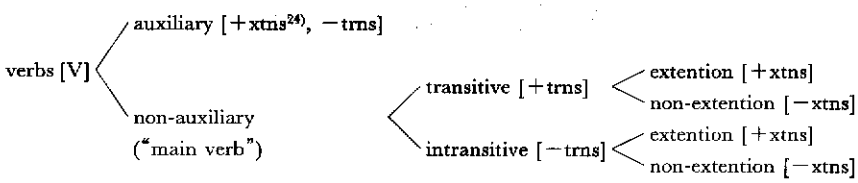


Figure 3: NDR Verb Subcategorization

Noun phrases and other constituents of a verbal clause follow the Adverb(s) unless topicalized,[25] as *o Makeresi* in (31). A transitive clause may have two core noun phrases, while an intransitive verb may have only one core noun phrase. This is schematically illustrated in (32). Between the Agent and the Patient of a transitive clause, there is no strictly fixed word order, although typically the former is observed to follow the latter.

(31)

Lai	*zive*	*rā*	*o*	*Makeresi!*
lai	ⁿdiβe	rā	o	makeresi
2Im.go.to	look at.3Gn	please	+prpr	M.
Aux	+trns	Adv		

'Go to see Makeresi!'

24) The feature [+xtns] (extention) indicates that the verb requires another verb as its dependent. As can be seen in the figure, all the auxiliary verbs in NDR are such extention verbs, while a non-auxiliary verb may or may not be an extention verb.

25) A topicalized noun phrase occurs in the clause initial position. For details, see Section 1.3.

(32)	Transitive	**(V)**	**V**	**(Adv)**	**NP**	**NP**
		Aux	+trns		PAT	AGT
						actr
	Intransitive	**(V)**	**V**	**(Adv)**	**NP**	
		Aux	−trns		PAT	
					actr	

Further examples are given from (33) through (35). In Sentence (33), the noun phrases *na moli* 'citrus fruit(s)' and *na gone* 'child(ren)' are complement noun phrases, and follow the predicate *ratou some* 'they (few) drank'. In Sentence (34), *yaguna* 'to him' is a Dative (adjunct) phrase and *o Vuniwai* 'Doctor' is a complement phrase, and follow the predicate *tou xadataxe* 'they (few) ran with'. A Dative phrase, although it is an adjunct, usually precedes other (both complement and adjunct) phrases and occurs in a position closest to the verb. An example of a prepositional (adjunct) Locative phrase *i na were* 'to the field' is also given in (35).[26]

(33)	*Ratou some*	*na*	*moli*	*na*	*gone.*
	ratousome	**na**	moli	na	ŋone
	3Pc.drink.3Gn	−prpr	orange	−prpr	child
	V	Det	N	Det	N
	+trns		PAT		AGT
					actr

'Children ate oranges.'

(34)	*Tou xadataxe*	*yaguna*	*o*	*Vuniwai.*[27]
	touxa^{n}dataxe	yaŋuna	o	βuniwai
	1inPc.run.with.3Gn	Dtv.3Sg	+prpr	Doctor
	V	N	Det	N
	+trns	REF		PAT

'We ran with the doctor to him.'

(35)	*Xua*	*ni*	*vā*	*i*	*na*	*were.*
	xua	ni	βā	i	na	were
	2Im.don't	3Sg.that	go	Lcv	−prpr	farm
	V	V	V	P	Det	N
	−trns	Aux	−trns			Lcv
	+xtns					LOC

'Don't go to the farm!'

26) See 2.1 and Section 3 for details of the occurrence of core noun phrases and the casemarking system.
27) See example (6) for a different reading of this sentence.

Agreement features of the core noun phrase(s) are carried by the clause-initial verb (for actor) and by the transitive verb (for the Patient of transitive sentences). Details of the agreement systems are described in 1.2.1. Auxiliary verbs and Adverbs are described in 1.2.2 and 1.2.3 respectively.

1.2.1. Agreement Markings

1.2.1.1. Actor agreement on the clause initial verb

A clause initial verb carries an agreement feature implying the person and (usually) number of the actor ([actr]). As has been shown in (30), a clause initial verb may be either an auxiliary verb or a non-auxiliary verb. In example (36), the clause initial verb is the auxiliary verb *sā*, which implies that the actor is third person singular. In example (37), the form *au sā* is the clause initial verb and implies that the actor is first person singular. The auxiliary verb *mata* and the non-auxiliary verb *moce* are not clause initial, and cannot carry any actor agreement feature.

(36)	*Sā*	*zive.*
	sā	ⁿdiβe
	3Sg.already	look.at.3Gn
	Aux	+trns
	'He has already seen it.'	

(37)	*Au sā*	*mata*	*moce.*
	ausā	mata	mioðe
	1Sg.already	want.to	sleep
	V	V	V
	Aux	Aux	−trns
	'I want to sleep./I am sleepy.'		

Sentence (38) is another example where the clause initial verb is non-auxiliary, but is the main verb of the sentence. The actor agreement forms are given in Table 8. It should be noted that a third person singular form ([*e*... or [...) implies a third person general (non-specified number) actor.

(38)	*Ratou some*	*na*	*moli*	*na*	*gone.*
	ratousome	na	moli	na	ŋone
	3Pc.drink.3Gn	−prpr	orange	−prpr	child
	V	Det	N	Det	N
	+trns		PAT		AGT
					actr
	'The children have already eaten the oranges.'				

Table 8: Actor ([actr]) Agreement Forms

	1in	1ex	2	3
Sg	—	[*au*...	[*(x)o*...	[*e*..., [...
Dl	[*taru*...	[*xairau*...	[*drau*...	[*erau*...
Pc	[*tou*...	[*xaitou*...	[*dou*...	[*eratou*...
Pl	[*xita*...	[*(xai)mamu*...	[*niu*...	[*era*...

Note that the forms for first person exclusive dual and paucal (and the longer form for plural) are identical with the corresponding independent pronouns shown in Table 3.

When the actor is third person singular, an overt agreement form may or may not occur as in (36) and (39). An imperative verb that is addressed to a second person addressee also may not have an overt actor agreement form. One such example is given in (40).

(39)	*Ā*	*lolomataxi*	*yaguna*	*e dua na*	*senacodo.*
	ā	lolomataxi	yaŋuna	eⁿduana	senaðoⁿdo
	3Sg.past	be.presented	Dtv.3Sg	one	necklace
	V	V	N	Det	N
	Aux	−trns	REF		PAT
					actr

'A necklace was given to her as a gift.'

(40)	*Lai*	*zive*	*rā!*
	lai	ⁿdiβe	rā
	2Im.go.to	look.at.3Gn	polite
	V	V	Adv
	Aux	+trns	

'Go to look at it (check it) please.'

1.2.1.2. Patient agreement on the transitive verb

A main verb is either transitive ([+trns]) or intransitive ([−trns]), and determines the transitivity of the clause. A transitive verb carries agreement features that imply the person and number of the Patient. For example, the transitive verb *zive* 'look at, see' implies a third person general (or, non-specified number) Patient, while *zivixexo* 'look at you, see you' implies a second person singular Patient. The Patient agreement endings of the transitive verb are given in Table 9, followed by sentence examples in (41) and (42).

Table 9: NDR [PAT] Agreement Marking Endings of Transitive Verbs

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*...iau]*	*...ixexo]*	*...ix(w)aya]*
Dl	*...ixitaruxa]*	*...ixairau]*	*...ixodrau]*	*...ixirau]*
Pc	*...ixitatou]*	*...ixaitou]*	*...ixodou]*	*...ixiratou]*
Pl	*...ixita]*	*...ixaimamu]*	*...ixoniu]*	*...ixirā]*
Gn				*...e], ...a]*

(41) *Au zivi xexo.*
au^{n}diβixexo
1Sg.see.2Sg
+trns
'I look at you.'

(42) *Au zivi xiratou na gone.*
au^{n}diβixiratou na ŋone
1Sg.see.3Pc Det child
+trns PAT
'I looked at the children.'

1.2.2. Auxiliary Verbs

1.2.2.1. General features

One or more auxiliary verbs may occur in a clause, preceding the main verb. An auxiliary verb always requires another verb as its dependent to follow it. Sentence examples are shown in (43) where auxiliary verbs are underlined. Some auxiliary verbs are listed in Table 10.

(43)

a.	*Xunā*	*mo*	*sā*	*mata*	*xana,*	*qoi*	*xaya*	*mai.*
	xunā	mo	sā	mata	xana	^{ŋ}goi	xaya	mai
	if	2Sg.should	already	want.to	eat	then	say	hither
	P	V	V	V	V	V	Adv	
		Aux	Aux	Aux	−trns	Aux	Aux	−trns

'If you are hungry, then let me know.'

b.	*Au sā*	*dau*	*numinumilevaji.*
	ausā	^{n}dau	numinumileβati
	1Sg.already	habitual	forget.many.things
	Aux	Aux	−trns

'I'm very forgetful these days.'

Table 10: Some NDR Auxiliary Verbs

Category	*Form*	Meaning
Complementizers	[*me*...	'So that'
	[*ni*...	'That'
State of the event	*sā*	'Event started taking place. Already, yet.'
	se	'Event stayed in the same condition. Already, yet, still.'
Tense	*na*	'Future, statement based on an assumed situation, irrealis.'
	ā	'Past, also realis.'
Sequencing	*qoi*	'Then'
Negation	*labu*	'Not'
Mental and/or physical direction	*lai*	'Go to do, going to take place, after this.'
	mai	'Come to do, coming to take place, since then.'
The attitude of the [actr]	*mata*	'Want to do, be about to.'
	dau	'Habitually do, has the nature of.'
	bara	'Finally, actually'

Of the forms shown in Table 10, those which belong to the same category do not cooccur. For example, the forms *sā* and *se* never cooccur. When more than one auxiliary verb occurs, their relative order is approximately that given in the list above. For example, when the forms *sā* and *na* cooccur, *sā* precedes *na*.

1.2.2.2. Auxiliary verbs that always occur as clause initial verbs

There are three auxiliary verbs that always occur as clause initial verbs. The forms are referred to here as [*me* forms 'so that, should', [ni_1 form 'when, as', and [ni_2 form 'that'. These differ from other auxiliary verbs also in that they have actor agreement marking forms as their endings instead of as their initial forms.

A list of the [*me* forms is given in Table 11, and example sentences are given in (44) through (46). A [*me* form may occur as the clause-initial verb of an independent sentence as in (44), or as the clause-initial verb of a complement clause as in (45) and (46), where the complement clauses are indicated between brackets.

Table 11: The Forms of Auxiliary Verb [*me*...

	1in	1ex	2	3
Sg	—	*meu*	*mo*	*me*
Dl	*metaru*	*meqairau*	*modrau*	*merau*
Pc	*metou*	*meqaitou*	*modou*	*meratou*
Pl	*meta*	*meqaimamu*	*moniu*	*mera*

(44)	*Mo*	*vā*	*mai*	*vaxariqariqa.*
	mo	βā	mai	βaxari^{ŋ}gari^{ŋ}ga
	2Sg.should	go	hither	quickly
	V	V	Adv	Adv
	Aux	−trns		

'(You should) come here quickly!'

(45)	*Xaimamu,*	*wara*	[*meqaimamu*	*dau*	*lai*	*lotu*	*i*	*valenilotu*].
	xaimamu	wara	me^{ŋ}gaimamu	^{n}dau	lai	lotu	i	βalenilotu
	1exPl	not	1exPl.that	habit	go.to	worship	at	church
	N	V	V	V	V	V	P	N
	topic	−trns	Aux	Aux	Aux	−trns		
		+xtns						

'As for us, we do not go to worship in church.'

(46)	*Au sā*	*numelevate*	[*meu*	*yade*	*mai*	*na*	*noqu*	*isulu*].
	ausā	numeleβate	meu	ya^{n}de	mai	na	no^{ŋ}gu	isulu
	1Sg.already	forget	1Sg.that	bring	hither	−prpr	my.thing	clothes
	V	V	V	V	Adv	Det	N	N
	Aux	+trns	Aux	+trns			PAT	
		+xtns						

'I forgot to bring my clothes.
(Lit. I forgot that I should bring my clothes.)'

Further examples (47) and (48) follow.

(47)	*Au sā*	*xaya*	*yagudrau*	[*me rau*	*vā*	*mai*].
	ausā	xaya	yaŋu^{n}rau	merau	βā	mai
	1Sg.already	say	Dtv.3Dl	3Dl.should	go	hither
	V	V	N	V	V	Adv
		+trns	REF	Aux	−trns	
		+xtns				

'I told them (two) to come here.
(Lit. I told them (two) that they (two) should come here.)'

(48)	*Au sā*	*vinaxwace*	*ligo*	[*meu*	*loxā*	*vaxaNadrau*].
	ausā	βinaxaðe	liŋo	meu	loxā	βaxana^{n}rau
	1Sg.already	like	only	1Sg.should	speak	Nadrauan
	V	V	Adv	V	V	Adv
	Aux	+trns		Aux	−trns	
		+xtns				

'I would like to speak the Nadrau language only.
(Lit. I would like only that I speak the Nadrau language.)'

The inflection of the two [*ni* forms basically follows that of the [*me* forms shown in Table 11. The distinction between [ni_1 form 'when, as' and [ni_2 form 'that' is based on the fact that the former introduces a conditional clause, while the latter introduces a complement clause of extention verbs. Examples of the two [*ni* forms are given in (49) through (52).

(49)	*Nī*	*sā*	*matua*	*na*	*maqo,*	*qai*	*vute.*
	$nī_1$	sā	matua	na	ma^{ŋ}go	^{ŋ}gai	βute
	3Gn.when	already	ripe	−prpr	mango	then	2Sg.pick.3Gn
	V	V	V	Det	N	V	V
	Aux	Aux	−trns		PAT	Aux	+trns

'When/if mangoes are ripe, pick them.'

(50)	*Nī*	*sā*	*tali*	*qaca,*	*sā*	*na*	*qoi*	*lauxani*	[*nī*	*sā*	*ibesāsā.*]
	$nī_1$	sā	tali	ŋaða	sā	na	^{ŋ}goi	lauxani	$nī_2$	sā	i^{m}besāsā
	3Gn.when	already	be.woven	finish	already	future	then	be.said	3Gn.that	already	be.*ibesāsā*
	V	V	V	Adv	V	V	V	−trns	V	V	V
	Aux	Aux	−trns		Aux	Aux	Aux	+xtns	Aux	Aux	−trns

'When it is completely woven, then it is now called *ibesāsā*.
(Lit. When it has been totally woven, then it will be said that it is an *ibesāsā*.'

(51)	*Xaitou vaxabate*	[*ni xo*	*se*	*nume vinaxwa*	*jixo*	*na*	*loxā*	*vaxaNadrau*].
	xaitou.vaxa^{m}bate	$nixo_2$	se	numeβinaxa	tixo	na	loxā	βaxana^{n}rau
	1exPc. expect	2Sg.that	still	remember.well	PROG	−prpr	language	Nadrauan
	V	V	V	V	Adv	Det	N	Adj
	+trns	Aux	Aux	+trns			PAT	
	+xtns							

'We expect that you still remember the Nadrau language well.'

(52)	*Na*	*suxuda*	*me*	*vui*	*vaxavinaxwa,*
	na	suxu^{n}da	me	βui	βaxaβinaxa
	−prpr	our.hands	3Gn.should	be.washed	well
	Det	PAT	V	V	Adv
		topic	Aux	−trns	

ni	*sā*	*bere*	[*ni ta*	*lai*	*xana*].
ni$_1$	sā	^{m}bere	nita$_2$	lai	xana
3Gn.when	already	before	1inPl.that	going.to	eat
V	V	V	V	V	V
Aux	Aux	−trns	Aux	Aux	−trns
	+xtns				

'We should wash our hands well before eating.
(Lit. Our hands should be washed well, when it is already before we are going to eat.)'

1.2.3. Adverbs

The main verb may be followed by one or more Adverbs. In Sentence (53), the form *rā* 'polite' is an adverb which is a dependent of the predicate *vua* 'wash (it)' and in Sentence (54), the form *qaca* 'finish' is an adverb which is a dependent of the predicate *volai* 'be written'. Some NDR Adverbs are shown in Table 12.

(53)	*Lai*	*vua*	*rā*	*na*	*suxumu.*
	lai	βua	rā	na	suxumu
	2Im.go.to	wash.hands	please	−prpr	your.hand
	V	V	Adv	Det	N
	Aux	+trns			PAT

'Go to wash your hands please.'

(54)	*Sā*	*na*	*volai*	*qaca*	*na*	*loxā*	*vaxaNadrau.*
	sā	na	βolai	^{ŋ}gaða	na	loxā	βaxana^{n}rau
	3Gn.already	future	be.written	finish	−prpr	language	Nadrauan
	V	V	V	Adv	Det	N	Adj
	Aux	Aux	−trns			PAT	

'All the Nadrau words will have been written.'

Table 12: Some NDR Adverbs

Category	*form*	meaning
State of the event	*qaca*	'Finished, done'
	jixo	'Event in progress'
	tū	'Stay doing/being...'
Direction	*mai*[28]	'Toward the speaker'
	yani	'Toward the addressee'
	rā	'Add politeness, please, may I, shall I?'
Repetition	*cuxa*	'Again'
	muni	'Also'
Emphatic	*ligo*	'Emphatic, only'
(derived Adverbs)	[*vaxa...*	examples: *vaxariqariqa* 'Quickly, fast', cf. *riqariqa* 'fast' *vaxaNadrau* 'Nadrau style', cf. *Nadrau* 'Nadrau'

When more than one adverb occurs in a clause, they occur in a fixed order relative to one another. For example, in (55), a derived adverb *vaxariqariqa* 'quickly' must follow the form *mai*.

(55) *Mo* *vā* *mai* *vaxariqariqa.*
mo βā mai βaxariⁿgariⁿga
2Sg.should go hither quickly
V V Adv Adv
Aux −trns
'(You should) come here quickly!'

In addition to those given in the list, there is an adverb, *xine*, that requires an anaphoric locational/temporal noun somewhere preceding it (but not necessarily in the same clause) and indicates the meaning "there, then". It follows all other Adverbs. The form *xine* refers to either a place or time which has been previously mentioned as in (56), or something which is indicated by a topicalized locative noun phrase as in (57).[29]

28) When the Adverb *mai* is followed by a Preposition *mai*, usually only one form occurs.
Me *yazi* *mai* *(mai)* *Japani* *na* *noqu* *isulu.*
3Sg.should be.brought hither from Japan −prpr mine clothes
'Please bring my clothes from Japan. (Lit. My clothes should be brought from Japan.)'

29) For the usage of *xine* with a topicalized locative noun phrase, see 1.3.

(56)

E dua	*na*	*vanua*	*au.samaxe,*	*me*	*tei*	*xine*	*na*	*tavioxa.* (=(27))
e^{n}dua	na	βanua	ausamaxe	me	tei	xine	na	taβioxa
3Sg.be.one	−prpr	land	1Sg.clear.3Gn	3Gn.should	be.planted	there	−prpr	cassava
V	Det	N	V	V	V	Adv	Det	N
−trns		PAT	+trns	Aux	−trns			PAT
		actor						actor

'I cleared a piece of land to plant cassava.
(Lit. There is a piece of land which I cleared (the grass from), so that cassava should be planted there.)'

(57)

Na	*xuro*	*ni*	*Viji,*	*e.dau*	*dei*	*xine*	*na*	*magiji.*
na	xuro	ni	βiti	e^{n}dau	^{n}dei	xine	na	maŋiti
−prpr	pot	of	Fiji	3Gn.habit	be.cooked	there	−prpr	food
Det	N	P	N	V	V	Adv	Det	N
topic			Aux	−trns			PAT	
							actor	

'As for a Fijian pot, food is cooked in it./In a Fijian pot, food is cooked there.'

1.3. Topicalization

Both in an equational sentence and a verbal clause, a noun phrase or a prepositional phrase may be topicalized by being placed in the sentence initial position. When the topicalized noun phrase is either the Patient or the Agent of a sentence, it simply occurs in the clause initial position (instead of following the verb) and the rest in the sentence remains the same. Examples are given in (58) through (60). In (58a-c), it is the Patient of intransitive verbs that is topicalized, while in (59a-b), it is the Patient of transitive sentences. Examples (60a-b) are instances of topicalization of the Agent of transitive sentences.

(58)

a.

"Bexa",	*me*	*vaxayagataxi*	*yagudra*	*na*	*tūraga.*
^{m}bexa	me	βaxayaŋataxi	yaŋun^{n}ra	na	tūraŋa
"bexa"	3Gn.should	be.used	Lcv.3Pl	−prpr	chief
N	V	V	N	Det	N
topic.PAT	Aux	−trns			

'As for the word *bexa*, it is to be used toward those who are chiefs.'

b.	*Na*	*isulu*	*lūlū,*	*e lili*	*jixo.*
	na	isulu	lūlū	elili	tixo
	−prpr	clothes	wet	3Gn.hang	PROG
	Det	N	Adj	V	Adv
		topic.PAT		−trns	

'As for wet clothes, they are on the line."

cf. *E lili jixo na islulu lūlū.*

c.	*Xaimamu,*	*wara*	*meqaimamu*	*dau*	*lai*	*lotu*	*i*	*valenilotu.* (=(45))
	xaimamu	wara	me^{ŋ}gaimamu	^{n}dau	lai	lotu	i	βalenilotu
	1exPl	not	1exPl.that	habit	go.to	worship	at	church
	N	V	V	V	V	V	P	N
	topic.PAT	−trns	Aux	Aux	Aux	−trns		LOC
		+xtns						

'As for us, we do not go to worship in church.'

cf. *Wara meqaimamu dau lai lotu i valenilotu (xaimamu).*

(59)

a.	*Na*	*yacu,*	*mamu dau*	*vaxayagataxe*	*i*	*na*	*gauna*	*ni*	*xana.*
	na	yaðu	mamu^{n}dau	βaxayaŋataxe	i	na	ŋauna	ni	xana
	−prpr	spoon	1exPl.habit	use.3Gn	Lcv	−prpr	time	of	eating
	Det	N	V	V	P	Det	N	P	N
		topic.PAT	Aux	+trns			LOC		

'As for *yacu* (spoon), we use (it) when we eat.'

cf. *Mamu dau vaxayagataxe na yacu in na gauna ni xana.*

b.	*I levu na*	*xā*	*o sā*	*vulice?*
	ileβuna	xā	osā	βuliðe
	many	thing	2Sg.already	learn.3Gn
	Det	N	V	V
		topic.PAT		+trns

'Have you learned a lot? (Lit. Many things, have you learned (them)?)'

cf. *O sā vulice i levu na xā?*

(60)

a.	*O*	*cei*	*e zigitaxi xexo?*
	o	ðei	e^{n}diŋitaxixexo
	+prpr	who	3Sg.select.2Sg
	Det	N	V
		topic	+trns

'Who selected you?'

cf. *E zigitaxi xexo o cei?*

b.	*Na*	*luvena*	*ni*	*gāneiqu,*	*dau*	*xacivi au*	*o*	*tuxai.*
	na	luβena	ni	ŋānei^{ŋ}gu,	^{n}dau	xaðiβiau	o	tuxai
	−prpr	her.child	of	my.*gāne*	habit	call.1Sg	+prpr	tuxai
	Det	N	P	N	V	V	Det	N
		topic.AGT			Aux	+trns		

'As for the child of my *gānei*, s/he would call me *tuxai*.'

cf. *Dau xacivi au o tuxai na luvena ni gānequ.*

The Patient of equational sentences can also be topicalized, as shown in (61).

(61)

a.	*O*	*Makelesi,*	*na*	*gonevuli.*
	o	makelesi	na	ŋoneβuli
	+prpr	M.	−prpr	student
	Det	N	Det	N

'As for Makelesi/talking about Makelesi, (she is) a student.'

cf. *Na gonevuli o Makelesi.*

b.	*Na*	*umane*	[*au sā*	*zive*	*jixo*],	*ixwaya,*	*na*	*noqu*	*tacita.*
	na	umane	ausā	^{n}diβe	tixo	ixaya,	na	no^{ŋ}gu	taðita
	−prpr	man	1Sg.already	look.at.3Gn	PROG	3Sg	−prpr	mine	father's.sibling
	Det	N	V	V	Adv	N	Det	N	N
		topic		+trns		topic		prdc	

'As for the man I'm looking at now, he is the one who is my father's sibling.'

c.	*Xiratou,*	*na*	*noqu*	*mata vūvale.*
	xiratou	na	no^{ŋ}gu	mataβūβale
	3Pc	−prpr	mine	family
	N	Det	N	N

'They, (they are the ones who are) my family.'

cf. *Na noqu matavūvale xiratou.*

A non-core phrase indicating either Locus or Means can also be topicalized. In such case, the adverb *xine* usually occurs. When topicalized, the preposition usually does not occur. Example (62) is repeated here along with a sentence where the prepositional phrase is not topicalized.

(62)

Na	*xuro*	*ni*	*Viji,*	*e.dau*	*dei*	*xine*	*na*	*magiji.*
na	xuro	ni	βiti	eⁿdau	ⁿdei	xine	na	maŋiti
−prpr	pot	of	Fiji	3Sg.habit	be.cooked	there	−prpr	food
Det	N	P	N	V	V	Adv	Det	N
	topic.MNS			Aux	−trns			PAT
								actor

'As for a Fijian pot, food is cooked in it./In a Fijian pot, food is cooked there.'

cf.

E dau	*dei*	*na*	*magiji*	*i*	*na*	*xuro*	*ni*	*Viji.*
eⁿdau	ⁿdei	na	maŋiti	i	na	xuro	ni	βiti
3Sg.habit	be.cooked	−prpr	food	Lcv	−prpr	pot	of	Fiji
V	V	Det	N	P	Det	N	P	N
Aux	−trns		PAT	MNS				

'Food is cooked in a Fijian pot.'

Na gauna ... xine 'As for the time when ...' is a fixed expression corresponding to English phrase "When (one did something...)". An example sentence is given in (63).

(63)

Na	*gauna*	*au volivoli*	*xine,*	*e volivolitaxi*	*jixo*	*na*	*tūqwaqwa.*
na	ŋauna	auβoliβoli	xine	eβoliβolitaxi	tixo	na	tūᵑgaᵑga
−prpr	time	1Sg.do.shopping	then	do.selling	PROG	−prpr	old.man

'When I did shopping, an old man was attending the store.
(Lit. As for the time I did shopping, an old man was selling.)'

A Locus phrase that is expressed with a Dative pronoun preceded by a preposition *mai*, may also be topicalized. Sentence (64) is an example of a sentence with a topicalized Dative pronoun.

(64)

a.

Mai	*yaguna*	*o*	*Turaga ni xoro,*	*drau sā*	*somu yaqona*	*jixo*	*xine?*
mai	yaŋuna	o	turaŋanixoro	ⁿrau.sā	somu.yaᵑgona	jixo	xine
at	Dtv.3Sg	+prpr	village.chief	3Dl.already	kava.drinking	PROG	there
P	N	Det	N	V	V	Adv	Adv
topic.LOC				Aux	−trns		

'Is it at the village-chief's place where they two are drinking kava?
(Lit. At the village-chief's place, are they drinking kava there?)'

b.	*Drau sā*	*somu yaqona*	*jixo*	*mai*	*yaguna*	*o*	*Turaga ni Xoro?*
	^{n}rau.sā	somu.ya^{ŋ}gona	jixo	mai	yaŋuna	o	turaŋanixoro
	3Dl.already	kava.drinking	PROG	at	Dtv.3Sg	+prpr	village-chief
	V	V	Adv	P	N	Det	N
	Aux	−trns			LOC		

'Are they two drinking kava at village-chief's place?'

It should be noted, however, that a Referent phrase, which is also expressed by a Dative pronoun, cannot be topicalized. Examples (65) through (67) show such cases along with the corresponding non-topicalized sentence each. In examples (65) and (66), the sentence shown as (a) were both uttered in a conversation, while (b) was created for the purpose of examining the possibility of topicalizing the Dative pronouns. As for (67), I happened to say sentence (67a) and it was corrected as shown in (67b). This shows that the topicalization applies to core and non-core phrases but not to a Dative Referent.

(65)

a.	*Vā*	*mai*	*(i)yagudatou*	*ixwaya.*
	βā	mai	iyaŋu^{n}datou	ixaya
	go	hither	Dtv.1inPc	3Sg
	V	Adv	N	N
	−trns		REF	PAT
				actr

'He came to our place.'

b.	**(I)yagudatou*	*sā*	*vā*	*mai*	*ixwaya.*
	iyaŋu^{n}datou	sā	βā	mai	ixaya
	Dtv.1inPc	3Sg.already	go	hither	3Sg
	N	V	V	Adv	N
	topic.REF	Aux	−trns		PAT
					actr

'I.M. To our place, he came.'

(66)

a.	*E bībī*	*yaguqu*	*na*	*xwā*	*qoi.*
	e ^{m}bī^{m}bī	yaŋu^{ŋ}gu	na	xā	^{ŋ}goi
	3Gn.heavy	Dtv.1Sg	−prpr	thing	this
	V	N	Det	N	N
	−trns	REF		PAT	COR
				actr	

'This is heavy for me.'

b.	*Yaguqu	*e bībī*	*xine*	*na*	*xwā*	*qoi.*
	yaŋu^{ŋ}gu	e^{m}bī^{m}bī	xine	na	xā	^{ŋ}goi
	Dtv.1Sg	3Gn.heavy	there	−prpr	thing	this
	N	V	Adv	Det	N	N
	topic.REF	−trns			PAT	
					actr	

'I.M. To me, this is heavy.'

(67)

a.	*(I)yagumu	*me*	*soli*	*xine*	*na*	*ivola*	*qoi.*
	iyaŋumu	me	soli	xine	na	iβola	^{ŋ}goi
	Dtv.2Sg	3Gn.should	be.given	there	−prpr	book	this
	N	V	V	Adv	Det	N	N
	REF	Aux	−trns			PAT	
						actr	

'I.M. To you, this book is to be given.'

b.	*Me*	*soli*	*yagumu*	*na*	*ivola*	*qoi.*
	me	soli	iyaŋumu	na	iβola	^{ŋ}goi
	3Gn.should	be.given	Dtv.2Sg	−prpr	book	this
	V	V	N	Det	N	N
	Aux	−trns	REF		PAT	
					actr	

'This book should be given to you.'

There is one case where a Locative phrase indicating the Means cannot be topicalized as shown in (68). Further research is necessary to determine whether this is a result of a syntactic restriction that applies generally to a certain syntactic structure, or of some pragmatic or lexical restriction associated with this particular verb.

(68)	**Na*	*moli*	*au dau*	*vaxasomi xira*	*xine*	*na*	*gone.*
	na	moli	au^{n}dau	βaxasomixira	xine	na	ŋone
	−prpr	orange	1Sg.habit	make.drink.3Pl	with.it	−prpr	child
	Det	N	V	V	Adv	Det	N
		topic.MNS	Aux	+trns			PAT

'I.M. The oranges, I make children eat them.'

cf.	*Au vaxasomi xira*	*na*	*gone*	*i*	*na*	*moli.*
	auβaxasomixira	na	ŋone	i	na	moli
	1Sg.make.drink.3Pl	Det	child	Lcv	Det	orange
	V.+trns		PAT	MNS		

'I make children eat oranges.
(Lit. I make children drink with oranges.)'

Finally, there is an example observed where Adverb *xine* does not appear when it is expected. It is shown in (69) where the position where the occurrence of the form *xine* is expected is indicated as <*xine*>. The optionality of this form remains as a future research topic.

(69)

a.	*E*	*na*	*gauna*	*ni*	*sā*	*kilikiliwa,*	*dau*	*qoi*	*yagi*	<*xine*>
	e	na	ŋauna	ni	sā	kilikiliwa	ⁿdau	ᵑgoi	yaŋɪ	
	Lcv	−prpr	time	3Gn.that	already	cold	3Gn.habit	then	be.lit	
	P	Det	N	V	V	V	V	V	V	
				Aux	Aux	−trns	Aux	Aux	−trns	

me	*xataxata*	*na*	*loma*	*ni*	*vale.*
me	xataxata	na	loma	ni	βale
3Gn.should	warm	−prpr	inside	of	house
V	V	Det	N	P	N
Aux	−trns		PAT		

'When it is cold, it (the fire place) is lit to make the inside of the house warm. (Lit. When it is cold, it is lit so that the inside of the house should be warm.)'

1.4. Other Clause Structures

There are some syntactic phenomena that are of interest but yet to be examined in detail. Example sentences are given below with a brief explanation of relevant matters.

1.4.1. Relative Clauses

A clause may be simply placed after a noun to modify it. Examples are given in (70) through (72), where the modified nouns are underlined and the following relative clauses are indicated between brackets. In example (70), the relative clause is transitive while in (71), it is intransitive. In sentence (72), the relative clause is introduced by the initial form [*x*..., the only such instance in my data. It is possible that this is an influence of Standard Fijian where a relative clause is introduced by the form [*ka*...

(70) *E dua na vanua* [*au samaxe*], *me tei xine na tavioxa.* (=(27))

e^{n}dua	na	βanua	ausamaxe	me	tei	xine	na	taβioxa
be.one	−prpr	land	1Sg.clear.3Gn	should	be.planted	there	−prpr	cassava

'There is a piece of land [from which I cleared (the grass)], so that cassava will be planted there.'

cf. *Au samaxe e dua na vanua.* 'I cleared a piece of land.'

(71)	*Xita na*	*saume*	*na*	*veitaro*	[*e lautarogi*	*mai*	*guda*].
	xitana	saume	na	βeitaro	elautaroŋi	mai	ŋu^{n}da
	1inPl.future	answer	−prpr	questions	be.asked	hither	Dtv.1inPl
	V	V	Det	N	V	Adv	N
	Aux	+trns		PAT	−trns		REF

'We will/let's answer each question [that is asked us].'

cf. *Elautarogi mai guda na veitaro.* 'Questions are asked to us.'

(72)	*Na*	*qele*	[*xau*	*vole*],	*e tei*	*tū*	*xine*	*na*	*dovu.*
	na	^{ŋ}gele	xau	βole	etei	tū	xine	na	^{n}doβu
	−prpr	land	1Sg	buy	be.planted	state	there	−prpr	sugarcane
	Det	N	V	V	V	Adv	Adv	Det	N

'The land [that I bought] is cultivated with sugarcane.'

cf. *Au vole na qele.* 'I buy land.'

1.4.2. Clauses Introduced by Prepositions

The Prepositions *xunā* 'like ..., if ...' and *balete (ni)* 'concerning, because (of) ...' also introduce a clause. Examples are shown in (73) and (74).

(73)	*Xunā*	*mo*	*sā*	*mata*	*xana,*	*qoi*	*xaya*	*mai.*
	xunā	mo	sā	mata	xana	^{ŋ}goi	xaya	mai
	like	2Sg.should	already	want.to	eat	then	2Im.say	hither
	P	V	V	V	V	V	V	Adv
		Aux	Aux	Aux	−trns	Aux	+trns	Adv

'If you are hungry, tell (me) so.'

cf.	*E*	*nā*	*xunā*	*qwoi.*
	e	nā	xunā	^{ŋ}goi
	at	here	like	this
	P	N	P	N

'Here, (it is done) like that.'

(74)	...*balete*	*niu*	*sā*	*oca*	*vaxalevu.*
	^{m}balete	niu	sā	oða	βaxaleβu
	concerning	1Sg.that	already	be.tired	a.lot
	P	V	V	V	Adv
		Aux	Aux	−trns	

'(I forgot to bring my clothes,) because I was very tired.'

1.4.3. Nominalization

The nominalization of clauses is another topic for further research in relevance to the possessive expressions. Examples are repeated in (75) from 1.1.2.2.1.

(75) (=(20))

a.	*E loxāvaxi*	*xexo*	*na*	*nona*	*yazi*	*ni*	*matailoilo*	*o*	*Manu.*
	e.loxāβaxi	xexo	na	nona	ya^{n}di	ni	matailoilo	o	manu
	talk.about.3Sg	2Sg	−prpr	his	carrying	of	glass	+prpr	M.
	V	Det	N	N	P	N	Det	N	

'Manu told you that he carries glasses (at his work).
(Lit. Manu told you about his carrying-glasses.)'

b.	*Riqariqa*	*na*	*nomu*	*xilā*	*na*	*loxā*	*vaxaNadrau.*
	ri^{ŋ}gari^{ŋ}ga	na	nomu	xilā	na	loxā	βaxana^{n}rau
	fast	−prpr	your.thing	learning	−prpr	language	Nadrauan
	V	Det	N	N	Det	N	N

'Your learning (how to speak) the Nadrau language is fast.'

2. Transitivity and Verb Forms in NDR

In this section, an outline of sentence structures is described focusing on their transitivity, followed by a discussion about the correlation between verb morphology and transitivity, and other verb derivations.

2.1. Transitivity

In a NDR sentence, some nouns agree with agreement features implied in the verb(s), while some do not. Those that agree with the verb are referred to here as "core nouns". A core noun occurs without being preceded by any casemarking preposition. As has been described in 1.2.1.1, the clause initial verb always carries agreement features implying the person and number of the actor (or, the so-called "subject") of the sentence, that is, any verbal sentence may have one core noun agreeing with those features. It has also been shown that a transitive verb carries agreement features implying the person and number of the Patient (or, the so-called "object"). That means, in a transitive sentence, a core noun that agrees with the Patient agreement features may occur, in addition to the one that agrees with the clause initial verb.

Examples (76) through (78) are given to illustrate this, where the optional core noun phrases are shown in parentheses. Agreement features are indicated under the verb in brackets, for example, [actr, 1Sg] in (76) indicates that the verb implies an actor which is first person singular. Examples (76) and (77) are transitive sentences. In (76), a core noun *oiau* 'I' may occur agreeing with the actor features (first person singular) implied in the verb, and another core noun phrase *na moli* 'orange' may occur agreeing the Patient features (third person General). The occurrence or non-occurrence of each core noun is independent from that of the other, in other words, it is not conditioned by whether the other core noun occurs in the sentence or not. Sentence (78) is an example of an intransitive sentence. Note that in (78), it cannot have another core noun phrase as shown in (b).

(76) *Au some* (*na* *moli*) (*oiau*).
auxome na moli oiau
drink (Det orange) (1Sg)
[actr / 1Sg]
[PAT / 3Gn]
+trns
'I ate an orange (myself).'

(77) *Ratou some* (*na* *moli*) (*na* *gone*).
ratousome na moli na ŋone
drink (Det orange) (Det child)
[actr / 3Pc]
[PAT / 3Sg]
+trns
'The children ate the oranges.'

(78)
a. *Au somu* (*oiau*).
ausomu oiau
drink (I)
[actr / 1Sg]
−trns
'I drink (myself).'
b. **Au.somu* *na* *moli* (*oiau*).
1Sg.drink Det orange (I)

Another morphosyntactic characteristic of core nouns that is differernt from that of other (non-core) arguments is that they are topicalized without requiring additional Adverb *xine*. See 1.2.3 and 1.3 for details.

Some transitive verbs may take a (non-Dative) noun phrase without being preceded by a preposition in addition to the two core noun phrases. These are referred to here as ditransitive verbs and the third noun phrase is referred to as the Referent of a ditransitive verb. Examples of sentences with ditransitive verbs are given in (79) and (80). The Referents of the ditransitive verbs are underlined.

(79)	*E loxāvaxi xexo*	*na*	*nona*	*yazi*	*ni*	*matailoilo*	*o*	*Manu.* (=(20a))
	e.loxāvaxixexo	na	nona	yadi	ni	matailoilo	o	manu
	talk.about.to.2Sg	−prpr	his	carrying	of	glass	+prpr	M.
	V	Det	N	N	P	N	Det	N
	[actr 1Sg]		REF					AGT
	[PAT 3Gn]							actr
	+trns							

'Manu told you that he carries glasses (at his work).
(Lit. Manu told you about his carrying of glasses.)'

(80)	*Na*	*luvena*	*ni*	*gāneiqu,*	*dau*	*xacivi au*	*o*	*tuxai.* (=(60b))
	na	luβena	ni	ŋānei^{ŋ}gu,	^{n}dau	xaðiβiau	o	tuxai
	−prpr	her.child	of	my.*gāne*	habit	call.as.1Sg	+prpr	tuxai
	Det	N	P	N	V	V	Det	N
	topic.AGT				Aux	+trns		REF
		actr			[actr 3Sg]	[PAT 1Sg]		

'The child of my *gānei*, s/he would call me *tuxai*.'

In example (79), the verb *e.loxāvaxi.xexo* carries actor agreement feautres, namely, third person General, and Patient agreement features, namely, second person singular, meaning '(it) told (you) about...'. The noun phrase *na nona yazi ni matailoilo* 'his carrying-glasses' agrees with neither of these features, but still occurs in the sentence without being preceded by a preposition, which is one of the characteristics of core noun phrases that are different from those of non-core nouns. Similary, in example (80), it is the topicalized noun phrase *na luvena ni gāneiqu* 'the child of my *gānei*' that agrees with the actor agreement features (third person singular), and there is no noun phrase in the sentence that agrees with the Patient agreement features (first person singular). However, again, another noun phrase *o tuxai* occurs in the sentence without being preceded by a preposition.

Other phrases, namely, Referents that are expressed by Dative pronouns, and Locus's, which are expressed by Locative prepositional phrases, may occur in a sentence regardless of the transitivity. Transitive and intransitive sentences with Dative pronouns are shown in (81), and those with Locative prepositional phrases are shown in (82).

(81)

a.	*Au talaxi xexo*	*rā*	*yaguna*	*o*	*Naitalatala.*
	au.talaxi.xexo	rā	yaŋuna	o	naitalatala
	1Sg.send.for.errand.2Sg	polite	Dtv.3Sg	+prpr	priest
	V	Adv	N	Det	N
	+trns		REF		COR

'I will send you to the priest. (Lit. I will send you to his place of the priest.)'

b.	*Sā*	*lauxani*	*yagumu*	*mo*	*lai*	*tasi tavioxa.*
	sā	lauxani	yaŋumu	mo	lai	tasitaβioxa
	3Sg.already	be.told	Dtv.2Sg	2Sg.should	go.to	skin.cassava
	V	V	N	V	V	V
	Aux	−trns	REF	Aux	Aux	−trns

'You have been told to go to skin cassava.
(Lit. It has been said to you that you should go to do cassava-skinning.)'

(82)

a.	*Xua*	*ni*	*vā*	*i*	*na*	*were.*
	xua	ni	βā	i	na	were
	don't	2Sg.that	go	Lcv	−prpr	field
	V	V	V	P	Det	N
	Aux	Aux	−trns	LOC		

'Don't go to the field.'

b.	*Xaitou dau*	*vaxatatama raijō*		*i*	*na*	*veimataxwa.*
	xaitou^{n}dau	βaxatatama.raijō		i	na	βeimataxa
	1exPc.habit	listen.to.radio		Lcv	−prpr	every.morning
	V	V		P	Det	N
	Aux	−trns		LOC		

'We listen to the radio every morning.'

c.	*Au donumaxi xirau*	*i*	*na*	*māxete.*
	au^{n}donumaxixirau	i	na	māxete
	1Sg.run.into.3Dl	Lcv	−prpr	market
	V	P	Det	N
	+trns	LOC		

'I ran into them at the market.'

2.2. Syntactic Derivation

2.2.1. Transitive Endings and Forms Commonly Found on Intransitive Verbs

The transitivity of a verb is often reflected in the verb morphology. In this section, commonly found derivational forms of verbs that correlate with their transitivity are described.

As has been described earlier (1.2.1.2), transitive verbs carry Patient-agreement

features. These are indicated by endings that alternate depending on the person and number of the Patient. In other words, the transitive feature ([+trns]) is indicated either by the existence of a Patient agreement-ending form, which follows the segment *.i.* in a verb, or by the *e*] or *a*] ending of the verb. The forms of the endings are repeated in Table 13.

Table 13: NDR Patient Agreement-Marking Endings of Transitive Verbs (=Table 9)

	1in	1ex	2	3
Sg	—	...*iau*]	...*ixexo*]	...*ix(w)aya*]
Dl	...*ixitaruxa*]	...*ixairau*]	...*ixodrau*]	...*ixirau*]
Pc	...*ixitatou*]	...*ixaitou*]	...*ixodou*]	...*ixiratou*]
Pl	...*ixita*]	...*ixaimamu*]	...*ixoniu*]	...*ixirā*]
Gn				...*e*][30], ...*a*]

In Sentence (83), a transitive verb *yazixexo* 'see' has a Patient agreement-ending *ixexo*. The content of the [PAT] may be overtly expressed by a noun phrase. In example (84), the same verb appears with the ending *ixiratou* that implies a third person paucal [PAT]. Its content may be overtly expressed by the following noun phrase, as by *na gone* in (84).

(83) *Au.zivi.xexo.* (=(41))
1Sg.see.2Sg
+trns
'I look at you.'

(84) *Au.zivi.xiratou* *na* *gone.* (=(42))
1Sg.see.3Pc Det child
+trns PAT
'I looked at the children.'

The endings *e*]~*a*] imply a third person general Patient, that is, a third person Patient with no-specified number. In sentence (85), the form *zive*, which ends with *e*], is transitive and implies a Patient that is not specified in the sentence. In sentences (86) through (88), the verbs also imply third person General Patients, but the Patients are expressed by noun phrases *na qau* 'taro' and *o Vaolo* 'Vaolo (personal name)'. Example (89) shows that, when the number of the Patient needs to be specified, a third person plural form may occur, followed by a noun phrase specifying the Patient, in this case, *na moli* 'orange'.

30) Historically, this form is considered to have developed from the sequence *i* followed by a third person general ending *a*]. See Geraghty 1983 for a discussion.

(85) *Xo.sā* *zive?*
2Sg.already see.3Gn
V V
Aux +trns
'Have you seen it?'

(86) *...au.na* *zive* *sara* *o* *Vaulo.*
1Sg.future see.3Gn immediately +prpr V.
V V Adv
Aux +trns
'(When I go back after this,) I'll see Vaulo immediately.'

(87) *Au lai* *yade* *mai* *na* *suxa.*
1Sg.go.to bring hither −prpr sugar
V V Adv Det N
Aux +trns
'I'll fetch the sugar.
(Lit. I'll go to bring sugar here.)'

(88) *Au.na* *vaxadea* *na* *qau.*
1Sg.future cook.in.Fijian.pot.3Gn −prpr taro
V V Det N
Aux +trns
'I'll cook taro in a Fijian pot.'

(89) *Au.sā* *somi.xirā* *na* *moli.*
1Sg.already drink.3Pl −prpr orange
V V Det N
Aux +trns PAT
'I have already eaten those oranges.'

A transitive verb usually has a corresponding passive-meaning intransitive verb. Some of these forms are shown in Table 14. As can be seen in the table, the form [*lau* in the initial and the ending *i*] are often (but not always) observed on intranisitive verbs. Sentence examples with passive-meaning intransitive verbs follow in (90) through (92). Compare (90) with (85) and (86), (91) with (87), and (92) with (89). Note that with these verbs the "agent", or the "doer" of the event cannot be expressed.

Table 14: Some Transitive and Corresponding Passive-meaning Intransitive Forms

Transitive (3Gn Patient) form		Corresponding intransitive form	
numelevate	'forget (it)'	*launumelevaji*	'be forgotten'
sogote	'close (it)'	*sogo*	'be close/d'
some	'drink (it)'	*lausomu*	'be drunk'
tamane	'hear (it), listen to (it)'	*lautama*	'be heard'
tetea	'ask (it), question (it)'	*tetei*	'be asked'
vaxayade	'send (it)'	*vaxayazi*	'be sent'
vaxayagataxe	'use (it)'	*vaxayagataxi*	'be used'
volā	'write (it)'	*volai*	'be written'
vua	'wash (for hands only) (it)'	*vui*	'(hands) be washed'
xadataxe	'run with (it)'	*xadataxi*	'be run with, be carried'
xana	'eat (it)'	*lauxana*	'be eaten'
xaya	'say (it)'	*lauxani*	'be said'
yade	bring (it)'	*lauyazi, yazi*	be brought'
zive	'see (it), look at (it)'	*lauzī*	'be seen'
zigitaxe	'select (it)'	*zigitaxi*	'be selected'

(90) *I dua na* *delana* *sā* *lauzī.*
one its.top 3Sg.already be.seen
Det N V V
PAT/topic Aux −trns
'Now we can see the top of a mountain.
(Lit. The top of a mountain, it is now seen.)'
cf. *zive* 'transitive, look at, see'

(91) *I dua na* *gone* *sā* *lauyazi.*
one child 3Sg.already be.brought
Det N V V
PAT/topic Aux −trns
'There is a child who has already been brought (somewhere).'
cf. *yade* 'transitive, bring something'

(92) *E dau* *lausomu* *na* *moli.*
3Sg.habit be.drunk −prpr orange
V V Det N
−trns
'The orange is something for drinking.'

Some transitive verbs with coresponding active-meaning intransitive verbs are shown in Table 15. The active meaning verbs sometimes have a reduplicated form.

Table 15: Some Transitive and Corresponding Active Meaning Intransitive Forms

Transitive (3Gn Patient) form		Corresponding intransitive form	
some	'drink (it)'	*somu*	'have a drink'
xana~xane	'eat (it)'	*xana~xane*	'have a meal'

A summary of the syntactic derivations of verbs is given in Table 16 with some specific examples.

Table 16: Examples of Syntactic Derivation of the Verb[31]

verb form and its transitivity		bring ([+drct])	see ([+drct])	run with ([+inst])
...*i*] and/or [*lau*..., or neither	[−trns]	*lauyazi, yazi* '[inst] be brought'	*lauzī* '[goal] be seen'	*xadataxi* '[inst] be run with'
...*i*.PAT]	[+trns], 2Sg	*yazi.xexo* 'bring you'	*zivi.xexo* 'see you'	*xadataxi.xexo* 'run with you'
	[+trns], 3Gn	*yade*	*zive*	*xadataxe*

cook ([+drct, +caus])	drink ([+drct])	eat ([+drct])	forget ([+drct])
vaxadei "be cooked in a Fijian pot"	*lausomu* 'be drunk'	*lauxana* 'be eaten'	*launumelevaji* 'be forgetton'
vaxadei.xirā "cook them in a Fijian pot"	*somi.xirā* 'drink them'	*xani.xirā* 'eat them'	*numelevaji.xexo* 'forget you'
vaxadea	*some*	*xana~xane*	*numelevate*

2.2.2. "Noun Incorporation"

An intransitive verb may derive from a sequence of a verb and a noun (so-called "incorporation"). Some examples are shown in (93), and a sentence example follows in (94). The boundary between the original verb and the incorporated noun is indicated by the symbol "=".

(93)

a. *vaxadei=qau* 'do taro-cooking (in a Fijian pot)' cf. *vaxadea na qau* 'cook taro'
b. *somu=jī* 'do tea-drinking, have tea' cf. *some na jī* 'drink tea'
c. *xana=madrai* 'do bread-eating, have bread' cf. *xana na madrai* 'eat bread'

31) As for explanations for [+drct], [+inst], [+caus], see 2.3.

(94)	*Au sā*	*lai*	*yazi=magiji*	*mai*		*na*	*were.*
	1Sg.already	go.to	bring=food	hither	(from)[32]	−prpr	farm
	V	V	V	Adv	(P)	Det	N
	Aux	Aux	−trns			LOC	

'I'm going to fetch some food from the farm.
(Lit. I'm going to do food-fetching from the farm.)'

2.3. Semantic Derivations

Verbs undergo various semantic derivations as well as the syntactic derivations described above. In this section, major semantic verb derivation and relevant forms are described.

2.3.1. Verb Forms Implying "Direct" Patient ([−trns] or [+trns])

A verb with the direct ([+drct]) feature typically implies an undergoer of an event and a goal of perceptional activity semantically. This feature of the verb is usually shown by the existence of a lexically determined consonant, which has been traditionally described as "a close transitive suffix" or a "a short transitive suffix", although not always. Syntactically, a verb with [+drct] feature undergoes the syntactic derivation described in 2.1.1, and may be either [−trns] or [+trns]. For example, in (95a), the form *xada* 'run' has corresponding forms *xadave* 'run for [goal]' ([+trns]) and *xadavi* ([−trns]). The consonant *v* indicates that the activity expressed by the forms semantically implies a goal, and the goal is syntactically realized as the Patient (that is, the "object" when transitive, and the actor/"subject", when intransitive). Note that the forms *xadave* and *xadavi* have the syntactic derivational relation described in 2.2.1.

(95)	Form with the [−drct] feature		Corresponding forms with the [+drct] feature	
a.	*xada* [−trns] 'run'	:	*lauxadavi*	[−trns] '[goal] be run for'
			xadave	[+trns] 'run for [goal], run to fetch [goal]'
b.	*sabe* [−trns] 'be cleaned'	:	*sabeji*	[−trns] '[goal] be cleaned'
			sabete	[+trns] 'clean [goal]'
c.	*sau* [−trns] 'be charged, cost'	:	*saumi*	[−trns] '[goal] be charged for'
		:	*saume*	[+trns] 'pay for [goal]'

2.3.2. Verb Forms Implying "Instrumental" Patient ([−trns] or [+trns])

A verb with the instrumental ([+inst]) feature typically implies an instrument used in the activity, or the cause of the activity semantically. Morphologically, this feature is shown by the form *-Cax* (C stands for a lexically determined consonant) which has been traditionally described as "a remote transitive suffix" or "a long transitive suffix". Syntactically, a verb with [+inst] feature may be either [−trns] or [+trns]. For

32) When the preposition *mai* follows the adverb *mai*, it does not formally appear. See footnote 28.

example, in (96a), the form *xada* 'run' and *xadataxe* 'run with [inst]' have a semantic derivational relation. The form *tax* indicates that the second form implies that the activity is accompanied with some entity, which occurs as the Patient both in the transitive (*xadataxe*) or intransitive (*xadataxi*) constructions.

(96)	Form with the [−inst] feature		Corresponding forms with the [+inst] feature	
a.	*xada* [−trns] 'run'	:	*xadataxi*	[−trns] '[inst] be run with'
		:	*xadataxe*	[+trns] 'run with [inst]'
b.	*xada* [−trns] 'run'	:	*xadaqwaji*	[−trns] '[inst] be chased'
		:	*xadaqwate*	[+trns] 'chase [inst]'
d.	*daxe* [+trns] 'throw at [goal]'	:	*daxetaxi*	[−trns] '[inst] be thrown'
		:	*daxetaxe*	[+trns] 'throw [inst]'
c.	*loxā* [−trns] 'speak'	:	*loxāvaxe*	[+trns] 'talk (about something) with [inst]'[33]

2.3.3. Verb Forms with "Causative" Meaning ([−trns] or [+trns])

A verb with the causative ([+caus]) feature typically implies 'something/someone is caused to be/do something' semantically. It may also mean intensive, or repetitive activition. Morphologically, this feature is shown by the form [*vaxa* ([*vā* when the following form starts with a velar consonant) in the initial position and/or by either C] or C*ax*] ending (C stands for a lexically determined consonant). Syntactically, [V, +caus] may be either [−trns] or [+trns]. Examples are given in (97), followed by sentence examples (98) and (99).

(97)	Form with the [−caus] feature		Corresponding forms with the [+caus] feature	
a.	*dei* [−trns] 'be cooked in a Fijian pot'	:	*vaxadea*	[+trns] 'cook [goal] in a Fijian pot'
	somu [+trns] 'drink'	:	*vaxasome*	[+trns] 'make [goal] drink'
	yaga [−trns] 'be useful'	:	*lauvaxayagataxi*	[−trns] '[inst] be used'
		:	*vaxayagataxe*	[+trns] 'make a use of [inst], use [inst]'
	xataxata [−trns] 'be warm/hot'	:	*vāxataxatataxe*	[+trns] 'make [inst] warm/hot'

33) The corresponding intransitive form is missing in my data. The form for the corresponding intransitive which means "[inst] be spoken to" should be either *lauloxāvaxi* or *loxāvaxi*, or could be the both. Note that this is also a ditransitive verb (see example (79)).

(98) *Au vaxasomi xira* *i* *na* *moli.*
1Sg.make.drink.3Pl with −prpr orange
V P Det N
+trns
'I will make them have some oranges.'

cf. *Era some* *na* *moli.*
3Pl.drink −prpr orange
V Det N
+trns
'They have some oranges.'

(99) *Sā* *vāxataxatataxi* *na* *raisi* *bulagi.*
3Sg.already be.made.warm −prpr rice left.over
V V Det N Adj
Aux −trns
'The left-over rice has been heated.'

cf. *Sā* *xataxata* *na* *raisi* *bulagi.*
3Sg.already warm/hot Det rice left.over
V V Det N Adj
Aux −trns
'The left-over rice is warm.'

The forms [*vaxa*... and ...C*ax*...] also derive verbs meaning 'put something on, equip with something' from nouns. Examples are shown in (100) followed by an example sentence in (101).

(100)

a.	*malo*	N	'underwear, something to put underneath, pith of orange'
	vaxamalo	V [−trns]	'be put underwear, wear underwear, have pith (orange)'
	vaxamalotaxi	V [−trns]	'to be made to put on underwear'
	vaxamalotaxe	V [+trns]	'to make someone to put on underwear'
b.	*loxa*	N	'lock (<Eng. lock)'
	vaxaloxa	V [−trns]	'be equipped with a lock'
	vaxaloxataxe	V [+trns]	'equip (something) with a lock'
	loxa	V [−trns]	'be locked'
	loxataxe	V [+trns]	'lock (something)'

(101)	*Xo sā*	*loxataxe*	*mai*	*na*	*matanadarava?*	*Me*	*loxa.*
	2Sg.already	lock	hither	−prpr	door	3Sg.should	be.locked
	V	V	Adv	Det	N	V	V
	Aux	+trns				−trns	

'Did you lock the door (and came)? It should be locked.'

2.3.4. *vei...i*: Reciprocal, or Human-goal Action ([−trns])

The form [*vei* in the initial position with *i*] ending on a verb indicates i) a reciprocal activity, or ii) an activity which takes place toward/on people. Verbs with these forms are always intransitive. Examples are shown in (102) and (103). Note that the verb *veixerexerei* in (103) indicates the kind of action that takes place in relation to other people in general. When a specific goal (the person who is asked about, or the things that are asked about) needs to be specified, this form cannot be used.

(102)	*Drau veixadaqwaji*	*na*	*ose.*
	3Dl.chase.each.other	−prpr	horse
	V	Det	N
	−trns		PAT

'One horse is chasing another. (Lit. Two horses are chasing each other.)'

(103)	*veixerexerei*	[−trns]	'ask people for things'
cf.	*xerea*	[+trns]	'ask for [goal]'

2.3.5. Reduplication: Repeated Activity, Action without Specific Goal ([−trns])

Reduplication, or partial reduplication indicates repeated activity. Semantically, the only complement noun expresses the person who does the activity. Sentence examples are given in (104) and (105).

(104)	*Xadexade*	*mai!*
	run	hither
	−trns	

'Come running!'

cf. *xade* [−trns] 'run'

(105)	*Au lai*	*savasava*	*rā.*
	1Sg.go.to	wash	polite
	V	V	Adv
	Aux	−trns	

'I'm going to do laundry.'

cf. *sava* [−trns] 'be washed'

2.3.6. *vei...axi*: Activity of 'Going Around' ([−trns])

Verbs with the form [*vei...axi*] indicates an activity which takes place here and there. Examples are given in (106).

(106)	*veivāaxi*	'wonder around, travel around here and there'
cf.	*vā*	[−trns] 'go'
	veiyaziaxi	'bring something here and there, distribute something'
cf.	*yazi*	[−trns] 'be brought'

2.4. A Summary

Syntactic and semantic derivations discussed above are summarized in Tables 17 and 18 with the verb *xada* 'run' and its related forms. The meaning of each form is given in (107).

Table 17: A Summary of Verb Derivations Involving both Semantic and Syntactic Derivation

semantic derivation →

	[+drct]	[+inst]	[+caus]	[+inst]	
xada	*lauxadavi*	*xadataxi*	*lauvāxadavi*	*xadaqwaji*	[−trns]
	xadavi...	*xadataxi...*	*vāxadavi...*	*xadaqwaji...*	[+trns]
	xadave	*xadataxe*	*vāxadave*	*xadaqwate*	[+trns]

↑ syntactic derivation ↓

Table 18: A Summary of Verb Derivations among Intransitive Verbs

xadaxada		[−trns], repetitive
veixadeaxi		[−trns], around
	veixadaqwaji	[−trns], reciprocal

↑ semantic derivation ↓

(107)	*xada*	[−trns]	'run'
	xadavi	[−trns, +goal]	'be run for'
	xadave (na ose)	[+trns, +goal]	'run for (a horse), run to fetch (a horse)'
	xadataxi	[−trns, +inst]	'be run with'
	xadataxe (na ivola)	[+trns, +inst]	'run with a book'
	lauvāxadavi	[−trns, +caus]	'be made to run'
	vāxadave (na ose)	[+trns, +caus]	'make (a horse) run'
	xadaxada	[−trns]	'be running'
	veixadaaxi	[−trns]	'run around here and there'

3. Casemarking System

This section provides a brief summary of the casemarking system of NDR based on the description provided in the previous sections.

3.1. Marking on the Noun Phrases: Patient and Agent

In NDR, there is no morphological nor word-order casemarking on "core noun phrases"[34], namely, the Patient and Agent. Example sentences are given below. Sentences (108) through (110) are transitive, with a pronominal Agent, a non-pronominal non-proper Agent, and a proper Agent respectively. Likewise, examples (111) through (113) show intransitive sentences with different actors.

(108)	*Au.some*	*na*	*moli*	*oiau.*
	1Sg.drink	−prpr	orange	1Sg
	V	Det	N	N
	+trns		PAT	AGT.actr

'I ate an orange (myself).'

(109)	*Ratou.some*	*na*	*moli*	*na*	*gone.*
	3Pc.drink.3Gn	−prpr	orange	−prpr	child
	V	Det	N	Det	N
	+trns		PAT		AGT.actor

'The children ate the oranges.'

(110)	*E.some*	*na*	*moli*	*o*	*Manu.*
	3Sg.drink.3Gn	−prpr	orange	+prpr	M.
	V	Det	N	Det	N
	+trns		PAT		AGT.actor

'Manu ate the oranges.'

(111)	*Au.somu*	*oiau.*
	1Sg.drink	I
	V	PAT.actr
	−trns	

'I had a drink (myself).'

34) For the definition of "core nouns" in this study, see 2.1.

(112) *E.somu* *na* *gone.*
3Sg.drink −prpr child
V PAT.actr
−trns
'The child had a drink.'

(113) *E.somu* *o* *Manu.*
3Sg.drink −prpr M.
V PAT.actr
−trns
'Manu had a drink.'

Because there is no marking on the Patient and Agent, when a transitive sentence has two core noun phrases both of which may agree with either of the agreement features, the sentence may be syntactically ambiguous and allow two different readings. This is illustrated in (114) and (115). In (114), the verb implies a third person paucal Agent.actor, and a third person non-specified number Patient. The two noun phrases, *na gone* 'child' and *na qasenivuli* 'teacher' may agree with either one of these features, and thus could be interpreted as either the Patient or Agent. The two possible readings and their syntactic interpretation are shown in (114a) and (114b). The same is true when a transitive sentence has only one core noun. In (115), the only noun phrase *o Vuniwai* 'Doctor' may be interpreted as either the Patient (115a) or the Agent (115b). In actual language use, the linguistic and non-linguistic context usually help to identify who is the Agent and who is the Patient.

(114)

a. *Ratou zive* *qaca* *na* *gone* *na* *qasenivuli.*
3Pc.see.3Gn finish −prpr child −prpr teacher
V Adv Det N Det N
+trns PAT AGT.actr
'The (few) teachers have already seen the child.'

b. *Ratou zive* *qaca* *na* *gone* *na* *qasenivuli.*
3Pc.see.3Gn finish −prpr child −prpr teacher
V Adv Det N Det N
+trns AGT.actr PAT
'The (few) children have already seen the teacher.'

(115)

a.	*E na*	*lai*	*zive*	*qaca*	*o*	*Vuniwai.*
	3Sg.future	go.to	see.3Gn	finish	+prpr	Doctor
	V	V	V	Adv	Det	N
	Aux	Aux	+trns			PAT
	'He will have seen the doctor.'					
b.	*E na*	*lai*	*zive*	*qaca*	*o*	*Vuniwai.*
	3Sg.future	go.to	see.3Gn	finish	+prpr	Doctor
	V	V	V	Adv	Det	N
	Aux	Aux	+trns			AGT.actr
	'The doctor will have seen him.'					

An independent pronoun may occur in a full noun phrase for emphasis when it is the actor (or "subject"), as *oyau* 'I' in (116). An independent pronoun may not occur as the full Patient noun phrase in a transitive sentence, so [PAT] agreement forms, such as ...*xexo*] in (116), are the only marking of the "object" of a transitive sentence. Because of the agreement system, when the Patient and Agent (or either one of them) are not third person, there is no ambiguity as to the interpretation of the Patient and Agent.

(116)	*Au sā*	*zivi xexo*	*qaca*	*oyau.*
	1Sg.already	see.2Sg	finish	1Sg
	V	V	Adv	N
	Aux	+trns		AGT
	'I, myself, have already seen you.'			

3.2. No Formal Marking on the Noun Phrase: Referent of Ditransitive Verbs and Correspondent

A noun phrase that is not morphologically casemarked may also occur to express the Referent of ditransitive verbs. See (79) and (80) for details and examples.

A noun phrase that modifies another noun, which is analyzed as having the Correspondent Semantic Relation, may also occur without any morphological marking. Examples are shown in (117).

(117)

a.	*na*	*vuto*	*na*	*moli*	'the thorn of orange'
	−prpr	thorn	−prpr	orange	
		N		N.COR	
b.	*yaguna*	*o*	*Vuniwai*		'to the Doctor'
	Dtv.3Sg	−prpr	Doctor		
	N		N.COR		
c.	*nomu*	*tetei*			'your questions'
	your.thing	question			
	N	N.COR			

3.3. Dative Referents

That Dative pronouns are used to express other Referents has already been described in 1.1.1.2.

3.4. Genitive Preposition *ni*: Correspondent

The Genitive preposition *ni* 'of' and the following noun also expresses Corresondent, modifying the preceding noun. Examples are shown in (118).

(118)

a.	*na*	*loma*	*ni*	*vale*		'the inside of the house'
	−prpr	inside	of	house		
				COR		
b.	*na*	*qwaqwa*	*ni*	*cagi*		'the strength of the wind'
	−prpr	strength	of	wind		
				COR		
c.	*na*	*isau*	*ni*	*nomu*	*tetei*	'answers to your questions'
	−prpr	answer	of	your.thing	question	
				COR		

3.5. Locative Preposition *i*~*e* and Ablative Preposition *mai*: Locus and Means

Locative preposition *i*~*e* and Ablative preposition *mai* express Locus, indicating information as to the time or place where an event took place. Examples are given in (119). Proper nouns follow a preposition without a Determiner as in *i bajinawai* 'on the beach' and *mai Deuba* 'in Deuba' in (120).

(119)

a. *Xua ni vā i na were!*
don't that go Lcv Det farm
−trns LOC
'Don't go to the farm/field!'

b. *Au sā lai yazi=magiji mai na were.*
1Sg.already going.to bring=food Abl Det farm
Agr-Aux Aux −trns LOC
'I'm going to fetch some food from the farm.
(Lit. I'm going to do food-fetching from the farm.)'

(120)
Xira sā lai vaxataxāxana i bajinawai mai Deuba. (=(25e))
3Pl.already go.to go.for.picnic Lcv beach Lcv D.
V.Aux V.Aux −trns LOC LOC
'They went for a picnic on the beach in Deuba.'

When a location is expressed by a pronoun, it is the Dative pronoun that occurs after a Locative preposition as in (121).

(121) *Drau sā somu yaqona jixo mai yaguna o Turaga ni Xoro?* (=(5))
3Dl.already kava.drinking PROG Lcv Dtv.3Sg −prpr village-chief
V V Adv P N Det N
Aux −trns LOC COR
'Are they two drinking kava at the village-chief's place?'

The Preposition *i*~*e* also introduces a phrase that indicates the Means, or the instrument or the cause of an activity or event. Examples are given in (122).[35]

(122)

a. *Sā vari na vu na niu e na qwaqwa ni cagi.*
3Sg.already fall −prpr trunk −prpr coconut Lcv −prpr strength of wind
V.Aux V.−trns LOC
'The coconut tree fell down because of the strong wind.'

b. *Au vaxasomi xira i na moli.*
1Sg.make.drink.3Pl Lcv −prpr orange
V.+trns LOC
'I make them have some oranges.'

35) Note that these elements that are expressed by a prepositional phrase often can also be expressed as the Patient of a transitive verb that carries the feature either [+drct] or [+inst].

Abbreviations and Symbols

Abl=Ablative (Caseform)
actr=actor (macrorole)
Adj=Adjective
Adv=Adverb
AGT=Agent (Semantic Relation)
Aux=auxiliary verb
caus=causative (verbal feature)
COR=Correspondent
Det=Determiner
Dl=dual
drct=direct (verbal feature)
Dtv=Dative (Caseform)
ex=exclusive
Gn=General (unspecified) number
I.M.=intended meaning (attached to sentences which are grammatically not acceptable)
Im=imperative
in=inclusive
inst=instrumental
Lcv=Locative (Caseform)
Lit., lit.=literally
LOC=Locus (Semantic Relation)
MNS=Means (Semantic Relation)
N=Noun
P=Preposition
PAT=Patient (Semantic Relation)
Pc=paucal
Pl=plural
prdc=predicative
prnn=pronoun
PROG=progressive
prpr=proper noun
pssd=possessed (noun feature)
REF=Referent (Semantic Relation)
SF=Standard Fijian
Sg=singular
+trns=transitive
−trns=intransitive
V=Verb
xtns=extension verb
1in=first person inclusive
1ex=first person exclusive
2=second person
3=third person
[indicates word initial
] indicates word final
=indicates a boundary between a verb and a cliticized noun.

References

Bender, Byron W. 2000. "Paradigms as rules." *Grammatical analysis: morphology, syntax, and semantics. Studies in honor of Stanley Starosta* (Videa P. De Guzman and Byron Bender, eds), pp.14–29. *Oceanic Linguistics Special Publicaion*, No.29. Honolulu: University of Hawai'i.

Capell, A. 1991. *A New Fijian Dictionary*. Suva: Government Printer. [A reprint of the third edition in 1968.]

Dixon, R.M.W. 1988. *Boumaa Fijian*. Chicago: University of Chicago Press.

Geraghty, Paul A. 1983. *The History of the Fijian Languages. Oceanic Linguistics Special Publication* No.19. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Kikusawa, Ritsuko. 1998. "A re-analysis of the so-called 'passive' structures in Fijian." *Journal of Asian and African Studies* 56, pp.113–140.

———. 2000a. "Historical implications of a syntactically ambiguous structure in Standard Fijian." *Leo Pasifika: Proceedings of the Fourth International Conference on Oceanic Linguistic* (Steven Roger Fischer and Sperlich Wolfgang eds.), *The Institute of Polynesian Languages and Literatures Monograph Series*, vol.2, pp.173–199, Auckland: The Institute of Polynesian Languages and Literatures.

———. 2000b. "Transitivity and verb morphology in Fijian." *Modern Approaches to Transitivity* (Ritsuko

Kikusawa and Kan Sasaki, eds.), pp.27–51, Tokyo: Kurosio Publisher.

———. 2001. "Rotuman and Fijian casemarking strategies and their historical development." *Oceanic Linguistics* 40(1), pp.85–111.

———. In press. *Reconstructing the actancy systems of Proto Central Pacific and its daughter languages: ergativitiy, accusativity and their historical change*. Canberra: Pacific Linguistics.

Pawley, Andrew and Timoci Sayaba. 1982. "A sketch grammar of the Nabukelevu language of Kadavu." *Te Reo* 25, pp.35–93.

———. n.d. Words of Waya: a dictionary of the Wayan dialect of the Western Fijian language. Computer files.

Schütz, Albert J. 1963. "A phonemic typology of Fijian dialects." *Oceanic Linguistics* 2, pp.62–79.

———. 1985. *The Fijian language*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Starosta, Stanley. 1988. *The case for Lexicase: an outline of Lexicase grammatical theory*. London: Pinter Publishers.

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

【Article】

Syllable Rimes in Old Indo-Aryan and Dravidian

KOBAYASHI, Masato
Hakuoh University

This paper attempts first to describe the restrictions on syllable structure which are present in Old Indo-Aryan but not elsewhere in Indo-European languages, and then to compare them with their equivalents in early Dravidian phonology. Sound rules such as SIEVERS's LAW and OSTHOFF's LAW suggest that it is a common tendency of Indo-European languages to avoid syllable rimes of more than two moras, a tendency still confirmed in the early layer of Old Indo-Aryan by a computational analysis of Ṛgvedic meter. On the other hand, Sanskrit grammarians describe curious gemination rules of clustered consonants, which show that consonants of the same stricture are preferred in the clusters of later Old Indo-Aryan. This preference for the agreement of stricture across a syllable boundary seems to have superseded the original tendency to avoid overlong rimes in the course of the development within Old Indo-Aryan. In the reconstructed phonology of the Dravidian languages, place and closure of obstruents always agree across a syllable boundary. Old Indo-Aryan is in a transition regarding the well-formedness of syllable rimes, and the innovated syllable structure exhibits a similarity to that of early Dravidian.

0. Background
1.1 Well-formedness of syllable rimes in Indo-European
1.2 Quantitative evaluation of Hoenigswald's observation
1.3 Native grammar on consonant doubling
1.4 Native grammar on syllabification
1.5 Indo-Aryan innovation
2.1 Syllable weight in Dravidian
2.2 Difference between Indo-Aryan and Dravidian length alternation
2.3 Maximal syllable rimes in Dravidian
2.4 Syllable-boundary rules in Dravidian
3. Discussion

Abbreviation

V: vowel; Y: glide; C: consonant or glide; L: liquid; N: nasal; R: sonorant (Y+L+N); S: sibilant; T: stop; K: non-continuant (N+T); X: vowel or

Keywords: Indo-European historical phonology, Sanskrit syllable, Dravidian syllable, Vedic meter, Prātiśākhya

consonant; V̄: long vowel; V, V̆: short vowel; r̥, l̥, n̥, m̥: /r/, /l/, /n/ and /m/ in syllable nucleus; *: reconstructed as; ×: unattested; σ: syllable.
Aṣṭ.: Aṣṭādhyāyī, Av.: Avestan, AV: Atharva-Veda, Brah.: Brahui, Go.: Gondi, Ka.: Kannada, Kur.: Kurukh, Mlt.: Malto, OAv.: Old Avestan, OIA: Old Indo-Aryan, PDr.: Proto-Dravidian, PIE: Proto-Indo-European, PIIr.: Proto-Indo-Iranian, Pj.: Parji, RPr.: Ṛk-Prātiśākhya, RV: Ṛg-Veda, ŚCĀ: Śaunakīyā Caturādhyāyikā, Skt.: Sanskrit, Ta.: Tamil, Te.: Telugu, TPr.: Taittirīya-Prātiśākhya, Ved.: Vedic, YAv.: Younger Avestan.

0. Background

Since Sandfeld's *Linguistique balkanique* (1930), linguists have noted that neighboring but genetically unrelated or remotely related languages often share a number of structural properties after a long period of contact. This phenomenon, called 'convergence area', is best known in the Balkan languages, which belong to different subfamilies of Indo-European but came to share features such as postposition of an enclitic definite article and use of the coordinate clause instead of an infinitive phrase.

For the languages of the Indian subcontinent as well, similarities regarding retroflex phonemes (Kuiper 1967), gerund (Masica 1978), echo-word construction and quotative particles (Emeneau 1956) have been pointed out. On the other hand, less phenomena have been proposed to be areal in the patterns of phonological alternation. Chatterji (1926, p.171) suggests the possibility that cluster assimilation in Middle Indo-Aryan and Dravidian might be due to convergence. Krishnamurti (1991) points out parallelism between the developments of Old Indo-Aryan sequence -V̄CCV- into non-Northwest Middle Indo-Aryan -V̄CV- and -VCCV- on one hand, and of PDr. -V̄CCV- into -V̄CV- and of PDr. -V̄NT-, -V̄NTT-, -VNTT- into -V̄T-, -V̄TT-, -VTT- on the other, and suggests that a close contact between the two groups caused the parallel development of the overlong (i.e. longer than the durational equivalent of two moras) syllables into two moras.

In this paper, I will first discuss Indo-European restrictions on syllable structure, and Old Indo-Aryan preferences based on the meter of the Ṛgveda, the oldest Vedic text, and the description of syllable-boundary rules by native grammarians. After defining Indo-Aryan innovations through comparison of the well-formedness of syllable and syllable boundary in Indo-European languages, I will compare those innovations with early Dravidian, thereby attempting to contribute to the discussion of Indian convergence area.

1.1 Well-formedness of syllable rimes in Indo-European

Since linguistic reconstruction is based on "identities or systematic correspondences of phonemes" (Bloomfield 1933, p.302), a reconstructed string may not automatically yield itself to syllabic division and analysis of well-formedness. The shapes of Proto-Indo-European roots and suffixes themselves, however, entail the existence of overlong

syllables; when a root of the form *-e/oRC or *-ēC is followed by a suffix beginning with a consonant or a consonant cluster, the root syllable necessarily becomes overlong, provided that the notion of an overlong syllable is valid in Proto-Indo-European. E.g.: PIE *u̯oi̯d-th$_2$e 'you know'>Greek *oîstha*, Ved. *véttha*; PIE *h$_1$eu̯g^h-to 'utters'>OAv. *aogəδā*, Greek *eûkto*; PIE *ǵn̥h$_3$-sko-h$_2$ 'I come to know'>Greek *(gi)gnōskō*, Latin *(g)nōscō*; PIE *mēns-e/o-s 'month'>Greek *mēnós*, Latin *mēnsis*. Overlong syllables also arise secondarily from vowel contraction such as PIE *e-h$_3$r̥-to root-aor.3sg.mid.>Homeric Greek *ôrto* 'arose', Ved. *ārta* 'set in motion'.

Although Proto-Indo-European seems to presuppose the existence of overlong syllable rimes, there are at least two sound rules which are shared by more than two subfamilies and which are sensitive to syllable weight:

i) SIEVERS's LAW (Seebold 1972): PIE *i̯,*u̯>Ved. *iy*, *uv* / VXC__V.[1] This rule is not limited to Vedic, but the same adjustment is found in other subfamilies as well:

Germanic: Gothic *harjis* /ryi/ 'army' : *hairdeis* /rdii/ 'herdsman' instead of ×/rdyi/ (Seebold 1972, p.64ff). See Kiparsky (1998) for a prosodic account of SIEVERS's LAW in Germanic.

Anatolian: Hittite *ardumēni* 'we cut with a saw'<*/arduwV-/<*/ardwV-/ (Melchert 1984, p.24ff).

Tocharian: Proto-Tocharian *məskélʲlʲē gerundive 'which must be (in a place)' >Tocharian B *mäskelle*~*mäskelye* : Proto-Tocharian *ñəktʲyē 'divine'>Tocharian B *ñäkciye* (Ringe 1991, p.162f).

Italic: The split of the verbal formation in *-i̯e/o- into classes III and IV in Latin, such as III *capiō*, *capere*<*/kapi̯e/o-/<PIE *kh$_2$p-i̯e/o->Gothic *hafjis* 2sg. : IV *sentiō*, *sentīre*<*/senti̯e/o-/<PIE *sn̥t-i̯e/o-, *audiō*, *audīre* (Meiser 1998, pp.90, 194). This explanation, however, is rejected by Sommer (1948, p.505f), who attributes the shortening of *-ī-<*-i̯e- to the Latin rule of IAMBIC SHORTENING (V̄>V̆ / V̆C__, V̆__V́).

Cf. Celtic: *i̯ is lost in Middle Welsh *eil* 'other'<PIE *h$_2$eli̯o->Latin *alius*, Greek *állos*, Gothic *alja*- while *i̯ is preserved after *i in Welsh *newydd* 'new'<PIE *noui̯o->Ved. *náv$^{(i)}$ya*- (Lewis and Pedersen 1961, p.15f., McCone 1996, p.109), showing that there was at least an adjustment in the nucleus status of *i̯ in Celtic.

Although the anaptyxis itself is a repeatable sound change and there is no conclusive evidence for reconstructing this rule within Proto-Indo-European, these traces suggest that this law started in a very early period, if not Proto-Indo-European

1) Sievers (1878, p.129), translated by Collinge (1985, p.159): "If, in Indic, /I/ or /U/ occurs before a vowel and itself carries no accent (not even the falling contonation of a post-acute syllable or of acute plus contraction), then – no matter what the accent position may be elsewhere in the word — this segment is realized as a consonant after a light syllable and as a vowel after a heavy syllable."

itself. This rule implies that syllable rimes of both the shapes V̄ and VC have the same prosodical effect of making the syllable heavy.

ii) Osthoff's Law: PIE *V̄>V̆ / __RC

Italic: PIE *h_2u̯eh_1n̥to-[2] 'wind'>*u̯ēnto->Latin *vĕntu-s*.
Celtic: PIE *h_2u̯eh_1n̥to->Proto-Celtic *wīnt->*wintā>Old Irish *fet* 'whistle' (McCone 1996, p.55).
Germanic: PIE *h_2u̯eh_1n̥to->Gothic *winds*.
Cf. *h_2u̯eh_1n̥to->Vedic *vā́ta-* /vaata-/. Hittite *ḫuwant-* might come from a different vowel grade *h_2u$h_1$ent- as well as from *$h_2$ueh_1n̥t- (Melchert 1994, p.54).

The context of this law can be restated as __R]$_\sigma$, if the preservation of the vowel length before a final sonorant as in Greek *patḗr* can be explained by word-final extrametricality (Don Ringe p.c). In that case, both Sievers's and Osthoff's Laws have a common effect of eliminating overlong syllables, respectively by epenthesis and vowel shortening. It suggests that overlong syllables start being avoided already in the post-Proto-Indo-European period.

Hoenigswald (1988, p.202, 1989, p.559) considers that Greek and Vedic have independently developed processes which effect elimination of overlong syllable rimes together, adducing the following arguments: (i) In Epic Greek, PIE *-r̥ appears as *Vr* or *rV* depending on the weight of the preceding syllable rime. (ii) In the Ṛgveda, full-grade non-thematic forms of *TeRT roots such as *dógdhi* are avoided. (iii) Connective *i* of non-laryngeal origin is inserted between a perfect stem ending in a heavy syllable and an ending beginning with a consonant (*uvóc-i-tha* : *vivyák-tha*). (iv) Hiatus instead of crasis before a consonant cluster as in *sá ít C* : *séd V* (Wackernagel 1896, p.315). See Klein (1996) for the distribution of *áthā* and *ádha* in the Ṛgveda. (v) Sievers's Law.

1.2 Quantitative evaluation of Hoenigswald's observation

Although Hoenigswald convincingly demonstrates the tendency to avoid overlong syllables in the cadences of the second book of the Ṛgveda, this book accounts for only about 4.7% of the whole Ṛgveda, and it might not necessarily represent a common tendency of the text. And since the second book is a collection of the hymns by the poets of the Gṛtsamada family, this tendency might just be an idiosyncrasy or a dialectal feature. Scansion of the entire Ṛgveda, however, can only be done by restoring the vowels which are considered to be contracted by synaeresis, synizesis and crasis before the authority of the text was established, and the metrical restoration requires scrutiny from the viewpoints of prosody, textual criticism and historical linguistics.

In order to see an approximate pattern of distribution of overlong syllables, I

2) See Ringe (1996, p.13) for the grade of the first vowel.

scanned the electronic texts of the Ṛgveda by the following procedures. I used two electronic texts of the Ṛgveda for this study; Holland and Van Nooten's version contains Saṃhitā text based on Aufrecht's edition, and Cardona's (typed by Elliot Stern) contains Saṃhitā and Pada texts based on the edition of Vaidika Saṃśodhana Maṇḍala. Since both of them treat two pādas as one line, pāda boundaries need first be marked before examining the cadences. Pādas were split by a Perl script with the following algorithm:

(1) Define the syllable as a string of any characters which includes a vowel or an avagraha. (2) Count 8 syllables from both ends of a line. If all the syllables in the line are exhausted and a word boundary is left, then put a pāda boundary there. (3) Otherwise, count either 7 or 8 syllables from both ends, and put a pāda boundary if the syllables in the line are exhausted and a word boundary is left. (4) If the line has only 7 or 8 syllables, count the whole line as a pāda. (5) If the line has more than 16 syllables, first count 12 syllables from both ends. If all the syllables in the line are exhausted and a word boundary is left, then put a pāda boundary. (6) Otherwise, count either 11 or 12 syllables from both ends, and put a pāda boundary if the syllables in the line are exhausted and a word boundary is left. (7) Otherwise, count 11 syllables from both ends. If all the syllables in the line are exhausted and a word boundary is left, then put a pāda boundary. (8) Otherwise, count either 11 or 10 syllables from both ends, and put a pāda boundary if the syllables in the line are exhausted and a word boundary is left. (9) Leave unsplit lines as they are.

This algorithm divides the two pādas of a line if the meter is either Gāyatrī, Anuṣṭubh, Triṣṭubh or Jagatī, unless the pādas are fused by crasis. About 90.5% of the output lines of Holland and Van Nooten's text, and about 90.7% of Cardona's text, consist of a single pāda. Since the remaining 9.5% or 9.3% typically contain two pādas, we are leaving out about 8.6% or 8.5% of all the pādas. The output is then fed to the following algorithm:

(10) Define an overlong syllable rime either as a long vowel followed by two consonants, of which the first is not *r* preceded by *ī* or *ū*, of which the latter is neither *y* or *v*, and which are neither *mn* or *vn*, or as a short vowel followed by three consonants, of which the last is neither *v* or *y*. (These conditions effectively exclude pāda-final syllables.) (11) Scan the line from the beginning. If there is an overlong syllable rime, return the syllable in question, three following syllables, and a pāda boundary, if any. (12) The rest of the line is fed back into 11 until there is no more positive match.

If the output ends in a pāda boundary, it means often, but not always, that an overlong syllable is in cadence but not pāda-final. The ratio of the output ending in a pāda boundary is 13.1% in Holland and Van Nooten's text, and 12.9% in Cardona's. This is the possible maximal ratio of overlong syllables in non-final cadence syllables, for non-cadence overlong syllables are included if metrical restoration applies to the following three syllables. Supposing the uncounted 8.6% or 8.5% of the pādas show the same ratio, the estimated maximal ratio of overlong syllables in three non-final cadence syllables is 14.2% and 14% respectively.

If we suppose that the Ṛgveda consists only of verses with 12, 11 or 8 syllables, then these three types occupy approximately 28%, 44% and 28% respectively. The average ratio of the three cadence syllables would then be 3 / (10.44−1)=31.8%. Since only 14.2%, 14% or less of all non-final overlong syllables occur in 31.8% of all non-final syllables, the tendency to avoid overlong syllables in cadences can be considered to be a general preference of the Ṛgvedic meter.

The following table shows the ratio of overlong syllables in cadences in each book of the Ṛgveda:

Table 1 Ratio of overlong syllables in cadences

	Van Nooten and Holland			Cardona		
book	total overlong syllables (A)	overlong syllables in cadences (B)	ratio (B/A)	total overlong syllables (A)	overlong syllables in cadences (B)	ratio (B/A)
I	2185	256	11.7%	2313	266	11.5%
II	588	68	11.6%	613	74	12.1%
III	683	83	12.2%	714	83	11.6%
IV	635	97	15.3%	659	95	14.4%
V	695	104	15.0%	719	104	14.5%
VI	921	190	20.6%	965	199	20.6%
VII	917	117	12.7%	982	125	12.7%
VIII	1501	158	10.5%	1564	165	10.5%
IX	804	113	14.1%	831	115	13.8%
X	2341	291	12.4%	2408	298	12.4%

The difference between the results of the analysis of Van Nooten and Holland's and Cardona's electronic texts seems to lie mainly in different word-sandhi rules observed. It is to be noted that the ratio of overlong syllables in cadences does not differ significantly among the family books, except it is a little higher in the sixth book, which is traditionally ascribed to the Bharadvājas.

1.3 Native grammar on consonant doubling

The meter of the Ṛgveda may avoid overlong syllable rimes in cadences, but phonological rules related to consonant clusters apparently take the opposite direction in the late Vedic period, when the Prātiśākhyas and Pāṇini describe various kinds of consonant insertion within a cluster. The following rules are about gemination of consonants in a cluster (Varma 1929, pp.99–125, Cardona Unpubl. MSS).

Most authorities agree on doubling the first consonant of a cluster, or the second if the first is a continuant. Rules related to articulatory transition (e.g. -VSKV-> -VSTKV- in TPr. 14.9 and RPr. 6.2) could just be a microscopic description of differential phases and might have nothing to do with duration of the consonants in question; there is no doubt, however, that the gemination rules bear on articulatory duration. What is then the phonological motive for lengthening non-continuants and

Table 2 Gemination rules in the Prātiśākhyas

		TPr.	RPr.	VPr.	ŚCĀ	Aṣṭ.
-VC$_1$C$_2$-	→ **-VC$_2$C$_1$C$_2$-**	14.1	6.1	4.99	3.2.3	*8.4.47*
-V{*r,h*}C-	→ **-V{*r,h*}CC-**			4.100	3.2.8	*8.4.46*
-V{*r,h*}C$_{(-S)}$-	→ -V{*r,h*}CC-				3.2.9	*8.4.49*
-VrC-	→ -VrCC-	14.4				
-V{S,W}C-	→ -V{S,W}CC-			4.101		
-V{S,L}K-	→ -V{S,L}KK-		*6.2*			
-VSK-	→ -VSSK-		*6.2*			
-VC$_1$C$_2$-	no doubling					*8.4.52*
-VC$_1$C$_2$C$_3$-	no doubling					*8.4.50*
no doubling at all						*8.4.51*

some fricatives in those doubling rules? It is at least clear that the doubling rules are for creating geminates in certain environments, and making the syllable rime overlong is just a concomitant phenomenon, for there are rules which cancel doubling if a homorganic occlusive cluster is otherwise attained, i.e. TPr. 14.23 *savarṇasavargīyaparaḥ* "A letter followed by one homogeneous with itself, or one of the same mute-series, is not duplicated." (Whitney 1868), ŚCĀ 3.2.7 *sasthāne ca* (*na*), or VPr. 4.110 *savarṇe*.

Judging from the fact that Sanskrit allows -VC or tautomorphemic -VrC in word-final position, -VC$_1$C$_1$KV- and -VrC$_1$C$_1$V- can be syllabified as -VC$_1$.C$_1$KV- and -VrC$_1$.C$_1$V- respectively. If that observation is valid, doubling might be for creating gemination *across a syllable boundary*. In terms of constraint ranking, what happened between the period of the Vedic poets and the native grammarians is reranking of the constraints on syllable weight and the one on syllable boundary; at the time of the native grammarians, requiring homorganic occlusives across a syllable boundary has become a highly ranked constraint, and an overlong syllable is no longer as bad as consonants of different stricture across a syllable boundary:

Early Vedic: No overlength ≫ Same consonant stricture
↓
Prātiśākhya: Same consonant stricture ≫ No overlength

1.4 Native grammar on syllabification

The details given by native grammar are, however, hard to comprise by such a simplistic generalization. First, doubling is not accepted unanimously by the native grammarians: According to Aṣṭ. 8.4.51 *sarvatra śākalyasya* (46 *dve*, 48 *na*), Śākalya does not allow consonant doubling in any context.

Furthermore, the Prātiśākhyas teach various views on consonant syllabification including doubled consonants in TPr. 21.1–9, RPr. 1.15, VPr. 1.99–106 and ŚCĀ 1.2.15–18, based on their observation on syllable weight and the accentual property of

consonants, and some of them do not agree with what I assumed above (Varma 1929, pp.61–83, Cardona Unpubl. MSS). All texts agree on the point that a consonant adjoining vowels on both sides forms a syllable with the following vowel; in phonological terms, this amounts to the Onset First Principle, and ambisyllabicity as in English intervocalic consonants is not known in Old Indo-Aryan. All texts agree on counting the first consonant of a cluster and a consonant before pausa as the coda of the preceding syllable, except that Ṛk-Prātiśākhya 1.25 admits the former as optional and does not mention the latter. They also agree on a syllable boundary between the geminate consonants arising before an occlusive, except it is optional according to Ṛk-Prātiśākhya 1.25. As to the gemination after liquids (and *h*), the Vājasaneyi-Prātiśākhya and Śaunakīya-Caturādhyāyikā 1.2.18 put a syllable boundary between the geminate consonants, and the Taittirīya-Prātiśākhya tacitly assumes it (Whitney 1868, p.380), while Ṛk-Prātiśākhya 1.26 does not allow it.

Cardona (*op.cit.*) shows that Pāṇini assumes a certain syllable structure regarding the following rule, although his grammar does not mention syllabification explicitly. The rule Aṣṭ. 6.1.3 *na ndrāḥ saṁyogādayaḥ* [1 *dve*, 2 *ajāder dvitīyasya*] "The phonemes [n, d, r] constituting the initial of a consonant nexus [forming part of the second syllable of a polysyllabic verbal stem beginning with a vowel 2] are not [duplicated 1]. (Katre 1987)" precludes reduplication like ×undindisa- or ×arcircisa-, which would follow from the syllabification Pāṇini assumes, namely ×/u.ndi.ndi.sa-/ or ×/a.rci.rci.sa-/.

The difference among those grammatical treatises is summarized as follows.

Table 3 Prātiśākhya rules of syllabification

	TPr.	RPr.	VPr.	ŚCĀ	Aṣṭ.
$V]_\sigma CV$	yes	yes	yes	yes	yes
$VC]_\sigma$	yes	o.k.	yes	yes	(no)
$C_1]_\sigma C_1$	yes	o.k.	yes	yes	—
$rT]_\sigma$	(yes)	$r]_\sigma T$	yes	yes	$]_\sigma rT$
$VC_1]_\sigma C_2$	yes	o.k.	yes	yes	$V]_\sigma C_1C_2$

Related to the different views on the syllabification of consonant clusters beginning with *r* is *svarabhakti*, or anaptyxis of an extra-short a after a cluster-initial *r*: $\emptyset \rightarrow_a$ /r__C (TPr. 21.15), while /r/ before a geminate remains unchanged (TPr. 21.16). The syllable boundary comes after r^a if a singleton consonant follows (TPr. 21.6), whereas the syllable ends in -*r*C if the C is the first element of a geminate (TPr. 21.5), providing a further support for the idea that a geminate is preferred to a homorganic cluster or a cluster of consonants with different stricture across a syllable boundary.

The svarabhakti after *r* also implies that an *r* cannot end a syllable just as it cannot end a word, and that a heterorganic cluster with a syllable boundary in it must be repaired. To the heterorganic clusters other than *r*C across a syllable boundary,

another repair process applies, namely abhinidhāna or checking of the stop release (Allen 1953, p.70ff., Varma 1929, p.137ff.): The first of a stop cluster (ŚCĀ 1.2.4, RPr. 6.17), and a word-final stop or a semivowel (ŚCĀ 1.2.5, RPr. 6.5), are pronounced without release.

These rules give a spectrum of restrictions on syllable coda and boundary:

Pāṇini	rime	-V, but possibly -VC in word final and in doubling
	C.C:	N/A in principle
RPr.	rime:	-VC is optionally allowed if unreleased
	C.C:	need not be homorganic
ŚCĀ	rime:	-VC is acceptable if unreleased
	C.C:	must be homorganic
TPr./VPr.	rime	-VC is fine
	C.C:	must be homorganic

1.5 Indo-Aryan innovation

These observations of native grammarians on syllable boundary are different from the original tendencies of Proto-Indo-European in two respects. In the first place, geminate consonants in Indo-European languages all result from place assimilation of heterorganic consonants, with a possible exception of the geminate in Hittite *atta-* 'father', Greek *átta* etc. (Szemerényi 1990, p.115). There is no gemination in Avestan, an Iranian language closer to Vedic than any other Indo-European languages (Hoffmann and Forssman 1996, p.108). Secondly, we discussed above in 1.1 and 1.2 that many Indo-European languages and the meter of the Ṛgveda share a tendency to avoid overlong rimes, which does not seem to take precedence in the gemination rules of the native grammar.

Since BRUGMANN'S LAW blocks lengthening and lowering of PIE *ŏ before a consonant cluster, it naturally follows that Proto-Indo-Iranian syllabifies the first consonant of a cluster as a part of the syllable to its left.[3] Comparison of Avestan with corresponding Vedic forms, however, suggests a difference between Iranian and Indo-Aryan ways of cluster syllabification. In syllable onset, Avestan allows more diverse obstruent clusters than Vedic: OYAv. *ptā* ~ OAv. *tā* nom.sg. 'father' : Ved. *pitā́*; YAv. *fstāna-* 'breast' ~ Ved. *stána-*; OAv. *zdī* 'be!' : Ved. *edhí* < *az-d^{h}í ← *s-d^{h}í; YAv. *xštuua-* m. 'sixth'.

On the other hand, the variety of consonants occurring in word-final position is not as broad as in Vedic, given that many of them end in a sibilant and *-ṯ* probably has no release (Morgenstierne 1942, p.70f.): *-m*, *-ng* (< *-ms), *-ṯ*, *-š*, *-s(-cā/a)*, *-s/st* (< *-s-t), *-šṯ*, *-xš*, *-fs* and *-rš*.[4] These coda clusters with s make a sharp contrast with Vedic, where a

3) See Kuryłowicz (1977, p.166ff.) for a morphological account for BRUGMANN'S LAW.

4) For Bartholomae's equation of OAv. *yaogaṯ* with Ved. ×ayok, where the former is claimed to preserve the final cluster of PIIr. *a-i̯au̯k-t better, see Kellens (1974, p.299f).

sibilant cannot become a coda unless followed by a voiceless stop; in this respect, Avestan is closer to Greek, which allows a final stop only when followed by a sibilant, e.g. Greek *méli* 'honey'</melit-/, *gála* 'milk'</galakt-/ :: *thrīks* 'hair'. If this distribution of consonants in initial and final positions reflects an internal syllable structure, it would follow that Avestan favors a zero or minimal coda while it allows consonants to be crammed in the onset.

Anaptyxis of internal clusters, another strategy of Avestan to repair coda consonants, is extensive but not very consistent, partly due to the period and the region Old and Younger Avestan represent, and partly due to the untransparent assimilation of voicing and frication among consonants. Anaptyctic ə breaks internal clusters, particularly in Old Avestan (Hoffmann and Forssman 1996, p.51): YAv. *nəmas^{ə}.tē* : Ved. *námas te*; OAv. *kar^{ə}pā* 'ritualist'. ə is inserted after *r* in Old Avestan and Younger Avestan, except before *ii* and *uu*, and in *á/ərt (>š), *á/ərk and *á/ərp (>*hr*), e.g. OYAv. *ar^{ə}θa-* : Ved. *ártha-*; OYAv. *vadar^{ə}/^{ə}* : Ved. *vádhar*; PIIr. *vr̥ka->YAv. *vəhrka-*; *árta>OYAv. *aṣ̌a-* (Hoffmann and Forssman 1996, pp.51,92).

Among the native grammarians' restrictions on consonant clusters (1.4), those of Pāṇini, and of the Ṛk-Prātiśākhya to a smaller extent, resemble Avestan treatment of coda consonants. If the descriptions of these grammarians reflect actual dialectal features of the schools they belong to, their dialects, which were probably distributed in the upper Indus valley and the Punjab, might reflect a transitional state between Indo-Aryan and Iranian.

2.1 Syllable weight in Dravidian

While vowel length alternates in Indo-European languages depending on the grammatical context the morpheme in question is in, short and long vowels make phonemic contrast in Dravidian (Krishnamurti 1955, p.237):

> PDr. *pal 'tooth'>Ta. *pal*, Te. *pal(l)u*, Konḍa *pal*, Kol. *pal*, Mlt. *palu* : PDr. *pāl 'milk'>Ta. *pāl*, Te. *pālu*, Konḍa *pāl*, Brah. *pāl̲h*; PDr. *kal 'stone'>Ta. *kal*, Te. *kallu*, Pe. *kal*, Brah. *xal* : PDr. *kāl 'leg'>Ta. *kāl*, Te. *kālu*, Pe. *kāl*; PDr. *√vay,vey 'put'>Ma. *vekka*, Te. *va(y)icu*, Nk. *vay* 'sow' : PDr. *√vāy 'swell'>Ma. *vāykka*, Te. *vācu*, Nk. *vāy* (see Krishnamurti 1955, p.243f. for length contrast before *y); PDr. *√paṭ, paṯ 'lie down'>Ta. *paṭu*, Te. *paḍu*, Ga. *par* : PDr. *√pāṭ 'sing'>Ta. *pāṭu*, Te. *pāḍu*, Ga. *pār*, Kur. *pāṛnā*; PDr. *kaṇ 'eye'>Ka. *kaṇ*, Ga. *kaṇ*, Brah. *xan* : PDr. *√kaṇ ~ kāṇ 'see'>Ka. *kāṇ*, Ga. *kanḍp* 'search', Brah. *xaning* (*DEDR*, Krishnamurti 1961).

While geminates are usually of secondary origin and there is no grammatical gradation of consonant length in Indo-European languages, long or geminate consonants in Dravidian make contrast with their singleton counterparts typically in derivational and inflectional alternations: Non-past transitive suffix *kk, *pp : non-past

intransitive suffix *k, *p; past transitive suffix *tt : past intransitive suffix *t (Krishnamurti 1978, p.18f); nominative Ta. *kāṭu* 'jungle', Pj. *key* 'hand': +oblique suffix PDr. *-tt- Ta. *kāṭṭ-*, Pj. *keyto* (Krishnamurti 1961, p.259, Kumaraswami Raja 1969, p.84). Note, however, that there are Proto-Dravidian phonological rules which do not treat a root-final consonant as having its own mora:[5] e.g. *l+*t>*ṯ as in the pair Ta. √*nil* 'stand' : Ta. √*niṯu* 'place'.

If Proto-Dravidian phonology have the notion of syllable weight, it could well be reflected as reconstructible weight-sensitive rules or restrictions on syllable weight as in Indo-European. Such rules are hard to find, however. In the derivation of verbal bases, stem-formative vowels *a, *i or *u are inserted between roots and suffixes beginning with consonants already in Proto-Dravidian (Krishnamurti 1978, p.18): PDr. *tir-u-mpp- 'turn'>*tirppu->Te. *trippu*; PDr. *tir-u-mpp->Ta. *tiruppu*. This anaptyxis does not necessarily make an argument for weight-sensitive rules in Proto-Dravidian, for avoidance of unallowed clusters of heterorganic non-continuants or of their undesirable assimilation can also be the motivation. Krishnamurti (1961, p.125) notes that vowels with different grades are sometimes reconstructed in Proto-Dravidian, for example *kāṇ- : *kaṇṇ- 'to see' etc. with -V̄C and -VCC rimes, and mentions the possibility of common alternation. Rule status of this alternation between -VC and -VCC claimed by Zvelebil (1967/1970, p.185) is untenable according to Subrahmanyam (1983, pp.168–171) and Krishnamurti (1991, p.165), for the cases of the alternation is small in number and a commoner alternation between -VC and -VCC as in PDr. *yāṯu 'river' : *yāṯṯu obl. exists.

2.2 Difference between Indo-Aryan and Dravidian length alternation

Alternation of vowel length in Indo-European is usually an adjustment of the weight of the syllable to which the vowel in question belongs to. For example,

OSTHOFF'S LAW	$\bar{V}>V$ / __{L,N}]$_\sigma$	Greek, Latin etc.
SIEVERS'S LAW	PIE *i̯,*u̯>Ved. *iy, uv* / VXC__V	Vedic, Germanic
compensatory lengthening	VC >$\bar{V}$ / __..]$_\sigma$	Latin etc.
LACHMANN'S LAW	V>$\bar{V}$ / __T[voiced]-tó-	Latin
shortening of an unaccented vowel	$\bar{V}>\breve{V}$	Anatolian

There are also weight-related rules which refer to morphological entities or prosodic contexts:

IAMBIC SHORTENING in Latin: Latin $\bar{V} > \breve{V}$ / $\breve{V}$C__, $\breve{V}$__V́. E.g. *amā* > *ama*, *putā* > puta (Sommer and Pfister 1977, p.104ff.).

QUANTITATIVE METATHESIS in Ionic and Attic Greek: *ēa*, *ēo* > *eā*, *eō*. E.g. Homeric basilêa : Attic *basiléā*, Homeric *nēós* : Attic *neōs* (Rix 1992, p.57).

VOCALIS ANTE VOCALEM CORRIPITUR: Latin: $\bar{V} > \breve{V}$ / __V. Homeric Greek, Vedic: $\bar{V}$

5) Krishnamurti (1998, p.66), "*niṯ, *niṯṯ, and *kaṯ are represented as bases within Proto-Dravidian, perhaps restructured with the past suffix incorporated as a derivative at a later stage, still within P[roto-]D[ravidian]."

> $\breve{V}$ / $\_\_]_{wd}$ V- (Rix 1992, p.56, Sommer and Pfister 1977, p.102f., Oldenberg 1888, p.465ff.).

morphological templates: Vedic reduplicated aorist stems show trochaic (–⏑) rhythm of a heavy reduplicated syllable and a light root syllable. E.g. *√jan*ⁱ : *ájījanat*, *√bhī* : *bībhayat* (Meillet 1920, p.198), Insler (1997) on Vedic denominative.

optional lengthening of subminimal word: The vowel of an orthotonic monomoraic word is optionally lengthened, e.g. Vedic *nú* ~ *nū́* 'now'.

With a possible exception of VOCALIS ANTE VOCALEM, these phenomena are either language-/category-specific or cross-linguistic, and we could say that Indo-European does not have a rhythmic rule in its grammatical system. In other words, Indo-European rules on vowel length are usually local and phonological: They refer only to phonological contexts such as the syllable the vowel in question belongs to.

Weight rules in Dravidian, on the other hand, seem to operate on a morphemic basis. Krishnamurti (1955, p.248) summarizes the distribution of Telugu root types caused by prehistorical vowel shortening as follows:

Table 4 Distribution of Telugu root rimes (Krishnamurti 1955)

suffix type	suffix	root
strong	-$\breve{V}$(N/T)T	(C)$\breve{V}$R-
weak	-(N/T)T	(C)$\bar{V}$-, (C)$\bar{V}$R-, (C)$\breve{V}$-
strong	-$\breve{V}$R	(C)$\breve{V}$R-
weak	-R	(C)$\bar{V}$-

The long root vowels are shortened before suffixes beginning with vowels whereas they remain long before suffixes beginning with consonants. This alternation makes reference to the morphological context and keeps the total weight of the root morpheme stable.[6] Note also $C_1\bar{V}C_2$: $C_1\breve{V}C_2$-V (Krishnamurti 1955) as in *yān- 'I' : *yan-V obl. This length alternation makes a sharp contrast with SIEVERS's LAW in Indo-European which eliminates overlong syllables created by suffixation.

2.3 Maximal syllable rimes in Dravidian

Proto-Dravidian roots are considered to be ultimately monosyllabic, and they fit the shape $C_0\breve{\breve{V}}C_0$ (Krishnamurti 1992, p.374). If all Dravidian nouns are derived from roots, the heaviest tautomorphemic rime is that of the root in -$\bar{V}$C.

Subrahmanyam (1983, p.22) gives the following forms as possibly reconstructible cases of tautomorphemic *(C)$\bar{V}$CC- sequences, which would be called 'overlong' in Indo-European:

6) Subrahmanyam (1983, p.160) "It should be noted that quantitative variation does not operate across a morpheme boundary."

PDr. *kākk-ay 'crow' Ta. *kākkai/kākkāy*
PDr. *tāṇṭ- 'cross' Ta. *tāṇṭu*
PDr. *pāmp- 'snake' Ta., Ma. *pāmpu*

Furthermore, Kumaraswami Raja (1969) reconstructs a Proto-Dravidian sequence *-NTT- which explains the correspondences such as Te. -NT- : Ta.-Ma. -TT-. If we accept this reconstruction, there are morphemes whose reconstructed forms end in -V̄CCC, although they probably go back to early suffixation:[7)]

PDr. *cāṅkk- 'hunger' Pa. *cākol*
PDr. *cīṅkk- Te. *sikili* 'broom', Ta. *cikku*
PDr. *kāṇpp-/kāmpp- Ka. *gāmpa, gāṇpa* 'rustic'
(Kumaraswami Raja 1969)

While stem-formative vowels *a, *i or *u keep verbal bases from having too heavy rimes, there seem to be noun formations in which formative vowels do not occur. Since *-NTT- suffixes are reconstructed for noun formation as well, a few forms are reconstructed with a very heavy rime *(C)V̄R-NTT:

PDr. *nālnk-/*nālnkk- 'tongue'>Te. *nāl(u)ka*, OTa. *nākku*, Mlt. *naqlu* 'uvula', etc., (Burrow 1943–46, p.337); PDr. *cīy-ntt->Ta. *tīy(tt)*; PDr. *vāy-(m)pp->Ta. *vāyppu* 'suitability', Te. *vāpu*, *vāpu*; PDr. *pūy-ntt->Te. *būcu* 'mould, mildew' (Kumaraswami Raja 1969).

2.4 Syllable-boundary rules in Dravidian

Dravidian derivational morphology seems to presuppose the existence of syllables ending in V̄C, VCC or V̄CC, e.g. Ta. *ēṟu* 'to rise' : *ēṟṟu* 'to raise'; Ta. *māṟu* 'to change (vi.)' : *māṟṟu* 'to change (vt.)'; Ta. dir. *āṟu* 'river' : obl. *āṟṟu*; Ta. root. *pār* 'to see' : past stem. *pār-tt-*; Ta. root. *vāḻ* 'to live' : past stem. *vāḻ-nt-*. A Proto-Dravidian vowel, whether short or long, can thus be followed by the sequences *-TT-, *-NT-, *-NTT-, *-RT-, *-RTT-, *-RNT- (R: liquids and *y). Since Dravidian allows only one consonant in word-initial position, the syllable boundary is considered to fall between the last and the last but one of a medial consonant cluster, by Kuryłowicz's principle that restrictions on word-initial and final clusters reflect restrictions on syllable structure. It follows from this that Dravidian allows only homorganic non-continuants across a syllable boundary.

7) Cf. Krishnamurti (1991, p.164) on verbal bases of this type, "It is also possible to set up a type *(C)VCCC for PDr., where CCC=NPP, but there is definitely a morph boundary here, descriptively +NP +P (transitive) as opposed to +NP (intransitive); e.g., *kānku 'to boil (v.i.)'; *kānkku 'to boil (v.tr.)'."

3. Discussion

The rules of the Prātiśākhyas produce obstruents of the same stricture (but not necessarily of the same place) across a syllable boundary at the cost of optimal syllable weight up to two moras. The situation of Sanskrit taught in the Prātiśākhyas is not what the meter of the Ṛgveda favors, but it is halfway similar to Proto-Dravidian, which requires obstruents across a syllable boundary to be homorganic and non-continuant regardless of the length of the rime preceding the boundary.

When Brugmann's Law took place between Proto-Indo-European and Proto-Indo-Iranian, an intervocalic cluster such as -VCCV- must have been syllabified as -VC.CV-. On the other hand, the distribution of consonants in Avestan onset and coda (1.5), and the syllabification Pāṇini assumes in his rules on reduplication (1.4), point to a cluster syllabification in which syllable codas are minimized. This might be an innovation of Iranian and Northwest Indo-Aryan, for the poets of the Ṛgveda tend to avoid a consonant cluster following a long vowel in cadences, suggesting that the first syllable of the sequence -V̄CCV- is heavier than that of -V̄CV-, i.e. they are syllabified as -V̄C.CV- and -V̄.CV- respectively.

Contrary to this tendency to avoid overlong rimes, Old Indo-Aryan as known from the Prātiśākhyas shift the emphasis of the criteria of well-formedness from the length of a rime to the agreement of stricture across a syllable boundary. In the Prātiśākhyas, agreement of place and stricture, or at least of stricture, of consonants across a syllable boundary, becomes more important than keeping the rime up to two moras long; and when the consonants across a syllable boundary have different stricture, a repair process geminates one of them in order to attain the same stricture across the syllable boundary even though it may make the preceding rime overlong.

A situation similar to this is found in Proto-South-Dravidian, and probably in Proto-Dravidian as well, where a long vowel is commonly followed by tautosyllabic consonants, and where only clusters of homorganic non-continuants are allowed across a syllable boundary.

Acknowledgment

This is an enlarged and revised version of a paper which was first presented to the American Oriental Society at the 210th meeting in Portland, Oregon, in March 2000, and then became a part of the first chapter of my dissertation. I wish to acknowledge my gratitude to Dr. George Cardona and Dr. Bhadriraju Krishnamurti for their guidance and illuminating suggestions. I am further grateful to Professor Kôji Kamioka, Dr. Craig H. Melchert and Dr. Haruko Sakaedani for valuable comments. All errors of understanding or of fact are mine alone.

Bibliography

Allen, William Sidney. 1953. *Phonetics in Ancient India, London Oriental Series vol.1.* London: Oxford University Press.

Bloomfield, Leonard. 1933. *Language.* New York: H. Holt and Co.

Burrow, Thomas. 1943–46. "Dravidian studies IV: The body in Dravidian and Uralian", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 11. pp.328–356.

Cardona, George. "Developments of nasals in early Indo-Aryan: anunāsika and anusvāra", unpublished MS.

Chatterji, Suniti Kumar. 1926. *The origin and development of the Bengali language.* Calcutta: University of Calcutta Press.

Collinge, N.E. 1985. *The Laws of Indo-European.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

DEDR: Burrow, Thomas and Murray B. Emeneau. 1984. *A Dravidian Etymological Dictionary*, 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.

Emeneau, Murray B. 1956. "India as a Linguistic Area," *Language* 32. pp.3–16.

Hoenigswald, Henry M. 1988. "A Note on Semivowel Behavior and its Implications for the Laryngeals", A. Bammesberger ed., *Die Laryngaltheorie.* Heidelberg: Carl Winter.

———. 1989. "Overlong syllables in Ṛgvedic cadences", *Journal of the American Oriental Society* 109. pp.559–563.

Hoffmann, Karl and Bernhard Forssman. 1996. *Avestische Laut- und Formenlehre.* Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.

Insler, Stanley. 1997. "Vedic denominatives to thematic a-stems", A. Lubotsky ed., *Sound Law and Analogy.* Amsterdam and Atlanta: Rodopi. pp.103–109.

Katre, Sumitra M. 1987. *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini.* Austin: University of Texas Press.

Kiparsky, Paul. 1998. "Sievers' Law as Prosodic Optimization", *Mír Curad.* Innsbruck.

Klein, Jared S. 1996. "Rigvedic *áthā*: Metrics, Phonology, and Etymology", *Studien zur Indologie und Iranistik (Festschrift Paul Thieme)* 20. pp.205–223.

Kobayashi, Masato. 2000. *Historical Phonology of Old Indo-Aryan consonants.* Dissertation, University of Pennsylvania.

Krishnamurti, Bhadriraju. 1955. "The History of Vowel-Length in Telugu Verbal Bases", *Journal of the American Oriental Society* 75. pp.237–252.

———. 1961. *Telugu Verbal Bases: A Comparative and Descriptive Study.* Berkeley: University of California Press.

———. 1978. "Areal and lexical diffusion of sound change", *Language* 54. pp.1–20.

———. 1991. "The emergence of the syllable types of stems (C)VCC(V) and (C)V:C(V) in Indo-Aryan and Dravidian: Conspiracy or convergence?", in Boltz, William G. and Michael C. Shapiro eds., *Studies in the Historical Phonology of Asian Languages.* Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. pp.160–175.

———. 1998. "Patterns of sound change in Dravidian", in Singh, Rajendra ed., *Yearbook of South Asian Languages and Linguistics* 1. pp.63–79.

Kuiper, F.B.J. 1967. "The genesis of a linguistic area", *Indo-Iranian Journal 10.* pp.81–102.

Kumaraswami Raja, N. 1969. *Post-nasal Voiceless Plosives in Dravidian.* Annamalainagar: Annamalai University.

Kuryłowicz, Jerzy. 1977. *Problèmes de linguistique indo-européenne*: Chapitre IV. Problèmes phonétiques. Wroclaw, Warszawa, Kraków and Gdańsk.

Lewis, Henry and Holger Pedersen. 1937. *A Concise Comparative Celtic Grammar.* Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

Masica, Colin P. 1971. *Defining a Linguistic Area: South Asia.* Chicago and London: University of Chicago Press.

McCone, Kim. 1996. *Towards a relative chronology of ancient and medieval Celtic sound change.* Maynooth: The Department of Old Irish, St. Patrick's College.

Meillet, Antoine. 1920. "Sur le rythme quantitatif de la langue védique", *Mémoires de la Société de Linguistique, Paris* 21. pp.193–207.

Meiser, Gerhard. 1998. *Historische Laut- und Formenlehre der Lateinischen Sprache.* Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Melchert, H. Craig. 1984. *Studies in Hittite Historical Phonology.* Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

———. 1994. *Anatolian Historical Phonology*. Amsterdam and Atlanta: Rodopi.

Morgenstierne, Georg. 1942. "Orthography and sound-system of the Avesta", *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 12. Oslo. pp.30–82.

Oldenberg, Hermann. 1888. *Die Hymnen des Rigveda. Herausgegeben von Hermann Oldenberg. Band I. Metrische und textgeschichtliche Prolegomena*. Berlin: W. Hertz.

Rix, Helmut. 1992. *Historische Grammatik des Griechischen*, 2. Aufl. Darmstadt.

Sandfeld, Kristian. 1930. *Linguistique balkanique; problèmes et résultats*, 2 éd. Paris: E. Champion.

Seebold, Elmar. 1972. *Das System der indogermanischen Halbvokale*. Heidelberg: Carl Winter.

Sommer, Ferdinand. 1948. *Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre*. Heidelberg: Carl Winter.

Sommer, Ferdinand and Raimund Pfister. 1977. *Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre, Band I: Einleitung und Lautlehre*. Heidelberg: Carl Winter.

Subrahmanyam, P.S. 1983. *Dravidian Comparative Phonology*. Annamalainagar: Annamalai University.

Van Nooten, Barend A. and Gary B. Holland. 1994. *Rig Veda: A Metrically Restored Text with an Introduction and Notes*, Harvard Oriental Series 50. Cambridge, MA and London: Harvard University Press.

Varma, Siddheshwar. 1929. *Critical studies in the phonetic observations of Indian grammarians*. London: Royal Asiatic Society.

Wackernagel, Jacob. 1896. *Altindische Grammatik, Band I: Lautlehre*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

Zvelebil, Kamil. 1967. "On morphophonemic rules of Dravidian bases", *Linguistics* 32. pp.87–95.

———. 1970. *Comparative Dravidian Phonology*. The Hague and Paris: Mouton.

【論　文】

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

コリャーク語の名詞句階層と格・数標示

呉人　恵
（富山大学）

The Animacy Hierarchy and Case/Number Marking in Koryak

KUREBITO, Megumi
Toyama University

Koryak NPs are classified into four main classes according to the different ergative marking, with gradations from the highest animacy class A to the lowest animacy class C. Class A has its own ergative marker **-nan** and contains only personal pronouns. Class B uses the locative case **-k** for the ergative and uses the animate marker **-ne** (Sg), **-jəka** (Pl). Proper nouns referring to humans and dogs, the personal interrogative pronoun meaning 'who', and kinship address terms are included in class B. Class C uses the instrumental case **-te** for the ergative but has no animate marker. Kinship reference terms, animal nouns and inanimate nouns are included in class C. There is also another class B/C which falls between the classes B and C with optional ergative marking, using the locative or instrumental, and the corresponding animate marking, optional, which includes human nouns, demonstrative pronouns, and the interrogative pronoun meaning 'which'.

The present paper is concerned with structural reflections of the animacy hierarchy in Koryak and examines in detail how the animacy hierarchy correlates with the grammatical phenomena of Koryak, paying special attention to the above-mentioned ergative case-marking and the animacy category.

はじめに
1.　文法概要
　1.1.　形態音韻的特徴
　1.2.　形態統語的特徴
2.　コリャーク語の名詞句階層と能格標示
3.　クラスA
4.　クラスB
　4.1.　固有名詞
　4.2.　人称疑問代名詞「だれ」
　4.3.　親族呼称
5.　クラスC
6.　クラスB/C
　6.1.　普通人間名詞
　6.2.　指示代名詞
　6.3.　疑問代名詞「どの」
おわりに

Keywords: Koryak, hierarchy, ergative marking, number marking, animacy
キーワード：コリャーク語，名詞句階層，能格標示，数標示，有生性

はじめに

さまざまな言語において，名詞句階層がさまざまな文法現象に反映されていることはつとに知られているとおりである（Silverstein 1976, Dixon 1979, Comrie 1978; 1979; 1981 [1992] など）。コリャーク語（Koryak）[1] では，とりわけ，有生性が文法範疇として存在すること，名詞により能格が異なる形式的標示をうけることがその階層と密接にかかわっている。そこで本稿では，コリャーク語における名詞句階層と能格標示を中心とする文法構造へのその反映について，筆者が現地調査で得た資料をもとに考察したい[2]。

コリャーク語と同系のチュクチ語の名詞句階層に関しては，すでにコムリー（Comrie 1978, 1979）がその概略について述べているが，コリャーク語に関しては，このような枠組みで名詞全体をとらえた視点はこれまで管見のかぎりでは見られない。ジュコヴァ（Zhukova 1972, pp. 97–104）は，有生性の高い名詞に付加される **-ne**（単数），**-jəka-k**（複数）の形式に注目し，これを人間名詞にのみ関わる「定 *opredelennost'*」の文法範疇としてとらえている。しかし，これでは有生性を軸に階層をなす名詞全体の中での人間名詞の位置づけは浮かび上がってこない。筆者はむしろ，すべての名詞がその階層により形式的，意味的に分類されるという視点に立ち，有生性の文法標示，能格標示を中心とする文法現象がどのようにその階層を反映しているのかを具体的に記述していく。なお，ジュコヴァ（Zhukova 同上）と筆者の具体的なデータならびにその扱いの違いについては，随時，言及していくものとする。

ところで，ここまで「有生性 Animacy」という用語をことわりなく用いてきたが，コリャーク語の名詞句階層がどのような意味的基準によってできているかについては，必ずしも定説があるわけではない。例えば，コムリー（Comrie 1979, p.323）は，チュクチ語の名詞句階層を論じる際，やはり「有生性 Animacy」という伝統的な用語を用いながら，一方ではこれが単純化しすぎた意味基準であるとも指摘している。たしかに，「有生性」という基準は，コリャーク語の実際にそぐわない面もある。例えば，コリャーク語では，普通人間名詞が任意に無生物名詞と同じ能格標示を受けることがあるのがその一例である。むしろ，コムリー（Comrie 1979, 同上）が指摘するように「個別化 Individualization」あるいは「顕著さ Salience」といった別の意味的基準を設ける方がより適切であるかもしれない。ただし，本稿は，このような意味論的問題の解明を目的とするのではなく，文法現象の形態統語論的記述に重きを置くため，

---

1) コリャーク語はロシア連邦カムチャツカ州コリャーク自治管区，マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区を中心に分布する話者数4,500人ほどの言語である。周辺のチュクチ語（Chukchi），イテリメン語（Itelmen），ケレク語（Kerek），アリュートル語（Alyutor）とともにチュクチ・カムチャツカ語族（the Chukotko-Kamchatkan language family）を形成する。コリャーク語は方言分岐の高いことで知られており，主要な方言であるチャウチェヴァン方言（Chawchəvan）ならびにパラナ方言（Palana）以外にも，パレニ（Paren），イトカン（Itkan），カメンスコエ（Kamenskoe），アプカ（Apuka），カラガ（Karaga）方言などの存在が知られている（Zhukova 1968, p.271）。本稿で扱うコリャーク語はチャウチェヴァン方言である。この方言の音素目録は以下のとおり：***p, t, t', k, q, v, γ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə***（注：声の有無は対立的特徴をなさず，すべての閉鎖音は無声である。音声的に ***c*** は破擦音 [tʃ] である。' は歯音の口蓋化を表す）。

2) 本稿は，筆者が2000年12月22日～2001年1月12日にロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区エヴェンスク村で行なった現地調査で得られた資料に基づいている。この現地調査は，平成12年度文部省科学研究費補助金（基盤研究 B2）「東北アジア諸民族の文化変化とアイデンティティの形成に関する文化人類学的研究」（代表者：北海道大学文学部教授　煎本孝，課題番号：11691057）の援助によって行なわれた。調査には Kechgelxut Irina Gergol'tagovna さん（1936年生，女性）に主に協力していただいた。

ここではこれに深入りすることはせず，伝統的に認められてきた「有生性」という用語を引き続き便宜的に用いていくことにする。

1. 文法概要

以下では，本稿の議論に関連する形態音韻的特徴ならびに形態統語的特徴のみを取り上げて概説する。

1.1. 形態音韻的特徴

コリャーク語の主たる形態音韻的現象としては，母音調和，*ə* 挿入があげられる。まず，母音調和について述べる。コリャーク語では母音が基底において強母音 **i**, **e₁**, **u**, **ə₁** と弱母音 **e₂**, **a**, **o**, **ə₂** の2つのグループに分かれ，両者が1語において共起することは許されない。また，形態素の接続に際し，強母音はその語中での位置のいかんにかかわらず，対応する弱母音，すなわち，**i**→*e*, **e₂**→*a*, **u**→*o*[3] に交替する。言い換えるならば，コリャーク語の母音調和は，語幹，接辞という形態素の種類のいかんにかかわらず，強母音をもつ形態素が順行的にも逆行的にも弱母音を同化しえる母音調和であるといえる。ただし，コリャーク語には母音調和の規則に従わない例も数多く見出され，厳密な母音調和を有するチュクチ語とは対照的である（呉人徳司 [特占斯] 1995, pp.177–179)。

ə 挿入は形態素の接続に際し，語頭，語末での2子音連続，語中での3子音連続が起こるのを避けるためのものである。

その他の形態音韻的現象としては，名詞語幹末母音の脱落，不定形での動詞語幹初頭子音の脱落，歯音の逆行的口蓋化，多様な子音同化などがあげられる。

1.2. 形態統語的特徴

名詞の文法範疇には，数，格，人称，さらに本稿で論じる有生性がある。数には単数，双数，複数があり，これらは絶対格においてのみ区別される。ただし，有生のクラスに属する名詞は，後述のとおり，絶対格で単数，双数，複数が区別されるだけではなく，斜格においても単数と複数の区別がなされる。格には11の格，すなわち，絶対格，場所格，道具格，与格，方向格，沿格，奪格，接触格，原因格，様態格，随格がある[4]。統語における格標示は，能格型である。すなわち，自動詞主語と他動詞目的語は絶対格をとり，他動詞主語は能格をとる。ただし，本稿の骨子とも直接関わるが，能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで，その他の名詞はその有生性に応じて既存の格，すなわち道具格あるいは場所格を能格として援用する。人称は，名詞ならびに形容詞が述語になる場合，主語のそれがその述語に標示される。

動詞には，主語と目的語の人称と数が接頭辞と接尾辞によって標示される（ただし，1人称以外は接頭辞はしばしばゼロ)。接頭辞は通常，主格・対格型，接尾辞は能格型を示す。すなわち，自動詞では接頭辞，接尾辞いずれも主語を表すが，他動詞では接頭辞が主語，接尾辞が

---

3) 本稿では基底形は太字で，そこから形態音韻規則によって導かれる表層形はイタリック（太字）で表わされている。

4) この他，筆者は従来「所有形 Possessive」「関係形 Relational」と称され，格形式とは別個に扱われてきたもの（Koptjevskaja-Tam 1995）を属格と考えているが，これについてはまずはその詳細を論じる必要があるため，ここでは伝統的に認められている格のみをあげている。

目的語を表す。

コリャーク語では，動詞と名詞項が形態的に照応を示すために，語順は比較的自由であるといえる。すなわち，主語は動詞に前置されるのが一般的であるが，目的語は動詞の前後いずれにも置かれる。また，修飾語も被修飾語の前後いずれにも置かれる。

2. コリャーク語の名詞句階層と能格標示

コリャーク語の名詞は能格がどのような形式的標示を受けるかにより，大きく次の4つに分類される。

1) 独自の能格標識 **-nan** をもつ名詞（以下，クラス A）
2) 能格に場所格（**-k**）が援用され，同時に有生の標示 **-ne**（単），**-jəka**（複）をうける名詞（以下，クラス B）
3) 能格に道具格（**-te**）が援用され，有生の標示を受けない名詞（以下，クラス C）
4) 能格として任意に場所格も道具格もとり，有生の標示も任意である名詞（以下，クラス B/C）

このうち，1）の独自の能格標識をもつクラス A には人称代名詞，2）の場所格が援用されるクラス B には，人間や家畜を表す固有名詞，人称疑問代名詞，親族呼称，3）の道具格が援用されるクラス C には，親族名称，動物名詞，無生物名詞，4）の任意に場所格，道具格いずれもが用いられるクラス B/C には，普通人間名詞，指示代名詞，「どの」を表す疑問代名詞などがそれぞれ含まれる（表1参照）。

表1 コリャーク語の能格標示の違いによる名詞の分類

	A	B	C	B/C
能格標識	-nan	-ne-k/-jəka-k	-te	-ne-k/-jəka-k〜-te
名詞の種類	人称代名詞	固有名詞 人称疑問代名詞「だれ」 親族呼称	親族名称 動物名詞 無生物名詞	人間名詞 指示代名詞 疑問代名詞「どの」

能格標示の違いに反映されるこのような名詞の区別は，これまでシルバーステイン（Silverstein 1976），ディクソン（Dixon 1979, p.85）らによって指摘されてきたいわゆる名詞句階層におおよそ対応している[5]。以下では，各クラスの名詞の能格標示，有生性の文法範疇をはじめとする文法現象を具体的に見ていく。

3. クラス A

上述のとおり，能格専用の標識（**-nan** [*-nan*]）をもつクラス A には唯一，人称代名詞が含まれる。ただし，人称代名詞は能格形において単数，複数の区別がされるだけで，双数は区別

5) 註4で触れた「所有形 Possessive」「関係形 Relational」の形式的標示の違いも，実はこのような名詞句階層を反映したものであると考えられる。これについては改めて別稿をもうけて考察したい。

されない（表2参照）。

表2　コリャーク語人称代名詞の能格形

	単数	複数
1人称	*ɣəm-nan*	*mocɣ-ə-nan*
2人称	*ɣ-ə-nan*	*tocɣ-ə-nan*
3人称	*ə-nan*	*əcɣ-ə-nan*

以下ではこのうち，***ənan, mocɣənan, əcɣənan*** の文例を見られたい。

(1) ***ə-nan*** ***ɣe-leʕo-lin*** ***kajŋ-ə-n*** ***ŋanko*** ***ɣəcɣol*** ***əjava-k***
彼／彼女-能　過去-見る-3単目　熊-挿入-絶単　あそこで　上で　遠隔地-所
təmupe-l'q-ə-k
山-表面-挿入-所
「彼／彼女は熊を向こうの上の山で見た」

(2) ***mocɣ-ə-nan*** ***məc-ca-jta-la-ŋ-ə-n*** ***əjava-k***
私たち-挿入-能　1複主-未来-取りに行く-複-未来-挿入-3単目　遠隔地-所
va-lʕ-ə-n ***ineŋ-Ø***
ある-分詞-挿入-絶単　貨物用橇-絶単
「私たちはずっと向こうにある貨物用橇を取りに行こう」

(3) ***əcɣ-ə-nan*** ***ne-ku-leʕo-ŋ-ə-n*** ***wejem-ə-k***
彼ら-挿入-能　反転-現在-見る-現在-挿入-3単目　川-挿入-所
inini-lʕ-ə-n ***ənnəən***
現れる-分詞-挿入-絶単　魚（絶単）
「彼らは川で魚が飛び跳ねるのを見た」

4. クラスB

クラスBには，人間および家畜の固有名詞，人称疑問代名詞，親族呼称が含まれる。家畜の固有名詞としてこれまでに確認されているのは犬のそれのみで，コムリー（Comrie 1992, p. 210）が同系のチュクチ語について指摘しているような，トナカイの固有名詞は確認されていない。クラスBに属する名詞には能格として場所格（**-k**）が援用されるが，この際，有生の標識 **-ne**（単数），**-jəka**（複数）も義務的に場所格接尾辞の直前に付加され，全体で **-ne-k** [*-na-k/-ne-k*[6]]（単数），**-jəka-k** [*-jək*[7]]（複数）という標示をうける。

6) *-na-k/-ne-k* は母音調和による異形態。
7) この表層形 *-jək* は，**-jəka-k**→**-jəka**（**-k** 脱落）→*-jək*（語幹末尾母音 **a** 脱落）のように導かれると考えられる。

4.1. 固有名詞

まずは，人間を表す固有名詞の能格標示の例をみられたい。

(4) ***l'aŋe-na-k*** ***teik-ə-nin-Ø*** ***icʕ-ə-n***
リャゲ-有単-所（能） 作る-挿入-3単主／3単目-過去 毛皮コート-挿入-絶単

qlavol-ə-ŋ
夫-挿入-与

「リャゲ（女性名）は夫に毛皮コートを縫った」

(5) ***qecɣəlqot-na-k*** ***ujetik-Ø*** ***ku-tejk-ə-ŋ-nin***
ケチゲルコット-有単-所（能） 橇-絶単 現在-作る-挿入-現在-3単主／3単目

「ケチゲルコット（男性名）は橇を作っている」

(6) ***l'aŋe-jək*** ***ne-ku-tejk-ə-ŋ-ə-n*** ***icʕ-ə-n***
リャゲ-有複 反転-現在-作る-挿入-現在-挿入-3単目 毛皮コート-挿入-絶単

「リャゲたちは毛皮コートを縫っている」

(7) ***qecɣəlqot-jək*** ***ujetik-Ø*** ***ne-ku-tejk-ə-ŋ-nin***
ケチゲルコット-有複 橇-絶単 反転-現在-作る-挿入-現在-3単目

「ケチゲルコットたちは橇を作っている」

(6)（7）の ***l'aŋe-jək***，***qecɣəlqot-jək*** は必ずしも「複数のリャゲという名前の人」「複数のケチゲルコットという名前の人」である必要はなく，「リャゲをはじめとする複数の人」「ケチゲルコットをはじめとする複数の人」の意に解することができる。

現在はコリャークの人々もロシア人の習慣にならって名・姓・父称を名乗るのが一般的だが，その際には，名・姓・父称のすべてが有生の標識を受けて能格に場所格を取り，相互に照応を示す。

(8) ***irina-na-k*** ***qecɣəlqot-na-k***
イリーナ-有単-所（能） ケチゲルコット-有単-所（能）

yerɣolitaɣovna-na-k ***ko-kətʕajŋa-ŋ-nen***
ゲルゴリタゴヴナ-有単-所（能） 現在-叱る-現在-3単主／3単目

「イリーナ・ケチゲルコット・ゲルゴリタゴヴナは彼／彼女を叱っている」

次は，犬の固有名詞の例である。犬には，性別，毛の色などにより，***əvaqli***「エヴァクリ（雄の黒犬）」，***wel'vəŋ***「ウェリヴァン（雌の黒犬）」，***ilɣəqli***「イルガクリ（雄の白犬）」，***il'ɣəŋ***「イルガン（雌の白犬）」などの名前がつけられる。

(9) ***əvaqli-na-k*** ***ənnəən*** ***ku-nu-ŋ-ə-nin***
エヴァクリ-有単-所（能） 魚（絶単） 現在-食べる-現在-挿入-3単主／3単目

「エヴァクリ（雄の黒犬名）は魚を食べている」

有生の標識 **-na**（単数），**-jəka**（複数）は能格のみならず，その他の斜格にも現れる。

(10) ***kamak-na-ŋ*** ***ŋənvəq*** ***jamkəlʕ-o*** ***əjava-ŋqo*** ***ɣe-jel-linew***
カマク-有単-与　多くの　客-絶複　遠隔地-奪　過去-来る-3複主
「カマクのところに遠くから多くの客が来た」

(11) ***jotvayəl-ə-na-ŋqo*** ***en'ajacelʕ-o*** ***ecɣi***
ジョトヴァガル-挿入-有単-奪　客-絶複　今
t-ə-jətʕe-new-Ø ***ko-jajt-ə-la-ŋ-Ø***
1単主-挿入-出会う-3複目-過去　現在-帰宅する-挿入-複-現在-3主
「今，私はジョトヴァガルのところから客たちが家に帰るところに出会った」

(12) ***kavaw-jəka-kjet*** ***t-ə-kimav-ə-k-Ø***
カヴァウ-有複-原因　1単主-挿入-遅れる-挿入-1単主-過去
jajt-ə-lʕ-ə-jɣəm
帰る-挿入-分詞-挿入-1単
「カヴァウたちのせいで私は家に帰るのが遅くなった」

(13) ***notajava-jəka-jtəŋ*** ***wutken*** ***ʕaqaw-la-j-Ø*** ***ɣekeŋe-lʕ-o***
ノタヤーヴァ-有複-向　今し方　出かける-複-過去-3主　トナカイ橇-分詞-絶複
「ノタヤーヴァたちの所に向かって今し方，トナカイ橇の人たちが出かけた」

ちなみに，人間の固有名詞 ***qecɣəlqot*** の格変化は下の表3のとおりである。道具格，随格が欠如していること，また様態格には有生の標識がつかず，単複同形であることに注意されたい。

表3　固有名詞 *qecɣəlqot* の格変化表

	単数	複数
絶対格	*qeclɣəqot-Ø*	*qecɣəlqot-ə-nte*（双）*qecɣəlqot-o*（複）
場所格	*qecɣəlqot-na-k*	*qecɣəlqot-jək*
与格	*qecɣəlqot-na-ŋ*	*qecɣəlqot-jək-ə-ŋ*
方向格	*qecɣəlqot-na-jtəŋ*	*qecɣəlqot-jəka-jtəŋ*
沿格	*qecɣəlqot-na-jpəŋ*	*qecɣəlqot-jəka-jpəŋ*
奪格	*qecɣəlqot-na-ŋqo*	*qecɣəlqot-jəka-ŋqo*
接触格	*qecɣəlqot-na-jite*	*qecɣəlqot-jəka-jite*
原因格	*qecɣəlqot-na-kjit*	*qecɣəlqot-jəka-kjit*
様態格	*qecɣəlqot-u*	*qecɣəlqot-u*

なお，随格の欠如には，***-k omakaŋ***（*-k* 場所格，***omakaŋ***「いっしょに」）の形式が代用される。これは有生の標示をうけるすべての名詞について同様である。

(14) ***muju*** ***qecɣəlqut-na-k*** ***omakaŋ*** ***mət-ko-tva-la-ŋ***
私たち（絶） ケチゲルコット–有単–所 いっしょに 1複主–現在–住む–複–現在
「私たちはケチゲルコットといっしょに住んでいる」

4.2. 人称疑問代名詞「だれ」

「だれ」を意味する人称疑問代名詞もクラスBに含まれ，能格は **-na-k** [*-na-k/-ne-k*]（単数），**-jəka-k** [*-jək*]（複数）で標示される。また，上述の固有名詞同様，その他の斜格においても義務的に有生の標示 **-na**（単数），**-jəka**（複数）をうける。

以下は，人称疑問代名詞が能格をはじめとする斜格で現れている例である。

(15) ***mik-ne-k*** ***ənn'ej-u*** ***ənn-u*** ***ɣe-jel-linew*** ***me-ŋqo***
誰–有単–所（能） これ–絶複 魚–絶複 過去–持ってくる–3複目 どこ–奪
əjava-ŋqo
遠隔地–奪
「誰がこれらの魚をどこの遠くから持ってきたのだ？」

(16) ***mik-jək*** ***ŋajen*** ***jaja-ŋa*** ***ne-ku-tejk-ə-ŋ-ə-n***
誰–有複 あの（絶単） 家–絶単 反転–現在–作る–挿入–現在–挿入–3単目
「誰たちがあの家を建てているのか？」

(17) ***mek-na-jtəŋ*** ***ɣəcci*** ***in-ekmit-i-Ø***
誰–有単–向 お前（絶単） 逆受動–取る–過去–2単主
「お前は誰につかまったのか？」

(18) ***mek-na-ŋqo*** ***ŋajej-o*** ***ɣe-jel-linew*** ***ʕujemtewilʕ-u***
誰–有単–奪 あれ–絶複 過去–来る–3複主 人–絶複
「あの人たちは誰のところから来たのですか？」

(19) ***mik-jəke-kjet*** ***tuju*** ***ujŋe*** ***inʕe*** ***e-jet-ke***
誰–有複–原因 お前たち（絶複） 否定 すぐに 否定–来る–否定
el-la-tək-Ø
ある–複–2主–過去
「誰たちのせいでお前たちはすぐに来なかったのだ？」

ちなみに，疑問人称代名詞の格変化表は以下のとおりである。

表4　疑問人称代名詞の格変化表

	単数	複数
絶対格	*meki*(単)	*meki-nti*(双) *meki-w*(複)
場所格	*mik-ne-k*	*mik-jək*
与格	*mek-na-ŋ*	*mek-jək-ə-ŋ*
方向格	*mek-na-jtəŋ*	*mek-jəka-jtəŋ*
沿格	*mek-na-jpəŋ*	*mek-jəka-jpəŋ*
奪格	*mek-na-ŋqo*	*mek-jəka-ŋqo*
接触格	*mik-ne-jite*	*mik-jəke-jite*
原因格	*mik-ne-kjit*	*mik-jəke-kjit*
様態格	*mik-nu*	*mik-nu*

一方，ジュコヴァ（Zhukova 1972, p.188）は，接触格，原因格を単複いずれも同形式の ***mik-jite***，***mikə-kjit***，様態格を単数 ***mik-ne-nu***，複数 ***mikə-cɣənenu*** としている。筆者の記述との形式上の違いがなにによるものかは今のところ明らかではない。

4.3.　親族呼称

親族呼称も通常，クラスBに含まれ，能格には場所格が援用され有生の標示をうける。ただし，コリャーク語には同じ親族を表すのに，親族名称と呼称の両方の形式があり，それぞれに別個の形式をもつ場合と，1つの形式が親族名称としても呼称としても使われる場合とがある。有生性の標示はそのいずれの場合かにより異なる。直系の親族名称，親族呼称（いずれも絶対格単数形）の対応は次の表5のとおりである。「父母」「兄弟姉妹」には親族名称と呼称が並存するが，それ以外には1つの形式しかないことに注目されたい。

なお，ここでいうコリャーク語の呼称とは，日本語の「お父さん」「お母さん」と同様，呼びかけに用いられるのみならず，文中の名詞項あるいは補語としても用いられるものを言う。

表5　直系の親族名称・親族呼称の対応表

親族名称	親族呼称		
	apappo		「祖父」
	an'a, vava		「祖母」
en'pic		*appa*	「父」
əlla		*əmma*	「母」
qajtakəlɣən		*qattak*	「(男にとっての) 兄弟」
jicʔamjitumɣən		*jicʔom*	「(女にとっての) 兄弟」
cakəɣet		*cakke*	「(男にとっての) 姉妹」
cakettomɣən		*cakok*	「(女にとっての) 姉妹」
	akək		「息子」
	ŋavakək		「娘」
	jəlɣəkmiɣəŋ		「孫息子」
	jəlɣəŋavakək		「孫娘」

親族名称と呼称に別個の形式がある「父母」「兄弟姉妹」の場合には，呼称は常に有生の標示を受けるが，親族名称は有生の標示を受けない。ジュコヴァ（Zhukova 1972, p.98）は親族名称が任意に標示を受ける例をあげているが[8]，筆者の調査ではこれは認められていない。一方，1つの形式しかない場合には，常に有生で現われるものと，任意に有生の標示を受けるものと，その現われ方に揺れが見られる。

4.3.1 親族名称と呼称が併存する場合

1つの親族に対して親族名称と親族呼称が併存する場合には，呼称は場所格を能格として援用し有生の標示をうけるが，名称は能格には道具格が用いられ，有生の標示はなされない。親族名称に対して任意に有生の標示をして場所格を用いたり，呼称に対して有生の標示をはずして道具格を用いたりすることはできない。したがって，親族名詞は本来，後述のクラスCに含まれるが，意味的に対応する親族呼称と能格ならびに有生性の標示を比較するために，以下，呼称とともに例をあげる。まずは，異なる形式をもつ親族名称，親族呼称がそれぞれ能格で現れている例である。

(20) ***əmma-na-k /*** ***əlləʕ-a*** ***ko-kətʕajŋa-ŋ-nen***
お母さん–有単–所（能） 母–具（能） 現在–叱る–現在–3単主／3単目
ənno
彼／彼女（絶）
「お母さん／母は彼／彼女を叱っている」

(21) ***appa-na-k /*** ***en'pic-te*** ***ku-tejk-ə-ŋ-nin***
お父さん–有単–所（能） 父–具（能） 現在–作る–挿入–現在–3単主／3単目
ujetik-Ø
橇–絶単
「お父さん／父は橇を作っている」

(22) ***cakok-na-k /*** ***cakettomy-a*** ***ləʕo-nin-Ø*** ***ənno***
妹–有単–所（能） 妹–具（能） 見る–3単主／3単目–過去 彼／彼女（絶）
「妹は彼／彼女を見た」

能格以外の斜格における有生標示の有無も，能格に準じる。以下は，親族名称 ***en'pic***「父」と親族呼称 ***appa***「お父さん」がそれぞれ能格以外の斜格で用いられている例である。後述のとおり，クラスBには現れない随格が親族名称では現れていることに注目されたい。

(23) ***y-en'pici-te*** ***muju*** ***ajyəve*** ***mət-o-ŋal-la-Ø***
随–父–随 私たち（絶） 昨日 1複主–木–採りに行く–複–過去
「昨日，私たちは父といっしょに木を採りに行った」

8) 例えば，ジュコヴァ（Zhukova 1972, p.98）は親族名称 **en'pici**「父」の能格形として ***en'pici-ne-k*** と ***en'pici-te*** の2つの形式をあげているが，筆者の調査では前者は許容されず，有生の標示をうけない道具格の ***en'pici-te*** のみが可能である。

(24) ***yəmmo*　*an'pece-jtəŋ*　*t-en'ajace-k-Ø***
私（絶）　父-向　　1単主-訪ねる-1単主-過去
「私は父のところに客に出かけた」

(25) ***appa-na-jpəŋ*　*muju*　*mət-ta-la-Ø*　*jamk-etəŋ***
お父さん-有単-沿　私たち（絶）　1複主-寄る-複-過去　隣村-向
qət-ə-lʂ-ə-muju
行く-挿入-分詞-挿入-1複
「私たちは父のところに寄ってから隣村に出かけた」

(26) ***appa-na-kjet*　*yəmmo*　*maleta*　*t-ə-ku-lle-ŋ***
お父さん-有単-原因　私（絶）　ゆっくり　1単主-挿入-現在-行く-現在
「お父さんのせいで私はゆっくり行っている」

(27) ***muju*　*appa-jəka-kjet*　*wutku*　*mət-ə-tkew-la-Ø***
私たち（絶）　お父さん-有複-原因　ここに　1複主-挿入-泊まる-複-過去
「両親のために私たちはここに泊まった」

ちなみに，親族名称 ***en'pic***「父」と親族呼称 ***appa***「お父さん」それぞれの格変化は以下の表6のとおりである。

表6　*en'pic*, *appa* の格変化表

	en'pic「父」	*appa*「お父さん」	
		単数	複数
絶対格	*en'pic-Ø*（単） *en'pici-te*（双） *en'pici-w*（複）	*appa-Ø*（単）	*appa-te*（双） *appa-w*（複）
場所格	*en'pici-k*	*appa-na-k*	*appa-jəka-k*
与格	*en'pici-ŋ*	*appa-na-ŋ*	*appa-jək-ə-ŋ*
方向格	*an'pece-jtəŋ*	*appa-na-jtəŋ*	*appa-jəka-jtəŋ*
奪格	*an'pece-ŋqo*	*appa-na-ŋqo*	*appa-jəka-ŋqo*
沿格	*an'pece-jpəŋ*	*appa-na-jpəŋ*	*appa-jəka-jpəŋ*
接触格	*en'pici-jite*	*appa-na-jite*	*appa-jəka-jite*
原因格	*en'pici-kjit*	*appa-na-kjit*	*appa-jəka-kjit*
様態格	*en'pici-nu*	*appa-no*	*appa-no*
随格	*ɣ-en'pici-te*	――――	――――

4.3.2.　親族名称と呼称の区別がない場合

親族名称と呼称の区別がなく，いずれにも同じ形式が用いられる場合には，標示のしかたが一様ではない。以下，いくつかの語例をあげて見ていく。なお，これ以下の名詞の格変化は，有生性の有無により表6の ***en'pic*** と ***appa*** の格変化のいずれかにしたがうため，以下ではその

パラダイムは省略する。

4.3.2.1 *vava*「おばあさん／祖母」

祖母を表す語は *vava* のみで，呼称としても名称としても用いられる。*vava* では能格は常に場所格で現れ，また同時に有生の標示をうける。

(28) ***vava-na-k*** ***ko-kətʂejŋa-ŋ-nen***
おばあさん／祖母–有単–所（能） 現在–叱る–現在–3単主／3単目

jəl'ŋəkmiŋ-ə-n
孫息子–挿入–絶単

「おばあさん／祖母は孫息子を叱っている」

(29) ***ɣəmmo*** ***t-ə-ko-tva-ŋ*** ***ɣəm-ə-k***
私（絶） 1単主–挿入–現在–住む–現在 1単–挿入–所

vava-na-k
おばあさん／祖母–有単–所

「私は私のおばあさん／祖母のところに住んでいる」

(30) ***vava-na-jtəŋ*** ***mucɣine-w*** ***kəmiŋ-u***
おばあさん／祖母–有単–向 私たちの–絶複 子供–絶複

mət-təle-new-Ø, ***ŋanko*** ***ən-ə-k*** ***pəce***
1複主–連れて行く–3複目–過去 そこに 3単–挿入–所 しばらく

ja-tva-la-jke-Ø
未来–住む–複–未来–3主

「私たちは子供たちをおばあさん／祖母のところに連れていった，彼らはしばらくそこにいるだろう」

(31) ***onm-ə-ajɣəven'ŋ-a*** ***jajt-ə-la-j-Ø*** ***vava-na-ŋqo***
とても–挿入–晩–具 帰宅する–挿入–複–過去–3主 おばあさん／祖母–有単–奪

「彼らは晩遅くおばあさん／祖母のところから帰ってきた」

(32) ***vava-jək-ə-ŋ*** ***ajɣove*** ***ŋənvəq*** ***ɣe-lle-linew***
おばあさん／祖母–有複–挿入–与 あの時 多くの 過去–行く–3複主

jamkicilʂ-o
客–絶複

「おばあさんたち／祖母のところにあの時，たくさんの客が行った」

(33) ***vava-jəka-kjet*** ***juleq*** ***mət-ko-lla-la-ŋ***
おばあさん／祖母–有複–原因 長く 1複主–現在–行く–複–現在

「おばあさんたちのせいで私たちは長いことかかって行っている」

4.3.2.2.　*an'a*「おばあさん／祖母」

上述の *vava* と同義の *an'a* にはやはり対応する親族名称がないが，*vava* とは若干異なるふるまいをする[9]。すなわち，能格では通常，有生標示をうけるが，その際，3人称が目的語になる場合，有生の標示がなされないことがある。

(34)　***an'a-na-k***　　***ena-kətʂajŋa-j-Ø***　　***yəmmo***
おばあさん／祖母-有単-所（能）　1単目-叱る-過去-3単主　私（絶）
「おばあさん／祖母は私を叱った」

(35)　***an'a-na-k***　　***yəcci***　　***na-kətʂajŋa-ye-Ø***
おばあさん／祖母-有単-所（能）　お前（絶）　反転-叱る-2単目-過去
「おばあさん／祖母はお前を叱った」

(36)　***an'a-ta***　　***ənno***　　***kətʂajŋa-nen-Ø***
おばあさん／祖母-具（能）　彼／彼女（絶）　叱る-3単主／3単目-過去
「おばあさん／祖母は彼／彼女を叱った」

有生標示が任意になる傾向は，*an'a* が能格以外の斜格で用いられるとき，より顕著になる。すなわち，1人称を主語とする文中に *an'a* が能格以外の斜格で現われると有生の標示をうけやすいが，主語が2人称では任意，3人称では有生の標示がされなくなる傾向が見られる。例えば，主語の人称を異にするいくつかの文で，異なる現われ方をする *an'a* の場所格の例を見られたい。以下では主語が単数の例のみをあげるが，複数の人称においても同様の傾向が見られる。

(37)　***yəmmo***　　***an'a-na-k***　　***t-ə-ko-tva-ŋ***
私（絶）　おばあさん／祖母-有単-所　1単主-挿入-現在-住む-現在
「私はおばあさん／祖母のところに住んでいる」

(38)　***yəcci***　　***an'a-na-k /***　　***an'a-k***
お前（絶単）　おばあさん／祖母-有単-所　おばあさん／祖母-所
ko-tva-ŋ-Ø
現在-住む-現在-2単主
「お前はおばあさん／祖母のところに住んでいる」

(39)　***ənno***　　***an'a-k***　　***ko-tva-ŋ-Ø***
彼／彼女（絶単）　おばあさん／祖母-所　現在-住む-現在-3単主
「彼／彼女はおばあさん／祖母のところに住んでいる」

9)　この同義語の存在が方言差を反映するものなのかどうなのかは，今のところ明らかではない。

4.3.2.3 目下の親族を表す親族名称・呼称

コムリー（Comrie 1979, pp.327-328）もチュクチ語について指摘しているように，コリャーク語でも子供，孫など1親等以上目下の親族を表す親族名称・呼称には有生の標示がなされない傾向がある。

(40) ***akka-ta*** ***ujetik-Ø*** ***ku-tejk-ə-ŋ-nin***
息子-具（能） 橇-絶単 現在-作る-挿入-現在-3単主／3単目
「息子は橇を作っている」

(41) ***ɣəmmo*** ***akk-ə-k*** ***t-ə-ko-tva-ŋ***
私（絶） 息子-挿入-所 1単主-挿入-現在-住む-現在
「私は息子のところに住んでいる」

(42) ***jəlŋəkmiŋ-a*** ***ku-tejk-ə-ŋ-nin*** ***ujetik-Ø***
孫息子-具（能） 現在-作る-挿入-現在-3単主／3単目 橇-絶単
「孫息子は橇を作っている」

この他，ジュコヴァ（Zhukova 1972, p.102）は物語における擬人化された動物が有生標示をうけることを指摘しているが，筆者の調査ではこれまでのところ，このような有生標示は確かめられていない。

5. クラスC

クラスCには，親族名称，動物名詞，無生物名詞が含まれる。これらは有生の標示をうけず，能格には常に道具格が援用される。親族名称についてはすでに上述したので，以下では，動物名詞語幹 *qoja*「トナカイ」が能格をはじめとするいくつかの格で現われている例をあげる。クラスBには欠如している随格がここでは現れていることに注意されたい。

(43) ***ŋanko*** ***qoja-ta*** ***ku-nu-ŋ-nin*** ***pəʔo-n***
あそこで トナカイ-具（能） 現在-食べる-現在-3単目 キノコ-絶単
「あそこでトナカイがキノコを食べている」

(44) ***ənno*** ***ŋanko*** ***qoja-k*** ***pelat-e-Ø***
彼（絶） あそこで トナカイ-所 残る-過去-3単主
「彼はあそこのトナカイのところに残った」

(45) ***ɣa-qoja-ta*** ***va-kkə*** ***metʔaŋ***
随-トナカイ-随 いる-不定 よい
「トナカイといることはいいことだ」

6.　クラス B/C

普通人間名詞，指示代名詞，疑問代名詞「どの」などは，任意に有生の標示をうけるいわばクラスBとクラスCの中間的な範疇である。

6.1.　普通人間名詞

固有名詞，親族名称，親族呼称以外の人間名詞（例：*el'ʕa*「女」，*ʕujemtewilʕəŋ*「人」，*tumyətum*「友人」など）は，その有生性の程度により能格は場所格でも道具格でも現われる。また有生の標示も任意である。

(46)　***el'ʕa-ta /***　***el'ʕa-na-k***　***yəcci***　***ne-ku-ʕejŋew-wi***
女–具（能）　女–有単–所（能）　お前（絶単）　反転–現在–呼ぶ–2単目
「女がお前を呼んでいる」

(47)　***ənnej***　***qəlavol-te***　***el'ʕa-kjet /***　***el'ʕa-na-kjet***
これら（絶双）　男–絶双　女–原因　女–有単–原因
ko-tkəŋewcin'-ŋ-i
現在–喧嘩する–現在–3双主
「この2人の男は女が原因で喧嘩している」

6.2.　指示代名詞

指示代名詞は，主部の名詞が有生の標示をうける場合には，それに照応して同じく有生の標示をうける。

(48)　***ŋanen-ə-na-k***　***el'ʕa-na-k***　***yəcci***　***ne-ku-ʕejŋew-wi***
あれ–挿入–有単–所（能）　女–有単–所　お前（絶単）　反転–現在–呼ぶ–2単目
「あの女がお前を呼んでいる」

(49)　***ənin-ə-ne-k***　***el'ʕa-na-k***　***yəcci***
これ–挿入–有単–所（能）　女–有単–所（能）　お前（絶単）
ne-ku-ʕejŋew-wi
反転–現在–呼ぶ–2単目
「この女がお前を呼んでいる」

(50)　***ŋanen-ə-jək***　***elʕ'a-jək***　***jetem-Ø***
あれ–挿入–有複　女–有複　テントカバー–絶単
ne-ku-nni-ŋ-ə-n
反転–現在–縫う–現在–挿入–3単目
「あの女たちがテントカバーを縫っている」

(51) ***wutin-ə-jək*** ***elʕ'a-jək*** ***jetem-Ø***
これ–挿入–有複 女–有複 テントカバー–絶単

ne-ku-nni-ŋ-ə-n
反転–現在–縫う–現在–挿入–3単目

「この女たちがテントカバーを縫っている」

主部の名詞を取らずに，指示代名詞だけで単独に現われることも可能である。

(52) ***ŋanen-ə-na-k*** ***(an'a-na-k)*** ***ənno***
あれ–挿入–有単–所（能） おばあさん／祖母–有単–所（能） 彼／彼女（絶）

ko-kətʕajŋa-ŋ-nen
現在–叱る–現在–3単主／3単目

「あの（おばあさん／祖母）が彼／彼女を叱っている」

(53) ***ənin-ə-ne-k*** ***(ilɣəqli-ne-k)*** ***ənno***
この–挿入–有単–所（能） イルガクリ–有単–所（能） 彼（絶）

ku-jɣutku-ŋ-nin
現在–噛む–現在–3単主／3単目

「この（イルガクリ）が彼を噛んでいる」

(54) ***ənen-ə-jək-ə-ŋ*** ***(el'ʕa-jək-ə-ŋ)***
この–挿入–有複–挿入–与 女–有複–挿入–与

t-ə-jəl-ə-n-Ø ***kinuŋi***
1単主–挿入–与える–挿入–3単目–過去 肉（絶単）

「この（女たち）に私は肉をあげた」

(55) ***ŋanen-ə-jəka-jtəŋ*** ***(ʕojemtewelʕ-ə-jəka-jtəŋ)*** ***t-ə-lqət-ə-k***
あの–挿入–有複–向 人–挿入–有複–挿入–向 1単主–挿入–行く–挿入–過去

「私はあの（人たち）のところに行った」

主部名詞が有生の標示をうけない場合には，属部である指示代名詞は主部名詞に合成され単独で現れることはない[10]。

(56) ***ŋanen-qoja-ta*** ***pəʕon-Ø*** ***k-enajej-ŋ-ə-nen***
あれ–トナカイ–具（能） きのこ–絶単 現在–探す–現在–挿入–3単主／3単目

「あのトナカイはきのこを探している」

(57) ***woten-kojŋ-ə-k*** ***n-ə-cəq-qin-Ø*** ***cajcaj***
これ–コップ–挿入–所 形容–挿入–冷たい–形容–絶単 茶（絶単）

10) コリャーク語の形態法における語幹合成についての詳細は，呉人恵1997，ならびにKurebito, Megumi 2001を参照されたい。

ko-tva-ŋ-Ø
現在–ある–現在–3単主
「このコップにはお茶が入っている」

6.3.　疑問代名詞 *meŋin*「どの」

疑問代名詞 ***meŋin***「どの」も上述の指示代名詞と同様のふるまいをする。ジュコヴァ（Zhukova 1972, p.192）では，非有生の場合に主部名詞のみならず ***meŋin*** も分析的に格変化をすることが示されているが[11]，筆者の調査では，絶対格以外では主部名詞に合成され，分析的に現われることはない。

まずは，有生の標示をうけない例である。

(58)　***yənan***　　***meŋin***　　***qoja-ŋa***　　***ja-java-ŋ-ə-n-Ø***
お前（能）　どの（絶単）　トナカイ–絶単　未来–使う–未来–挿入–3単目–2単主
「お前はどのトナカイに乗るつもりだ？」

(59)　***yənan***　　***meŋin***　　***wala-Ø***　　***ja-java-ŋ-ə-n-Ø***
お前（能）　どの（絶単）　ナイフ–絶単　未来–使う–未来–挿入–3単目–2単主
「お前はどのナイフを使うつもりだ？」

(60)　***maŋen-wala-ta***　　***yənan***　　***j-ə-cvi-ŋ-ə-n-Ø***
どの–ナイフ–具　お前（能）　未来–挿入–切る–未来–挿入–3単目–2単主
「どのナイフでお前はそれを切るつもりだ？」

(61)　***maŋen'-ja-k***　　***yəcci***　　***ko-tva-ŋ-Ø***
どの–家–所　お前（絶単）　現在–住む–現在–2単主
「どの家にお前は住んでいるのか？」

---

11)　ちなみにジュコヴァ（Zhukova 1972, p.192）によれば，***meŋin*** の格変化は以下のとおりである。

	無生	有生	
		単数	複数
絶対格	*meŋin*	*meŋin*	*meŋiji*（双） *meŋiju*（複）
能格	*meŋine-te*	*meŋinə-ne-k*	*meŋinə-jək*
場所格	*meŋinə-k*	*meŋinə-ne-k*	*meŋinə-jək*
与格	*maŋenə-ŋ*	*maŋenə-na-ŋ*	*maŋenə-jəkə-ŋ*
方向格	*maŋen-etəŋ*	*maŋenə-na-jtəŋ*	*maŋenə-jəka-jtəŋ*
沿格	*maŋen-epəŋ*	*maŋenə-na-jpəŋ*	*maŋenə-jəka-jpəŋ*
奪格	*maŋenə-ŋqo*	*maŋenə-na-ŋqo*	*maŋenə-jəka-ŋqo*
接触格	*meŋin-jite*	*meŋinə-ne-jite*	*meŋinə-jək-jite*
原因格	*meŋinə-kjit*	*meŋinə-ne-kjit*	*meŋinə-jəkə-kjit*
様態格	*meŋin-u*	*meŋi-ne-nu*	*meŋin-ə-cɣinu*

(62) ***maŋen-wajam-etəŋ*** ***ɣəcci*** ***ku-lqət-ə-ŋ-Ø***
どの-川-向 お前（絶単） 現在-行く-挿入-現在-2単主
「どの川にお前は行くところだ？」

(63) ***ɣənan*** ***ənnəən*** ***maŋe-ʕojamtəwelʕ-ə-ŋ***
お前（能） 魚（絶単） どの-男-挿入-向
jəl-ə-n-Ø-Ø
与える-挿入-3単目-2単主-過去
「お前は魚をどの男にやったのか？」

一方，有生の標示をうける場合には斜格において合成形も分析形も許容される。また，主部を省略して疑問代名詞のみが斜格で現われることもできる。以下，合成形の例は（a），分析形の例は（b）で示す。

(64a) ***maŋen-qattak-na-k*** ***na-kətʕajŋa-ɣe-Ø***
どの-兄弟-有単-所（能） 反転-叱る-2単目-過去

(64b) ***meŋin-ə-ne-k*** ***(qattak-na-k)*** ***na-kətʕajŋa-ɣe-Ø***
どの-挿入-有単-所（能） 兄弟-有単-所 反転-叱る-2単目-過去
「どの兄弟がお前を叱ったのか？」

(65a) ***ɣəcci*** ***maŋen-qattak-na-k*** ***ko-tva-ŋ-Ø***
お前（絶単） どの-兄弟-有単-所 現在-住む-現在-2単主

(65b) ***ɣəcci*** ***meŋin-ə-ne-k*** ***(qattak-na-k)*** ***ko-tva-ŋ-Ø***
お前（絶単） どの-挿入-有単-所 兄弟-有単-所 現在-住む-現在-2単主
「お前はどの兄弟のところに住んでいるのか？」

(66a) ***ɣənan*** ***maŋen-qattak-na-ŋ*** ***jəl-ə-n-Ø-Ø*** ***kinuŋi***
お前（能） どの-兄弟-有単-与 与える-挿入-3単目-2単主-過去 肉（絶単）

(66b) ***ɣənan*** ***maŋen-ə-na-ŋ*** ***(qattak-na-ŋ)***
お前（能） どの-挿入-有単-与 兄弟-有単-与
jəl-ə-n-Ø-Ø ***kinuŋi***
与える-挿入-3単目-2単主-過去 肉（絶単）
「お前はどの兄弟に肉をやったのか？」

おわりに

本稿では，コリャーク語において名詞句階層が文法構造に反映された1つの例として，名詞により異なる能格標示，有生性の範疇を中心とする文法現象を記述的に考察した。これにより，名詞句階層という概念がコリャーク語において個々の文法現象を総合的にとらえるための有効な1つの基準であることが確かめられたといえる。ちなみに，議論が煩雑に流れるのを避ける

ために本稿では扱うことができなかったが，コリャーク語で所有を表す「所有形(Possessive)」の **-nən**, **-in**，修飾語と被修飾語の間の所有形よりも緩やかな関係を表す「関係形（Relational)」の **-kin** として，他の格形式とは別個に形容詞形成接辞として伝統的に扱われてきた形式も，実はこれをいわゆる属格形式ととらえ，名詞の有生性の程度により所有形から関係形へと異なる標示をうけるのだと考えれば，より全体的かつ明解にコリャーク語の格体系を説明することができる。実際，上の３つの属格標識の違いによる名詞の分類は，能格標識の違いによるそれとほぼ対応している。これについては，改めて別稿をもうけ，本稿の議論と併せてコリャーク語における格体系を検討することにより，その記述の枠組みを再構成したいと考えている。

略号表

主＝主語	目＝目的語	単＝単数	双＝双数
複＝複数	有＝有生	挿入＝挿入母音	形容＝形容詞形成接辞
絶＝絶対格	能＝能格	所＝場所格	具＝道具格
与＝与格	向＝方向格	奪＝奪格	沿＝沿格
原因＝原因格	随＝随格		

参　考　文　献

Comrie, Bernard. 1978. "Agreement, Animacy, and Voice." Paper read to LSA Annual Meeting, Boston.

————. 1979. "The Animacy Hierarchy in Chukchee." *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels, Including Papers from the Conference on Non-Slavic Languages of the USSR* (Paul R. Clyne et al. eds.), pp. 322–329, Chicago: Chicago Linguistic Society.

————. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology, Syntax and Morphology*. Oxford: Basil Blackwell. (松本克己・山本秀樹訳『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房1992)

Dixon, Robert M.W. 1979. "Ergativity." *Language* 55. pp.59–138.

Koptjevskaja-Tamm, Maria. 1995. "Possessive and Relational Forms in Chukchi." *Double Case* (F. Plank ed.), pp.301–321, New York/Oxford: Oxford University Press.

呉人徳司（特古斯）　1995　「チュクチ語西部方言の音韻論」『言語学研究』14，pp.165–197。

呉人　恵　1997　「コリャーク語の合成形と分析形」『北海道立北方民族博物館紀要』6，pp.9–30。

Kurebito, Megumi. 2001. "Noun Incorporation in Koryak." *Languages of the North Pacific Rim* 6 (Osahito Miyaoka and Fubito Endo eds.), pp.29–57, Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Silverstein, Michael. 1976. "Hierarchy of Features and Ergativity." *Grammatical Categories in Australian Languages* (Robert M.W. Dixon ed.), Linguistic Series 22, pp.112–171, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Zhukova, Alevtina N. 1968. "Korjakskij Jazyk." *Jazyki Narodov SSSR* V, pp.271–293, Leningrad: Nauka.

————. 1972. *Grammatika Korjakskogo Jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

【Article】

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

Muslim Law in Britain

MENSKI, Werner F.
University of London

Muslim law in Britain has become not only an aspect of foreign law among earlier Muslim immigrants, but has now turned into an integral part of the lived experience and the unofficial law (angrezi shariat) prevalent among Muslims in the UK. The paper discusses the impact of concentrated settlement patterns of Muslims in Britain today, explains the emergence of angrezi shariat, and discusses conflict problems in this new situation of legal plurality, particularly in the area of family laws.

The De-statussed Position of Muslim Law in Diaspora
Effects of Muslim Settlement Patterns in Britain
The New British Muslim Scenario
The Historical Muslim Experience of Being a Minority
Muslim Minorities and English Law
The Legal Approach to Muslims and Muslim Law in Britain
Muslim Responses to Legal Exclusion
Assimilation on Their Own Terms: *Angrezi shariat*
Informal Muslim Dispute Settlement Processes
Future Trends: The Need to Plan Ahead

The De-statussed Position of Muslim Law in Diaspora

Given that Islam is a younger religion than many others, it is hardly a new experience for Muslims to be a religious minority within a state that is not governed by the principles of Islam, in particular submission to the will of one God, Allah. Earlier, a Muslim minority might have been part of a state legal system which is closely linked to another religious system, be it Christianity, Judaism or Hinduism and which respected Islamic law as one of the several religions in a state.

In today's modern Western context, however, Muslim minority communities are faced with state legal systems which are avowedly secular, in the sense that religion and

Keywords: Muslims in Britain, unofficial laws, religious law, *angrezi shariat*, Shari'a Councils

law are seen and treated as separate matters.[1] We see here that Western traditional 'model jurisprudence', a useful term coined by the leading Japanese jurist Masaji Chiba (1986, p.1), leaves no formally recognised space for a Muslim personal law system based on different religious and cultural traditions. Most South Asian Muslims in diaspora in the Western world, thus, have to live with the fact that the typical Western state law restricts the scope for Muslim law in a new diaspora to the religious sphere alone. This means that Muslim individuals and communities are allowed freedom of religion, but not the right to live fully as Muslims, in the sense that they may interpret Islam as a way of life.

Therefore, when conflicts of law arise, the modern Western state law will prevail and Muslim legal norms, which are not part of the recognised official law, will become redefined as religious and therefore extra-legal elements, which the state law may or may not take into account. In other words, Muslim law finds itself pushed into the realm of the unofficial law, the extra-legal sphere of 'cultural practice'. Significantly, an early leading British textbook on the place of ethnic minorities in relation to the law spoke of 'ethnic minority customs' (Poulter 1986). In this framework of reference, Muslim law has manifestly lost its status as a legal system and has become de-statussed to a matter of community mores.

Muslim law in the West has been still further marginalised by the fact that the typical modern Western legal system tends to suspect the *shari'a* value system as inherently violative of modern, and supposedly universal, norms of human rights protection. In this way, Muslim law is often portrayed as fundamentally opposed to the values of the majority community and incompatible with modern concepts of human rights (see Poulter 1987). The most prominent examples in this context appear to be the unilateral *talaq* and the male privilege of polygamy (see Poulter 1995, p.85).

All this leads inevitably to a basic clash of values and to unprecedented conflict situations which do not fall within the ambit of private international law. Since, as we saw, the official state law has re-defined the Muslim minority law as a matter of cultural practice, there is officially no conflict of laws, only a clash of values. In a religious sense, of course, it is evident that Muslims in diaspora will remain Muslims and are unlikely to abandon Islam and Muslim law. The question arises therefore to what extent Muslims in countries like Britain today can be treated simply as secularised subjects of a unified national legal system. This issue resurrects ancient conflicts and tensions about the relationship between God's law and man's law (Coulson 1969) and between the conscience of the Muslim individual and the demands of the modern state (King 1995). If abandonment of the *shari'a* is not an option for Muslims in diaspora, and Islam is perceived as a way of life as well as a religion, it becomes a central issue to what extent *shari'a* can be formally incorporated into a secular legal system. As we shall

1) However, the concept of secularism has been used in a markedly different way in South Asia, particularly in Indian law, where 'secularism' means equidistance of the state from all religions, and therefore implies a certain respect for all religions and a guarantee of equal treatment for minorities.

see, the reaction of English law to this problem has been to refuse official legal recognition of the presence of large Muslim minorities in the country. In this sense, Britain is no different from countries like France or Germany, which also have huge Muslim populations today, albeit from different countries, mainly North Africans in the case of France and mainly Turkish people in Germany. All over Europe and North America nowadays, there is a sense of unbridgeable conflict between modern secular state law and the legal demands of Muslim minorities. In Britain, the main conflict appears to be between the purportedly uniform English law and the unofficial observance of Muslim law in Britain, between restrictive official policies and actual social observance of socio-religious minority norms.

Within the context of a study of South Asian communities abroad, the Muslim experience is only one example of the resilience of South Asian cultural and religious traditions in a new environment. The example of Muslim law in Britain shows, however, that not only cultural traditions in the private sphere will be continued in diaspora. Beyond that, the public sphere will also be influenced by the fact that many hundreds of thousands of South Asians have settled in a particular country and have made their new homes there. While this chapter tries to explain what implications this ongoing multiple conflict scenario carries for Muslim law and for legal developments in Britain, we are of necessity concerned with wider social processes of change and adaptation primarily among the South Asian Muslims of Britain today.

For this purpose, the present article outlines, first of all, some relevant facts concerning Muslim settlement in Britain. Then, turning to the juristic discourse on minority rights in Islamic law, we ask briefly what guidance traditional jurisprudence offers Muslims in diaspora today about their relationship with a modern secular state law. We then examine, in more detail, the legal responses to the Muslim presence in Britain. A survey of relevant literature, case law and statutes demonstrates the progression of interaction, which is perhaps best characterised by mutual avoidance reactions. This leads us, finally, to an analysis of the responses of British Muslims and a detailed exploration of the new concept of British Muslim law (*angrezi shariat*) and its implications for legal practice.

Effects of Muslim Settlement Patterns in Britain

While the centrality of Islam as a belief system is undoubtedly a key element in the reconstruction of today's British Muslim law as an unofficial law within a Western context, extra-religious factors have also played a large role. In particular, the settlement history and spatial distribution patterns of British Muslims seem relevant factors (see Nielsen 1992c, pp.1–7 and 39–94). While the Muslim presence in Britain is of relatively recent origin, most prominently post-1945, a few Muslims have been present in Britain since the 17th/18th century (Visram 1986). Some Muslim authors tend to emphasise that Muslims have lived in Europe for a very long time. Spain and

Sicily prospered under their rule for centuries (Anwar 1994, p.5). The ongoing Bosnia and Kosovo conflicts have brought home to a wider public that 'white Muslims' have existed in Europe for a long time and that Islam is in many ways a part of European culture.[2)]

The vast majority of Muslims in Britain today are fairly recent immigrants, mainly of South Asian origin (Ballard 1994 pp.1–34; Peach 1996). Especially in London, there are many Arabs, Iranians, Turks, various African Muslim communities, American and Caribbean Black Muslims, and a growing number of converts to Islam. Most South Asian Muslims arrived as labour migrants during the 1950s and 1960s. Until the passage of the Commonwealth Immigrants Act, 1962 it was possible for citizens of the United Kingdom and Commonwealth to enter Britain freely. While most migrants came initially as workers, many Muslims have come to Britain as family members, for studies, and business. Lots of Muslim migrants arrived subsequently as refugees, prominently East African Asians during the 1970s, Palestinians and Iranians, and now African Muslims from various countries. In addition, the phenomenon of family reunion has been instrumental in creating a permanently settled Muslim population in Britain (for details see Wahab 1989, pp.7–11). Today, almost 60% of Muslims in Britain are below 25 years, part of a "burgeoning British-born second generation" (Ballard 1994, p.6).

Determining the size of the Muslim community in Britain is an impossible task because the census procedures do not provide figures about religious allegiances. In Britain, place of birth has remained a primary statistical criterion. The 1991 Census included for the first time an 'ethnic question', which yielded approximate figures about how many people from different 'ethnic groups' live in Britain today. The approximately 6% of Britain's ethnic minority population, comprise mainly non-white ethnic minorities and do not include Jews, Cypriots and many others, who simply self-classified themselves as 'white'. As a result, the Census has been much criticised (Ballard 1996; 1997). It is now being discussed whether the next Census should contain a question on religion, which is favoured by many Muslim organisations but otherwise widely resisted.

Britain's Muslim population is estimated at about 1–1.5 million people, about 2–3% of the population, with an upward trend, making Muslims the largest minority group in Britain and Islam the second religion after Christianity.[3)] There is widespread agreement that in the absence of precise statistics it remains difficult for public agencies and the communities themselves to assess the extent of their needs (Anwar 1994, p.18;

2) See a speech of H. R. H. The Prince of Wales on 'Islam and the West', in Vol.9 (1994) *Arab Law Quarterly*, pp.135–143.

3) For details see now Peach 1996. Peach and Glebe (1995, p.28) gave a figure of one million for the UK and also write about other European countries. While official statistics are generally too conservative, some community leaders are tempted to inflate the numbers of 'their' people. For example, Ahsan (1995, p.21) gives an estimate of 2–3 million Muslims in Britain today.

Ellis 1991).

Early labour migration by Muslims involved mostly male individuals who had gone abroad to make money, to buy property and to improve the lives of their families in their home country. This is why many early migrants did not actually stay in Britain for long and were involved in systems of rotating labour. Since they were staying in Britain only for a relatively brief period before a close relative normally took their place, early Muslim migrants developed a dominant pattern of viewing themselves as temporary sojourners rather than settlers. Having no intention to stay in Britain, they did not see any need to adjust to local norms. In sociological terms, the famous 'myth of return' (Anwar 1979) became prominent. However, due to the gradual restrictions on free movement for Commonwealth citizens after 1962, Britain's Muslims (like other South Asian migrants) had to restructure their lives, individually and collectively. It is now being recognised, all over Europe, that the immigration restrictions of the 1960s and 1970s forced many migrants to stay in their European host environment for much longer than originally anticipated. Indeed, many found that they had to become more or less unwilling permanent settlers in order to retain their family's representation in Europe. Not surprisingly, there is now a significant return migration of 'retired' migrants to South Asia, often with their families. This further illustrates the continuing strong multipolar links between diasporic people who are now increasingly referred to as 'transnational communities'.

An important, direct consequence of this process has been the emergence of family reunion during the 1970s and 1980s. Sikhs and Hindus implemented this strategy much faster than most Muslims, in particular Bengali Muslims, some of whom have never called their wives to Britain (Gardner and Shukur 1994, pp.153-154). The gradual re-establishment of Muslim families and whole local Muslim communities in Britain involved also the reconstruction of Muslim ways of life, influenced by traditional local, caste and family customs as well as the new British environment. Among South Asian Muslims, certain communities are strongly represented in Britain, while others are almost totally absent. Today, the majority of South Asian Muslims in Britain are Panjabis and Mirpuris, with significant Gujarati and Bengali groups (see Ballard 1994 for details).

Researchers with insight into the South Asian communities have shown that many Muslims view the lifestyle of the British majority with some distaste (Ballard 1994, pp.2-5). This reflects a more or less conscious assertion of South Asian religious and cultural values in diaspora. This occurs more explicitly than 'back home', where so many elements of culture and religion are simply taken for granted. But this development also implies a feeling of superiority of one's own system, as Ballard (1994, p.2) emphasises when he writes that "all the new minorities are strongly committed to cultural and religious reconstruction". This is certainly not the kind of assimilation that was expected to occur among South Asian migrants to Britain during the past few decades.

One visible outcome of such patterns of mental and spatial reconstruction is the current picture of Muslim residential segregation in Britain. Overall, Muslims may be about 2–3% of the British population, but they are not evenly and thinly spread over the whole country. British Muslims today live in large concentrations in London, in several big industrial cities like Birmingham, Glasgow and Manchester, and in the old textile towns on either side of the Pennines in Yorkshire and Lancashire. Within particular cities, too, one finds local Muslim centres of settlement and concentration, now not only in the classic 'inner city' areas. Researchers have begun to realise that virtually entire villages of South Asian Muslims have resettled in Britain's cities.

It appears, therefore, that even if they were not initially settling in close proximity, many Muslims have during the past two decades chosen to live in more or less Muslim-dominated areas because of all kinds of structural advantages. One should think of easy access to mosques, after-school education facilities (the religious schools or *madressas*), shops and the homes of relatives and friends. At the same time, other Muslims have moved out of the 'inner city' areas to suburban residences, where they may also recreate community structures or where they may live more or less remote from other Muslims (see Werbner 1979 on Pakistanis in Manchester).

Muslim residential segregation often reflects purposive distancing from the majority community. Contrary to assumptions by Western researchers who have tended to emphasise ethnic disadvantages, these settlement structures are largely based on active initiative rather than victimised submission. Muslims may choose to stay put in so-called 'inner city' areas because residence there provides a number of structural advantages. Settlement patterns reflect a complex mixture of self-protection and the desire to be among one's own people.

This trend is much more relevant for legal analysis than researchers have so far realised. Locally, if not nationally, the recreation of large Muslim communities in Britain has strengthened the adherence to community mores, to *shari'a* law, and specifically to South Asian concepts of honour *(izzat)*, all of which are perceived as superior to those of other communities.[4] At the same time, not all British Muslims are closely linked with such community structures and there is no unity among Muslims in Britain, reflected in many divergent opinions about how *shari'a* and legal life in Britain should be reconciled and in a complex pattern of neighbourhood mosques for specific communities of Muslims. Far from being socially homogenous, divided by ancient sectarian groupings and regional affiliations (see also Nielsen 1992c, pp.164–165), British Muslims today are part of the universal Muslim community of all believers (*ummah*), as well as members of distinct families and clan groups (*biraderi*). Leading sociologists like Roger Ballard have commented that kinship loyalties amongst Muslims dominate over loyalty to one's co-religionists (see also Shaw 1994, p.50). Young

4) Nielsen (1992c, p.51) emphasises that many practical problems faced by Muslims in Britain had to be dealt with at the local level. A prominent example is found in burial practices (Anwar 1975).

Muslims, in particular, constitute an increasingly vocal British-born second generation with a self-perception as hyphenated Britons or British Muslims. Women's groups like 'Women Against Fundamentalism' emphasise that Muslim women have developed their own voices (see Sahgal and Yuval-Davis 1992). Much has been written about the outward and inward islamisation of British Muslims, but it remains unclear how this can be translated into the legal sphere.

The New British Muslim Scenario

While allegiance to the supremacy of *shari'a* has continued among Muslims in Britain, the modern state law has tenaciously insisted on the supremacy of its own 'rule of law' models. This immediately sets up a conflict situation with which the classical conflict of laws methodology of lawyers cannot cope. For, in Britain today, recognising Muslim law is no longer simply a matter of giving legal validity to something 'foreign', to actions performed abroad, as in the classic conflict of laws scenario. Rather, it has become necessary to think about how to deal with official legal recognition for actions performed by Muslims in Britain itself. According to dominant legal assumptions, British Muslims should simply behave like other British citizens and should follow the rules of English law. However, this matter is not so simple, as we shall see.

It is hardly surprising that the muted debates about this problem should have led to tensions, misunderstandings and notable unease on all sides. At the end of the 1990s, an appropriate diagnosis highlights continuing lack of communication and a lingering danger of mutual intolerance. It appears that two diametrically opposed, irreconcilably entrenched positions have dominated the discourse and cloud our thinking. From a Muslim perspective, Islamic doctrines about the absolute supremacy of God's law are said not to be not negotiable. While that is a matter of religion, some Muslim leaders have irresponsibly played with the extremist argument that God's law was laid down in the Qur'an, once and for all, and man must not add to this in any form. However, the vast majority of Muslims accept man's obligation to interpret the divine will and to make rules for Muslim communities anywhere in the world that are in tune with time and place. This is a debate among Muslims, therefore, which continues to be fierce and contentious. It is not helpful that some prominent spokespersons have taken extremist positions in their desire to defend Islamic values and Islam itself.

On the other hand, the theorists of Western legal centralism, having defined religion away as a rule-making authority and emphasising only the state's role as lawmaker, insist that Islam is merely a religion. According to this view, in today's modern world the state alone makes legal rules and British Muslims therefore have to follow the rules of English law; being Muslim is declared legally irrelevant.

Both positions, as it were, are extreme stances which inevitably clash. Since they do not, however, represent the totality of views and possibilities, there is much scope for debates — but these have remained undeveloped. The study of how British Muslims

have made sense of these contradictions for their own lives has only just begun, and most English lawyers remain unwilling to address such issues.

The emergence of the muted British legal debate on this issue can be traced back to the late 1960s and early 1970s, when Muslim migration to the UK became more prominent. Some perceptive authors noted, probably based on their own diasporic experience, that migration does not need to involve the shedding of cultural traditions and established legal norms. Thus, Pearl (1972b, p.120) wrote:

> When Pakistanis and Indians emigrate to this country, they do not discard their family customs..... most immigrants who adopt a domicile of choice in this country still follow family customs dissimilar from those of the indigenous population. These customs, deeply engrained into the way of life of the immigrant population, cannot be cast aside by the English courts in an attempt to integrate the immigrants into the English community around them. This country has a multicultural history and the recognition of alien customs, so long as they do not fall below minimum standards of public policy, would appear to be a valuable contribution to the enhancement of racial harmony. Alien customs have been respected in some cases; in other cases, however, English practices appear to have been imposed.

Pearl's comments confirm the social reality that Muslims, wherever they may be in the world, remain subject to the main principle of Islam, total and unqualified submission to the will of Allah (Coulson 1968, p.54). However, as we saw, this first principle, that God's authority is perceived as superior to any form of human authority, appears to have been overlooked and sidelined by secularising modernity. This process itself should be familiar to the British who, migrating to the Indian subcontinent centuries earlier, created a legal system not only for others, but first of all for themselves and their allies. This example does not mean to say that Muslim migrants to Britain ever had the legal power to create official laws for themselves, let alone for others, but it is unrealistic to assume in our globalistic, post-modern world that migrants to a new land will simply abandon all aspects of their 'cultural baggage' and will behave 'as the Romans do' (see however Poulter 1986: v).

Early comments on the legal position of Muslims in Britain, as Pearl's statement above shows, realised the importance of the emerging new conflict between social and legal cultures. Pearl made these observations as a member of a minority community, but spoke as a lawyer. Significantly, as a lawyer, he argued at once that any recognition of the social and religious norm systems of minorities cannot override the supremacy of English law and its core values over divergent customs and moralities, while allowing for recognition of new customs on certain conditions.

This ambivalent approach to the Muslim 'other' has been adopted by subsequent writers (in particular Poulter 1986). It persists today when English law remains willing

to take account of 'cultural practices' in certain situations, but strictly imposes uniform rules in others. For example, in one reported case, *R. v. Bibi* [1980] 1 WLR 1193, a Muslim woman successfully pleaded that her conviction as a drug courier should be reconsidered to take account of the fact that many Muslim women remain subject to the strict authority of males. In another case, a Muslim woman was awarded £20,000 in damages after her former husband had falsely alleged in public that she was not a virgin on her wedding night. In view of strong community values about such matters, the social impact of such a slur on her and her family is reflected in the size of the award.[5] In sharp contrast, a Muslim wife who has only undergone a *nikah* marriage in Britain and never registered that marriage with the state will still be told today that she is not a legally wedded wife and has no standing in law, although certain allowances may be made in terms of social security if there are children involved.

One could of course say that such a Muslim wife has been negligent by not following the rules of English law, while in the first two cases the women concerned sought the help of the English law to defend themselves against pressures from within their own society. However, the examples show that the law does not appear to follow a clear strategy of recognition or non-recognition and 'muddles through' in a very unsystematic way.

It is now increasingly recognised that the customs of immigrants and their descendants pose numerous challenges which are not fully answered by Western official legal systems today (Menski 1993). Nielsen (1992c, pp.154–155) noted an early, misguided secular assumption in Europe that Muslim immigrants would somehow be leaving their religion behind which, of course, was soon found not be the case. A further prominent assumption has been that the adherence of migrants to certain religious and cultural traditions would merely be a transitional phenomenon, perhaps an issue for a generation or two. Such assumptions put the burden of assimilation on Muslims and other minorities (Nielsen 1992c, p.164), assuming that, once Muslims and others became assimilated to an imagined 'mainstream culture', prominently through education, as leading writers like Poulter (1986, p.3) appeared to suggest, the culture of the migrants would somehow become submerged in that of the majority.

By the end of the 1990s, researchers have realised that such classic assimilationist ideologies have not been reflected in social reality. British Muslims have neither abandoned Islam, nor most of their religious and cultural traditions, they have merely reconstructed them, and they have done so, as detailed research clearly tells us, "on their own terms" (Ballard 1994, p.8). These new patterns of ethnic minority behaviour (and thereby legal arrangement) favour pluralism over uniformity, ethnic diversities over national stratification.[6] These social processes are not yet reflected in British legal

5) For details see Poulter (1995, p.83), referring to *Seemi v. Seemi* [1990] 140 NLJ 747. On the case see also Edwards 1990.

6) See Ballard 1994, pp.1–34, an excellent introduction to a study of Asians 'at home' in Britain. Parallels could be drawn to America's failed 'melting pot' ideology (Moore 1995).

writing on the subject, which has continued to be dominated by ideological posturing about the supremacy of state law and muddled thinking about the future of ethnic minority 'customs' in Britain. Poulter (1986: v) posed the problem as follows:

> Should the ethnic minorities who have come to live here conform to English ways or should they be free to continue and practise their own customs in this country? More specifically, should English law adapt its principles and rules to accommodate foreign customs or should new arrivals bear the burden of any adjustment?

Such questions are evidently based on the central assumption that the state alone determines the law. Such an approach denies minorities any agency and purposely overlooks their power to construct their lives as they see fit, indeed 'on their own terms', as Ballard put it. Poulter's suggestion that the modern state should adopt a policy of cultural pluralism within limits defined by the state itself, borrowed from Pearl's earlier writing, as quoted above, and from Lester and Bindman (1972, p.18) is not in fact a tolerant position, as the power to determine what is acceptable remains entirely with the state rather than the community (Lutz 1990).

Poulter's approach, elaborated in his later writing (esp. Poulter 1987; 1992a; 1995) suggests that accommodation to diversity should be made by responding positively to the requirements of ethnic minorities in Britain, but strictly within a set of shared values. Beyond this, legal recognition must not occur. Thus, it became easy for legal writers like Poulter to argue that certain aspects of Muslim law are inherently incapable of legal recognition, trespassing beyond the limits of multicultural flexibility and of 'core values' or 'shared values' (most clearly Poulter 1995, p.83). In this way, the ongoing international debates about universal human values (see Renteln 1990) have become linked to the discussions about the place of Muslim law in Britain. The dominant assumption has been that some ethnic minority 'customs' (and in particular Muslim law) violate certain shared norms, while English law as the official law is somehow exempt from such value judgments, despite evidence of systematic human rights violations by the police, for example. In this way, the official law occupies the moral high ground, which has been perceived by Muslims and other ethnic minorities in Britain as dishonest, since it so manifestly does not match with the daily minority experience of racism and differential treatment. Thus, in exempting itself from equal scrutiny, the modern Western law has further lost legitimacy in the eyes of British Muslims.

Roger Ballard (1996; 1997) has recently highlighted this latent problem, showing that in Britain, as exemplified by the handling of the Census of 1991, 'ethnic' still means something alien and non-white, somehow overlooking the fact that everybody is 'ethnic'. Being non-white, thus, becomes a deviation from an assumed norm, being 'the other' becomes pathogenic in itself. We could add here that being avowedly religious and

Muslim adds a further alienating dimension to 'the other' in a supposedly secular state.

Most British Muslims clearly understand these issues, but from their perspective modern Western state law is not necessarily superior to any other form of legal regulation. As Muslims, they still put God's law above the state law in the first place. This raises important new questions for Britain and other Western countries today about the recognition of Muslim law as an integral part of modern national legal systems.[7] Not surprisingly, given the social reservations about new minorities in Europe, there has been considerable reluctance on the part of English law to grant any form of official recognition to Muslim law as part of English law. However, as we began to see above, it is a recorded fact that English law has taken notice of the presence of a large Muslim population in various ways, explicitly and implicitly,

In my own research, I began to observe that South Asian migrants in the West did not throw their cultural luggage on the rubbish tip of history (Menski 1993, p.257) and that they have been subtly, often imperceptibly to the outsider, reasserting their cultural and religious values, albeit with some modifications, in their new homeland. This process, never without tensions, has for some time been observed among young Asians born and brought up in the West, and now occurs among the second and third generations, too.[8] Consequently, leading researchers now emphasise that the Western assimilation thesis is no longer valid today (Ballard 1994, p.8). This also means that the earlier image of immigrants as lost 'between two cultures' (Watson 1977) needs to be replaced by a more realistic assessment of the resultant pluralities. Assimilationist researchers like Kannan (1978) are now shown to have been misguided in their basic assumptions that the next generation of South Asians would readily assimilate to British norms. Ballard (1994, pp.30–31) suggested persuasively that many British Asians have now become "skilled cultural navigators" who have learnt, often quite effortlessly, to combine living in Britain with reconstructing particular Asian ways of life, switching codes in language and lifestyles as they please. It is significant that experienced researchers like Ballard (1994, p.8) emphasise, in contrast, the enormous difficulties which Western 'white' people face with regard to diversity, multicultural approaches, and barriers to becoming 'skilled cultural navigators'.

The critical question for lawyers, and for the law, remains to what extent the process of recognition of ethnic diversities should extend to the legal sphere. So far, it has only been possible to observe some *ad hoc* recognition of the presence of Muslims in Britain and, otherwise, to study the re-emergence of Muslim law in Britain as an unofficial law (see Menski 1987; 1988a; 1993a on the reconstruction of Hindu law in Britain).

There is a powerful assumption that Muslims have found it more difficult than

7) On Canada see now Ali and Whitehouse 1992; on the USA see Moore 1995.

8) See Taylor 1976 on young people in Newcastle; Brah 1987 on South Asian teenagers in Southall; Shaikh and Kelly 1989 on Muslim girls generally; Mirza 1989 as well as Knott and Khokher 1993 wrote about Muslim women in Bradford.. A new literature on citizenship and exclusion has recently emerged (Spencer 1994; 1995; Bauböck 1994).

other minority groups to harmonise aspects of their community and family customs with the official laws of European countries.[9] Much of this, it seems, has to do with the nature of Islam, although Ballard (1994, pp.20–22) emphasises that commitment to Islam is only one set of factors among others. For example, the conceptual non-division of the 'religious' and the 'secular' is, contrary to vigorous assertions by Muslims and non-Muslims alike, not unique to Islam. When Muslims raise this issue, they reflect concern over the basic question of God's law/man's law (which is also an issue in other religious traditions) but often this is mixed with considerable misgivings about the fact that minorities like the Jews and the Sikhs in Britain appear to have been given better legal recognition than Muslims. The major focus of Muslim legal demands in Britain in the past few decades has therefore been on removing the exclusion of Muslims from the protective label of 'racial group' under the *Race Relations Act*, 1976 (Modood 1993). The main demand is no longer (as it was during the late 1970s) that Islamic law as a whole should be recognised as a legal system under the umbrella of English law. Today the focus is on remedying the effects of exclusionary policies which disadvantage Muslims in Britain in comparison to other communities (see now Werbner and Modood 1997). In this context, it is quite apparent that English law faces major conceptual problems over how to handle religion (Bradney 1993), which is not just a matter of having places of worship or holding particular beliefs or values, but also involves putting into practice what one believes and acting in accordance with the values one holds in esteem.

Like British Sikhs, Muslims have attempted to raise their concerns in the public sphere (Modood 1993; Vertovec 1996). At times, this has created the impression that Islam and Muslim law, pushing for official legal recognition, are the source of the problem. However, the conceptual tensions over legal recognition for minorities are, in the first place, caused by Western dominant rule of law concepts rather than the presence of minority laws. In other words, the official majority law allows insufficient space for diversity and thus drives minority communities underground, treating them as unofficial law, even only 'cultural practices' or customs. South Asian migrants to Britain are familiar with such conflicts, but they are also used to legal arrangements through which the state law recognises various religion-based personal laws. This goes particularly for the older religious minorities, like various Christian groups and the Jews (Hamilton 1995). To face total non-recognition, and even positive obstruction towards legal recognition, must have come as a shock to many South Asians in Britain, while the deliberate non-recognition of their religious law may hurt the fervent believer most of all. One senses a strong cultural expectation that, as in South Asia, at the end of the day, religion will not be ignored by the state and people's law will not be declared non-existent. While the reluctant, piecemeal legal recognition of Muslim law in Britain can no longer be denied, this is not seen as sufficient. Worse, it is perceived as divisive

9) This is also apparent from the growing French literature in this field (Bistolfi and Zabbal 1995; Foblets 1994a; 1994b and 1996).

rather than inclusive, because other communities appear to fare better.

It has not helped to cool tempers in this debate that the purportedly secular nature of English law is somewhat fictitious. In this regard, one may consider a number of factors. In countries like the UK, too, religion serves as a focal point for group cohesion and individual identity and the British Crown remains linked to the Church. The Salman Rushdie affair and the resultant debates about blasphemy highlighted most clearly that the public/private distinction with regard to religion in Britain is blurred. English law only purports to be secular, it is neither neutral nor equidistant to different religions. Having argued themselves into a corner and now feeling victimised, Muslims are bound to perceive the official approach as more or less hostile discrimination. Muslim authors have not helped the complex debate by emphasising, time and again, the strong link between law and religion. Even feminist Muslim scholarship goes along with this (Mernissi 1993; Afshar 1994). Traditional authors like Abdur Rahim (1984, p.47) emphasise the personal application of law to Muslims, wherever they may be:

> In Muhammadan jurisprudence law is personal in its application to the Muhammadans, that is to say, it is not affected by the constitution of a particular society.... thus, if a Muhammadan goes from one state to another, he is bound by the same law, and if he does not live within the jurisdiction of a Muslim state, the Muhammadan law still applies to his conscience.

All of his illustrates that many Muslims see themselves as Muslims first and citizens or residents of a particular state second, raising profound questions of loyalty and identity. Genuine desire not to offend the laws of the new country conflicts here with strong allegiance to Islam as an entity which is larger and higher than the state. As individuals and members of communities, British Muslims are therefore faced with situations of seemingly irreconcilable conflict. As individuals and communities, they have reacted to this with remarkable creativity, as we shall illustrate further below.

The official law has been less ready to respond creatively to the new diasporic scenarios. It has been relatively easy and certainly convenient to assume that modern Western state law would ultimately prove superior to any cultural form of legal regulation. However, such wishful thinking has not been matched by social reality and key questions about the extent of legal recognition of Muslim law in Britain have remained unresolved. We have already noted the considerable reluctance on the part of English law to grant any form of official recognition to Muslim law as part of English law. On the other hand, we have already seen that English law has occasionally taken notice of the presence of a large Muslim population. Still, that is only half the story, since a comprehensive analysis of this conflict also needs to look at how Muslims themselves have adjusted to the new diasporic situation.

Open conflict has been avoided by the fact that the modern Western positivist approach to the concept of law results in purposeful blindness to what Masaji Chiba

(1986) has called 'unofficial laws' and 'legal postulates', in other words, social conventions and so-called cultural practices, values and norms which operate in the 'extra-legal' Muslim sphere. While English law has not prohibited Muslims from living as Muslims, it refuses to recognise the legal consequences of many aspects of the Muslim way of life. The indirect result of this purposive, selective blindness has been a reluctant tolerance, which has allowed space for the unofficial development of new hybrid rules among Muslims. One writer has explicitly highlighted that it is not easy to be British and Muslim at the same time (Modood 1992), but it appears that British Muslims have learnt to balance the two conflicting legal cultures better than the official law itself.

English law thus assumes, from a position of official superiority, that its cautious policy of selective recognition keeps the legal position of British Muslims under negotiation and official supervision. This is especially obvious in the field of education law, where the state has for a very long time obstructed any legal recognition of Muslim demands for separate schools. British Muslims, on the other hand, being faced with such persistent official intransigence, have cultivated numerous avoidance strategies, so that the contact points between the official law and the unofficial Muslim law have become obscured. An outside observer may therefore assume today that British Muslims are simply following English law, while in reality they are following a path which *they* consider appropriate. The classic Muslim term for this is precisely the old concept of *shari'a*, meaning the right path for the individual Muslim. In the new legal environment of Britain, a new hybrid form of *shari'a* was needed to avoid breaking the official law of the new home. This is how the concept of *angrezi shariat*, British Muslim law as an unofficial amalgam, has been constructed by the communities themselves.

My observations about this phenomenon in the socio-legal sphere strongly confirm what Roger Ballard (1994) has written with regard to the social sphere. It is a fact today that South Asian immigrants and their descendants in Britain have reconstructed *desh pardesh,* a home away from home, by rebuilding their lives "on their own terms" (Ballard 1994, p.5). Thus, in Britain today, we find a new form of *shari'a,* English Muslim law or *angrezi shariat,*[10] which remains officially unrecognised by the state but is now increasingly in evidence as a dominant legal force within the various Muslim communities in Britain. Individual and community effort at finding the right path have led to the emergence of new hybrid, unofficial Muslim rule systems in Britain which operate in society but have not been given official legal recognition. This observation is confirmed by official publications from Muslim organisations such as the Islamic Shari'a Council (1995).

Angrezi shariat must remain officially unrecognised, for several reasons: From the state's perspective, its emergence is deeply offensive to established ideas of Western model jurisprudence about modern legal systems and their functioning. At the same

10) This term for Muslim law in England is adapted from Urdu, the national language of Pakistan. Its spelling reflects the South Asian majority orientation among Muslims in Britain today.

time, Muslims in Britain are, to a large extent, happy to keep matters that way, arguing that traditionally the sphere of family law has never been a matter for state law anyway (Ahsan 1995), so there is nothing wrong with this *status quo*.

The development of *angrezi shariat* is not a new phenomenon, however, nor should its public emergence come as a surprise. During the late 1960s and early 1970s, English law moved further and further in the direction of recognising, through case law, that Muslims in Britain continued to act in accordance with what they took to be *shari'a*. The liberal high-water mark is the case of *Qureshi v. Qureshi*, [1971] 1 All ER 325. By the early 1970s, however, in line with increasing immigration restrictions and despite new anti-discrimination laws, English statute law began to demand that the rules and procedures of the uniform domestic law must be followed. Most specifically, English divorce law insisted on formal legal proceedings before an English court to bring about a legally valid divorce and refused to recognise any other proceedings that might be designed to dissolve a marriage. Soon after this, the explicit demand for the full-scale recognition of Muslim personal law, made by the Union of Muslim Organisations in 1975, itself a reaction to the increasing assertiveness of English law, resulted in a straightforward negative response: There was no official space for *shari'a* in modern English law (see in detail Nielsen 1993a).

This stand-off has pushed Muslim law firmly back into the realm of 'unofficial law' and has forced Muslims and others, during the past two decades, to reorganise their legal world. Charting the emergence of *angrezi shariat* in more detail below, we show that it is possible today to trace and explain the resulting hybridisation process. Much more detailed research will need to be done in the coming years to fully understand those half-hidden processes of legal readjustment and to research their implications. The existing literature on Muslims in Britain tends to have a socio-political focus and rarely discusses legal issues. My argument is now that English case law and legislation will need to be re-examined in the light of the emerging presence of *angrezi shariat* and that this analysis will need to be compared with research on how Muslims themselves organise marriages and divorces, polygamy and maintenance, child custody and inheritance.

The Historical Muslim Experience of Being a Minority

I began this essay by emphasising that the history of Islam and its legal system starts from a position where Muslims were in various types of minority situation. Indeed, the status of Muslim minorities in non-Islamic territories has been an important subject of debate from the very beginning of Islamic history and it is highly significant that the topic has received fresh attention recently (Kettani 1990; Lewis 1992; Fadl 1994). Early Muslims, including the Prophet of Islam himself, became refugees and had to migrate to avoid religious persecution.

If we ask briefly what Islamic jurisprudence has had to say about the minority

status of Muslims, we see that no clear answers are forthcoming. Lewis (1992, p.6) has argued that this topic received only minor attention from Islamic jurists and that there was no precise precedent in Islamic history for the kind of minority scenario that British Muslims face today (Lewis 1992, p.13). Earlier discussions related mainly to migration necessitated by persecution or by the forced occupation of Muslim territory. Further, the historical context of gradual Muslim expansion made it inevitable for many Muslims to live under non-Muslim rule, until perhaps one day demography and politics resulted in Muslim political domination, a scenario which probably continues today. As a result of widespread labour migration during the 20th century, we must now add to the more historical categories of Muslim minorities settled Muslim communities of more recent origin who form 'ethnic minorities' in non-Muslim secular states, most of which have a Christian ethos.

The juristic discussions relate to "the ethical and legal duties that these Muslims owe to the Shari'a and to their host polity" (Fadl 1994, p.143). Some jurists argued that Muslims and non-Muslims can live together on the basis of peaceful co-existence and the right to profess and preach their respective religions. However, it was said that if Muslims were unable to defend and maintain their faith, they are obliged to emigrate, following the example of the Prophet, preferably to a Muslim country (Kettani 1986, pp.3–4). If this was the settled, authoritative position, it would carry with it enormous implications for Muslim communities in the West today. Indeed, some Muslims in Britain have sent their children back to Pakistan or other countries for education, fearing that their offspring would be corrupted by the new environment, and this issue regularly crops up in informal discussions with Muslims.

After thorough examination of the traditions, Fadl (1994) concludes that no one definitive view has been offered by the various jurists of different schools. Many Muslim jurists held that residence in a non-Muslim land was permitted, as long as Muslims were secure from harm, would suffer physically or financially if emigration took place, and were able to manifest or practise their religion (Fadl 1994, p.157). However, it was always better to reside in a Muslim territory, however poor or despotically governed it may be. Fadl noted that words such as 'manifest' and 'practise' are nowhere defined. Thus, at what point is a Muslim being prevented from following Islam? Is the critical issue ability to perform acts of worship, such as prayer or fasting, or permission to apply the laws of Islam in their totality? Fadl (1994, p.158) rightly notes that "while it might be feasible to pray or fast in non-Muslim lands, it is far more difficult to apply Islamic criminal, commercial and personal status laws". Such comments have an obvious bearing on the kinds of demands which can legitimately be made by Muslims in Britain today.

Fadl also shows that in these juristic deliberations much depends on the definition of what constitutes *dar al-islam*, the territory or abode of Islam. Some jurists contended that even where sovereignty vested in non-Muslim hands, the territory in question may still be a part of *dar al-islam*. More recent research appears to indicate that the classic

distinction between *dar-al-islam* and *dar-al-harb* is not in fact a simple dualistic model, because of the intermediary concept of *dar-al-dawah* ('the country of mission') or *dar-al-ahd* ('the country of treaty'), where Muslims could live as a minority in a non-Muslim state, yet could organise their lives in accordance with *shari'a*. This concept probably comes closest to the current Muslim experience in most Western countries. It is significant that this model was not prominently discussed in the earlier Islamic literature, confirming that scholarly concern was focused on those members of the Muslim *ummah* who faced persecution.

This brief historical excursion shows that today's Muslim members of minority communities in the West possess no uniform and authoritative juristic guidance on this matter. The only consistent advice appears to be that Muslims must remain bound in conscience to God's law and must retain their separate identity, thus safeguarding *shari'a*. It appears, otherwise, that the main justification for Muslim residence in Western countries is based on economic considerations. This mixture of socio-economic and religious reasoning should not escape notice. It has clearly been conducive to the hidden growth of unofficial Muslim laws in Western countries. At the same time, as we saw, the equally ambivalent approach of Western legal systems to Muslim law, legally de-recognising it while tolerating its social presence, has assisted the development of *angrezi shariat* in Britain today as a prototype of post-modern unofficial Muslim laws in Western countries.

The demand for the full-scale recognition of Muslim personal law in Britain during the mid-1970s (see Poulter 1990b) showed most clearly that Muslims in the West have been increasingly reasserting their religious and legal values and have been willing to challenge the official legal system rather than neglecting what they perceive as their religious duties. While it was certainly a tactical mistake to demand full-scale legal recognition for *shari'a* in Britain at that time, the official negative response to this struggle, outright rejection of the claim for recognition of the Muslim personal law in Britain, leads us directly to the private strategy of individual Muslims, now more manifestly of the various Muslim communities, to restructure their lives in accordance with *shari'a* as well as the requirements of English law. A typical example would be the attempt to teach British Muslims how to make wills under English law, while preserving the supremacy of Muslim law rules (see Haqq, Aisha and Thomson 1995).

Studies of Muslim law in Britain today must therefore take notice of the fact that British Muslims have begun to deal with such conflicts internally, but not entirely without reference to English law, attempting to work out feasible solutions for themselves as a Muslim minority in a non-Muslim state. The result, it appears, has been the more or less conscious creation of a new legal system, *angrezi shariat*. But quite how does this operate in practice? In the following section we first concentrate our attention on the reactions of English law to this new hybrid legal phenomenon.

Muslim Minorities and English Law

At the end of the 1990s, the process of reluctant legal recognition of actions which Muslims and other ethnic minorities perform in Britain has already gone much further than all players, including Muslims themselves, are ready to admit. The English legal system, widely perceived as a typical Western, uniform legal system, is manifestly not as compact as it appears. Being a complex system of rules, it is in fact composed of many sub-systems which only apply in certain situations, to certain facts, and often to particular groups of people. It is manifestly not the case that all rules of the law relate to all subjects of the law in equal measure. Thus 'legal system' and the notion of 'common law' are convenient labels rather than reflections of socio-legal reality.

The assumption that uniform laws are desirable and are the pinnacle of legal development, fit for universal application, is clearly Eurocentric (see in detail Kelly 1992). Authors with exposure to non-Western concepts of law, speak of "normative legal theory" (Cotterell 1992, p.3) or of Western "model jurisprudence" (Chiba 1986, pp.1–2), thus contradicting universalistic claims. The history of non-Western laws, especially South Asian laws, demonstrates that basic, so-called universal assumptions about legal uniformity and the separation of law and religion are not shared in South Asia, as indeed elsewhere in 'Southern' countries. It is significant that the European colonial powers respected this to a large extent when they got involved in law making overseas. Today, it seems they have forgotten such lessons when it comes to dealing with Asian and African minorities living in their own countries.

Kelly (1992, pp.303–304) shows that the current debates about Muslim laws in Europe remain influenced by colonial experiences and the inferiorisation of overseas concepts and values. In Britain, this has led to many uneasy compromises (Shah 1994). Kelly (1992, p.306) emphasises that the claim of the modern state to a larger interventionist role went hand in hand with increasing state interest in regulating and thus dominating family relationships. It has been assumed for a long time that the post-colonial states of Asia and Africa would follow — and indeed did follow — such strategies of modernisation. During the 1950s and 1960s, South Asian family laws became a typical lawyers' law, emphasised the supremacy of state intervention and attempted to override religious and social customs and traditions (Derrett 1968b; Anderson 1968; Mahmood 1972). By the 1990s, however, South Asian family laws have evidently returned to a position of greater respect for the religious and social spheres, not only as a result of islamisation, as is often assumed, but because the Western model of uniform legal regulation is increasingly seen and experienced as inadequate for vastly diverse populations. South Asian jurisdictions today have re-discovered their indigenous value systems, which also involves treating religion as an integral part of law-making processes. Therefore, in many respects they are no longer even attempting to follow Western models, developing instead their own forms of legal regulation. These rely much more on family solidarity and public interest than on the

individualistic, private interest domination of modern Western laws.

Such conceptual developments have not yet taken place in Western jurisdictions, although the mounting criticism of modern social welfare laws and their implications, as to some extent in Japan, indicates disquiet over several legal paradigms of modernity. In the UK, so far, the impact of legal positivism and its conceptual underpinnings has been that English law, as the official legal system, still largely ignores what Chiba (1986, pp.6–7) has called "unofficial law" and "legal postulates", particular value systems of certain groups of people. Within its own realm, English law simply grants no space for any other legal system. As we began to see, many Muslims — but not only Muslims — find this unacceptable.

There is an interesting international dimension to this ongoing debate. In view of the experience of other increasingly multicultural countries, notably Australia and Canada, some authors have begun to argue that the fictional uniformity of Western legal systems is plainly unreal (Griffiths 1986, p.4). From Australia comes the argument that a re-conceptualisation of equity is required today to handle ethnic diversity (Castles 1994, pp.15–16). All these debates are about legal pluralism, the antithesis of Western legal centralism, defined authoritatively as "that state of affairs, for any social field, in which behaviour pursuant to more than one legal order occurs" (Griffiths 1986, p.2). In a pluralistic analysis of English law today, this approach would imply recognition of the factual existence of many other normative orders, such as local customs, but now also Muslim law. This is quite different from the classic colonial model of 'weak legal pluralism' (see Hooker 1975).

These debates link to the current discussions in Britain and elsewhere about multiculturalism. At first sight, multiculturalism may seem like a utopian, fuzzy sociological concept with little relevance to a legal discussion. However, what is a multicultural law? Poulter (1992a, p.175) saw equal opportunity, cultural diversity and mutual tolerance as the three key elements of multiculturalism and argued that the law's role in maintaining cultural diversity is "to allow and, where appropriate, facilitate the continued practice of ethnic minority customs and traditions". Crucially, Poulter then immediately went on to emphasise the limits to such acceptance of cultural diversity. Where the belief or practice in question falls below certain perceived standards and thereby clashes with the "overriding public interest in promoting social cohesion" (Poulter 1992a, p.176), the law must restrict plurality. But who determines the criteria for what is acceptable and what is not? If this particular approach is taken, British Muslims would appear to have to renounce or modify certain beliefs and practices which are perceived to be contrary to the limits of acceptability as defined by the modern state. Very similar questions constantly arise in Indian law, where the acceptability of Muslim norms is also a prominent issue.

Recognising the presence of other normative orders does not necessarily mean that the dominant legal system abdicates its claim to overriding authority. However, this appears to have been a major fear, reflecting concern about losing control. But what is

preferable in multicultural Britain today? Should the official English law restrict itself to controlling the official sphere, knowingly ignoring the rest of the social sphere, or should it attempt to control the entire social field while being prepared to make concessions to diversity? The section below explores this issue in some more depth and shows the consequences for the legal position of Muslim law in Britain today.

The Legal Approach to Muslims and Muslim Law in Britain

As we saw above, the critical question for English law today is whether and to what extent the legal sphere should take notice of the fact that today millions of people resident in Britain, and subject to English law, are Muslims. From a pluralistic legal perspective, there can be no doubt that this should lead to some creative development. From a traditional positivist viewpoint, however, this is not a legal matter and there is not much to debate. Any analysis of this complex issue depends, therefore, on the basic definition of 'law' which one uses. The prevailing approach so far has been to study Muslims and others as objects of the official law, not as active players and agents in real conflict of laws situations, which has been widely resented by British Muslims

At the same time, and in certain respects, English law has made significant allowances for Muslims in Britain. However, these have been neither coherent, nor have they been systematically researched. Recent research about citizenship (Spencer 1995) portrays a scenario of muddled criteria for inclusion and exclusion of certain minorities, as well as deliberate distinctions between individuals and groups of people to demonstrate and assert legal power. Poulter (1992a, p.183) argued that the law appears to be responding to needs depending on the strength of demands and the urgency of the needs. However, this does not mean that those who shout loudest will achieve the best results. Muslims in Britain experienced quite the opposite when the demand for full-scale recognition of *shari'a* in the mid-1970s was simply thrown out,[11] while British Sikhs appear to have won legal concessions through persistent, less dramatic low-key lobbying.[12]

Looking at the official status of Muslim law in Britain, we therefore find a complex dual picture. As a foreign legal system, under the rules of private international law, various forms of Islamic law are fully recognised as law, but only as overseas law. For Muslims in Britain itself, the continued basic non-recognition of *shari'a* remains a fact because the official law treats all ethnic minority laws as customs or cultural practices.

11) Similarly, Muslim demands in India that Muslim ex-husbands should not (like all other Indian men) have to pay maintenance to their ex-wives till their death or remarriage, ended in the implementation of the *Muslim Women (Protection of Rights on Divorce) Act,* 1986, which imposes the general law rules in personal law form. More recently, Indian debates about the triple *talaq* (Ahmad 1994) show that Indian Muslims have now learnt to use a restrained level of debate rather than provoking further legal reforms.

12) See in particular the *Motor-Cycle Crash Helmets (Religious Exemption) Act,* 1976 and the effects of the House of Lords decision in *Mandla v. Dowell Lee* [1983] 1 All ER 1062.

This approach, more or less completely, tries to ignore the presence of Muslim and other ethnic minority legal perspectives.

The key argument in the official legal position has been that all ethnic minority practices, in order to qualify for legal recognition, must not offend the "core values" (Poulter 1986: vi) or "shared values"(Poulter 1995, p.83) of British or even English culture. This approach has been more and more prominently justified by human rights arguments (Poulter 1986: v–vi; 1987). As Poulter (1992a, p.176) put it:

> There are, therefore, limits to the acceptance of cultural diversity which need to be imposed in support of the overriding public interest in promoting social cohesion. Cultural tolerance cannot become a 'cloak for oppression and injustice within the immigrant communities themselves', nor must it endanger the integrity of the 'social and cultural core' of English values as a whole....English judges have emphasized that tolerance is bounded by notions of reasonableness and public policy and that foreign customs and laws will not be recognized or applied here if they are considered repugnant or otherwise offend the conscience of the court.

This purportedly liberal, yet culture-biased approach clearly preserves the position of English law as the dominant law and the only valid legal system in England. It also relies self-righteously on the assumption that non-Western laws, including Islamic law, cannot be trusted to uphold universally accepted human rights values. The assumption that Muslim law allows the systematic violation of basic human rights provides an immediate response to advocates of legal pluralism or the legal recognition of Muslim law. While it could be said that this approach seeks to protect certain members of ethnic minorities from their own rule systems, it is a big issue, not the least among Muslim scholars themselves, how injustice to any one segment of Muslims can be avoided.[13)]

The above discussion confirms that recognition of diversity is found acceptable in the social sphere, but not in the realm of the law. However, as Hamilton (1995) shows for various Christian groupings of 'dissenters' and Jews, English law has for a long time been making numerous exceptions to its own general law by allowing adherents of certain religious or ethnic minorities to do what their belief system requires of them (see also Poulter 1989, pp.123–124). Seen in this light, Muslims in Britain are simply one of the most recent claimants to separate legal recognition and need to learn that new minorities do not win concessions overnight. Allowances have to be carefully negotiated, and this takes time. As the Muslim example in Britain shows, a less than diplomatic, too demanding approach leads to defensive reactions and swift refusal.

---

13) This issue is particularly relevant for the debates generated by Muslim feminists (Helie-Lucas 1994; Afshar 1995; Kabbani 1995).

Given that the policy of English law towards recognition of ethnic minority laws has been so inconsistent and uncoordinated, what are the factors responsible for this? It appears that any particular response depends on the nature of the particular rule or conflict in question and is undoubtedly linked to cultural factors. Thus, English law criminalises bigamy, but has found itself making more and more allowances for unmarried cohabitation, which would in many cases be considered a crime under Muslim law, given the powerful Islamic prohibitions on sex outside marriage (*zina*). The English legal system has extended the provisions of s. 1(2) of the *Slaughter of Poultry Act,* 1967 and s. 36(2) of the *Slaughterhouses Act,* 1974 from Jews to Muslims. English law allows Muslim butchers to procure and sell *halal* meat, provided it is for the consumption of Muslims (Poulter 1989, p.124). It is interesting to note that such assumptions of the law do not match with social and commercial realities. After all, *halal* butchers are popular with many non-Muslim customers. Hindus, in particular, as in the subcontinent, rely on Muslim butchers to carry the *karmic* burden of killing animals and handling their meat. In this particular case, it seems that English law, as a result of cultural ignorance, has gone much beyond recognising a 'religious' need for Muslims.

On the other hand, English law has been unwilling to recognise the existence of Muslims as a 'racial group' under the *Race Relations Act,* 1976. This has become a matter of great concern to Muslims who point to preferential treatment for other groups (Modood 1993). Well-used earlier examples are the exemptions for Jews and Quakers in the *Marriage Act,* 1949 when it comes to solemnising marriages (Hamilton 1995). Such explicit legal permission to practise particular usages points to established precedents for the recognition of non-secular and non-Anglican beliefs and practices by statute under the general umbrella of English law, supporting the assertion that "English law is a reasonably flexible system" (Poulter 1995, p.82). However, many Muslims note the differential treatment of Jews, Quakers and Sikhs, seeing this as contradictory to the state's claim of equal treatment. There is growing evidence now that British Muslims feel excluded and victimised by the English legal system.

The critical question remains to what extent English law may be willing to accommodate Muslim concepts and concerns. Poulter's writing demonstrates remarkable strictness when he identifies polygamy, divorce by repudiation (*talaq*) and prohibitions on interreligious marriages as the most controversial issues, which "would seem to me to be points of absolutely irreducible conflict" (Poulter 1995, p.85).[14] At the same time, many actions remain permitted in English law simply because there is no law against them. For example, it is not prohibited by English law to enter into an Islamic contract of marriage in Britain, although by itself this will not be given legal

14) Poulter appears to have overlooked here that so-called 'modern' forms of divorce, i.e. the breakdown principle, have exactly the same effect of unilateral repudiation as the dreaded *talaq*, and it has also been forgotten that many Muslim women can claim the right to unilateral divorce.

validity under English law.

Poulter (1992a, p.187) argued that there should be a continuation of the current approach. It is obvious that allowing Muslim claims for the full-scale recognition of Muslim personal law would necessitate a fundamental restructuring of English law, introducing a system of particular family laws for different religious communities. This is an unrealistic expectation; it would be a major change affecting the entire structure of the English legal system (Nielsen 1992a, p.98).

However, this view appears too simple. In the shape of *angrezi shariat*, we now find evidence of an unofficial British Muslim law, developed by Muslims themselves outside the sphere of the official law. How should English law deal with this? It has been suggested that the judiciary "has shown the greatest degree of practical flexibility" (Nielsen 1992a, p.93). But how far can the judges go in accommodating Muslim concerns if the law is unwilling to recognise the presence of Muslim law?

It may help to turn to the historical development of Islamic law, which shows that family law issues, in particular, were never treated as a matter for the state. This is a common pattern, also found in Hindu law, classical Chinese law and many other legal systems (Derrett 1968a). All of these know long-established systems of 'extra-legal' regulation of family affairs, avoiding outside interference and officialdom by setting up internal regulatory mechanisms to settle disputes within the community. Indeed, Pearl (1986a, p.32) has emphasised that "conciliation within the family and community circle is well understood amongst South Asian families".

Naturally, this informal strategy has resulted in considerable ignorance on the part of state legal systems about how order is maintained at various local levels. The consequence has been powerlessness of the state in virtually all matters of family law, including succession and property laws. Modern legal systems claim the right to regulate all forms of behaviour, which must inevitably clash with traditional concepts of informal dispute settlement and legal regulation within society.

In Britain, the official non-recognition of Muslim personal law has avoided the emergence of such a conflict. However, the law has not resolved difficult practical problems such as 'limping marriages', which arise when a Muslim woman obtains a divorce from an English court but is not divorced under Muslim law because the husband refuses to give her a *talaq*. It is too simple to assume that such a woman could ignore the Muslim law rules because she now lives in Britain. The evidence is that her conscience as a Muslim will tell her that she must not marry again until she has obtained an Islamic divorce as well. English law does not help her in this respect.

Seen from this perspective, it is obvious that Britain's *a priori* refusal to accord validity to Muslim law within the realm of English law does not solve many of the family law problems among British Muslims, in fact it may create new problems. Without taking explicit notice of certain rules of Muslim law, English law cannot offer meaningful solutions. Selective legal blindness, unwillingness to understand what Muslims in Britain actually do and what *their* concerns are, precludes any open and full

interaction of the two legal systems.

Since Muslims in Britain have been unwilling to abandon *shari'a* and Muslim law as a way of life, many individuals appear to have ended up ignoring the state law. This cannot be a healthy approach. The official law's disregard of so-called 'cultural practices' or 'customs' in Britain has been a useful cloak under which the sphere of Muslim family law could remain almost totally outside formal legal regulation. It has been surprisingly convenient for both parties in this ongoing struggle to perpetuate a scenario dominated by ineffective communication. Today, it is increasingly accepted that mutual non-recognition of the other's law is not a viable option from either perspective.

Muslim Responses to Legal Exclusion

One can identify one common element in the various reactions of Muslims in Britain to assimilation pressures and to the non-recognition of Muslim law as an integral part of English law. These reactions developed outside the official law, and on terms set by Muslim individuals and representatives of the Muslim communities themselves (Badawi 1995). This is also confirmed in the anthropological literature when Roger Ballard (1994, p.8) writes:

> Short of comprehensive ethnic cleansing — which one hopes is not an option — nothing can alter the fact that the new minorities have become an integral part of the British social order, and that they have done so *on their own terms*. Hence the underlying challenge is simple: how — and how soon — can Britain's white natives learn to live with difference, and to respect the right of their fellow-citizens to organise their lives on their own preferred terms, whatever their historical and geographical origins?

By emphasising the agency of British South Asians in the process of reconstructing their communities, Ballard raises the question of conflict between Muslim socio-legal systems and the state. He provides a well-founded answer, to the effect that Muslims and other South Asian minorities have organised their own response to this dilemma, seeing that the state was not willing to compromise. For British Muslims, the legal reconstruction process is therefore largely a counter-reaction to the failed demand for full-scale recognition of Muslim family laws in Britain.

We have already seen why this demand was immediately refused. Nielsen (1993a, pp.2–3) argued that these proposals were unsuitable for Britain, emphasising that old struggles over the definition of *shari'a* and its practical application would be revived in Britain, which would create immense practical problems. Tariq Modood (1993) observed that the demand for a separate Muslim personal law in Britain has slipped off the immediate agenda. This indicates that the official integration of *shari'a* into English

legal structures has been abandoned, if only for the moment. Perhaps the official discourse has been overtaken by the informal adjustment processes within the Muslim communities. The demand for official legal recognition of Muslim personal law is perhaps no longer necessary since Muslims have found their own private ways, through *angrezi shariat*, of reconciling *shari'a* and English law.

Two types of non-public actions to ensure the harmonisation of English law and Muslim law as conflicting rule systems have therefore gained prominence. The more individualised creation of *angrezi shariat* seems to be the major element, supplemented by the slightly more official development of informal Muslim dispute settlement systems in Britain. Both aspects of legal development constitute forms of recreating *shari'a* in Britain to turn it into *angrezi shariat*.

Assimilation on Their Own Terms: *Angrezi shariat*

Unilateral assimilation to the rules of English law cannot be a viable option for most Muslims in Britain; it is not a realistic strategy because it involves abandoning *shari'a*. As a result, as Modood (1992) showed, many Muslims feel more or less marginalised by the official insistence on legal uniformity. Efforts to "confine all residents of England to English law even where this conflicts with people's personal and religious law" (Berkovits 1988, p.92) have created intense resentment, increasing the sense of alienation and isolation. Consequently one finds various avoidance reactions, a form of inner migration, coming out publicly as heightened emphasis on religion and ethnicity. In other words, Islam has become much more of an ethnic phenomenon in diaspora situations. One misses the point of this complex debate if one simply labels this as 'fundamentalism' and blames Muslims for the observable 'resurgence' of religion and culture.

There is a need to make adjustments on all sides in the process of creating space for the new identities of European Muslim communities (Nielsen 1992b, p.150). However, most legal researchers stubbornly cling to old paradigms and resist the challenges of the post-modern focus on diversity, while many immigrants have now become "skilled cultural navigators" (Ballard 1994, p.31) who have learnt to combine living in Britain with reconstructing their specific ways of life. Nielsen (1992b, p.156) has emphasised that many young European Muslims "are developing new forms of expressing their Islam, which they consider more appropriate to the European context". The resulting processes of constructing hybrid rule systems have allowed many Muslim individuals to feel more or less at ease in two worlds. As part of this complex process, redefined Muslim laws in Britain have become hybrid social obligation systems peculiar to British Muslims.

An analysis of the position of Muslim law in relation to the English legal system today has to take account of the emergence of *angrezi shariat* and other forms of hybrid legal cultures among ethnic minorities in Europe and North America.[15] The

terminology chosen signifies that the reconstruction of British Muslim law was not merely a matter of continuing an ancient form of *shari'a* familiar to all Muslims. Rather, a variety of locally influenced sub-forms, in this case prominently South Asian British Muslim law, can be found. The term *angrezi shariat* signifies the re-emergence of various forms of South Asian law, different from their prototypes, because they take explicit account of the presence of English law in the same field (Menski 1993, p.244). In the realm of family law, in particular, we now have significant evidence that virtually all ethnic minorities in Britain marry twice, divorce twice, and do many other things several times in order to satisfy the demands of concurrent legal systems. There is currently much research work in progress showing that such diversities exist in all minority communities, not just among Muslims.

As a matter of fact, then, Muslims in Britain operate today a form of unofficial legal pluralism. Muslim individuals and whole communities, irrespective of state law or in explicit reaction to it, have developed their own hybrid legal system in Britain, which *they* perceive as a form of Muslim law.

What is *angrezi shariat?* The leading Japanese jurist Masaji Chiba (1986) offers a useful model for explaining this phenomenon in jurisprudential terms. While English law is clearly the 'official law', Muslim law in Britain today has become part of the sphere of 'unofficial law'. This analytical paradigm indicates that Muslims continue to feel bound by the framework of the *shari'a* and value it more highly than Western concepts (Ballard 1994, pp.13–14; Wahab 1989, pp.4–5). In addition, British Muslims employ Chiba's 'legal postulates', ethical-philosophical concepts which are culture-specific and include religious notions. Thus, rather than adjusting to English law by abandoning certain facets of their *shari'a,* South Asian Muslims in Britain have turned tables and have built the requirements of English law into their own traditional legal structures. They follow their own, new form of Muslim law, not English law. The reconstruction of *angrezi shariat* is strong evidence of the continued vitality of South Asian legal traditions in a new environment.

This legal reconstruction as a consequence of Muslim migration to Britain started immediately on arrival and appears to have developed in three stages (Menski 1988; 1993). Firstly, when immigrants arrive in a new place, they do not normally know about the official laws of their new home. At the same time, still unknown to them, the demands of English law affected immigrants as soon as they came to Britain (Menski 1988, p.14). Living in what Ballard has so perceptively called 'desh pardesh', a home made for oneself abroad, in other words, living in their own little world of segregated settlements, many new migrants would not have noticed that they became subject to a different legal system. This process can still be observed in Britain today when newcomers arrive from South Asia, for example Muslim women who painfully learn about such legal conflicts and who may be extremely vulnerable as a result (Barton

15) For the USA see Haddad and Lummis 1987; Moore 1995.

1987). There are many indications that South Asian men can be similarly confused and victimised. It takes time to learn the rules of a new place of residence.

Muslims would get married, at this early stage, by simply contracting a *nikah*, a contract of marriage before God. Since many early Muslim migrants returned to the subcontinent to get married there, there would have been further delay in the development of *angrezi shariat*. Similarly, a Muslim man would divorce his wife by *talaq*, irrespective of whether she was in Britain or Pakistan, and she would then be treated as free to remarry. In this first stage, neither does English law take cognisance of such actions, nor are Muslims aware of the conflicts which this is bound to cause.

Inevitably and sometimes very quickly, the first stage led to the second when individuals realised that non-compliance with English law may cause problems and when confusions arose over legal statuses. Within the rule system of Muslim law, individuals would know who is married to whom and whether a person is divorced or single. According to English law, however, there would be a number of questions: Is the *nikah* the equivalent of a legal marriage under English law? Does a *talaq* uttered in Britain dissolve a marriage? Legal insecurity and the phenomenon of 'limping marriages' caused intense trouble to many Muslims because Muslim law severely penalises *zina*, illicit extra-marital sexual intercourse (Miftahi 1993).

While British Muslims began to realise that non-observance of English legal rules could cause grave difficulties, the third stage in the development of *angrezi shariat*, has not simply been recourse to English law and abandonment of *shari'a*, as assimilationist assumptions suggested. Rather, it involved a combination of the rules of English law and of Muslim law. If the state law clearly lays down that a legally valid marriage must be registered in a prescribed form, the clear message was that a simple *nikah* contracted in England does not constitute a valid marriage. But this does not mean that Muslims would not have a *nikah*, just as much as the official registration requirement does not rule out a Christian 'white wedding'. Muslims would now have a registered wedding and a *nikah*.

Registration of marriage is of course not entirely unknown to Muslims. There are no prohibitions against it and British Muslims simply learnt how to register marriages under English law, so that it looks like they follow English law. However, the prevailing picture today is that most Muslim couples marry twice. They register their marriage first in accordance with English law and then, sooner or later, celebrate the *nikah*. Significantly, in most cases it is this form of marriage which is socially marked as the main wedding, is treated as the date of the marriage. Most significantly, before the *nikah* there is normally no cohabitation between the couple. The current trend is to bring the secular registered ceremony and the religious marriage as close together as possible, thereby avoiding the legal and social insecurities of another form of limping marriage.

This peculiar development of *angrezi shariat* brings out a potential conflict of loyalties. Are Muslim individuals and whole communities in England bound by

Muslim law, or by English law? The intention appears to be to follow both legal systems. It is misleading to ask, therefore, whether a Muslim in Britain should just follow English law, or should the *shari'a* still be the dominant yardstick. The majority of British Muslims have clearly decided in favour of legal pluralism, they want to retain the basic rules of Muslim law as well as following English law. It is the official English law which finds this difficult to understand, not the Muslims themselves.

Basically Muslims in Britain (and elsewhere in Europe and North America) had three alternatives: First, one could avoid the official state law altogether. Indeed, there is evidence that some British Muslims are following this strategy, probably relying on the universality of Muslim legal concepts. The second approach would simply be to follow the new official law. For example, a British Muslim couple might solemnise and register their marriage in accordance with English law and do nothing else. It appears, however, that extremely few British Muslims would choose this path, while English law appears to expect this kind of long-term assimilation.

The third alternative is the one chosen by most Muslims (and other ethnic minorities) in Britain today. The development of *angrezi shariat* is marked by awareness of the need to combine the requirements of both legal systems. Today, the construction of *angrezi shariat* as hybrid British Muslim law is no longer a haphazard and uneasy effort. It has become a process of consciously building the English legal requirements into the framework of localised *shari'a* rules. This third stage in the development of *angrezi shariat* is evidence that Muslims view the *nikah*, the *talaq*, in general the rule system of Muslim law, as dominant to that of English law and treat it as such.[16)]

Because the presence of *angrezi shariat* has not been officially recognised by English law, some disputes reach the courts in a twisted form. English solicitors and barristers are rarely knowledgeable about the Muslim dimensions in a particular case, or they may inadvertently or purposely have been misled about the full extent of the problem. Frequently, thus, it becomes difficult for judges to ascertain the full facts and to reach an adequate verdict. Current attempts to sensitise the British judiciary to ethnic minority cultural practices and religions seem a step in the right direction and a new Handbook on Ethnic Minority Issues is currently being prepared by the Judicial Studies Board in London. However, hidden away from the official legal structures, Muslim communities in Britain have been developing their own quasi-legal mechanisms to solve difficult legal issues that arise in the community as a consequence of the official non-recognition of Muslim law in Britain. This is a form of communal self-help which is only now beginning to be studied and understood.

16) Hindus in Britain have clearly taken that approach, in that the official registration of the marriage is becoming ritually incorporated into the drawn-out process of the religious marriage rituals (see in detail Menski 1993). Some field research among Muslims has been conducted since the mid-1980s, but it is still too early to draw definite conclusions.

Informal Muslim Dispute Settlement Processes

The Muslim strategy to avoid any direct recourse to English law in cases of conflict between the rules of English law and Muslim law is a direct consequence of the refusal by English law to accept *shari'a* as a personal law component. If Muslim individuals are faced with non-recognition of a particular legal problem, where should they turn to? It is only natural that community leaders should have stepped into the legal void to find acceptable solutions. Hence, the development of informal Muslim dispute settlement mechanisms in Britain is very practice-focused and is designed to solve difficult social and legal problems which arise as a result of the application of English law to British Muslims, without recognising the presence of Muslim legal concepts in the same social field.

Over time, responding to such real needs has led to the emergence of a complex informal network and hierarchy of Muslim dispute settlement fora in Britain, facilitated by the residential concentration of British Muslims.[17] Inaction on the part of the state, while religious leaders recognised the gravity of the problem, led to efforts from within the Muslim communities to address practical issues. The phenomenon of 'limping marriages' appears to have had a catalytic function in propelling self-help mechanisms. Badawi (1995, p.77) illustrates clearly why Muslims had to act:

> A common problem was that you get a woman seeking a divorce in the courts and obtaining it. She becomes therefore eligible for marriage in accordance with the civil law, but her husband has not given her a *talaq* which is the prerogative of the husband within an ordinary contract of marriage, so the woman becomes unmarried according to the civil law but still married according to the Sharia law.

Limping marriages occur, and their frequency is likely to increase, when an unscrupulous husband realises the damaging effects this can have on the woman. Thus,

> He leaves the woman hanging there, unable to remarry, because in conscience she does not want to challenge the law of Islam because she is a committed Muslim or because she is frightened as a Muslim from doing so. Also socially she does not want to lose face and honour in her community by marrying someone else when she is still married in the eyes of God. (Badawi 1995, pp.77–78).

17) Historically, this is not a new experience. Kettani (1990, p.229) refers to the fact that the Muslims of Bulgaria had at some time 22 *shari'a* courts. New writing from India refers to the re-establishment of Islamic courts during the 1990s (Bharatiya 1996, pp.48–49). In India, this appears to be a strategically planned development, which fits the customary model of the local *panchayat*. On similar evidence from Belgium and France see Foblets 1994a. On Britain see Ahsan 1995 and Carroll 1997.

Making efforts to deal with this problem "in a manner that would resolve the dispute without breaking either the Sharia or the law" (Badawi 1995, p.78), Muslim leaders found that they had an obligation to intervene in such disputes to find acceptable solutions. The resulting establishment of a variety of informal Muslim dispute settlement fora and the involvement of formal bodies like the UK Islamic Shari'a Council confirm Muslim initiatives in this field. Founded in 1980 and consolidated at a Muslim jurists' meeting in Birmingham in 1982 (Surty 1991), the UK Islamic Shari'a Council provides professional conciliation services to couples and gives authoritative guidance on aspects of Islamic family law (Badawi 1995, pp.73–80). In essence, it is modelled on the Beth Din, a Jewish quasi-judicial body, which has operated in London for many years. The Islamic Shari'a Council has started to make its presence felt by resolving difficult marital disputes, for example those relating to enforcement of dower (*mahr*). It also provides expert advice to lawyers and courts on aspects of Islamic law from its panel of twenty-five jurists, who represent all the major Islamic schools of thought.

The need to act was strongly felt, as "sitting back and waiting for the civic local authorities to solve the problems of the Muslim community does not present a positive response to the challenges facing Muslims" (Islamic Shari'a Council 1995, p.9). The main objectives of the Council are to advise and assist in the operation of Muslim family matters, to establish a bench to operate as a court of Islamic *shari'a* and to make relevant decisions, to safeguard the identity of Islamic family laws and to encourage their recognition for the Muslim community by the English legal system (Islamic Shari'a Council 1995, pp.3–5).

This complex response, focused on Muslim self-organisation and designed to solve practical problems, has much wider implications for the future of Muslim laws in Britain. Many disputes among Muslims in Britain are today settled in the context of informal family or community conciliation, involving senior family members or community leaders, and this appears to be a preferred method, attempting to heal wounds and to bring the parties together, whereas adversarial proceedings in English courts risk exacerbation of such difficulties (Pearl 1986, p.32). More complicated disputes, however, may be referred to bodies like the Islamic Shari'a Council. By March 1995, the Council had dealt with 1500 cases presented to it (Islamic Shari'a Council 1995, p.5), the majority concerning divorces where the wife had obtained a civil decree but the husband refused to release her from the Muslim marriage.

It appears that the Council tries to deal with this problem of limping marriages through mediation, but where the husband persists in his refusal to grant the wife a *talaq,* it may grant a *khula* to the wife (Islamic Shari'a Council 1995, pp.17–18). This technique of dissolving a Muslim marriage is immediately effective and a divorce certificate is provided which is recognised as authoritative in several countries, notably Pakistan (Islamic Shari'a Council 1995, p.19). This method also reflects recent judicial practice in Pakistan of granting *khula* to wives who claim that they cannot live with the

husband 'within the bounds of Allah'.

This strategy to end a broken Muslim marriage raises significant points for any discussion about the position of Muslim women in Britain. It could be argued that it virtually involves the wife in purchasing her freedom, since she has to return to the husband any dower (*mahr*) given to her on marriage. Thus, there is a critical financial penalty against the wife, while the husband is absolved from financial liabilities. It is not surprising, therefore, that this method of divorce should find favour with some Muslim husbands. It seems that this particular issue has barely been noticed in Britain, while it has become a matter of growing concern in South Asia. As Poulter (1995) and Pearl (1987, p.168) have observed, there may be inadequacies in the informal Muslim methods of conciliation, and there may be reservations against the operation of such informal Muslim courts in Britain. They are patriarchal in nature and tend to put undue pressure on women, either to pay for their freedom or to go back to their husbands, so as to avoid dishonour through the violation of *izzat*. While Poulter (1995, pp.85–86) argued that the state should encourage settlement of family disputes between Muslims by mediation, conciliation and arbitration through some kind of tribunal such as the Islamic Shari'a Council, he also sought to make such agreement conditional on safeguards protecting the rights of women and monitoring human rights standards (Poulter 1995, p.84). In his view the Council "merely operates as a facility for those who feel that the English courts are not responsive enough to their religious needs or cultural needs" (Poulter 1995, p.86) and could, if the party or parties wished, be completely bypassed, since recourse to the English court remains fully available.

The critical issue remains, however, that Muslim wives whose husbands do not wish to release them from the Muslim marriage will find that recourse to English law alone will not solve their problem, unless they are prepared to ignore *shari'a* concepts. Poulter's advice and inclination is useful for a secular context but overlooks the religious needs of Muslim individuals in Britain.

The Council itself, in view of its growing prominence within the Muslim community, and the satisfaction of those who dealt with it, argues that Muslim law is perfectly capable of settling matrimonial disputes (Islamic Shari'a Council 1995, p.8). Badawi (1995, pp.78–79) illustrates the wide range of cases that are brought to another conciliatory and advisory body, the Muslim Law Council, while at the same time referring to the dangers of official state sponsorship for certain Muslim bodies, which has been a feature of French approaches to Muslim religious leaders.[18)]

This Muslim strategy of communal self-help in Britain and elsewhere clearly reflects processes of inner emigration. Like the communities themselves, the semi-official Muslim bodies in Britain are operating *angrezi shariat*, aspiring for its eventual

18) The French government has been making concerted efforts to liaise with an authoritative body of French Muslim representatives, only to find that this has increased the level of political tensions among different Muslim groups (see Kettani 1990, p.231; Bistolfi and Zabbal 1995; Chirane 1995 and Boumidienne 1995).

official recognition without claiming this as a definite right at the present time and lobbying vigorously for it. In this way, by the creation of social facts, a quiet process of legal restructuring is being achieved from within the community, a process of gradual islamisation, which is not explicitly prohibited in modern England, which, in classical Muslim terminology, has become *dar-al-dawah,* a place in which Muslims can practise their faith, while remaining bound by the rules of English law at the same time.

Future Trends: The Need to Plan Ahead

The continuing latent conflict between official non-recognition of Muslim law in Britain and the gradual reconstruction of unofficial Muslim laws will not be easy to resolve. Poulter (1995, p.82) emphasised the position of English law as a reasonably flexible system, providing examples of increasing ethnic sensitivity on the part of the English judiciary, partly through the efforts of the Judicial Studies Board. At the same time, Poulter (1995, p.85) also identified definite limits to the recognition of Muslim legal concepts.

I think the growing presence of *angrezi shariat* puts severe limits on what can be done by the English judiciary. If more and more complex cases are in fact settled by Muslim dispute settlement bodies rather than by state legal institutions, the English judiciary will rarely get sight of important Muslim cases. There is now a disproportionately low profile of matrimonial case law in England involving Muslim parties, in marked contrast to the 1970s and early 1980s. Muslim disputes, then, are becoming officially more invisible than before. Further, since the official state policy appears to be to intervene as little as possible, even if the judiciary wanted to see changes, charges of judicial legislation and excessive activism would easily be raised, so the hands of the British judges are tied. This dilemma is illustrated in a recent case concerning recognition of the Jewish *get.* Refusing such recognition, Mr. Justice Wall commented:

> The question as to whether or not in an increasingly multi-racial and multi-ethnic society the refusal to recognise the...divorce can or should continue is a matter for Parliament, and should not influence my interpretation of the statute.[19)]

Similar pronouncements by English judges show that the state is finally getting worried about this important issue, but lacks specialist knowledge and political will to fully address such difficult questions. The official English law still closes its eyes to the unpalatable reality of different Asian laws in full, unofficial, operation on British soil. Apart from some liberal rhetoric about the somewhat charming nature of 'ethnic customs' in a multicultural, multi-faith state, the absence of a more courageous approach from both Muslims and the state is notable. A polite distance has been

19) *Berkovits v. Grinberg (Attorney General Intervening)* [1995] 1 All ER 681, at 696.

maintained, perhaps a silent agreement not to raise the key issues, while British Muslims themselves continue to develop their own ways of dealing with the complex legal problems that do arise. In this way, *angrezi shariat* continues to develop among British Muslims

For example, the use of Muslim marriage contracts which contain clauses offering specific protection to women could fairly easily be encouraged within the communities (Carroll 1982; Pearl 1986, pp.35–37.). Courts in England may then consider the terms of such a contract in deciding what orders to make (Badawi 1995, p.79; Poulter 1995, p.86). This example shows that Muslims in Britain might need to get more directly involved in the process of law reform by positive contributions to policy discussions. But this is a two-way process, and there are many reservations within English legal circles to take special cognisance of Muslim concepts within the framework of English law. While the assimilationist school of thought remains dominant among lawyers, Muslim organisations have rarely come forward to offer comments, unlike their Jewish and Christian counterparts (Poulter 1992b, p.269). Again, therefore, we find evidence of a purposeful non-communication, although it could be argued that the lack of a co-ordinated Muslim response is due to the absence of a single authoritative body which is representative of all British Muslims. While it seems evident that a two-way dialogue is required, there is no evidence of focused legal policy debate, while academics have noted a growing perception of the need for change. King (1995, p.12) writes:

> Just as Islam has successfully adapted itself to different countries and different cultures, so the institutions of the West *are* changed by the environments in which they operate. The very fact that the legal, political, economic and educational systems in many European countries are now obliged to confront the demands of Muslim communities for recognition of their differences *is* a significant development of recent years, even if those demands are not always fully met.

However, this process has not gone far enough. Nielsen (1995, p.154) refers to the "unreality of cultural encounter" in today's European context, where the burden of assimilation is still on the new ethnic minorities (Nielsen 1995, pp.155–156). Ballard (1994), as we saw, used strong language to analyse the skilled cultural navigation processes among the transnational communities of Britain. The official legal system, however, hiding behind public policy arguments, does not show sufficient willingness to incorporate 'the other'. It remains doubtful, therefore, whether a process of more explicit recognition of Muslim legal needs in Britain can be achieved through a total restructuring of English law into a personal law system with separate rules for British Muslims. Bernard Lewis (1992) has argued for a kind of 'communal autonomy' similar to that given to non-Muslims or *dhimmis* in Muslim countries, which would probably apply at least to Muslim family law. While a process described by Anwar (1994, p.16) as "pluralistic integration" is apparently well under way through the development of

angrezi shariat, the key issue remains to what extent the official legal system is willing to take account of such new phenomena, as well as the new informal British Muslim dispute settlement processes.

My argument has been that if the state law wishes to control the sphere of family laws effectively, more formal recognition of the effective presence of *angrezi shariat* by English law becomes inevitable. In particular, if the official law wishes to protect Muslim women in Britain against discriminatory treatment on the basis of gender, it cannot be a viable option to ignore the actual operation of unofficial Muslim laws in Britain today. Thus, it appears inevitable, in the long run, to consider in more detail how to harmonise *angrezi shariat* with the official English law. Mutual non-recognition does not recommend itself as a useful strategy for a harmonious future in a multicultural Britain with rapidly growing Muslim communities.

References

Afshar, Haleh. 1994. 'Fundamentalism and women in Iran'. In: Mendelsohn, Oliver and Upendra Baxi (eds.): *The rights of subordinated peoples*. Delhi et al.: Oxford University Press, pp.276–294.

———. 1995. 'Islam empowering or repressive to women?'. In: King, Michael (ed.), pp.54–61.

Ahmad, Furqan. 1994. *Triple talaq. An analytical study with emphasis on socio-legal aspects*. New Delhi: Regency Publications.

Ahsan, Manazir. 1995. 'The Muslim family in Britain'. In: King, Michael (ed.), pp.21–30.

Ali, Syed Mumtaz and Enab Whitehouse. 1992. 'The reconstruction of the Constitution and the case for Muslim personal law in Canada'. In: Vol.13 No.1 [January 1992] *Journal of Muslim Minority Affairs*, pp.156–172.

Anderson, J.N.D. (ed.) 1968. *Family law in Asia and Africa*. London: George Allen and Unwin.

Anwar, Muhammad. 1975. *Muslim burials — A policy paper*. London: Community Relations Council.

———. 1979. *The myth of return*. London: Heinemann.

———. 1994. *Young Muslims in Britain: Attitudes, educational needs & policy implications*. Leicester: The Islamic Foundation.

Badawi, Zaki. 1995. 'Muslim justice in a secular state'. In: King, Michael (ed.), pp.73–80.

Ballard, Roger (ed.) 1994. *Desh pardesh. The South Asian presence in Britain*. London: Hurst.

———. 1996. 'Negotiating race and ethnicity: Exploring the implications of the 1991 Census'. In: Vol.30 No.3 [July 1996] *Patterns of Prejudice*, pp.3–33.

———. 1997. 'The construction of a conceptual vision: 'Ethnic groups' and the 1991 UK Census' (Review article). In: Vol.20 No.1 [January 1997] *Ethnic and Racial Studies*, pp.182–194.

Barton, Rachel. 1987. *The scarlet thread. An Indian woman speaks*. London: Virago.

Bauböck, Rainer (ed.) 1994. *From aliens to citizens. Redefining the status of immigrants in Europe*. Aldershot et al.: Avebury.

Berkovits, Bernard. 1988. 'Transnational divorces: The Fatima decision'. In: Vol.104 [January 1988] *The Law Quarterly Review*, pp.60–93.

Bharatiya, V.P. 1996. *Syed Khalid Rashid's Muslim law*. 3rd rev. and enl. ed. Lucknow: Eastern Book Company.

Bistolfi, Robert and François Zabbal (eds.) 1995. *Islams d'Europe. Intégration ou insertion communautaire?*. Paris: Éditions de l'Aube.

Boumidienne, Halima. 1995. 'African Muslim women in France: The emergence of a new identity'. In: King, Michael (ed.), pp.49–53.

Bradney, A. 1993. *Religions, rights and laws*. Leicester et al.: Leicester University Press.

Brah, Avtah. 1987. 'Women of South Asian origin in Britain: Issues and concerns'. In: Vol.7 No.1 [May 1987] *South Asia Research*, pp.39–54.

Carroll, Lucy. 1982. 'Talaq-i-Tafwid and stipulations in a Muslim marriage contract: Important means of

protecting the position of the South Asian Muslim wife'. In: Vol.16 No.2 *Modern Asian Studies*, pp.277–309.

———. 1997. 'Muslim women and 'Islamic divorce' in England'. In: Vol.17 No.1 *Journal of Muslim Minority Affairs*, pp.97–115.

Castles, Stephen. 1994. 'Democracy and multicultural citizenship. Australian debates and their relevance for Western Europe'. In: Bauböck, Rainer (ed.), pp.3–27.

Chiba, Masaji. 1986. *Asian indigenous law in interaction with received law*. London and New York: Kegan Paul International.

Chirane, Abdelhamid. 1995. 'Conflict and division within Muslim families in France'. In: King, Michael (ed.), pp.16–20.

Cotterell, Roger. 1992. *The politics of jurisprudence*. 2nd ed. London: Butterworths.

Coulson, Noel J. 1968. 'Islamic law'. In: Derrett, J.D.M. (ed.) [1968a], pp.54–79.

———. 1969. *Conflicts and tensions in Islamic jurisprudence*. Chicago: University of Chicago, Center for Middle Eastern Studies.

Derrett, J.D.M. (ed.) 1968a. *An introduction to legal systems*. London: Sweet & Maxwell.

———. 1968b. *Religion, law and the state in India*. London: Faber and Faber.

Edwards, Susan. 1990. 'Vindication v. compensation'. In: No.140 *New Law Journal*, May 25, 1990, p.747.

Ellis, Jean. 1991. 'Local government and community needs: A case study of Muslims in Coventry' In: Vol.17 No.3 [April 1991] *New Community*, pp.359–376.

Fadl, K.A.E. 1994. 'Islamic law and Muslim minorities: The juristic discourse on Muslim minorities from the 2nd/8th to the 11th/17th centuries'. In: Vol.1 No.2 *Islamic Law and Society*, pp.141–187.

Foblets, Marie-Claire. 1994a. 'Community justice amongst immigrant family members in France and Belgium'. In: Kuppe, René and Richard Rotz (eds.): *Law and anthropology*. Dordrecht: Martinus Nijhoff, pp.371–385.

———. 1994b. *Les familles maghrébines et la justice en Belgique. Anthropologie juridique et immigration*. Paris: Éditions Karthala.

———. 1996. *Familles — Islam — Europe. Le droit confronté au changement*. Paris: Éditions L'Harmattan.

Gardner, Katy and Abdus Shukur. 1994. 'I'm Bengali, I'm Asian, and I'm living here. The changing identity of British Bengalis'. In: Ballard, Roger (ed.), pp.142–164.

Griffiths, John. 1986. 'What is legal pluralism?'. In: No.24 *Journal of Legal Pluralism and Unofficial Law*, pp.1–55.

Haddad, Yvonne and A.T. Lummis. 1987. *Islamic values in the United States*. New York and Oxford: Oxford UP.

Hamilton, Carolyn. 1995. *Family, law and religion*. London: Sweet & Maxwell.

Haqq, A., B. Aisha and Ahmad Thomson. 1995. *The Islamic will: A practical guide to being prepared for your death and writing your will according to the Shari'a of Islam and English law*. London: Dar al-Taqwa Ltd.

Helie-Lucas, Marie-Aimee. 1994. 'Strategies of women and women's movements in the Muslim world vis-a-vis fundamentalisms'. In: Mendelsohn, Oliver and Upendra Baxi (eds.): *The rights of subordinated peoples*. Delhi et al.: Oxford University Press, pp.251–275.

Hooker, M.B. 1975. *Legal pluralism*. Oxford: Clarendon Press.

Islamic Shari'a Council. 1995. *The Islamic Shari'a Council: An introduction*. London: ISC.

Kabbani, Rana. 1995. 'Family matters'. In: King, Michael (ed.), pp.44–48.

Kannan, C.T. 1978. *Cultural adaptation of Asian immigrants: First and second generation*. London: Author.

Kelly, J.M. 1992. *A short history of Western legal theory*. Oxford: Clarendon Press.

Kettani, M.Ali. 1986. *Muslim minorities in the world today*. London: Mansell.

———. 1990. 'Muslims in non-Muslim societies: Challenges and opportunities'. In: Vol.11 No.2 [July 1990] *Journal of Muslim Minority Affairs*, pp.226–233.

King, Michael (ed.) 1995. *God's law versus state law. The construction of an Islamic identity in Western Europe*. London: Grey Seal.

Knott, Kim and Sajda Khokher. 1993. 'Religious and ethnic identity among young Muslim women in Bradford'. In: Vol.19 No.4 [July 1993] *New Community*, pp.593–610.

Lester, Anthony and Geoffrey Bindman. 1972. *Race and law*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd.

Lewis, Bernard. 1992. Legal and historical reflections on the position of Muslim populations under non-Muslim rule'. In: Vol.13 No.1 [January 1992] *Journal of Muslim Minority Affairs*, pp.1–16.

Lutz, Helma. 1990. 'Cultural/ethnic identity in the safety net of cultural hegemony'. In: Vol.1 No.2 *The*

European Journal of Intercultural Studies. pp.5–13.

Mahmood, Tahir. 1972. *Family law reform in the Muslim world*. New Delhi and Bombay: N.M. Tripathi and Indian Law Institute.

Menski, Werner F. 1987. 'Legal pluralism in the Hindu marriage'. In: Burghart, Richard (ed.): *Hinduism in Great Britain*. London: Tavistock, pp.180–200.

———. 1988. 'English family law and ethnic laws in Britain'. In: 1988(1) *Kerala Law Times*, Journal section, pp.56–66.

———. 1993. 'Asians in Britain and the question of adaptation to a new legal order: Asian laws in Britain?'. In: Israel, Milton and Narendra Wagle (eds.): *Ethnicity, identity, migration: The South Asian context*. Toronto: University of Toronto, pp.238–268.

Mernissi, Fatima. 1993. *Women and Islam. An historical and theological enquiry*. Indian reprint. New Delhi: Kali for Women.

Miftahi, Mufti Zafeeruddin. 1993. *Modesty and chastity in Islam*. New Delhi: Qazi.

Mirza, Kauser. 1989. *The silent cry. Second generation Bradford Muslim women speak*. [No.43, Muslims in Europe]. Birmingham: CSIC.

Modood, Tariq. 1992. *Not easy being British. Colour, culture and citizenship*. Stoke-on-Trent: Runnymede Trust and Trentham Books.

———. 1993. 'Muslim views on religious identity and racial equality'. In: Vol.19 No.3 [April 1993] *New Community*, pp.513–519.

Moore, Kathleen M. 1995. *Al-Mughtaribīn. American law and the transformation of Muslim life in the United States*. Albany: State University of New York Press.

Nielsen, Jørgen S. 1992a. Islam and Islamic law in the United Kingdom'. In: Vol.10 *Recht Van de Islam*, pp.92–99.

———. 1992b. *Islam, Muslims and British local and central government*. Birmingham: CSIC-MR. [CSIC Papers No.6].

———. 1992c. *Muslims in Western Europe*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

———. 1993a. *Emerging claims of Muslim populations in matters of family law in Europe*. Birmingham: CSIC-MR. [CSIC Paper No.10, Nov. 1993].

———. 1993b. 'State, religion and laicité: The Western European experience'. In: Speelman, Gé et al. (eds.): *Muslims and Christians in Europe: Breaking new ground*. Kampen: Kok Pharos, pp.90–99.

———. 1995. *Muslims in Western Europe*. 2nd ed. Edinburgh: Edinburgh University Press.

———. 1997. 'Muslim in Europe: History revisited or a way forward?'. In: Vol.8 No.2 [July 1997] *Islam and Christian-Muslim Relations*, pp.135–143.

Peach, Ceri. 1996. *Ethnicity in the 1991 Census. Vol.2: The ethnic minority populations of Great Britain*. London: HMSO.

Peach, Ceri and Günther Glebe. 1995. 'Muslim minorities in western Europe'. In: Vol.18 No.1 *Ethnic and Racial Studies*, pp.26–45.

Pearl, David. 1972. 'Muslim marriages in English law'. In: Vol.30 Part 1 [April 1972] *Cambridge Law Journal*, pp. 120–143.

———. 1986. *Family law and the immigrant communities*. Bristol: Jordan & Sons.

———. 1987. *A textbook on Muslim personal law*. 2nd ed. London et al.: Croom Helm.

Poulter, Sebastian M. 1986. *English law and ethnic minority customs*. London: Butterworths.

———. 1987. 'Ethnic minority customs, English law and human rights'. In: Vol.36 *ICLQ*, pp.589–615.

———. 1989. 'The significance of ethnic minority customs and traditions in English criminal law'. In: Vol.16 No.1 [October 1989] *New Community*, pp.121–128.

———. 1990a. *Asian traditions and English law*. Stoke-on-Trent: Runnymede Trust and Trentham Books.

———. 1990b. 'The claim to a separate Islamic system of personal law for British Muslims'. In: Mallat, C. and Jane Connors (eds.), pp.147–166.

———. 1992a. 'The limits of legal, cultural and religious pluralism'. In: Hepple, Bob and Erika M. Szyszczak (eds.): *Discrimination: The limits of law*. London: Mansell, pp.172–192.

———. 1992b. 'The Muslim community and English law'. In: Vol.3 No.2 [December 1992] *Islam and Christian-Muslim Relations*, pp.259–273.

———. 1995. 'Multiculturalism and human rights for Muslim families in English law'. In: King, Michael (ed.), pp.81–87.

———. 1997. 'Muslim headscarves in school: Contrasting legal approaches in England and France'. In:

Vol.17 [Spring 1997] *Oxford Journal of Legal Studies*, pp.43–74.

Prince of Wales, H.R.H. 1994. 'Islam and the West'. In: Vol.9 *Arab Law Quarterly*, pp.135–143.

Rahim, Abdur. 1984. *Principles of Muhammadan jurisprudence*. [1st ed. Madras 1911]. Reprint Lahore: Mansoor.

Renteln, Alison Dundes. 1990. *International human rights. Universalism versus relativism*. Newbury Park, London and New Delhi: Sage.

Sahgal, G. and Nira Yuval-Davis. 1992. *Refusing holy orders. Women and fundamentalism in Britain*. London: Virago.

Shah, Prakash. 1994. 'Legal pluralism — British law and possibilities with Muslim ethnic minorities'. In: Nos. 66/67 *Retfærd*, pp.18–33.

Shaikh, Sitara and Alison Kelly. 1989. 'To mix or not to mix: Pakistani girls in British schools'. In: Vol.31 No.1 [February 1989] *Educational Research*, pp.10–19.

Shaw, Alison. 1994. 'The Pakistani community in Oxford'. In: Ballard, Roger (ed.), pp.35–57.

Spencer, Sarah. 1994. *Strangers and citizens. A positive approach to migrants and refugees*. London: IPPR and Rivers Oram Press.

————. 1995. *Migrants, refugees and the boundaries of citizenship*. London: IPPR.

Surty, Muhammad Ibrahim H.I. 1991. 'The Shari'ah family law courts in Britain and the protection of women's rights in Muslim family law with special reference to the dissolution of marriage at the instance of the wife'. In: Vol.9 No.1 *Muslim Educational Quarterly*, pp.59–68.

Taylor, J.H. 1976. *The half-way generation. A study of Asian youths in Newcastle upon Tyne*. London: NEFR.

Vertovec, Steven. 1996. 'Muslims, the state, and the public sphere in Britain'. In: Nonneman, Gerd et al. (eds.): *Muslim communities in Europe*. Reading: Ithaca Press, pp.169–186.

Visram, Rozina. 1986. *Ayahs, lascars and princes. The story of Indians in Britain 1700–1947*. London et al.: Pluto.

Wahab, I. 1989. *Muslims in Britain: Profile of a community*. London: Runnymede Trust.

Watson, James L. (ed.) 1977. *Between two cultures. Migrants and minorities in Britain*. Oxford: Blackwell.

Werbner, Pnina. 1979. 'Avoiding the ghetto: Pakistani migrants and settlement shifts in Manchester'. In: Vol.7 No.3 [Winter 1979] *New Community*, pp.376–389.

Werbner, Pnina and Tariq Modood (eds.) 1997. *Debating cultural hybridity. Multicultural identities and the politics of anti-racism*. London and New Jersey: Zed Books.

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

【論　文】

教育をめぐる政治と文化
——エチオピア南部における紛争事例を中心に——

増田　研
（神奈川大学）

A Politico-Cultural Approach to Modern Education in Southern Ethiopia

MASUDA, Ken
Kanagawa University

This article focuses on the cultural situation and politics in modern education among the Banna in southern Ethiopia. Modern education has been refused by the Banna since the socialist government introduced it through the peripheral area. Thus, the enrollment rate of local children (7–12 years old) in southern Ethiopia is below 1%. I consider this situation is based on the politico-cultural background in the area while it has been recognized as a dilemma of the educational system itself in a developmental discourse.

In Chapter 1, I present a framework of educational anthropology to recognize Banna students as "marginal man" who are positioned between two cultural spheres. Because most Banna students enter the educational system after they have received Banna culture, education and life experience in towns, schools, and hostels, force them to be disciplined to another culture.

After a brief introduction of the history of Ethiopian modern education, I would like to analyze in Chapter 3 a case of conflict for girl's education, which has been discussed between government/police and *donzas* (Banna adult men), in order to examine the complex background of culture and politics in the educational issue. The background is described as a confrontation between the relativistic attitude of the Banna that depend on cultural particularity and the universalistic attitude of the government.

In Chapter 4, following the analysis of a previous case study, I define Banna students as "refugees" in the sense that they try to erase their past life and to restart their careers through engagement in education. The reason this is possible is that the students successfully secede from the validity of Banna culture and its duties. It is observed most students who attend school for several years become assimilated into Amhara culture through the experience of using Amharic in schools and

Keywords: Ethiopia, peripheral people, education, marginal man, cultural relativism
キーワード：エチオピア，周辺民，学校教育，境界人，文化相対主義

hostels, learning discipline for life in towns, conversion to Christianity, and the curriculum prepared by the Ministry of Education; this process of assimilation could be called "Amharization".

After the political change from socialist regime to EPRDF government, Ethiopia proclaimed the new constitution and new educational policy, in which political decentralization was declared. The government more positively to promote the enrollment of local children, however, the situation concerning the cultural confrontation has not been solved yet. The ultimate questions—Is the present type of education required? If so, to whom, by whom, and for what purpose is modern education carried out in the periphery?—remain.

1. はじめに
1.1. 学校教育と個別文化
1.2. 境界人としての学生
2. 南オモにおける学校教育の歴史と現状
2.1. バンナと北部系移民
2.2. エチオピア教育史概観
2.3. 南部における学校教育の展開
3. 就学をめぐる紛争
3.1. ディレ事件の概要
3.2. 政治＝文化的分析
3.2.1. 政府と警察
3.2.2. ドンザ（成人男性）
3.2.3. キリスト教徒たち
4. 「亡命」としての就学
4.1. 聖域としての学校
4.2. ジェンダー問題として
4.3. アムハラ化
4.4. 揺れ動くアイデンティティ
4.5. 生活規範の変更
5. 文化という問題領域

1. はじめに

本稿はエチオピア南部における教育をめぐる紛争事例を通して，その政治的・文化的背景をさぐる試みである。

1.1. 学校教育と個別文化

今日，文化の対立をめぐって，文化相対主義の危険性が取りざたされていることは周知の通りである。それに対して文化・社会人類学者たちは，その論理的危うさは認めながらも，一貫して相対主義を擁護してきた[1]。

相対主義が危険視されるのは，たとえば浜本が「自文化中心的な相対主義」とよぶ立場であり，個別文化の独立性を認めながらも他文化への関心を欠き，さらには排除に向かおうとする姿勢のことである。こうした立場が成立する背景には，文化というものが，異なる本質を持つ，独立した個別の実体的集団によって担われているという観念が存在すると，とりあえずはしておこう。本稿ではエチオピア南部における教育紛争を，そうした文化間の対立としてとらえる。

こうした文化の個別性をめぐる問題が，ジェンダーや教育開発の分野において顕著に見られるのは当然である。たとえばエチオピアのように，内部に複数の多様な文化を抱える国家においては，学校教育と個別の「伝統文化」の間に葛藤が生じやすい。それはとくに地理的・政治的な周辺社会において顕著であり，それらは時として暴力的な紛争に発展する。一例としてエチオピアン・ヘラルド紙の

1) 浜本 1996，内堀 1997，小田 1994

1998年4月1日の記事を紹介しよう。その記事は以下のように書き出されている。

> 4人の女学生が記者に語ったところでは，ディメカの学生寮に住む友人の1人が，10人あまりの集団によって連れ出され，誘拐されたということである。…ハマルの女性に対しては結婚に際してウシなどの婚資が支払われるため，彼女たちが学校に通うことは認められないのだ[2]。

南部エチオピアにおいて，諸個人の背負う文化的背景を度外視して近代教育を論じることは不可能である。ここでは子供たちは，学校に通うこと，寮生活を送ることによって，それまでの文化領域からもう一つの異質な文化領域に転移することが求められる。その意味で，これまで周辺の，往々にしてマイノリティに属する諸社会を研究してきた人類学者たちは，この種の文化的摩擦に対してなにがしかの示唆を与えられるはずである。

エチオピアにおける教育学研究はこれまで，教育制度の史的展開，教師育成のための実践的課題，そして近代化を牽引するものとしての教育の開発的側面という，主として三つの研究領域においてなされてきた[3]。Tekeste Negash が指摘するように，「教育は国家の発展をもたらす魔法のようなもの」としてとらえられてきたのである[4]。こうした開発アプローチは一系的な発展段階論[5]を前提としている。もちろんこのような発展段階論は，その単純で楽観的な性格だけでなく，エチオピア経済の停滞を説明できないという事実によってすでに葬り去られている[6]。教育の開発的側面について論じるのであるならば，発展（とくに周辺社会にとっての）とは何かがまず論じられなければならない。

エチオピアの教育全般について，まず指摘されるのは都市部（urban）と農村部（rural）の就学率の隔たりである。これについて Tekeste はこのように述べる。

> 農村部と都市の貧困層（およびドロップアウト組）には，フォーマル教育セクターがほとんど届いていない。諸研究が示しているように，農村部の人々はたとえばインフラの整備やよりよい価格の取引，よりよい品種の作物，よりよい農業開発を望んでいるのであり，そうした彼らの希望の中に教育は含まれないのである[7]。

すなわち学校教育が人々のニーズに必ずしも含まれないのは，経済的要因が大きいということになる。そのうえで Tekeste は，たとえ学校を卒業しても就職が保証されないのであれば人々にとって教育は意味をなさないとして，より実学的なノン・フォーマル教育セクターの開発推進を提案するのである[8]。その意味で，Tekeste もまた教育の開発アプ

---

2) Ethiopian Herald, April 1, 1998. "Hamari girls complain over parental, suitors threats." この記事が掲載された The Ethiopian Herald 紙は政府系の英字新聞である。無署名であるため執筆者の性別は分からないが，全体的に，女性を不当に扱うハマル社会とハマルの男たちを批判するトーンに満ちている。書き手の主張が拠り所とするのはエチオピアの法，わけても1994年にあらたに制定された憲法であろう。

3) 具体例をあげないが，Addis Ababa University が発行している Ethiopian Journal of Education の目次にその傾向がみてとれる。

4) Tekeste 1996, p.105

5) たとえば Rostow 1960 など。

6) Tekeste 1996. p.24

7) Tekeste 1996. p.91

8) Tekeste 1996. pp.87–92。また小川 1998. p.115も，セネガルにおいて公教育の内容と就職とが結びつかないため，学校教育を受けた人が失業状態を経験した後にダカールに流入し，インフォーマルセクターに受け入れられている様子を記述している。

ローチの中にいる。

1.2. 境界人としての学生

本稿はこうした開発と生活保障といった側面からのアプローチをしない。ここで私は教育の政治＝文化的側面に焦点を当てたい[9]。

フィールドワークを重視する社会人類学の立場から多言語・多文化状況における教育について考えるためには，教育人類学あるいは異文化間教育学の枠組みを参照するのが便利である。ここでは江渕[10]によりながら，分析のためのいくつかの概念を提示する。異文化間教育学とは，異文化の狭間に育つ青少年の教育の諸問題を研究する学問分野である[11]。そのうえで，教育をひろく「文化化(enculturation)」としてとらえる。江渕によれば文化化とは，「端的にいえば，ある社会に生まれ育つ個人が，その社会の言語および非言語的行為を媒介として，社会生活の戦術としての行動方法を自分なりのやり方で模倣と創造をくり返しながら身につけていく過程」である[12]。この定義からも分かるとおり，異文化間教育学は基本的に複数文化にまたがる環境において文化を身につけて行く個人の人間形成を主な研究対象としている。この学問がたとえば「文化とパーソナリティ」論と関係を持ち，なおかつ心理学的色彩を持っているように見受けられるのは，そのような理由によるものであろう。

その一方で，研究対象が移民や，マイノリティ，あるいは帰国子女といった領域に偏向していることは，この学問の理論的枠組みの形成におおきな影を落としている[13]。江渕が自らの異文化間教育学の理論構築をするにあたってアメリカの社会学に多くを負っていること，なおかつ江渕自身の調査地域が北米マイノリティや各地の日系人社会であることから，この理論をアフリカに適用するのには一定の慎重さを要するであろう。また学生の異文化適応を分析することは本稿の目的ではない。したがってここでは分析にあたって有用と思われる二つの概念，「文化化マトリクス」と「境界人」について，その適用可能性を検討するにとどめる。

文化化マトリクスは，文化化の機構を (1) 文化化のエージェント，(2) 文化を修得する人，(3) 伝達・修得される文化内容，および (4) それらを修得・媒介するシンボル・システムの四つの要素から成り立つと考え，それらの相互作用から展開するととらえる[14]。その上で，ある個人の異文化との接触のしかたをおおよそ四つの類型に分ける[15]。ここではとくにそのうちの三つを取り上げる[16]。

第一は文化転換型あるいは文化移行型と呼ばれるものである。これは帰国子女や留学生などの場合で，ある文化を修得した後で，別の文化を修得する場合である。第二は文化交差型で，この場合，村では伝統文化を教えられ，学校では白人の文化を教えられるアメリカ・インディアンのように，複数の文化を同時に修得していくことになる。文化転換型と文化交差型の違いは，前者が二つの文化の修

9) 人類学者としてエチオピアの教育について考えるAbbinkもまた，「個々の文脈，その社会的あり方，そして歴史的背景を分析することは有益であるだろう」と述べている（Abbink 1996, p.117）。
10) 江渕 1997
11) 江渕 1997. p.1
12) 江渕 1997. p.36
13) 小林・江渕 1985，江渕 1998
14) 江渕 1997. pp.39–40
15) 江渕 1997. pp.42–51
16) 第四の「相互作用型」を取り上げないのは，他の3つが異文化適応の結果を分類したものであるのに対して，これだけが計画的に相互作用を行わせようとする意図的モデル（あるいは実践志向のモデル）であるからである。モデルとしての是非はともかく，本稿の分析には無関係と考えて取り上げなかった。

得に時間差があるのに対し，後者ではそれが同時に行われる点にある。

第三は文化分離型あるいは異文化回避型で，異文化環境にありながら文化の転換や交差を回避する場合である。これはたとえば商社の駐在員の子弟が，閉鎖的な同胞コミュニティでのみ生活し，異文化への適応を拒絶するような場合に相当する。

結論からいえばバンナ学生は，既にバンナ文化をそれなりに修得した後に学校というまったく異なる環境で新たな文化を修得するため，文化転換（移行）型の異文化適応を経験する。とくに自分の意志によって就学を決意した学生は，バンナ文化からの積極的な離脱をはかる傾向があり，学校での生活が継続するにつれてしだいにバンナ文化からの分離が強くなり，やがては町の文化（エチオピア文化）に完全に同化してしまうことになる。場合によっては，学校に入った時点でバンナ文化に完全に決別し，一気に他文化へ取り込まれようとする。このような同化吸収は，江渕のモデルでは（2）の文化交差型の進んだ形として提示されているが，本稿で示す事例はむしろ，文化転換型において，当初の文化を一気にはぎ取ってしまうようなことが起こりうることを示す。

こうしたバンナ学生たちを本稿では「境界人 marginal man」と規定する。「境界人」概念は，ジンメルの「異人」を経てパークによって提起された概念である。江渕は特にシカゴ学派の社会学者ストーンクィストの著作『境界人：人格と文化的葛藤の研究』(1937) における「二つの社会，そして単に異なるというだけでなく，敵対的ですらあるような二つの文化に生きるという運命を余儀なくされた人間」という定義を紹介し，その理論を考察する[17]。個人は，自集団と他集団との文化的葛藤を自覚し，その心理的危機に対する適応努力を行うことで「境界人」となる。この概念についてはしばしば葛藤，心理的危機，緊張，対立といった否定的ニュアンスを伴う言葉がつきまとい，「自分を見失ってしまった人間」のイメージを作り出しやすい。そうした「ネガティブなトーン」[18]を問題にする江渕は，「境界人」にかわる概念として「二文化人 bicultural person」概念を評価する。「二文化人」は要するに，「境界人」のように異なる複数の文化と直面しながらも，そうした複数文化を使い分けることのできる人格を備えた人間のことである。この「二文化人」モデルには，未来に向けて開かれた異文化間教育のポジティブな側面が強く現れており，江渕がこのモデルを評価するのもそれ故である。

本稿で述べるような，自発的に学校生活を選んだ学生たちは，最終的にはバンナ文化からの離脱へ向かうことが多いので，ここでは境界人モデルのほうが適合するように思われる。ただしそれも，柔軟な文化の切り替えを可能にする二文化人が出現する可能性を否定するものではない。

まず学生はバンナ文化と学校教育文化（あるいはバンナ外の町の文化）との狭間に生きており，構造的にせよ文化的にせよ，最終的にどちらかに取り込まれてしまうか，あるいは「二文化人」的に適応するかのいずれかになる。またそうしたあり方は固定的ではなく，ある時点での状況や心のあり方に応じて変化しうる。しかしそうした個人の位置づけは，当人の認識だけでなく，他者の認識をも含む。境界性の月盛りのどの地点にいるのかは，そうした自己表象と他者表象の一致あるいはズレのなかにある。この概念を拡大適用すれば，バンナ外で生活するバンナ出身者は，みな「境界人」として取り上げることができるだろう。

私はそうした「境界人」を生み出す背景に，

17) 江渕 1997. pp.75–82
18) 江渕 1997. p.81

文化をめぐる政治的諸問題が潜んでいると考える。そこで本稿では，南部エチオピアのオモ系バンナ社会における女性の教育にまつわる紛争を資料として提示する。この事件は先の新聞記事で紹介されたものと非常によく似ており，南部エチオピア一帯に典型的な紛争であるということができる。またそこから，周辺地域における教育と文化をめぐる基本的な問題群を洗い出すことが可能であろう。そのうえでたとえば「近代教育はバンナのような周辺社会においてどのように機能するのか？」とか「いわゆる伝統主義者と近代主義者の対立のようなものはどのように解決されうるのか？」といった基礎的な問いかけに対する答えを準備するべきである。そしてよりラディカルには，「そもそも教育は必要なのか？」あるいは「必要であればどのような教育が，誰によってなされ，なんのために行われるのか？」といった問いもまた存在するのである。こうした問いにきちんと答えられなければ，この地域で学校を建設し教育を推進することの意味はいっこうに重みを持たない。

以下，第2章ではエチオピア南部地域とエチオピア教育史を概観する。そのうえで第3章で具体例を紹介し分析してゆく。つづく第4章は補完的事例を紹介しながら，それまでの議論を補足する。ついで第5章で議論の総括をおこなう。

2. 南オモにおける学校教育の歴史と現状

2.1. バンナと北部系移民

本稿でおもに取り上げるのはエチオピア南部のバンナ社会である。バンナ（Banna，自称は *Banya*）は南のバシャダおよびハマルと同じ言語を話し，文化的同質性も高いため，通常はこれらはハマルという名前で一括されることが多い[19]。

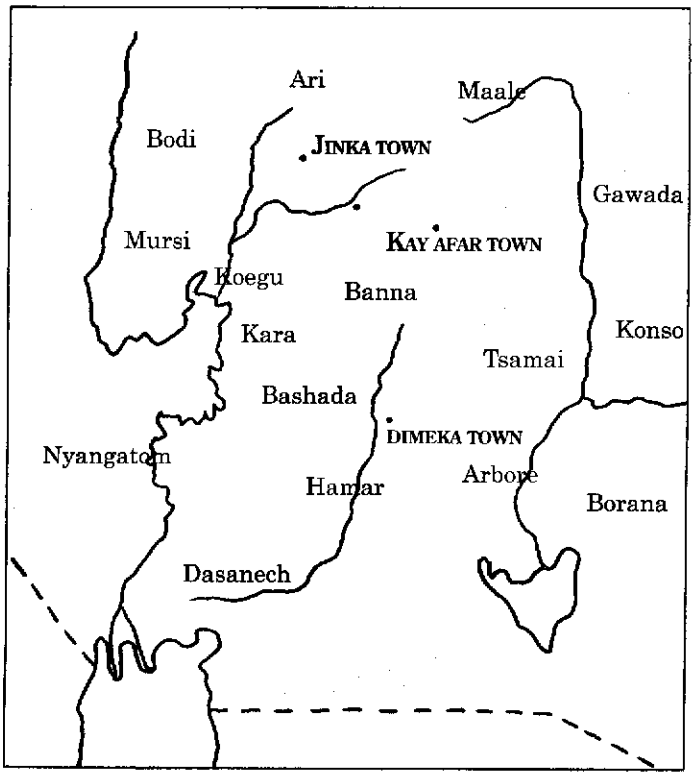
この地域は1900年前後にエチオピア帝国に組み入れられ，以後国家による管理・支配を受けてきたが，遠隔地であるため，そうした管理や統制は不完全にしかなされてこなかった。また同様の理由で，教育制度が持ち込まれるのにもかなりの時間を要した。

エチオピア軍は南部地域一帯に政治的，軍事的支配のための要塞都市（*ketema*）を建設したが，これが今日の町（これも同じく *ketema* と呼ばれる）の基礎となっている。当初の中心的都市 Bako はアリのバコ首長領の山頂部に建設されたが，バンナやハマルといった統治しにくい人々を効果的に支配するために Hamar に移され，1956年に現在の Jinka（人口約1万2千人，1994年）に移転した。

このような中心的都市のほかにも，警察や役所が配置され，そこには次第にアムハラなどの北部系住民が移住してきて小規模な都市的集落を形成するようになる。こうした場所には例外なくエチオピア正教の教会が建設され，そこに居住する住民も，その多くが正教徒たちとなった。それぞれの教会は小規模ではあるが，中央から司祭らが派遣され，エチオピアの国家イデオロギーの中核をなす正教を周辺にまで行きわたらせようとする意図を見ることができる。キリスト教はしかし，バンナをはじめとする周辺民に積極的に布教されたとはいいがたい。むしろ周辺民を周辺のまま留めおいて，自らはキリスト教徒という威信ある存在として隔離をはかったというべきであろう。アムハラ語による周辺民への蔑称として知られる *shankilla*（黒人）や *baria*（奴隷）といった表現に見られるように，彼ら「エチオピア人」からみて，バンナをはじめとする諸民族は文化的に劣った存在としてさげすまれてきた。こうしたことは，宗教的側面のみならず他のあらゆる側面にも見られる。

たとえば衣服であるが，「伝統的」なバン

19) 統計データではバンナもハマルもすべて「ハマル」として記述されているため，本稿ではハマルについてのデータを，バンナについてのデータを含むものと見なす。



地図１：南オモ地域

ナの男性は腰巻きを身につけ，女性は２枚のヤギ皮を腰の前後に垂らすという恰好をしている。それに対して北部系住民は男性はズボンにシャツ，女性はワンピースを身につけ，教会へ行くさいにはシャンマという白い服を着る。エチオピア南部の都市的集落においてこのシャンマを身につけることは一種の宗教アイデンティティの表出であり，逆にバンナにおいてこれを身につけるのは後述する福音派キリスト教徒（正教徒ではない）だけである。町の住民にとって服を着ないで出歩くということは「まるでバンナのよう」であり，これもまた文化的異質さを際立たせる際の重要な指標となっている。バンナの中でも，村の代表といった公的な地位にある者が，町で会議が開かれる際にはわざわざズボンとシャツを身につけ，町という場に適正な恰好をしようとしている。またごく最近になって若い男たちの間に下着（パンツ）を身につけようとする者が増えつつあり，さらにヤギ皮ではなくワンピースを着て定期市に現れる女性が数名出現している。

このように町（*ketema*）という場は，バンナの人々に対してある異質な文化空間となって現れる。ここでカイ・アファールという町を例にとって町の空間のあり方を述べてみよう。カイ・アファール（K'ay Afar）はエチオピア暦1945年（西暦1952-53年）に建設された町である。現在の南オモ郡[20]の郡庁所在地であるジンカ（Jinka）からは40 kmほ

20) 現在エチオピア南部はエチオピア南部諸民族州（Southern Nations, Nationalities and Peoples' Region）として一括され，その州都はAwasaである。州にはいくつかの郡（英語でzone，ア　↗

ど離れており，1994年まではバンナ・クレ行政区（Banna-Kule Warada）の区役所があった[21]。1999年現在，電気，水道，電話などのインフラストラクチャーは整備されていない。

人口は1994年の統計では746人で，民族別ではアムハラ401人（53.7%），ハマルおよびバンナ61人（8.1%）アリ55人（7.3%），ゴファ49人（4.6%）オロモ43人（5.7%），ガモ19人（2.5%）ワライタ10人（1.3%），その他108人（14.4%）となっている。近年はこれに多くのコンソ出身の労働者や移住者が付け加わっている。ここから一見して分かるのは，客観的に北部系住民と呼びうるのは50%強を占めるアムハラだけであり，残りの多くがエチオピア南部の山岳地帯出身者（ガモ，ワライタ，ゴファ，アリなど）で占められていることであろう。こうした地域の人々は多くがエチオピア正教であれプロテスタントであれキリスト教化されており，バンナの側から見れば明らかに異質な，それこそ「北部的」要素を感じさせる生活文化を実践しているのである。

カイ・アファールは，アディスアベバからアルバミンチを経てジンカへ向かう幹線道路に面している。この幹線道路からマーケット広場までの百メートルあまりが目抜き通りである。町の中心部にはマーケット広場があり，それに面してエチオピア国旗をはためかせるカイ・アファール警察署とガブリエル教会[22]がある。カイ・アファール警察は自前の自動車を持っていないが，銃を携行した警察官が24時間体制で町の警備に当たっている。この警備は通常は町の入り口すなわち幹線道路に面したあたりに限られるが，マーケットの開かれる木曜日には強化され，取引上のトラブルの仲裁などにあたっている。バンナ男性の多くは日常的に銃を携行しているが，所持すること自体が本来は違法なため，銃を持って町に入ることはしない[23]。広場や通りには3軒ほどの雑貨店と数多くの酒場が軒を連ね，マーケットの日には男たちが蜂蜜酒（*tej*）や蒸留酒（*katikala, arak*）を飲む溜まり場と化す。こうした酒はバンナでは製造されないため，彼ら（とくに男たち）にとって町とは現金を払って酒を飲むところ，あるいは買うところといった意味合いが強い。一方，カイ・アファールは木曜以外の日は閑散としており，バンナもものの売り買いといった経済的つながりや，警察や役所といった政治的つながりを除くと，町との関係はそれほど日常的とはいえない。町は，バンナの領域にあり，バンナの村々に囲まれながらも，北部から移植された文化で武装し孤立した空間である。その意味でも町（*ketema*）は要塞都市（*keterna*）の面影を引きずっている。

2.2. エチオピア教育史概観

本節では南部における教育事情を説明するために，Teshome Wagaw[24] と Tekeste Negash[25] によりつつ，エチオピア近代教育史の概略を紹介するに留める。

エチオピア初の近代的学校は1908年に開校した Menelik School である。これは皇帝メネリク（在位1889–1913）が外交官養成を目

↗ ムハラ語では kilil）が含まれる。本稿で言及する郡は第10郡（kilil 10）であるが，社会主義政権期からの名称をひきつぎ，一般に南オモ郡（アムハラ語で Debub Omo kilil）と呼ばれる。

21) その後行政区の編成が変わり，カイ・アファールの役場は放棄された。バンナ居住地のほとんどはハマル・バンナ行政区（Hamar=Banna Warada）に統合され，その行政府はディメカ（Dimeka）に置かれた。

22) エチオピア正教の教会はおのおのの聖者を祀っており，カイ・アファールの場合はそれが聖ガブリエルなのである。7月の聖ガブリエルの日には，近隣の町から多くの信者を集めて盛大な祭りが催される。

23) 増田 2001b

24) Teshome 1979

25) Tekeste 1996

的として設立したもので，カリキュラムは語学一辺倒，教師も全員ヨーロッパ人であった。

その後ハイレ＝セラシエ（在位1931-1974）の治世となり，1935年には全国で14の学校が存在した。1936年から1941年までのイタリア統治期を経て，1943年には全国でおよそ1万9千人だった学生が，1955年には9万人にまで増加するなど，近代教育は成功したかに見える。しかし実状はテキストやノート，黒板が不足するなど設備が整わず，なおかつカリキュラムも相変わらず外国語教育に偏重していたなど，エリート教育を志向していた点は否めない。この頃の学制は4/4/4制であった。

1957年からの第一次開発5カ年計画により，学校教育は近代化のための魔法としてとらえ直されることになった。1960年に19万人だった学生は，革命時（1974年）には110万人にまで膨れ上がった。それまでの4/4/4制は6/2/4制に改められ，アムハラ語が教授言語として定着した。

社会主義政権期は，それまで都市部に偏っていた学校の配分を地方にまでもたらした。周辺部の現地民の子供が通いやすいように寮を整備するなど，教育機会の平等を実現するべく多くの努力を払った点は評価されてよい。とくに1979年にNLCCC（National Literacy Campaign Co-ordinating Committee）を設立し，成人教育に力を注いだことで，1975年には93％もあった非識字率を1983年に37％にまで下落させ，ユネスコから表彰されてもいる。だが就学率はいまだ10％をわずかに越えるだけであり，中等教育以上はすべて都市近辺に限られていた。

2.3.　南部における学校教育の展開

社会主義政権期とその後を通じて，南部エチオピアにおける教育のインフラ整備はいまだ不十分とはいえ，徐々に進められつつある。しかし「すべての民族は教育を受ける権利を持つ」という理想にもかかわらず，最近の統計を見ても現実はそうした理想に追いついていない。

ここではカイ・アファールの学校に着目して，南部における現地民に対する学校教育の展開を追ってみよう。カイ・アファール小学校はエチオピア暦1955年（西暦1962-63）にコミュニティ・スクールとして開設されたが，西暦1970年の時点では1年生と2年生を合わせて25人の生徒と2人の教師がいただけである[26]。当時はまだバンナの学生はいなかったとされる。

1974年の革命のあと，エチオピア暦1969年（西暦1976-77）にカイ・アファール小学校は公立学校（governmental school）となった。エチオピア暦1980年（西暦1987-88）には学校のとなりに学生寮が建設され，バンナ学生の入寮が推進されるようになった。行政府の役人たちが村々をまわり，寮のすばらしさを吹聴し，子供たちを学校に入れるよう訴えた。この寮は当時のEC（ヨーロッパ共同体）から贈られた巨大なテントで，学生たちは内部に並べられた簡易ベッドで寝起きをし，発電器によって夜間の勉強も可能であった。このテントはその後老朽化したため，学生たちは別の建物に移動した[27]。

1994年の統計[28]によれば，ハマル・バンナ行政区では農村部（これは現地民社会を意味する）の7歳から12歳児（小学校に通う年齢）の就学率は0.63％である。同じ行政区でも都市部すなわちカイ・アファールやディメカなどの町では同じ年齢の就学率は58.8％に達しており，この地域における都鄙間の就学

26)　MOE n.d.

27)　この建物は社会主義政権期の末期に，カイ・アファール行政区役所の新舎とするべく建設されたが，政権の崩壊によって建築は中断，その後放棄されていたのを学生寮として利用している。1999年の時点ではコンクリートブロック製の新しい寮舎が建築中であった。

28)　Central Statistical Authority 1996

格差は歴然としている。ここから，周辺民すなわち周辺部の現地民社会は，エチオピアという国家において地理的側面のみならず，構造的にも周辺部に留めおかれているということがいえよう。その周辺性は政治，経済，制度といったあらゆる側面を横断しているのである。

1994年の新しい教育政策のもと，初等教育を8年，中等教育を第一期，第二期にそれぞれ2年ずつ振り分ける新しいカリキュラムが提示された。これにともない，カイ・アファール小学校もそれまでの6学年から，8学年へとシステムが変更された。

エチオピア暦1991年（西暦1998–99）には，この学生寮で生活する127人のうち80名がバンナであり，そのうち70名が男子，10名が女子となっていた。バンナ出身の学生数は4年前の約2倍であるが，女子は男子に比べて非常に少ない。しかしかつては女子学生が皆無であったことを思えば，変化があったと見るべきだろう。（表1，表2）

学生寮に入るには，現地民出身であるという条件を満たす必要がある。したがって，町に住まう他地域からの移住者の子供は寮には入れない。バンナを含む現地民出身の学生は学費を免除され，食事や衣服，靴，文具などのサービスを無料で受けられるので，これらの支給品だけで生活しようとすれば，親も本人も学校教育には一切の金銭的負担をせずにすむようになっている。ただしこれは「原理的には」であり，実際には親からの援助を受けたり，あるいは自分で小規模な商売をしたりして現金を手にし，それによって物品の購入や飲食に当てる者がいる。

学生寮の開設とそれに付随する諸々のサービスが，バンナの子供たちに学校教育への門戸を大きく開いたことは事実である。しかし学校に通うことが同時に村から離れた生活をすることを意味することになり，「子供を学校に通わせること」がある特別な意味合いを帯びることになった。近代的な学校教育に参加することは，単に地理的に「村から離れる」ことのみならず，象徴的には「ひとつの世界」から「もうひとつの世界」へと移動することを意味する。この「世界」は，本稿では文化

表1　エチオピア暦1990年（西暦1997–98年）のカイ・アファール小学校生徒の出身民族

出身民族	男子	女子	合計
Amhara	49	51	100
Banna*	62	7	69
Ari*	13	2	15
Tsamay*	9	0	9
Maale*	8	0	8
Gamo	2	4	6
Konso	3	1	4
Hamar*	3	0	3
Wallaita	2	0	2
Kambaata	1	1	2
Geleb*	2	0	2
Erbore*	1	1	2
Bume	0	1	1
	155	68	223

*印：寮生

表2　カイ・アファール学生寮の出身民族別学生数の推移（1995–99）

出身民族	EC1988 (1995–96)	EC1989 (1996–97)	EC1990 (1997–98)	EC1991 (1998–99)
Banna	40	41	66	80
Ari	44	29	17	15
Maale	10	10	6	8
Tsamay	3	0	9	8
Geleb	0	0	2	3
Mursi*	0	0	0	13
sub-total	97	80	100	127

*Mursi の居住地は本来はカイ・アファールからは遠いのだが，事情により13人まとめてカイ・アファールに移ってきた。

という言葉で表現される。こうした「世界＝文化の移動」が，バンナにおいて学校教育がネガティブに受容され，子供と学校をめぐる紛争がたびたび引き起こされる理由であるとするのが，私の見方である。

1991年以降の新しい国家体制を特徴づけるのが地方分権化（decentralization）である。教育分野におけるその実践のひとつとして，初等教育における地域語の教授言語としての採用があげられよう[29]。しかし，これはあらゆる言語が，平等に採用されるということにはならない。たとえばカイ・アファール小学校において，バンナの学生が増えても，バンナ語が教授言語となることはない。教授言語はこれまでと同様アムハラ語および英語であり，バンナ語の採用は音楽の時間にバンナ語の歌をうたうといった程度にすぎない。学校を卒業した後の実益を考えれば，アムハラ語で勉強する以外に選択肢はないといってよいだろう。じつは社会主義政権期に実施された全国規模の識字運動において，すでにアムハラ語以外の14言語が教えられるべき現地語として認められていた。しかし当の現地民は，学ぶ努力とそこから得られる実利を勘案し，結果的に識字教育では現地語よりもアムハラ語を選択した人が圧倒的に多かった[30]。その意味で，学校教育がアムハラ語で行われているということは，バンナとしてよりも，エチオピア国民として生きるための実用性に根ざしている[31]。

Tekeste が現在のエチオピアの教育事情を批判するのもこの点と関係している。地方分権を謳い，現地語による教育を標榜したとしても，南部において学校教育がもたらすものが結局のところ「月給取り」として就職することでしかないとすれば，アムハラ語と英語以外のいかなる言語も教授言語としては役に立たないのである。この点から掘り起こして，Tekeste は現地民のニーズに対応したノン・フォーマル教育の重要性を訴えるのだが，ここにおいて Tekeste の問題意識と本稿の問題意識とは同じ根を持つものであることが判明するであろう。

3.　就学をめぐる紛争

3.1.　ディレ事件の概要

ここで紹介する事例は1998年に起きた，女子学生の就学にまつわる紛争である[32]。この年の６月にディレ（10代後半）[33]という名の少女が村を抜け出し，30キロほど南のディメカという町に逃げ込んだことが発端となった。ディレ自身の言葉を引いてみよう。

> 学生寮に入ったのは，とにかく学校に入って勉強したかったからです。父は私を結婚させようとしました。私はすでに婚約させられていて，そこへ送られようとしていたのです。それが嫌で学生寮に入りました。教会のことは友人のビタから聞いて知っていましたが，父も母もま

29) Minga Negash 1997

30) Searl 1991. p.39

31) バンナの教師はほぼ皆無で，多くの教師が近在の町出身であるか，あるいは北部出身であるとのことである。ある教師によれば，北部出身者にとって，南部に配属されるのは「島送り」あるいは「左遷」のニュアンスがあり，したがって教師の「やる気」は全体として高いとはいえない。また Jinka High-Secondary School などは，教師の大部分の平均年齢が20代前半と，教育者としての実力が不足しているとの指摘もある。

32) ディレに対して聞き取りを行ったのはそれから１年後，1999年８月９日である。休暇を利用して村に戻っていた彼女（事件以来はじめての帰郷である）に，村のキリスト教徒宅でインタビューを行った。インタビューはバンナ語でおこなわれた。私が事件にじかに接したのは７月12日の会議（後述）が最初である。そのあと，ディレが解放されて，ディメカに護送されるまで直接現場で情報を集めることができた。

33) 本稿で登場する人名はすべて偽名である。また年齢も大まかな推定に過ぎない。

るで関心がありませんでした。この教会に入れば学校に行くことができると思っていました。ピタがキリスト教徒になるように誘ってくれました。

彼女自身はこの行動について二つの理由を挙げている。第一は学校で勉強したかったというもの，第二は彼女の婚約相手が年輩者であり，結婚したくなかったから逃げ出したというものである。この結婚はバンナの多くの事例と同様，ディレの父親と当の男性とのあいだで取り決められたものであり，彼女の意志ではなかった。ここで彼女が「教会に入れば学校に行ける」と述べている点については，後ほど触れることにする。

ディレが脱走をはかった日，父親は30キロほど北にある町カイ・アファールの定期市に出かけており，彼女はその留守を見計らって逃げ出した。脱走の直前，ディレはひとりブッシュの中でキリスト教徒の誓いをした。夜通し歩いてディメカに到着した彼女は，ディメカ在住の知人の女性を訪ねた。この女性は近隣の現地民出身[34]で，ディメカの役場に勤務していた。女性はすぐにディレをディメカ警察につれて行き，保護を求めた。二日後，ディレがディメカにいることを聞きつけた男性二人（兄とオジ）が警察をたずね，ディレの引き渡しを願い出たが拒否され，村に帰っていった。その後ディレはディメカ学生寮への入寮を許可され，9月から始まる新学期に備えて準備を始めた。事態が動くのはその一月ほどのちである。

7月10日頃の朝，町を流れるKeske川で洗濯していたディレは，村からやってきた11人のドンザ（成人男性）に連れ去られる。男たちは全員ディレの親族であり，ディレの父親もいた。彼らはライフルを携行しており，ディレをバラザ（木）の枝で打ち据えた。（このとき，父親は止めに入ったが，他の男たちが「どうせ俺たちは警察に捕まるんだ，だから打ってしまえ」といって止められなかったという）。こうして彼らはディレをとらえ，警察に追跡されないようにブッシュの中を進んで，婚約者のところまで連れていった。

婚約者の村に着くと，ディレは男たちによって手と足を縛られた。婚約者のボヤという男は当初は，連れてこられたディレと結婚することを拒んだという。事件が警察沙汰となり，それに巻き込まれるのを避けたかったからである。しかし男たちの懇願に答えるかたちで，最終的に結婚の儀礼をすることに同意した。ディレはバンナの通常の手順に従い，髪を剃られ，全身にバターと赤い顔料を塗られて儀礼を行った。

ここまでの展開は男たち，すなわち親族のドンザたちの筋書き通りに進んだといえよう。彼らの意図は，とにかくディレを結婚させてしまうこと，そしてそれを既成事実とすることによって，後戻りできない状態にしてしまうことである。バンナでは一度結婚した女性は離婚することも再婚することもできない。したがって結婚の儀礼を済ませてしまったディレが学校に通う可能性はゼロとなり，警察もこの件を追及しないと考えたのだろう。彼らにとってすでにこの段階で事件は終わっていたのである。

ところが警察にとってはそうではなかった。警察にとって事件は，ディレが誘拐された時点から始まっているのである。7月11日，バンナ・ハマル行政区から派遣された警察官が村を訪れ，ディレをディメカに返すよう要求した。この日，警察は村の長老2名を連行した。

翌12日の朝[35]，ディメカから役人1人と警

34) 現地民出身の女性としては極めて珍しく中等教育を終え，政府に勤める女性である。ディレは以前にこの女性に就学の意志を伝えていた。本来ならばディレは友人と2人で村を抜け出すつもりであったが，この友人が早々に婚出させられてしまったため，単独で行動を起こしたということである。

官4人が派遣された。村のドンザたちが集められ，話し合いが開催された。この話し合いについては次の節で検討する。警察は繰り返しディレの引き渡しを求めたが，ディレの父親は応じず，他の男たちも要求に対して拒否の姿勢を示した。この日も警察は長老2人（うち1人は首長）を連行した。この夜，誘拐に関与したドンザたちは逮捕を恐れ，村の北にそびえるズブリ山に身を隠した。その一方で，他のドンザたちは事態を収拾するべく対応を協議しはじめた。

翌日の早朝，12人の警察官が行政区長に率いられて村に到着した。彼らは「誘拐犯」たちが山に逃げ込んだ事実を知ると，山の麓にあるディレの家（ここからはズブリ山がよく見通せる）に腰を据えた。彼らは全員武装しており，機関銃一台はズブリ山に銃口を向けてセットされた。バンナ出身の行政区長はこのとき，「彼らに教育を授けよう」と自信たっぷりに語った。この発言は受け取りようによっては，「奴らに教訓を学ばせよう」とも「連中にお仕置きをしよう」とも意訳できる。この日，山にこもったドンザたちの動きはなかったが，他のドンザたちは村とディレの「婚出」先を行き来しながら，事態の収拾に向けた話し合いを試みていた。連行された首長の長男が陣頭指揮を執っていたが，話し合いはなかなか進まなかった。警察は話し合いの結果次第ではいつでも銃を発砲する用意がある姿勢を見せていたが，この時点ですでに警察の勝利は目に見えていた。村人から贈られたヒツジが警察官たちの食事となった。この晩は警官らはここに留まった。

事態の成り行きを決定づけたのは，村の最長老（連行された首長のオジにあたる）の採決である。その晩この長老は，警察と戦っても無駄である，ディレを警察に引き渡せとの意見を述べた。ディレの「夫」ボヤのところに使いが出され，ディレは解放された[36]。

翌朝，ディレは村に姿を現し，警察の保護下に入った。全身に赤い顔料が塗られ，腰にはヤギ皮をまとうという，バンナの伝統的新婚女性の姿であった。警察の自動車でディメカに護送されるに際し，村のキリスト教徒たちから衣服（ワンピース）を譲られ着替えをした。ヤギ皮のスカートは置いていかれた。村では牛1頭が解体され，警察官も村人もいっしょに食事をした。行政区長はディメカに戻るに先立ち，村人に対して演説を行った。区長自身はバンナ出身であるが，演説は公用語であるアムハラ語でなされ，バンナ出身の警察官がそれを通訳した。

ディメカ到着後，ディレは学生寮に戻り，拘留されていた長老4人は釈放された。ディレの父親をはじめ「誘拐」に関わった男たちは引き続き警察の捜査の対象であったが，その後事件はうやむやのまま自然に消滅した。

3.2.　政治＝文化的分析

本章ではこの事件のなかでも，とくにそれぞれのイデオロギーが明確に表れた7月12日の話し合いの内容を検討する。この事件をひとつのドラマとして眺めるならば，そこには非常に多数の登場人物が関わっていた。これらの人物を，ディレに対する立場によって分類するならば，おおまかに二つのグループに分けることができるであろう。一つはディレの行動を肯定し擁護する側，もう一つは否定する側である。それぞれの立場には，それぞれの意見を基礎づける文化的背景が存在する。

35)　私がこの事件に関する諸々の出来事を直接まのあたりにするのは，この日が最初であった。私的なことであるが，ディレが村を脱走したまさにその日，私はカイ・アファールの飲み屋で，ディレの父親と会っていたのである。その時はこのようなことが起こり得ようとは夢にも思わなかった。

36)　ディレによれば使いは二度出されている。最初に出された使いは若者だったため，ボヤは話し合いを拒否した。次に出向いた使いが長老格の1人であったので，ボヤは要求をのみディレを引き渡したという。

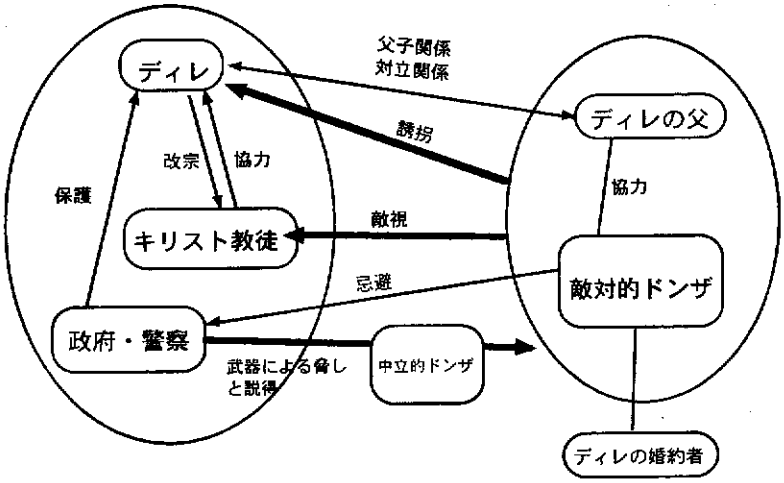


図1　事件をめぐる人間関係

ここではそうした政治＝文化的な分析を行う。

ディレの行動を肯定し擁護する側には政府関係者，警察官，そして村のキリスト教徒が含まれる。政府と警察はディレを保護することが義務であると感じており，目的遂行のためには銃の使用も辞さない態度をとった。それとは反対の立場にあるのが村のドンザ（成人男性）たちである。ドンザはさらに，ディレを誘拐した「強い否定」派と，ディレを否定しつつも，警察の武力行使を避けるべく交渉に当たった「弱い否定」派に分けられる。（図1）

話し合いは幹線道路に面した村の入り口で行われた。ここには大木があり，その日陰は日常的に話し合いの場として利用されている。木の根本に警察のリーダーと役人が座り，その周りをドンザたちが距離を置いて囲むかたちで話し合いがもたれた。形態からも，また進行からも，明らかにこの警察のリーダーを軸にして話し合いは展開された。他の警察官は銃を所持していたが，肩に掛けているだけであった。ほとんどのドンザも銃を携行していたが，銃の携行自体は日常的であり，その場に戦闘的な雰囲気は全くなかった。

3.2.1.　政府と警察

この日の話し合いは，まず警察のリーダーの口上から始まった。彼はおそらく20代後半の若い男だが，アムサ・アラカという，地方警察官としては高位の地位についていたエリートである。付け加えれば，彼は他地域から赴任してきており，バンナの事情について疎く，私の目にはバンナをはなから軽蔑しているように見えた。

彼の発言のうち，私のノートに記されているものを拾ってみよう。

「政府は巨大だが，バンナは小さい。これは（お前たちにとって）望みのない戦いなのだぞ」

「もしお前たちが引き金を引くなら，何百人もの警官と兵士が銃を持ってここにやってくるのだぞ」

一見して分かるように，彼の発言は警察の武力を楯にした脅しである。バンナは過去に経験した国家との戦いにおいてこの武力差を痛感しており，その意味においてこの脅しは効果があったものと思われる[37]。

「銃ではなにも解決しない。私たちは平和的に事件を解決するように努力しなくてはならない。」

「すべては政府のおかげで成り立っているのだ。たとえば私たちだって皆，政府（＝国家）の子供なのだぞ。」

次の発言は長年に渡ってバンナ近辺に勤務してきたベテラン警察官（位はアッスル・アラカで，さきのアムサ・アラカと比べて一段低い）が述べた意見の一部である。バンナの信頼が厚い彼が，「私は何十年もここで働いてきて，バンナの友人もたくさんいる。この村はこれまで一度もこのような問題を起こしたことがなかっただけに私は非常に残念だ」と彼の発言を切り出し，次のように述べた。

「ディレだって政府の子供なのだ。彼女の名前はすでに登録されてアジスアベバ（エチオピアの首都）まで届いているのだということを君たちは知らなければならない。」

他の警官や役人の発言からあと二つだけ紹介しよう。

「教育によって男も女も平等になるのだ。女の子ですらダルテやテスファイエ[38]のように月給取りの仕事に就けるようになれるのだ」

（ドンザの１人がバンナの結婚制度について語りだしたのをさえぎって）

「ここは習慣について話す場所ではない。民主主義に基づいて話し合わなければならないのだ。我々は法を犯すものは誰でも逮捕しなければならないのだ。」

これらの発言の要点は二つある。一つは教育の有効性である。学校で教育を受けることで，よりよい生活ができるのだというのが彼らの論点の一つになっているのは間違いない。だがより特徴的なのはこれが国家中心的な観点から語られていることだろう。彼らが依拠しているのはエチオピアの「法」であり，バンナも含めた「われわれ」全員がエチオピア「政府の子」であるとする認識である。ここで「政府の子」と訳したのはアムハラ語の *mengist lij* であるが，アムハラ語の *mengist* という言葉には「政府」と「国家」という意味合いが濃厚にとけ込んでいるため，以下では「政府＝国家の子」と訳す。

このことと大いに関係があるのが，1994年に制定された新憲法と教育政策である。新憲法は1991年に社会主義政権が崩壊したことを受けて，暫定政権が1994年12月に発布したものである。この憲法では全体の３分の１が何らかの形で基本的人権と個人の自由についての記述にあてられている[39]。とくに注目されるのは女性の権利について，第35条をまるまる割いて規定していることであろう。第35条はまず女性が男性と同等の権利を持つことを保証し，ついで女性が経験してきた不平等と差別の歴史を考慮しつつ，このように述べる。

国家は女性の権利を強化し，有害な慣習（harmful customs）を除去しなければならない。女性を抑圧し，女性に対して物理的，心理的な害を及ぼすようないかなる法や慣習も禁止される（Article35 (4)）[40]

同様の記述は1994年４月の教育政策（Education and Training Policy）の序言にも見られる。

教育の目的の一つは，基礎教育から始まるあらゆる段階での教育によって，個

37) 増田 2001b

38) ダルテはバンナ，テスファイエはハマル出身で，ともに1995年ごろに高校を卒業し，政府の仕事に就いている。２人ともアジスアベバで地方行政担当の部署で働いており，バンナでは立身出世のシンボル的存在である。なおこのうちダルテは1999年にバンナ代表の国会議員に選出された。

39) Fasil 1997. p.109

40) 憲法の原文はアムハラ語であるが，ここでは Fasil Nahum 1997 所収の英語版を用いた。

人や社会の問題解決能力や文化をはぐくむことである。教育によって人びとは有害な伝統を同定し，それを有益なものに置き換えることができるようになるのである[41]。

法に基づくとする政府・警察の態度は，ある種の普遍主義的性格をもつ。すなわち「人権」という共通基盤があり，これがすべての文化に適用可能であるという考えである。彼らにとってバンナとは，個別民族である以前にエチオピア国民であり，政府＝国家の子なのであるから，当然ながらこうした国民としてよるべき価値観の基盤（＝国家の法）に従うべきなのである。したがって個別文化としてのバンナ文化はその基盤上で，基盤に適合するかたちで運用されなければならない。今回の事件においてバンナ文化そのものへの攻撃はなかったが，事態の進行いかんではそのようになり得たのである。

たとえば冒頭に紹介した新聞記事において，ディメカ警察は，「警察には学生寮を守り，ハマル女性たちを不当な扱いから保護する義務がある」と表明した。また南オモ郡女性問題事務局の代表は，ハマルの慣習をめぐる問題の深刻さを指摘した上で，「長老たちと議論を行い，なおかつ彼らを啓蒙するフォーラムを開催するつもりがある」と述べた。いずれもバンナとハマルの文化を否定的にとらえているという点で共通している。

また次に紹介する社会主義政権期のアネクドートは，こうした文化の否定が自文化中心的な見方と深く結びついていることを示している。

ディメカにAllefeという行政官がいた。ガル（アムハラ）の人間だった。あるときハマルの長老を集めて，ハマル女性たちの首輪[42]を取り外せと命令した。女性たちの髪の毛[43]も切ってしまえ，あのヤギ皮の *aizi* もやめてしまえ，といった。バンナやハマルのこういった文化を，子どもたちが学んだらそれはいつまでも残ってしまう。そこで以上の三つを「明日までに止めろ」と言ったのだ。

Allefeの命令を聞いたハマルたちは，「お前さんのいうことをきくから，そのかわり（エチオピア正教の）キリスト教徒のやり方もやめてくれ」と言い返した。これは俺たちの生活のやり方で，政府が口出しするようなものではない，と。男たちは翌朝，ライフルを手に，それぞれが妻を伴って行政官のところを訪れた。そして「Allefeよ，妻を連れてきたぜ。俺たちはおまえさんのいうことは聞かない。まずおまえの奥さんの髪の毛を切ってもらおうか」と言った。

ガルの文化として，キリスト教徒がイースターの日に，頭にヒモを巻き付けるというのがある。死んだ牛の肉は食わない，ツォム（特定の日に動物性食物を口にしない習慣）の期間は肉は食べないというのもアムハラの文化だ。

もちろんここで言及されたアムハラ文化に，ハマル・バンナ文化が対置される。エチオピア正教の習慣であるツォムはせず，イースターもなく，死んだ牛の肉を食す文化としてのハマル・バンナ文化である。ここでもAllefeという行政官の自文化中心的な普遍主義と，ハマル・バンナ側の自文化中心的な相対主義の対立関係が明確に表れており，ディレの事件が決して特殊ではないことを教えてくれる。と同時に，このような相対主義的態度と普遍主義的態度はいずれも自文化を中心

41) ここではTekeste Negash 1996所収の英語版を用いた。
42) *binjare*。結婚した女性が首につける輪で，鉄製と革製のものがある。
43) 既婚女性は頭髪をよってひも状にし，それに赤い顔料とバターを塗り込んでいる。ここで行政官が「切れ」と命令したのはこれのことである。

としたものであるという点で，極めてよく似た様相を呈する。浜本の言を借りれば，ハマル・バンナ的相対主義には「自文化の自明性を全く疑いにさらさない楽観主義」が，警察や政府の普遍主義には「自文化のカテゴリーを普遍的なカテゴリーだとする傲慢さ」がそれぞれ見てとれる[44]。

また次に見るドンザの言い分のように，この事件の背景には結婚に関するローカルな制度が関わっているのだが，政府・警察の側にはこの点についての言及が一切ない。これは文化の有効性あるいは有効範囲ということを考えるときに示唆的である。警察にとって，バンナの結婚制度はバンナとして生きる人間にのみ有効であり，ディレについてはその制度が無効であると考える。なぜならディレはすでにバンナを離れることを決意した人間だからである。その意味で，政府・警察にとって学生という存在は境界人としては認識されず，むしろ彼らの側の人間となってしまっている。

3.2.2.　ドンザ（成人男性）

ドンザ（バンナの成人男性）たちの発言は以下の通りである。

> 「教育というものもたしかに良いものなのだろう。だがもしディレが学校に行ったとしたら，彼女がすでに受け取ってしまった（バンナ語では「食べてしまった」と表現する）婚資はどうなるのだ？」
>
> 「ディレはすでに婚資を受け取って（食べて）いる。もし彼女がもっと小さければ学校に入っても何の問題もなかったろう。だが，もう婚資を払い戻すには遅すぎる。私たちはディレのかわりに，小さい息子を学校にやるから，ディレの件は放っておいてほしい。」（これはディレの父親の発言である）
>
> 「教育を受けることはよいことだ。だが私たちには私たちの習慣（*dambi*）[45]がある。それはちょうどムスリムが，キリスト教徒の屠った肉を食べないようなものなのだ。」

ドンザの側は婚資を論点の中心に据える。ディレはすでに多くの婚資を受け取っており，それらはまた親族に分配済であるのでいまさら婚約を解消できないというのが彼らの主張である。これについてのディレの言い分はこうである。

> 婚資が「食べられる」（*kuli, koimo itsa di di ni*）というけれど，婚資（*keemo*）については私はなにも知りません。結婚とか婚資について父からなにか話をされたこともありません。婚資を食べたのは私ではなく，父なのです。だからこの婚約が破綻したからといって，私の知ったことではないのです。私の代わりに妹たちの誰かが行かされることになれば困ったことですが，彼女たちも行きたがらないでしょう。

ここからこの紛争においてジェンダーの問題が関係することが明らかとなるが，ジェンダーについては次の章で触れることにしよう。

この話し合いでドンザたちが強調したのは婚資のやりとりを含む，バンナの習慣（*Banya dambi*）であり，彼らは政府や警察の側がとりだした「政府＝国家の子」という言い分を自らの語りの中に取り込もうとはしなかった。同様に，政府・警察はドンザが語るバンナの習慣には一顧だにしない。たとえば話し合いの中で，あるドンザがバンナの結婚のやり方について説明する一幕があったが，これは先

44)　浜本 1996. p.80

45)　バンナ語の *dambi* は，アムハラ語の *demb*（規則）からくる言葉である。後のインタビューの中で出てくる *gilo* もまた，ここでは慣習あるいは文化と訳しているが，もともとは儀礼もしくは儀礼の手順を意味する。

に挙げたように警察官によってさえぎられてしまった。

このような，ドンザと政府・警察との議論のすれ違いを，それぞれの価値基準に対するポジションが文化相対主義に立脚しているか，普遍主義に立脚しているかの相違としてとらえることができる。ドンザの側はバンナの習慣の独自性を楯に，政府・警察の要求をかわすことができると考えている。それに対し，政府・警察が依拠するのはエチオピアの法であり，バンナもエチオピア「国民」である以上，これが適用されるべきだというのである。この立場をとる限り，少なくともエチオピアの領土内においては「法」は普遍的価値を持つ。いずれも自文化中心的であり，ドンザにとってはバンナ文化が，政府・警察にとっては「法」が唯一の価値基準とされていることは確かである。

したがってこの日の話し合いに，対話を成立させる共通のプラットフォームは存在しない。その意味でいずれの側も排他的に見えてしまうのは当然である。残念なことにディレ本人の意思がどうであるかは，議題からはずれてしまった。いうなればこの話し合いは，ディレの処遇を決めるという当初の目的をはずれ，文化闘争の場と化してしまったのである。

他文化への干渉という点から考えると，さらに両者の違いは明らかとなる。一方の政府・警察にとっては，バンナはあくまでも国家の一部であり，干渉するべき対象であるが，国家の法が干渉されることは考慮に入れていない。他方でドンザたちは，バンナ文化が外部から干渉されるのを嫌うが，同時に他文化（ここではエチオピア文化）に対する非干渉的態度を表明する。したがってドンザによれば，バンナと国家との関係は相互非干渉で，交通のない，分断された関係ということになる。それはもはや関係とも呼べないものである[46]。

バンナにとってバンナ文化とエチオピアの法は，同等の水準にある。したがって政府・警察のいうような，国民はまず法に従うべきだとする見解とは基本的に論点がかみ合わない。そしてバンナである以上はバンナ文化に従うべきであるとする。こうした自己相対化を伴わない相対主義は，内堀のいう「極限化された文化相対主義」[47]であり，浜本のいう「自文化中心的な相対主義」[48]である。そうした「相対主義」こそがメタレベルでは「普遍」であるとするのがドンザの立場であるといえようか。

ではどのような個人がバンナ文化に従うべきであると認められるのだろうか。ディレの場合は，ディレ自身はバンナ文化の境界を越えたと認識したが，ドンザはそれを認めなかった。あるいはそれを認識したうえで，今一度その境界を越えさせ，バンナの領域に戻させようとした。これは先に少し触れた文化の有効範囲に関する問題である。この意味でもバンナ学生は「境界人」である。その境界性は，境界を越えた瞬間がもっとも強く，次第に薄まってくる。その結果，元の領域への回帰力は失われ，同化が進んでいくのである。

3.2.3. キリスト教徒たち

政府や警察のように，村のキリスト教徒たちはディレを擁護する側にまわった。ただし彼らは事件の表舞台には姿を見せず，先の話し合いにおいても積極的な発言をしていない。

バンナに広がりつつあるキリスト教は，アムハラ文化の重要な基盤であるエチオピア正教会とは異なる，ミッション系のものである。現在バンナでは2つのミッションが活動して

46) バンナにおける「国家」イメージの遠さについては，食事文化についての簡単な考察で触れたことがある（増田 1998）。
47) 内堀 1997. p.51
48) 浜本 1996. p.80

いる。ひとつはディメカに拠点をおくカトリックのミッション，もう一つはアルドゥバ（Alduba）に拠点をおく福音派プロテスタントのものであるが，とくに近年盛り上がりを見せているのは後者である。ここにはアメリカ福音派の流れを汲むミッション団体SIM（Society for International Missionaries）の基地があり，ここに常駐するアメリカ人駐在員はクリニックや家畜の診療所をとおして援助活動も行っている。この福音派キリスト教は，当然ながらそのあり方においてエチオピア正教とはおおいに異なる[49]。

その最大の違いは，そのキリスト教がだれのものであるかについての認識であろう。SIMがいわゆるpaganの地域に積極的に進出し，現地語による説教や聖書の翻訳，賛美歌の作曲，援助活動など，信者獲得のための努力を惜しまなかったのに対して，エチオピア正教はアウトポストとしての町（*ketema*, garrison town）に教会を建てただけであり，現地民の教化には消極的であった。つまり，バンナにとってそもそもキリスト教とは町の宗教，アムハラという征服者たちの信仰だったのであり，その意味で当初から否定的な烙印を押されていたことは間違いない。

このような違いにも関わらず，一般のバンナにとって福音派と正教会とは似たようなものとして認識されている。バンナ・クリスチャンにとっても，たとえばアムハラ語の使用であるが，聖書がアムハラ語で書かれている以上，教会活動にアムハラ語は欠かせない。彼らの学校教育への情熱と併せて考えれば，キリスト教徒たちのアムハラ語への親和度は相対的に高い。またバンナ・クリスチャンのなかには，正教徒が教会に行くときにまとう白い綿の衣服（*shamma*）を所有するものがいる。このように福音派と正教会とは，宗教的特質は異なるものの，バンナの非・信者によって，またときにはバンナの信者によっても，類似したものと見なされやすい。

村でのキリスト教徒[50]の数は近年急激な増加傾向を見せている。とくにこの村にはキリスト教伝道活動に熱心な人物（バンナである）がいて，この人物は周辺村落のキリスト教徒の中心的役割を担っている。私が調査を始めた1993年当時，彼らの活動はそれほど目立ったものではなかったが，その後徐々にキリスト教徒たちが集まってすむようになり，現在では村の，道路に面したところにクリスチャン・コミューンとでも呼ぶべきものを形成している。信者の増加に合わせて，村には伝道師が派遣されるようになり，教会も建設されるにいたった[51]。

キリスト教徒たちの生活は，他の一般のバンナの人々とは明らかに異なる。彼らはアルコールを一切口にせず，日曜学校に通い，彼らだけの共同労働組織をつくっている。男性は腰巻きではなくズボンをはき，シャツを着用する。頭部を土で固めたり編み込んだりといった伝統的ファッションとは無縁である。腕時計をはめるものが多く，なかには聖書やノート類にボールペンを持ち歩いている者もいる。女性もまた，ヤギ皮のスカート（前掛けと尻あて）ではなくワンピースをまとい，髪に赤い顔料とバターを塗り込むことはしない。コーヒーを供するときに，子安貝が縫い込まれたケープを肩に掛けることもしない。このように見た目でキリスト教徒であるか否かを判断することはたやすい。私は何人もの人々がキリスト教に改宗していくのを見たが，彼らは例外なく，改宗すると同時に外見を変えた。

---

49) SIMのエチオピア南部における活動についてはDonham 1999が詳しい。

50) バンナ語ではmishion（mission），sabaki（ミッションを意味するアムハラ語sebakiから），あるいはhammagnと呼ばれる。最後のものは「改宗する」という動詞hammanaから来ている。

51) この建物には偶像崇拝的な要素は一切なく，教会と言うよりはむしろ伝道施設と呼んだほうがただしい。日曜学校や子供たちの歌の練習などはここで行われる。

外見上の差違について述べるのは，ディレが警察に保護された際，ヤギ皮のような「伝統」的な服装を捨て，町に住むのにふさわしいワンピースに着替えたことが念頭にあるからである。女性のワンピースは，バンナにおいてキリスト教徒であることと，町に住む女性であることを明示するのである。

服装だけではない。たとえば彼らは複婚を拒否する。また子供の学校教育にも熱心である。就学年齢（エチオピアの法律では7歳が就学年齢とされる）に達したころを見計らって，多くの子供が学生寮に送られる。ただしすべての子供が学校に通うわけではなく，どちらかといえば男子のほうに重きが置かれていることも書き添えておく。いずれにせよ，バンナ全体の就学率の低さと比較すれば，キリスト教徒の子弟の就学率は非常に高い。

紛争に話を戻そう。キリスト教徒はこの紛争において，表面的には何ら行動していないが，私は以下の二つの理由により彼らを分析の枠外におくことはできないと考えている。

第一にディレが村を脱走する直前に自らキリスト教徒としての誓いをたて「改宗」していることである。彼女が教会に惹かれた理由のひとつは，親友のピタが家族ともども改宗し学校に通いはじめたことである。ピタはまたディレに対してキリスト教徒になって，いっしょに学校に通おうとたびたび誘っていた。ディレ自身もまた「キリスト教徒になることで，学校に通うチャンスが生まれる」と考えていた。ディレの家族の中には教会に関心を持つものは1人もなく，こうした決断がディレの友人関係を通して導かれたことは注目に値する。ディレの父親がディレの知らないところで婚約を取り決め，婚資を受け取っていたことと見事に対照的であるという構図を浮かび上がらせるからである。

第二にキリスト教徒たちと村の人々，とりわけドンザたちのあいだに暗黙の敵対関係が存在することを挙げておく。ドンザなど非キリスト教徒の目には，今回の事件はキリスト教徒によって引き起こされたと映っていた。ディレの脱走について，教会が手引きをし，SIMの自動車でディメカに連れて行かれたという噂が流れていたことからもそれはうかがえる。警察に拘束されディメカに連行されていた長老たちもまた，釈放されたのちに，今回の事件はキリスト教徒たちが起こしたものだと不平をもらしていた。

同様に，キリスト教徒の側もまた今回の事件について，ドンザたちが起こした行動を非難する発言をしている。ただしこの発言は表だってなされてものではなく，筆者に対して個人的な感想としてなされたものである。キリスト教徒は常日頃から他のバンナの人々と良好な関係を保とうと努力を払っており，ドンザたちを攻撃することを避けたのだと思われる。

これらの点から考えて，キリスト教徒たちはバンナの人々，とくにドンザたちからは政府・警察よりの立場にいると認識されていたのだと結論できる。またキリスト教徒自身も，自らをディレを擁護する側においていると見て間違いないだろう。

4. 「亡命」としての就学

この章では，ディレの行動と語りから導かれるいくつかの論点を扱う。これらの論点はしかし，最終的にひとつの仮説へと収れんしてゆくはずである。その仮説とは，ディレの行動を「亡命」としてとらえることである。もちろんここでいう亡命は，国際間の政治的亡命とは意味合いが異なる。一般に政治亡命者は「本国での政治的理由などによる権力的な迫害を逃れて他国の庇護を求める者」[52]であり，そうした亡命者は通常「反政府活動家や旧政府要人など，政治的対立関係が顕著な，

52) 本間 1995. p.1040

またはその社会的影響力が少なくない者」を意味する。本稿で取り上げる学生たちにこうした政治的影響力は期待できないだろう。また一般的な政治的亡命には，地理的に遠隔な場所で安全を確保するという意味合いがあるが，バンナ学生たちは時には村に帰郷し，学校がおかれる町もバンナの領域内にある。ディレがディメカではなく，バスで丸一日かかるような遠隔の地にたどり着いていれば，連れ戻されることもなかったであろう。

私がここでディレの行動を亡命と呼ぶのは以下のような理由による。第一にさほど遠隔ではないとはいえ，村を離れ，町という異空間に身を置いていること。第二に学校と町での生活は，バンナでの生活規範とはまったく異なる規範を要求するため，必然的にバンナ的規範からの乖離が生じること。そして第三にこうした行為が，往々にしてそれまでの人生のキャリアを抹消することにつながることである。バンナ学生の亡命行為には強弱の振幅があり，また中には亡命的な意識を全く持たない者も存在する。たとえば親の言いつけで学校に入った子供たちには，こうした亡命意識は見られないであろう[53]。

4.1.　聖域としての学校

本節ではカイ・アファール小学校に学ぶボンコという少年の事例を紹介し，学校の「聖域」としてのあり方について考察する。ボンコの事例は，亡命者としてはかなり強い部類に属しているといえる。

ボンコは推定20歳前後で，バンナの東端にあたる Ansonda 地域の出身である。Ansonda もまた近年 SIM の活躍がめざましいとされているが，ボンコ自身は SIM とは関係を持たない。私が会ったのは1999年７月で，ちょうど５年生から６年生への進級試験を終えた直後だった[54]。彼の父親と実母（生物学的母），および実兄（生物学的母を同じくする兄）はすでに死亡しており，学校に入る前のボンコは，傍母（父親の第一夫人）とその息子たちと生活していた。彼は家族の他のメンバーに対してつねに従属的な立場にあり，そうした生活が嫌で村を抜け出し，学校に入ったという。以下，少し長くなるが，ボンコの発言を引用しよう[55]。

「ぼくは村での生活が嫌で寮に入り，勉強をはじめました。母（傍母）と兄たちからたくさん仕事を押しつけられる生活でした。放牧の途中で家畜が行方不明になると，罰として食事が抜かれたりしました。

学校に入ってからも兄たちは頻繁にカイ・アファールにやってきて，村に戻るように説得しようとしました。その度にぼくはブッシュに逃げ込みました。それでもはじめの頃は時々村に帰って放牧を手伝ったりしました。仕事の最中に少しずつくすねたバターを売って，現金にかえたりもしました。なにしろ家族からの援助は一切なかったのです。

一度だけ，村から男の子を１人連れてきて，学校に通わせたことがありました。でも彼は村の男たちに脅されて，すぐに学校を辞めてしまいました。

ある時に成人儀礼[56]を受けるように

53)　本稿では詳しく述べられないが，バンナにおいてキリスト教に帰依するという決断もまた，亡命行為に相当する。

54)　進級試験は６月におこわなわれ，９月中旬の新学期開始までは長い休暇がある。学生寮で生活する現地民学生はこの時期は母村に帰ることが多いが，彼のように母村とのあいだにトラブルがあるような学生がそのまま寮で生活することが多い。私がインタビューを行ったのが７月だったということもあり，結果的に話を聞けたのがそのような学生たちばかりであったということは否めない。

55)　以下，ボンコ，ベザイネシ，ツァハイ，アイケ，シェロ，ブラへのインタビューはカイ・アファールの学生寮で，1999年７月24日から25日にかけて行われた。

強制されました。その時はしかたなく成人儀礼をして，婚約までしましたが，結局また学校に戻ってきました。学校を辞めるつもりはありません。

親族の中でも母（僚母）と兄たちは激しくぼくを非難します。そしてついにはツァマイ・マルシャ（*tsamay marsha*）[57]を使って呪いをかけるようになったのです。このツァマイ・マルシャはぼくの大小便と土とを混ぜ合わせたもので，それが布の袋に入っているのです。誰が作ったのかは分かりません。一度，村に帰ったときに家の梁からそれがぶら下がっているのを見ました。それからは，そのツァマイ・マルシャが「家に戻れ，家に戻れ」とつぶやく声が一日中，頭の中に響いていました。とても怖いんです。ツァマイ・マルシャは殺しはしません。ただずっと「学校を辞めろ，村に戻れ」とささやくのです。授業中もずっとそうで，勉強にも全く集中できません。友達の中にはツァマイ・マルシャの脅しに負けて村に帰ってしまった人も２人います。一体どうしたらいいんでしょう。」

このボンコの語りの中には二つの興味深い内容が含まれている。ひとつは彼が学校と学生寮を親族から離れて暮らすための場所として認識している点である。その点で，彼の動機は，ディレの場合とよく似ている。

二つめは親族が彼を村に戻すべく努力を継続させている点である。親族たちの戦略は二つあると見られる。第一の戦略として，彼らがボンコに成人儀礼を受けさせたことである。通常，男子は成人儀礼を受けた後に婚約し，婚資の支払を開始する。これによりバンナの村で，バンナの女性と結婚し，バンナの子供を作り，バンナとして人生を全うするという不可逆的なサイクルに入るはずであったが，ボンコは形式的な婚約をしたのちに再び学校生活に戻っている。そして村に戻って結婚する意志は，いまのところない。バンナの学生で，学業を全うしようと考えている者に共通しているのは，成人儀礼を受けたり，あるいはバンナのやり方で結婚をして村で生活するという人生設計をしないという点にある。現在までに高校を卒業したバンナはすべて男子であるが，少なくとも彼らの中に成人儀礼を受けたものは１人もいない。そうした中に先のディレ事件にも登場した行政区長がいる。彼は1997年に高校を卒業したが，彼はジンカの町で知り合った女性（バンナではない）と結婚した。彼は1994年にエチオピア正教会に帰依しており，バンナ的な儀礼的手続きとはまったく無縁のところで人生を送ろうとしているのは明らかである。当然ながら妻はバンナ語を解せず，夫妻はアムハラ語を用いている。一般に長く町で生活するほど，バンナの生活に戻りにくくなる傾向があり，ボンコの場合もこのような方向性を志向していると考えていいだろう。ただ，ボンコは一度婚約しており，その履行をめぐって将来問題が生じる可能性はある。

ボンコの親族の第二の戦略としてはツァマイ・マルシャによる呪術的な脅しが挙げられよう。これは学生に「ツァマイ・マルシャを仕掛けた」と知らしめることによって心理的に追いつめる戦略である。ディレの場合を思い出せば，彼女は拉致という物理的暴力によって連れ去られたために，刑事事件として警察が乗り出したという経緯がある。だがツァマイ・マルシャのような呪術的暴力にたいして公的権力が介入する可能性は低い。そのため学生にしてみれば始末に悪いということに

56) バンナの成人儀礼については拙稿（増田 2001a）を参照のこと。
57) マルシャは呪具一般をさすが，その中でもとくに邪悪な目的のために使用されるものをツァマイ・マルシャというようである。私は実見していない。ちなみにツァマイとはバンナの東に分布する民族名だが，なぜこの名前がついたのかは不明である。

なる。

いずれの戦略も町（学校・学生寮）から引き離し村に戻すこと，および当該の個人をバンナの伝統的なライフコースにのせることを基礎としている点で共通しているといえるだろう。ここから思い出されるのは，南部スーダンのヌエル社会において学校教育を受けた男子が，成人年齢に達しても成人儀礼を受けることを望まなくなり，それによって少年でもあり大人でもあるという，社会的に曖昧な位置づけをされざるを得なくなっているという Hutchinson の報告である[58]。もちろん学校教育を受けた者の側には「エリート」としてのアイデンティティがすでに醸成されており，こちらはこちらで，すでに確立された世界なのである。こうした男たちは，大人と少年の両方にまたがっているという意味で“Bull-boy”と呼ばれるが，こうした Bull-boy たちには「男らしさ」や年齢組でのステイタスが欠けていると認識されている[59]。

4.2.　ジェンダー問題として

ディレ事件の背景のひとつに，バンナにおけるジェンダー問題がある。本節では，その点を明らかにするために，カイ・アファール学生寮に住まう２人の女学生の語りを検討する。カイ・アファールの学生寮には1999年には10人のバンナ女子学生がいた。その中で私が聞き取りをできたのはベザイネシおよびツァハイという名の２人の学生であった[60]。

バンナ北部 Chali 出身のベザイネシは十代後半と推定され，以前は SIM 系福音派教会の信者だったが，現在はエチオピア正教に帰依している。

「私の父は家族ともども教会（福音派の）に改宗することを決めました。そして２人の兄と私を学校に入れたのです。しかし兄の１人は長男で，父の財産を受け継ぐ立場にあったのですぐに村に呼び戻されました。もう１人の兄も自発的に学校を辞めてしまいました。

最初の頃，父は私の学校生活をサポートしてくれました。でも１年くらい前から学校を辞めて村の教会活動に参加しろと言うようになりました。私が断ると，父はまったく援助しなくなりましたが，それも仕方ないと思います。いまは（福音派の）教会を抜けて，カイ・アファールのガブリエル教会（エチオピア正教）に入っています。

私はバンナの文化（*Banya dambi*）は悪いと思っています。バンナ女性たちに訴えて，この悪い文化を改善できればと思っています。たとえば父や兄たちは「女は婚資を食べる」といいますが，これは間違いです。婚資を食べる（受け取る）のは男たちであって，女ではありません。近い将来，バンナの女性たちが結婚を自分で決められるようになればと思います。

バンナの女性はひどいところで出産させられます。これも改善しなければなりません。私は12年生を終えたら女性たちのために，毛布や機器を備えた出産施設を整備したいと思っています。よりよい状況で出産してほしいのです。

将来どんな人と結婚するか分かりませんが，結婚するならば学校で教育を受けた人としたいと思います。」

もう１人のツァハイは Alduba 出身で，聞き取りを行ったときには６年生を終えたばかりだった。彼女の父親は４人の妻をもち，あ

58) Hutchinson 1996.
59) Hutchinson 1996. p.290
60) Bezainesh および Tsehay というアムハラ語名を彼女らの仮名としたのは，彼女らの本名がもともとアムハラ語名であり，それを反映させるためである。バンナでも数十年前からアムハラ語の名前をつけることが多くなりつつある。

わせて12人の子供がいた。彼女はまったくの自分の意志で学校に通いはじめたという。

「私はバンナの文化は悪い文化（*sia dambi*, *sia gilo*）だと思います。女は一生懸命働かなければならないのに，男たちだけが牛やお金を手にできるのです。たとえば亡霊婚（*dooki keemo*）やミンギ[61]などというのも悪い文化です。私はそういった悪い文化を離れたくて学校に来ました。

バンナの女性に対して，男たちに立ち向かえ，文化を変えようというのは難しいことです。なぜならバンナの文化はとても古くて，頑固な伝統だからです。変えるためには，バンナの男たちにいろいろ教える必要があります。だからこそ私は学校でたくさんのことを学ぶ必要があるのです。

私はいずれ，出産のためのプログラムを作りたいと思います。バンナの女性は病院に行かないし，ヘルスケアもバンナにまでは届きません。ドンザたちが私のしようとしていることを聞きつければ，きっと邪魔しに来るでしょう。あるいは私の子供を「ミンギの子供」だといって殺しに来るかもしれません。そうなったら私はエチオピアの法律に訴えます。もし両親が私の結婚相手として教育を受けていない男を選んだら，私は拒否します。もしドンザたちが私を連れ去ろうとすれば，警察に駆け込みます。

学校生活は快適で，町での生活にも困ることはありません。私はカイ・アファールに来てから，ガブリエル教会（エチオピア正教）に改宗しました。もっとたくさんの女の子が学校に来て学んでほしいと思います。」

聞き取りの最中，私は彼女らの発言の中に「優等生の公式ステートメント」といったような雰囲気を感じていた。彼女らはバンナの文化・習慣をあからさまに否定してみせ，その悪い側面を「改善」することに高い意義を見いだしている。これを開発志向性と呼ぶことも可能であろう。そこには学校と「法」とエチオピア正教への絶対的帰依が感じられる。こうした発言は，彼女たちの6年あまりにわたる学校経験（そこには町での生活経験，キリスト教徒としての経験などが付随する）の末に形成されたものであるということを忘れてはなるまい。

2人がともに口をそろえて，バンナの出産にまつわる衛生状態の悪さについて語るのも，学校教育の影響であろう。カリキュラムには生活文化についての教科があり，そこでは清潔な環境で生活すること，そしてしっかりした医療を受けることの価値が教え込まれているという。つまり学生たちはカリキュラムによってバンナを相対化する視線を養っているのであり，その意味で学校教育は「価値の開発」[62]なのである。

いうまでもなく，ここではバンナの特有のジェンダー，とりわけ女性たちをめぐる問題が表れている。これもまたディレ事件の背景と多くの部分を共有する。彼女らがバンナ文化を「悪い文化」とネガティブにとらえる背景には，その文化が主として男性によって担われてきたという事実がある。子供を学校に入れたり，学校を辞めさせたり，あるいは連れ戻したりといった決断は男性（とくに父親）によってなされる。バンナにおいて，いったん婚出させられた女性が，結婚を嫌がって婚出先から脱走することはままある。そうした場合，事態の収拾のしかたには状況に応じたいくつものバリエーションが存在するが，基

61) ミンギはバンナにおいて「禁忌に違犯した状態」を意味する。たとえば獣姦を犯した男やインセスト・タブーを破った男女などはミンギとされる。かつてはミンギとされたものは殺されたが，現在では儀礼によって清祓が可能になりつつある。

62) 大塚 1997. p.222

本的には婚出先のドンザが逃げた女性の母村まで連れ戻しに行くことからはじまる。その点からいって，ディレを連れ戻したドンザの対応は，従来からの結婚紛争の解決法を踏襲したものといえるかもしれない。

またベザイネシの語りの中にある，長男であるという理由で村に戻された兄の話からは，男性ジェンダーに関する論点も浮かび上がってくる。バンナにおいて，親の意志で男の子を学校に出す場合にも，長男が選ばれる可能性はほとんどない。長男は父親の財産を受け継ぐべき人間であり，バンナ世界に留まるべきなのである。たとえば役人の説得に応じて子供を学校にだす親，子供が将来政府に就職するなどの期待を込めて学校に送る親などは，長男は自分の出自を引き継ぐものとしてあらかじめ取り分けておき，残った男の子（多くの場合，末の息子）を選ぶのである。

バンナ社会もまた，他の多くのアフリカ社会と同様に，極めて男性中心的な社会である。その父権的特性は，ひとりの政治的リーダーに宿るのではなく，ドンザたちに集合的に備わっている。男女の分業は明確であり，そうした男女間の差違は本質的なものであるとされる[63]。バンナの女子学生は，バンナのこうした側面を他の文化と比較することによって語る作法を次第に身につけつつあり，その「本質」を批判する力を養おうとしているように見える。それはまた，女子学生のみならず，キリスト教徒や男子学生たちにもある程度共通して言えることなのである。

4.3.　アムハラ化

このようにしてみるとき，学校教育を受けることとは，あらゆる意味でバンナの外部に出るということを意味するのだと理解できよう。それは物理的には村を出て，町の学生寮に住むことである。だがそれ以上に重要なことは，こうした移動が，生活規範全体の変更を不可避的にもたらすということである。

たとえば女子学生たちが「バンナの文化は悪い」と表現するとき，「バンナ」概念の対極に位置するのは「ガル *gal*」である。ガルの概念は複雑だが，おおよそ以下のように整理できよう。

まず一般的にガルといえば，民族としてのアムハラを意味するといわれる。ここで彼らがどのような人間をガルと認識しているかを指摘すると，おおよそ次の条件が浮かび上がる。まず絶対条件としてバンナではない人間であること。その上でアムハラ語を話すこと，町に居住すること，キリスト教徒であることのいずれかの条件を満たせば，その人間はガルと認識される。具体的には商人，役所などの職員，ミッションのエチオピア人宣教師，NGO のエチオピア人スタッフ，学校の教師，キオスクやバーのオーナーなどがガルとされることが多い。しかし当然ながら，バンナがガルと呼ぶ対象自らが，自分自身をアムハラと認識しているかどうかは保証の限りではない[64]。

ある非・キリスト教徒の少年は，はっきりと「サバキ（*sabaki*＝キリスト教徒）はガルだ」と述べた。また，以下の会話も興味深いものとなろう。これはある時，道ですれ違ったキリスト教徒の子供たちとの会話である。

子供たち：「○○を捜しているんだけど，見かけなかったかな」

筆者：「ああ，さっきすれ違ったのが○○かな」

子供たち：「それは僕たちの仲間（*naasi wontia*＝われわれの子供）かい。それともバニャ（*Banya*＝バンナ）かい？」

63)　Lydall 1994

64)　こうしたガルの多くがアムハラであることは事実だが，なかにはオロモやティグレといった人々もいる。こうした人々全体を表す日本語を探すとすれば北部人（Northerners）あるいは北部系移民がふさわしい。

少年たちは誰かを捜していたのだが，筆者が見かけた人物を同定するために，まずそれが *naasi wontia*，すなわちキリスト教徒であるか，あるいは *Banya* すなわちバンナであるかを聞いたのである。この場合，筆者が「見かけた」人物について少年たちが聞いているのであるから，キリスト教徒とバンナの差がまず見かけ，つまり洋服を着ているか着ていないか，髪型は編んでいるかいないか，といった点から区別されているのである。そもそも *naasi wontia* という表現は，同じクランや同じ村の人間というように，その人間が身内であることを表現するために比較的柔軟に使用されてきた言葉である。現在ではまたガルに対してバンナであることを意味する表現ともなっている。誰が誰に属するのかというアイデンティフィケーションは非常に状況依存的，文脈依存的であるので，場合によっては私のような日本人ですら，ある外部（たとえばよその村の住人など）に対しては *naasi wontia* として紹介されてもおかしくない。したがってキリスト教徒の子供たちが，服を着ている人間を *naasi wontia* と呼び，そうでないものを *Banya* と呼ぶのは，服装や外見といった文化的要素が身内と外部の弁別指標となっており，それによって，もはや彼ら自身はバンナ的なものを持ってはいないということの表明と受け取ってよい。

子供たちを学校に行かせまいとする親族たちは，学生たちが町での生活が長くなるにつれて徐々にバンナとしてのアイデンティティを失い，ガルの文化に同化してゆくことを危険視している。たとえば先に紹介した行政区長は，自分自身はかつてはバンナであったが，今ではだんだんとガルになりつつあると自認する。実際，ディレ事件において政府・警察側に立った彼を見て，村の人々は「あいつは昔はバンナだったが，今ではガルだ」と述べていた。この場合，「バンナ」の部分に「*naasi wontia*＝われわれの子供」を差し替えても意味は同じである。

このようにガル，あるいはアムハラという民族的属性は後天的に獲得できるものとされる。これはバンナの場合に限らない。Abbink[65] によれば，オモ川下流域のメエン社会とアムハラ移民との間に軋轢が存在するなかで，複数のメエン人が衣服をまとい，新種の穀物を栽培し，新しい耕作道具を導入するなどして，「アムハラのようになる」ことを目指しているという。一般的にメエンはアムハラを「厄介者」と見なし，また彼ら自身がアムハラによって「遅れた人々」と見なされていることを知っているにもかかわらず，である。

同様のことはあるオロモ人の語りの中にも見られる。

> 若い頃に私は正教会で洗礼を受けました。ですが別にイエスを信じていたからではありません。それは近代的なことだったのであり，文明ですらあったのです。アムハラはキリスト教徒で文明化されていたけれど，われわれは異教徒（pagan）で文明化されていなかった。私たちはアムハラのようになりたかった。彼ら（アムハラ）は支配者でしたが，われわれは農民でした[66]。

こうした側面をとらえて，Clapham[67] は「アムハラであるということは，両親が何者であるかということよりも，むしろどのように振る舞うのかという事柄に関わるのだ」といい，これを「アムハラの可塑性 the plasticity of Amhara」と呼んでいる。

このようにアムハラ的な生活規範と価値観

65) Abbink 1991. p.7
66) Eide 1996. p.77
67) Clapham 1988. p.24

に同化していく過程を，ここではさしあたりアムハラ化（Amharization）あるいはエチオピア化（Ethiopianization）と呼んでおこう。同様の現象はたとえばBlackhurstによってAmharicisationと呼ばれ，またDonhamによって「アビシニア化」Abyssinianizationと呼ばれている[68]。異文化間教育学によれば教育とはすなわち「文化化」であったが，エチオピア南部においてはこの文化化が，むしろ特定の文化すなわちアムハラ文化（あるいはエチオピア文化といってもいい）の修得であるのが特徴である。

こうしたアムハラ化は簡単に達成されるわけではない。先に引用したオロモ人の語りには続きがあり，そこではこう述べられているからだ。

> だが，私たちはなにも変えられませんでした。以前と同じように供儀を捧げ，他の農民たちとおなじように祖先を崇めていました。もちろん私たちは教会の前で，そして十字架の前ひざまずきました。ようするに表面的にだけ正教徒となったのです[69]。

だが学生たちがガル＝アムハラになりたくて学校に通うのだとするのは早計だろう。彼らがガルに近い存在であると見なされるのはむしろ，自己と他者の認識が織りなす相互主観的に生成された結果である。バンナに生まれながら外部で生活し，その生活を通して異なる文化を身につけつつある個人は，自分が生まれ育ったバンナ文化を相対化する一方で，自分自身がどのような視線にさらされるのかという問題に直面する。彼ら自身は少なくともバンナ（とくにドンザたち）が自分をどう見るか，および町の人々（アムハラ）が自分をどう見るかという2種類の視線が存在することは分かっている。

その時にどのような対応をとるかはそれぞれの学校体験や考え方，および脈絡に応じて変化しうる。異文化間教育学の基礎的な枠組みを参考にするならば，これは「文化転換型」「文化交差型」「文化分離型（異文化回避型）」という三つのモデルのいずれに属すか，あるいはそれぞれを往還するようなことになるだろう[70]。

4.4.　揺れ動くアイデンティティ

ここでは前節の議論を受けて，学校に入ることが単純なアムハラ化の過程ではなく，むしろバンナ文化を相対化する契機を与え，バンナとガル＝アムハラとの間を往還するようなアンビヴァレントな態度をもたらすことを示したい。事例としては3人の男子学生の話を取り上げる。

アイケはバンナ南部のSele出身で，推定16歳。母親は第二夫人で，子供はアイケ1人である。父の第一夫人には男子が2人いる。インタビューの時点では5年生を修了したばかりであった。正教の十字架のペンダントを身につけていた。

> 村にいた頃はウシやヤギを放牧したり，その乳を搾ったりしていました。牛を連れていると，ジンカやディメカから来たクルマが道を走っていったり，モーターサイクルが走っていったり，空には飛行機が飛んでいたりして，これは一体なんだと思っていました。バンナにいると子

68) Blackhurst 1980, Donham 1986。Blackhurstのアムハラ化は当該社会がキリスト教（エチオピア正教）を受け入れていることを基準にしているのに対して，Donhamのアビシニア化はエチオピア正教に加えて，アムハラの土地制度の導入とアムハラ語の浸透という，より多様な基準を用意している点に違いが見られる。Donhamのアビシニア化の方がここまでの議論との相性がよいが，しかし彼の議論は基本的に社会変化を扱っているのに対して，本稿ではむしろ個人におけるアムハラ化を念頭においている点で，若干の違いが見られる。

69) Eide 1996. p.77

70) 江渕1997. pp.42–51

供はウシやヤギを追い，はちみつを集め，そして結婚する，それしかありません。もっと外の世界を見たいと思いました。そこで自分で学校に行きたいと思うようになった。自分の親族には誰一人学校へ行った者がいませんでした。

あるとき，日曜日でしたが，カイ・アファールに来る用事があって，そのときに役所に行って当時の副議長（バンナ）に入学について相談しました。彼はこう言いました。「バンナの子供は学校に入ってもすぐに村に帰ってしまうので困る。お前もひとまず村に戻れ。本当に学校に入りたいのなら，一度村に戻り，それからもう一度来い」。そのときは言いつけにしたがって家に帰りました。次の木曜日，またカイ・アファールへ来て副議長に頼みました。そこでやる気を認められて，次の学生寮の登録のときに登録させてもらえました。Dizish'sh（村）からきていた3人は村に帰ってしまいました。村へ戻るとまた元の仕事をして，ダンスをしたり，狩をしたり，そういう生活になりますが，自分はもうそういうことができないと思います。

学校に入るときには父には特に反対されず，お金とか食べ物とかの援助をしてくれると言ってくれました。ただ，ほかの親族は「12年生を終えたら村へ戻れ，遠くへ行くな，成人儀礼をやってバンナの女と結婚しろ」と言っています。自分は12年の教育を終えても村へ戻るつもりはなく，もっと学べる道をとろうと思っています。

将来結婚するとしたら，相手はバンナでもバンナでなくてもかまわないが，学校教育を受けた人と結婚したいです。妻が，たとえば料理の仕方を知らなかったりしても，料理の学校へ入れて学ばせればいいと思います。

学校がはじまるとホステルと学校を往復する毎日なので，5年間カイ・アファールにいても，じつは町のことはよく知りません。町の生活と比べると，バンナの生活にも良い点と悪い点があります。バンナでは女をさらったりものを盗んだりすると *DaBi*（賠償）を支払って，ドンザがみんなで食べて解決するけど，町ではこういう仕事は政府がやります。町では朝，昼，夜と3回食事をとりますが，これはバンナとは違います。バンナでは朝に牛乳を搾って飲みますが，町では飲めません。そういう点では村の生活の方がいいです。

12年生まで終えたら，農業省とか病院とか役所とかの仕事をしたいです。

カイ・アファールへきてからガブリエル教会で洗礼を受けました。神様は一つで同じだけど，ミッションは酒やタバコは駄目とかいろいろうるさい。その点，正教は大丈夫だから。

マーケットなどで，知っているバンナの子どもに声をかけて学校へ入るように誘うことがあります。いままで2人の女の子と1人の男の子に声をかけました。その男の子は学校に入りたいのですが，父親や親族が承知しないだろうといっていました。

この内容から考える限り，アイケの就学の動機はバンナからの離脱よりは，「外の世界を見たい」というよりポジティブなもののように見受けられる。したがってバンナ文化に対する無差別の批判よりはむしろ，それぞれの文化の良いところをくみ取ろうとする姿勢がみてとれるのである。彼もまたキリスト教徒となったが，プロテスタントではなく正教を選んだ理由の一つが，ミッションの生活習慣への過度の介入の忌避である点は注目される。彼にとって正教もプロテスタントも同一の信仰（「神様は一つで同じ」）であるにもかかわらず，である。

アイケの語りの中で注目される点をあと二つ指摘しておこう。第一は将来の仕事の選択についてである。彼が言及した三つの仕事はいずれも，すでに高校を卒業した現地民学生たちが就職した実績のある，比較的地元にとどまれる職業である。その意味で彼は周辺民学生の就学→就職の基本パターンを知っており，それ以外に今のところは選択肢を持っていない。第二は結婚相手についてである。他の多くの学生同様，アイケもまた結婚相手として「教育を受けた女性」を条件としている。

次に Dizish'sh 出身のシェロである。父親は先代首長の弟で，政治的にも実力者といわれる人物だ。1人目の妻に3男4女，2人目の妻（すでに死去）にシェロを含む3男1女をもうけている。

父がカバレ（*kebele*）[71] の代表者だったときに，学生寮の方から誰か子供を寮に入れるようにとの申し出がありました。父はいろいろと声をかけましたが誰も応じず，結局私に聞いてきました。私はそのころ Algo（マーレとの境界付近）で父のウシの世話をしていました。私が学校へ行くというと，父はケリで祝福をして送り出してくれました。

同じ村からは3人が学校に入りましたが，2人は村に戻ってしまいました。この2人は今はカバレ経由で募集した兵隊としてエリトリアに行っています。もう1人は一度村へ戻ったものの，また寮に入りなおしています。村から女の子は来ていません。私も勧めたのですが，父親たちから「蜂蜜を地面にぶちまけるようなものだ」といって断られました。

辞めてしまった2人には，もう一度学校に戻るよう誘ってみましたが，もう来たくないと言っていた。1人はそれでも戻ってきましたが，彼の母親が連れ戻してしまった。息子が年下の子と学ぶ（彼はこのとき2年生，シェロは4年生に進んでいた）ことに抵抗があったらしいです。

町では寮と学校を往復するだけで，父にも町には入るなと言われています。学生がブンナベット（酒場）に入ったりするのは良くないと思います。学校教育を終えたら村の近くに住んで，子どもたちに学校に通うように伝えて回りたいです。

父は成人儀礼をしろと言っていますが，まだ学校での勉強が残っているので待ってもらっています。結婚するとしたらまず成人儀礼をして，そして学校に通っている女の子と結婚したいですが，バンナの習慣をちゃんと知っている女の子がいいです。バンナの婚約の儀礼もしたいです。

学校へ入ってからカイ・アファールの正教会に入りました。

語りの中の「父はケリで祝福をして送り出してくれました」とい部分について簡単に説明を加えておこう。ケリは2本の柱に横木を渡してつくった「入り口」のような形をした場所で，通常は先祖を祀るためのものである。シェロの父はここで「ケリを開いて（*kerin bulaise*）」祝福してくれたのである。祝福は口に含んだ酒やコーヒーをスプレーのように吹き出す仕草で，バンナ語で唾液を意味するファツィ（*fatsi*）と呼ばれる。この祝福は年長者とくに成人男性が年少者に対して与えるもので，たとえば婚出する女性などに対してもこのような祝福が与えられるのである。

シェロの語りの中で興味深いのは，他の学生たちと違って，彼がどちらかというと将来的にはバンナ社会へと回帰しようとしている点である。その点でバンナ社会への否定的感情は見られない。むしろカイ・アファールという町の若者の風俗を批判するなど，ガル＝

71) いくつかの伝統村を集めた行政村。

アムハラ世界に対してあまりよい感情を持っていないようである。しかし同時に結婚相手は「教育を受けた女性」を希望しており，またより多くの子供たちを学校に入れようと努力した形跡も見られる。またエチオピア正教会に入るなど，バンナ文化との離別も進めており，二つの文化のあいだで揺れ動くさまがみてとれよう。

次に紹介するブラは他の学生と違って，自発的に学校に入ったのではない。父親には2人の妻がいるが，第一夫人には3男1女，第二夫人には5男3女がおり，ブラは第二夫人の5番目の子供である。インタビュー時点で5年生を修了しており，6年生への進級を決めていた。彼の出身地はSIMの基地があるAlbubaだが，彼自身はSIMとは関係はない。

エチオピア歴1985年（西暦1992–93年）に当時のカイ・アファール役場の区長が父のところに蜂蜜を持参して，子供1人を学校に入れるように説得しました。私が選ばれてカイ・アファールに連れてこられたのですが，嫌だったので一度家に戻ってしまいました。父がもう一度説得したので，また学校に戻りました。

親族たちは自分が学校に通うことをよく思っていません。私は成人儀礼をするつもりはありませんが，親族内ではやれとうるさいです。1人がやらないと後がつかえる，というのがその理由です。でも自分が成人儀礼をしなくても問題はないと思います。将来，結婚するなら，学校で教育を受けた女性と結婚したいです。その女性が成人儀礼をしてくれというならしてもいいし，しないでいいといえばしません。

学校生活で特に困ることはありません。村にいた頃はミツバチの巣箱を作るなどの仕事をさせられましたが，いまはそういうこともありません。父と父以外の親族とでは自分が学校に通っていることに対する態度が違いますが，いまは父のいうことだけを聞いて勉強を続けるつもりです。

ホステルは衣服，せっけん，靴といった生活に必要なものをくれます。住むところもあります。現金はくれませんが，父がときどき小遣いをくれるので，それでお茶を飲んだりしています。

町ではドゥーリエ[72]たちが学校にも行かずにダンスしたりして遊び惚けています。バンナでは夜中にダンスに行っても昼間はちゃんと仕事をしています。町のドゥーリエは嫌いです。

学生寮にはムルシとかゲレブとかマレとか（かつての敵）がいるけど，自分たちにはかつての戦いのことは関係ないので，一緒に飯も食うし，勉強もします。たとえばムルシの女とお互いに好きになったら結婚したっていい。

町と村とどっちの生活がよいかといえば，私は仕事が好きなので，村での生活のほうがあっていると思います。

アルドゥバではSIMの教会からずいぶんと誘われたけど，村に帰ったときに*parsi*（どぶろく）を飲まないわけにはいかないので，カイ・アファールのガブリエル教会にはいりました。正教会はべつに「バンナ文化は悪い文化だ，否定しろ」とはいいません。カイ・アファールに住むMという人がクリスチャン・ファーザーになってくれて，ある日の早朝に教会の外で洗礼を受けました。クリスチャンネームもあります。でも，村に帰ったとき夜中のダンスに誘われれば自分は行きます。

72) アムハラ語，本来は日本語の「シティー・ボーイ」に相当するようなポジティブな含意を持っていが，ここでは不良，与太者といった意味合いで用いられている。

ブラの就学の経緯は，おそらく私がまだインタビューを行っていない年少の学生たちの事情と重なるであろう。カイ・アファール学生寮には，とても自発的意志で学校に入ったとは思えない小さな子供（すべて男子）が数多くおり，自分の意志で就学を決意したものはまだ少数派に過ぎない。その意味で，ブラのケースはむしろバンナ学生の多数派に属するかもしれない。

その一方で私たちは彼の発言の中に，他の学生の語りとの共通点を多く見いだせる。先に紹介したシェロ同様，ブラにとってもバンナ文化は否定すべき嫌悪の対象ではない。

この節で紹介した事例はいずれも，バンナ文化とアムハラ文化を一刀両断に切り分けたりできないということを示している。その意味で，完全なる文化の移行というよりは，二つの文化のはざまで揺れ動くさまを見ることができるであろう。このようなインタビュー結果となった理由は二つ考えられよう。一つはここでの3人がいずれも男子であり，これまでに紹介した3人の女学生たちとは明らかにバンナ社会における処遇が異なることである。いうなれば，男子学生には，勉学に失敗してもまだ帰る場所が確保されているのである。第二の理由としては，私がインタビューした学生がいずれも5年から6年という，公教育の中間点に位置していることである。1年生や2年生と，高等学校に通う学生とでは，文化に対する態度にはかなりの違いがあることは予想される。

4.5.　生活規範の変更

ディレがとった行動はバンナ文化からの離脱としてとらえられる。この場合の「バンナ文化」は伝統的な生活様式と儀礼的実践をさしている。ディレの場合，この離脱は二つの段階を経てなされた。すなわちキリスト教への改宗，そして学校教育システムへの参加である。

まずキリスト教徒としての生活様式に自分自身を合わせて行くことで，ディレはバンナ女性にあまねく課される女性としてのライフコースと儀礼的義務を脱することができる。女性としてのライフコースとは，父親の意志によって婚約し，婚資の支払を受け，結婚し，子供を出産し，家事労働に従事するというものである。儀礼的義務とは，たとえば服装であり，コーヒーを供する際にまとう子安貝の縫い込まれた肩掛け（*qaash*）であり，また性と出産にまつわる禁忌事項などである[73]。そして実際，彼女は結婚を拒否することで，そうした義務を脱することを目論んだのである。

可視的な領域では，そうした「離脱」はなおいっそう明白である。バンナ女性は *aizi* という2枚のヤギ皮を腰にまとい，1枚を前掛けに，もう1枚を尻あてにしている。*aizi* は彼らの手製であり，未婚女性と既婚女性ではタイプが異なる。他方キリスト教徒の女性はバンナ語で *apala* と呼ばれるワンピースを身につけ，決して *aizi* を着用しない。*apala* はマーケットなどで購入される。数年前に子供たちと一緒に改宗した寡婦は，改宗した際に *aizi* の着用をやめ，肩掛け *qaash* を切った。*qaash* を切るという行為はきわめて象徴的であるが，それが改宗した女性に一般的な手続きであるかどうかは今のところわからない。しかしこれを，彼女がそれまでよりどころとしてきたバンナ文化への決別として見ることは，あながち間違いではないだろう。ディレもまた，はじめて学生寮に入ったときには自分の *aizi* を捨てている。また「夫」のところから解放され，警察に保護されてディメカに移動するさいにも，キリスト教徒の女性たちから *apala* を贈られ，それに着替えている。

学校教育が学生たちのバンナ文化からの離脱を促す効果があることも前節で見たとおり

73)　これらについては拙稿で論じている（Masuda 2000）。

である。それが与える価値規範と生活規範は，バンナでのそれとはまったく異なる。

彼らはまず学校において，時計と時間割に従って行動することを学ぶ。村での生活の主体となるのは労働であり，その日その日の目標を達成することが一日の生活スケジュールを律していた。それに対して学校では時計と時間割が彼らの生活を律する。また通常バンナでは食事の時間も回数も日によって，季節によってまちまちなのが，学生寮では一日三度とることが求められるようになる。

学校には，学生寮から無償で支給される衣服を着用し，靴を履いて登校しなくてはならない。村では女子はヤギ皮の *aizi* を，男子は布製の腰巻きで生活していたのであるから，これもまた大きな変化である。しかも近年はエチオピアでも小学校からの制服の着用が義務づけられており，よりいっそう統制的な色合いが強くなってきている[74]。

さらに授業は，アディスアベバの教育省によって認定された教科書に基づいてなされるのであり，バンナ語ではなく公用語のアムハラ語でなされる[75]。教授言語は学年が進むにしたがって徐々に英語に移行され，9年生以降（高等学校に相当）ではごく少数の課目を除いてすべて英語でなされるようになる。しかし学校に通い続ける以上は町のなかで，あるいは学生寮で生活することになり，アムハラ語の生活言語としての実用性は確固たるものとなる。その過程で，バンナ語を次第に忘れていく学生もいる。こうした経験を通じて，ディレもまた「政府＝国家の子」としての自己認識を形成していくのではないだろうか[76]。バンナ文化とバンナの生活規範はこうして徐々に効力を失っていくのである。

多くの研究が指摘するように，エチオピアでは中心から周辺に対する文化的差別が存在してきた。バンナから見れば，それはガル＝アムハラを主とする政府によるバンナ文化の抑圧と映ったであろう。ここでバンナのキリスト教徒がバンナ文化を否定していた事実を思い出そう。またキリスト教徒たちが，他の一般のバンナの人々から「ガル」と同等であると見なされている事実もある。こうした点から，バンナのキリスト教徒とガル＝アムハラ（こちらもまたエチオピア正教というキリスト教徒であることが多い）は，バンナ文化の否定という共通項を持つことが分かる。

教会と学校はこうしてバンナの人々に，オルタナティブな人生のモデルを提供しているといえよう。どちらもドンザによって支配されるバンナ的生活規範から離脱することを求める。オルタナティブ世界へのボーダーを超えることで，彼らはそれまでの人生を抹消し，新たなスタートを切ることが，ある程度は可能となる。もちろん完全なる「人生のリセット」はむずかしく，あのディレすらも事件後には家族との関係を微弱ながら保っている。こうした外部への志向が，彼ら学生およびキリスト教徒たちを，バンナ社会の周辺部へと位置づけているのである。

5. 文化という問題領域

本稿は現代エチオピア南部地域における学校教育の在り方について，主に文化の対立という面から考察をめぐらせてきた。それが，成人教育などのより実践的な教育を重視すべきだとする Tekeste の論と通じる点が多いことも明らかになったことと思う。このアプ

74) Donham はいわゆる「近代」というものが，机の前に座る，時間通りに授業をはじめる，アムハラ文字を学ぶ，ラジオを聞くといったミクロな実践の積み重ねのうえに成立している様子を記述している（Donham 1999）。Donham のこの書物は，エチオピア南部における「近代」の問題を考えるうえできわめて重要であり，それについては別のところで紹介した（増田 2001c）。

75) 国家語としてのアムハラ語の成立過程については Mulugeta 1986が詳細に論じている。

76) 本来ならばここでエチオピア近代教育のカリキュラム分析が必要であるが，それは別の機会に譲る。

ローチの前提は，文化はけっして中立ではないということである。一つの国家の中であらゆる要素が中心から周辺へと構造化されているなかでは，政治的脈絡から逃れられる文化など存在しない。

したがって教育が無色透明な啓蒙などではないことも当然の帰結である。むしろ南オモにおける近代的学校教育とは，ごく少数の現地民エリートを養成するものだったのであり，それはとりもなおさず，彼らエリートが文化的にバンナから離脱し，アムハラ＝ガルの領域に同化してしまったことを意味する。教育も啓蒙も，ここではそれぞれの個人のキャリア構築には寄与したといえよう。エチオピア南部における学校教育には，そうした抑圧的本質が不可避的に備わっている。それではこのような難しい状況に対して，なんらかの具体的示唆をあたえることができるであろうか。

まずは対立の場に対話のための共通の地平を築くことが必要である。そうした地平はしかし，それぞれがこれまでのような自文化中心的な相対主義，あるいは自文化中心的な普遍主義を放棄しない限り拓かれないだろう。自文化に絶対的な価値をおくことなく，かといって他文化に全面的に寄りかかるのでもない，互いが互いを参照し合うような文化の対話が必要なのである。たとえばディレの処遇をめぐる話し合いにおいて，政府や警察はバンナの結婚制度について知悉しながら，国家法とバンナの習慣との溝を埋められるように努力するべきであるし，同様にドンザの側も，自らの文化を相対化しながらなおかつ「国家＝政府の子」というレトリックを正面から受け止めなければならない。

本稿に関する範囲については，まず周辺民にとっての学校教育の意味を問い直すべきである。しかもその議論は教育政策のような包括的・一般的なものではなく，できるだけ個別の事情に即したものであったほうがよい。

この点で異文化間教育学が理論的に導き出す「二文化人」は一つの目標となるであろう。「どちらでもない」という点に力点が置かれる境界人よりは，「どちらでもある」二文化人であるほうが，文化の（場合によっては政治の）仲介者としての役割を期待できるはずだからである。しかし二つの文化が個人のうちに併存し，それを切り替えながら併用することのできる二文化人が出現するためには，双方の文化に応分の敬意が払われるような環境が用意されていなければならない。残念ながら，現在の南部エチオピアにおいて，文化は二者択一を迫るものでしかない。バンナの学生は学校を辞めて村に戻り，バンナ世界に回帰するか，そうでなければ学校に留まり，次第にバンナ文化から切り離されていくかの決断を迫られる。私の観察では，３年生まで学校に留まれるかどうかが，どちらに将来の帰属先を求めるかの一つの分水嶺であるようだ。

では，冒頭の章で提起した問い，すなわち「彼らに学校教育は必要か」にはどう答えればいいのだろう。この問いそのものが学校教育の存在を前提としていることや，それぞれの個人（彼／彼女）ではなく「かれら」を対象としているなどいくつもの欠陥を宿している。にも関わらず当面の答えを「必要である」としておきたい。その理由はあくまでも政治的な理由による。多くの問題を抱えていたとはいえ，エチオピア社会主義政権は，それまで単に搾取する対象であった周辺民に学校教育に接近する機会を作り出した。そのことはもちろん，バンナをはじめとする現地民社会を，構造的に周辺化する契機ともなったわけだが，少なくとも制度のうえで平等をもたらそうと努力した理想は評価できる。

こうしたシステムの整備に対して，現地民の対応は二つに分けられる。一つは否定的な対応で，バンナで学ぶ文化と学校で学ぶ文化を本質的に異なる実体としてとらえるやり方である。そこではコミュニケーションは存在せず，そもそも〈交通〉をおこなうべき〈外部〉すらも消し去られている。もう一つは，

現在の与えられた状況の中でひとまず教育機会に参入し，それを内破していくやり方である。時間はかかるであろうが，後者が現在ではもっとも現実的な対応ではないだろうか。

ではTekesteのいうような成人教育や実践教育を重視し，公教育ではないインフォーマル教育をすることに意味があるか。Tekesteにとってエリートを養成するだけのフォーマル教育は農村には不必要であり，むしろ彼らにとっては日常生活の改善に直結する実践的な教育，実学でなければならないということである。私にはTekesteの主張は，教育問題と言うよりはむしろ内発的発展の必要性を強調しているもののように聞こえる。しかしそうしたプログラムが誰から与えられ，誰によってニーズが測定されるのかを，文化的背景から考える必要は依然残っている[77]。

異文化間教育学および教育人類学はどうであろうか。これらの研究分野は，エチオピア南部の教育研究において，たしかに重要な分析枠組みと概念を提供してくれる。学校教育を含めた教育をひろく文化化(enculturation)として把握する方法論は，個人における主体的な文化の定着や取捨選択を，分析的に取り扱うことを可能にしてくれる。すでにエチオピア教育学においてはこうした側面の心理学的研究が始まっているが，今後はより広い範囲で，より深く追及される必要があるだろう。

後　記

本論の締めくくりに，ディレのその後の足取りについて簡単に記しておこう。1998年9月からの新学期をディレは無事にディメカの学校で迎えることができた。しかしディレが経験したのと同じ事件が他の少女を襲い，この時は警察も少女を取り戻せなかった。ディレを含むハマルとバンナの女子学生はディメカ行政府に願い出て，親族が連れ戻しに来られないよう，ジンカの学校に転校させてもらった。ジンカでは4カ月間学んだが，ジンカ学生寮の風紀があまりに乱れていることを理由に，翌年からはカイ・アファールの学校に転校している。

事件からほぼ1年して，ディレは村を訪れた。村ではもっぱら教会に寄宿し，父親とは数回顔を合わせただけだが，それでも関係修復のきざしはある。しかし村のドンザの中には，ディレが村に姿を見せたことを不快に思う者もおり，村の少女たちはディレに会いに行かないよう，父親たちから固く言いつけられている。

ディレのみならず，本稿で紹介した学生たちは一様に，みな前向きに自分の将来を描いている。本稿で考察したバンナと国家との関係は，数年後，十数年後の彼らにかかっているのである。

附　記

本稿の内容の一部は，「アジールとしての学校と教会」の題で日本ナイル・エチオピア学会学術大会（2000年4月23日，京都文教大学）において，また「彼らの人生設計―エチオピア南部の学校教育と伝統的生活」の題で日本アフリカ学会学術大会（2000年5月28日，広島市立大学）において発表された。また本稿は2000年11月7日にThe 14th International Conference of Ethiopian Studiesにおいて発表された論文“Education in Cultural Conflict: A Case from the Banna in Southern Ethiopia”に，資料と理論的枠組みに関する議論を付け加えた改訂版である。

本研究は平成10年度および11年度の文部省科学研究費助成金による国際学術研究「民族と国家／地方と中央における動態的関係：北東アフリカ諸社会の再編成の比較研究」（代表：福井勝義），および平成11–12年度文部省科学研究費助成金（奨励研究A）「ポスト社会主義エチオピア周辺地域の国家統合におけ

77) 岡本 1997. p.179

る学校教育と識字能力の役割」（代表：増田研）の成果の一部である。関連文献の一部は金沢大学の柘植洋一先生よりご教示賜った。

参 考 文 献

Abbink, J. 1991. "The Deconstruction of 'tribe': Ethnicity and Politics in Southwestern Ethiopia." *Journal of Ethiopian Studies* 24: pp.1–21.

————. 1996. "The challenges of Education in an Ethiopian Agro-pastoral Society: Surma Childhood in Crisis." In Habtamu Wendimu (ed.) *Research Papers on the Situation of Children and Adolescents in Ethiopia*. Addis Ababa University Press. pp.115–135.

Blackhurst, Hector. 1980. "Ethnicity in Southern Ethiopia: The General and the Particular." In *Africa* 50(1): pp.55–65.

Central Statistical Authority. 1996. *The 1994 Population and Housing Census of Ethiopia: Results for Southern Nations, Nationalities and Peoples' Region*.

Clapham, Cristopher. 1988. *Transformation and Continuity in Revolutionary Ethiopia*. Cambridge University Press.

Donham, Donald. 1986. "Old Abyssinia and the New Ethiopian Empire: Themes in Social History". In Donham & James (eds.), *The Southern Marches of Imperial Ethiopia: Essays in History and Social Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.

————. 1999. *Marxist Modern: An Ethnographic History of the Ethiopian Revolution*. Berkeley: University of California Press.

Eide, Øyvind M. 1996. *Revolution and Religion in Ethiopia: the Church and Persecution of the Mekane Yesus Church 1974–85*. Oxford: James Currey.

Fasil Naum. 1997. *Constitution for a Nation on Nations: The Ethiopian Prospect*. NJ: The Red Sea Press.

Hutchinson, Sharon E. 1996. *Nuer Dilemmas: Coping with Money, War, and the State*. Berkeley: University of California Press.

Lydall, Jean. 1994. "Beating around the Bush", In Bahru Zewde, R. Pankhurst and Taddese Beyene (eds.), *Proceedings of the Eleventh International Conference of Ethiopian Studies*, Addis Ababa, April 1–6 1991, Institute of Ethiopian Studies, Addis Ababa University. pp.205–225.

Masuda Ken. 2000. "On The Paternity and Legitimacy of Children in an Agnatic Society: A Case from the Banna of Southern Ethiopia". *Journal of Nilo-Ethiopian Studies* Vol.5/6: pp.25–37.

Minga Negash. 1997. "Decentralization in Education: The Ethiopian Experience" In K. Fukui, E. Kurimoto and M. Shigeta (eds.) *Ethiopia in Broader Perspective: Papers of the 13th International Conference of Ethiopian Studies*. vol.3, Kyoto: Shokado Book Sellers. pp.463–476.

Ministry of Education. n.d. *School Census for Ethiopia 1962–1963*.

Mulugeta Seyoum. 1986. *The Development of The National Language in Ethiopia: A Study of Language use and Policy*. Ph. D Dissertation, Georgetown University.

Rostow, W.W. 1960. *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto*. Cambridge University Press.

Searl, Chris. 1991. *A Blindfold Remove: Ethiopia's Struggle for Literacy*. London: Karria Press.

Tekeste Negash. 1996. *Rethinking Education in Ethiopia*. Uppsala: Nordiska Afrikainstitutet.

Teshome G. Wagaw. 1979. *Education in Ethiopia: Prospect and Retrospect*. The State of Michigan Press.

内堀基光　1997「文化相対主義の論理と開発の言説」川田順造ほか（編）『反開発の思想（岩波講座開発と文化３）』岩波書店，pp.41–59。

江渕一公　1997『異文化間教育学：移民・在留民の比較教育民族誌的分析〔第２版〕』九州大学出版会。

————（編著）1998『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店。

大塚和夫　1997「価値の普遍性と個別性」川田順造ほか（編）『反開発の思想（岩波講座開発と文化３）』岩波書店，pp.19–40。

岡本真佐子　1997「開発と内発」青木保ほか（編）『異文化の共存（岩波講座文化人類学８）』，岩波書店，pp.164–188。

小川　了　1998『可能性としての国家誌：現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社。

小田　亮　1994『構造人類学のフィールド』世界思想社。

小林哲也・江渕一公（編）1985『多文化教育の比較研究：教育における文化的同化と多様化』九州大学出版会。

浜本　満　1996「差違のとらえかた：相対主義と普遍主義」青木　保ほか（編）『思想化される周辺世界（岩波講座文化人類学12）』岩波書店，pp.69-96。
本間　浩　1995「亡命者」梅棹忠夫（監修）『世界民族問題事典』平凡社，p.1040。
増田　研　1998「『国民食』インジェラと食い物の価値」『JANES ニュースレター』8，日本ナイル・エチオピア学会，pp.15-17。
――――　2001a「男として，牛の背を渡る」『季刊民族学』95，pp.4-33。
――――　2001b「武装する周辺：エチオピア南部における銃・国家・民族間関係」『民族学研究』65(4)，pp.313-340。
――――　2001c「書評　Donald Donham *Marxist Modern: An Ethnographic History of the Ethiopian Revolution.*」『アジア経済』42(6)，pp.89-92。

【論　文】

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

茶：薬から嗜好品への道

——技術史・医薬史の研究から見た喫茶の起源・道教の影響——

関　　剣平
(国立民族学博物館)

Tea: The Path from a Drug to a Luxury Good

GUAN, Jianping
National Museum of Ethnology

茶：從藥品向嗜好品的轉化
—從技術史・醫藥史的研究考察飲茶的起源以及道教的影響—

飲茶的起源假說主要有三種，即飲用起源說，食用起源說和藥用起源說。筆者也主張藥用起源說，與衆不同的是從藥學史，技術史的角度展開研究。

在飲茶習俗剛剛形成的魏晉南北朝時代，製茶技術却不簡陋、幼稚，反映了製茶技術在茶葉成爲嗜好飲料之前已經有了充分的發展，筆者認爲這一發展是在藥用領域裏完成的。

從中藥炮製學的角度看，中藥炮製與茶葉加工從意圖到技術都是吻合的。從中藥藥劑學的角度看，茶的烹點就如同中藥的煮散製劑，而使用多種材料的特徵使陸羽以前的茶如同一劑復方中藥。從對於飲茶意識的研究中可以看出，茶作爲羽化登仙的藥餌而被讚誉、飲用，這是茶在剛剛完成由道教養生服食的藥餌向嗜好飲料轉化之後所遺留下來的原始痕迹，也反映了道教對形成飲茶習俗所起的重要影響。本文從製造技術，烹點方法和飲用意識的三個方面，論證了飲茶的藥用起源。

一　はじめに
　1.　飲用起源説
　2.　食用起源説
　3.　薬用起源説
二　製茶技術について
　1.　『広雅』に反映した茶の概況
　2.　各種の茶の製茶プロセスについて
三　炮炙技術からみる製茶
　1.　製薬と製茶の技術と目的
　2.　茶の形態と種類
四　製剤技術からみる茶のたて方
　1.　湯剤と茶湯
　2.　製剤技術からみる茶器と茶のたて方
五　本草学における茶の成立の経緯と原因
　1.　『神農本草経』の成立と薬品の三品の分類
　2.　晋南北朝の薬学書における茶
　3.　『新修本草』に独立項目として登場する茶
六　喫茶と「服食」との意識の比較—喫茶の成立における道教の影響
　1.　茶と宗教についての研究
　2.　喫茶の効果と意識
　3.　養生「服食」の「上薬」
七　むすび

Keywords: tea drinking, luxury goods, drugs, technology, Taoism
キーワード：喫茶，嗜好品，薬，技術，道教

一 はじめに

喫茶の起源についての仮説は主に三つある。それは飲用起源説・食用起源説・薬用起源説である。筆者は薬用起源説を主張するが，これまでの研究とは異なって，技術史と医薬史の角度から喫茶の起源を考察する。

1. 飲用起源説

喫茶の飲用起源説は非常に自然であり，神農をシンボルとした薬用起源説ほど粉飾されなかった。布目潮渢氏は飲用起源説を主張している。

> 私は食べるお茶には幻惑されないで，世界史上まれな，一貫した二千年の喫茶史を考察していきたい。この方法こそ世界飲料史に基本的な一つのパターンを提供することになろう。私はむしろ，人類には渇きをいやしたいという，食料とは別の要求があり，それはまず水，ついでは湯によって満たされる。しかし水ないし湯は，そのままでは飲みにくい地域がある。そのような所では，湯になにか植物的なものを入れて，おいしい飲料にしていくことを考えつく。その中で，中国では，茶葉を加工して製茶したものが，もっともすぐれたものであることを知った。陸羽が唐代の八世紀に『茶経』を著作した目的の一つは，単独の飲料としての茶の優秀性の提唱にあったと見る（布目 1995，pp.29–30）。

喫茶の飲用起源説は，人間の美味しさを求める本能を立論の前提としたものである。茶はアミノ酸などの甘味の成分を含むとしても，基本的に苦くて渋い。よって茶を美味しい飲料とするのは，恐らく現在茶を好む人の見方であろう。人類は苦くて渋い味に対して，本能的に強い抵抗感を持っているので，慣れるまでは好むはずがないからである。だから，美味しい飲料を求めるために水に茶葉を入れるはずはない。喫茶の伝播から見ても，人間は茶にまず拒絶する態度を示す。喫茶風習を受け入れる前の漢民族であれ，少数民族であれ同じである。今の子供たちでさえも同じである。習慣というのは，勉強と練習の過程を経たものに過ぎない。苦味に慣れることを練習しながら，それに関わる文化を習う。茶はこの過程を経てから認められ，嗜好飲料とされたのである。したがって，初めの茶はおいしい飲料では全くなかったのである。茶は嗜好飲料になってから，おいしい飲物へと発展したのである。藤岡喜愛氏は茶の起源を検討して，次のように主張している。

> 最初はうまいものでも何でもなかった。要するに酔っぱらいたかった。これは酒と同じです。酒も最初は酔っぱらうのが目的で，うまいものでも何でもなかった。うまいものになって軽くなったというのは，最近の話や（石毛 1981，p.231）。

茶の「酔」とは最も早く認識され，注目された茶の興奮剤効果である。茶が嗜好飲料とされたのはこの次の段階である。唐代の詩僧の皎然も茶のこの発展特徴に気がついた。彼は「飲茶歌送鄭容」の中に，

> 丹丘の仙人は美味い食物を軽んじる
> 茶を摘んで飲むと羽が生え
> （『天台記』に，丹丘では大茗が産出し，これを服用すると羽が生える，という。）
> その名は仙府に留められ世には知られず
> 仙人の住まいは人が知ることはできない
> 雲山の童子は金の鍋で煮たてる
> 楚人の『茶経』は虚しく名を得る
> 冬の朝・夜半には芳しい草を折る
> 咲き乱れている浅葱色の花は啜られてもまた生じる
> 君の茶が私の病気を払ったことを誉める
> 人の胸の中にある憂え恐れるものを除き去らせる

日が香炉峰に出ても情は尽きず
酔っぱらって虎渓（廬山東林寺の前にある渓）を歩く
高らかに歌って君の出るのを見送る
丹丘羽人軽玉食
採茶飲之生羽翼
（『天台記』云，丹丘出大茗，服之羽化。）
名蔵仙府世莫知
骨化雲宮人不識
雲山童子調金鐺
楚人茶経虚得名
霜天半夜芳草折
爛漫緋花啜又生
賞君此茶祛我疾
使人胸中蕩憂慄
日上香炉情未畢
酔踏虎渓雲
高歌送君出（清・彭定求他『全唐詩』巻821，内府刊本。）

と述べ，まだ世に知られていない時期の茶の役目を解釈している。当時の茶はなお薬用，さらに具体的に言うと，「服食」（道家の養生法。丹薬を服用すること）の「薬餌」として使用される段階にあった。

茶は嗜好飲料として現れた時にはすでに完備した加工技術を持っていた。ということは茶が嗜好飲料になる以前に飲用とは別の分野で発展したことを示している。筆者はそれが薬の分野であると考えている

2.　食用起源説

中村喬氏は羹から喫茶への変容，また茶のたて方について次のように指摘した。

> 中国の茶は羹（スープ）より発達したもので，羹の芼（み）としての，食葉法がその本来の姿であった。ゆえに羹にポタージュとコンソメがあるように，茶にもその両種があり，コンソメ式から飲汁法の茶が生ずる。飲汁法の茶はすなわちコンソメ式の芼（み）を去ったもので，少なくとも三国時代に呉の地方では存在していた。これを茶茸とか茗茶といったらしい。後世の煎茶の祖先である。一方ポタージュ式は，最初葉を研りつぶして煮ていたが，六朝の頃にはその即席化ともいうべきものが出現した。それは茶葉をつき固めておいて，食する際に火で炙（あぶ）って搗いて粉末にし，湯を注いで用いる。ここにそのたて方においていわゆる淹法が生じたのである。その淹法は唐代にも見られるが，盛行するのは宋代で，宋の末茶淹法の祖となる。唐の陸羽の末茶は淹法ではなく煮たてる方法である（中村 1984，p.18）。

布目潮渢氏は，「喫茶というものは，このような羹から独立して，茶だけを用いる単独の飲物となったのではないかと思っている」と言い（布目 1995，p.88），中村氏の考えを支持している。羹も「飲む」という出発点から考えているのではないかと思われるが，羹は料理であり，渇きをいやす飲料ではない。氏の主張する飲用起源説と矛盾している。また，飲用起源説であれ，食用起源説であれ，いずれにしても製茶技術の起源についての説明ができない。

文化人類学によって東南アジアの北部と中国雲南の食用茶が研究されてから，もう一種の喫茶の食用起源説として中国少数民族起源説が現れてきた。日本において，食用起源説は照葉樹林文化と切っても切れない関係とされている[1]。この食用起源説について守屋毅氏は，

> 少なくとも，今日，われわれが確認できるかぎり，〈食べるお茶〉は，終始，〈食べるお茶〉として自己完結した発達の歴

1)　佐々木 1981a を参照。

史をふんできたのであり，それが〈飲むお茶〉に転換することはなかったのである（守屋 1987，p.229）。

と指摘する。また，布目潮渢氏は中国少数民族起源説に対して，以下のように批判している。

(1) 茶葉は果物のように，採取してすぐ食べられるものではない。製茶という加工の技術の開発がともなわないと，茶葉は飲用には用いられない。
(2) 照葉樹林文化の特色としての食べる茶が飲料の茶の先駆形態と考えられている。が，食べる茶が飲料に転化していかねばならない必要性は考えられないし，飲料としての茶の加工技術の中に，食料を経過しなければならない必然性も考えられない。
(3) 中国の膨大な文献の中から探求される喫茶の歴史を無視して，伝統の長い中国文明の根源を安易に求めるような態度には疑問がある。
(4) 文化は一般に高いものから低いものに流れる。
(5) 唐・樊綽『蛮書』（引用者注：唐代雲南の事情を記した書物）によると，当時雲南の思茅で製茶はされていなかった（布目 1995，pp.50-54）。

これらの批判は要点をついていると思われる。氏はまず製茶技術を強調しているが，それは製茶技術の重要性を十分認識しているということを示している。筆者は技術史の研究に基づき，喫茶風習の起源と発展について検討していきたい。つまり，製茶技術は茶樹という植物資源が中国文化と接触していく中で，薬用に適用されるために現れ，具体的な製薬技術として完成し，発展してきたのである。茶が嗜好飲料として流行していったのは，道教の「服食」風習の盛んな勢いに乗じたからである。東南アジア大陸部の北方及び中国南方の少数民族の地域において，地方の風土や文化などによって，食用茶が育てられたのである。

3. 薬用起源説

世界初の茶書である『茶経』を著した陸羽は『神農食経』によって「茶が飲み始められたのは，神農氏からである」（茶之為飲，発乎神農氏。唐・陸羽『茶経』巻上六之飲，萬暦四十年序刊本）と主張して以来，茶と薬とのつながりについては常に注目されてきた。神農は医薬の神と言われるので，茶と薬は関係づけられた。続いて，喫茶の薬用起源説も生み出されてきた。食用・飲用・薬用の三つの喫茶起源説を比べると，薬用起源説は歴史が長く，支持者が多い[2]。また，いくつかの食用起源説において，薬用は食用から飲用への転換の中間段階とされている。そしてそれらは間接的に薬用起源説を補強する役割を担ってきた[3]。

宮崎道三郎は「唐代の茶商と飛銭」の中で喫茶の歴史に言及し，中国と日本の文献を根拠として茶が薬品として用いられる時代があったと主張している（宮崎 1902，pp.501-503）。これに対して矢野仁一は，

その證據として引かれた唐の陸羽の茶経，南宋の古今源流至論讀集（巻之四榷茶）と云ふ書に，又引してある宋の毛文錫の茶譜などが，なんで博士の余程古いと言はれて居る飲茶の初期に，茶が薬品として用られる證據になろう（矢野 1977，p.51）。

と宮崎の根拠として用いている史料の問題を

2) 佐々木 1981b，pp.75-76，陳 1984，p.272，守屋 1987，p.232を参照。
3) 中尾 1976，p.35，荘 1989，p.16を参照。これが食用起源説の根拠と見られるかもしれないが，筆者は直接的な関係ではなければ，食用されたことがあっても食用起源と認めない。

指摘した。

中国で薬用起源説を支持する研究者は，ほとんど陸羽と同じように喫茶の起源は有史以前と考えている。唯一直接，且つ明確に薬用起源説を支持する史料は，次の『本草』（薬物の解説書）と言われる書物からの引用文である。

> そこで『本草』には云う，神農はあらゆる草木を舌で試し，1日に70種ものの毒に遇ったが，茶を得て毒を解した，と。
>
> 『本草』則曰，神農嘗百草，一日而遇七十毒，得茶以解之[4]。

さらに漢・劉安『淮南鴻烈解』（増訂漢魏叢書本。漢・高誘が『淮南子』に注をつけたもの。雑家に属する書物であるが，道家的傾向が全般的に強く，漢代初期の思潮を反映している）巻19修務訓にこれと似た文章がある。

> そのむかし，民は草を嚙み水を飲み，木の実を取り，貝の肉を食べていて，疾病・中毒にかかることが多かった。そこで神農は始めて民に百穀を栽培する技術を教え，土地の適性や乾湿・肥瘠・高低を調べ，あらゆる草木の滋味や，水泉の甘苦を舌で試し，民に利用の可否を知らせた。このときにあたっては，1日に70種もの毒に遇った。
>
> 古者，民茹草飲水，採樹木之実，食蠃蜯之肉，時多疹病毒傷之害。神農乃始教民播種百穀，相土地宜燥湿肥磽高下，嘗百草之滋味，水泉之甘苦，令民知所闢就。当此之時，一日而遇七十毒。

多くの茶文化研究者は，『淮南子』には茶に関する記述がないこと，また『神農本草経』（本草書の祖型）にこの文がないことを無視して，恣意的に茶と神農の関係は古いと決めつけている。

「厚古薄今」の考え方を利用して，自分のすることを古代の聖賢と関連付け，高い評価を得る，という加上法が漢代においてすでに見破られていた。同前掲に，

> 世俗の人は，一般に古（いにしえ）を尊び今を賤しむ。故に道を行う者は，必ず神農や黄帝にかこつけ，かくて初めてその説を人々に受け入れさせることができる。乱世のおろかな君主は，その由来を高遠であると鵜呑みにして，よって尊重する。学問をする者はその論に惑わされて聞いたことを尊重し，互いに正座してこれを称賛し，襟を正して読誦する。これらのことから是非の区別が不明であると見出せる。
>
> 世俗之人，多尊古而賤今，故為道者，必托於神農黄帝而後能入説。乱世闇主，高遠其所来，因而貴之。為学者蔽於論而尊其所聞，相与危坐而称之，正領而誦之。此見是非之分不明。

とある。

これまで長い間，史学や文献学の研究と茶文化の研究とは隔絶された状態にあった。史学や文献学の研究者は茶文化研究の分野に言及することはなかったし，茶文化の研究者もまた厳密な史学や文献学の研究方法で茶文化をより深く研究することを意識しなかった。ようやく周樹斌氏は，前掲神農と茶をつなげる史料が『神農本草経』に存在せず，清・孫壁文『新義録』を援引したものであると指摘した（周 1991）。にもかかわらず陳椽氏はその事実を認めなかった（陳 1994）。なぜなら，その『本草』から引用したと言われる史料が後世のいい加減なものであることを認めれば，喫茶の薬用起源説，ならびに喫茶が悠久の歴

4) 清・孫壁文『新義録』（類書）巻96飲食類，光緒27年（1901年）両湖訳書学堂刊本。『新義録』は『六芸通考』とも呼ばれる。清・陳元龍『格致鏡原』（四庫全書本）巻21飲食類・茶にも同じ記事がある。

史を持つという考えがつぶれてしまうと考えたからである。喫茶の薬用起源説の支持者は多いが，それに関する研究の弱さがここから窺える。

呉覚農も薬用起源説を支持するが，喫茶の起源が有史以前とは考えていない。氏は，「茶が薬用から飲用に転換される時期は戦国もしくは秦代以後であろう」と推論している（呉 1987，p.174）。

薬用起源説は最も影響力を持つ仮説であるにもかかわらず，詳細な論考が行われていない。そこで本稿では魏晋南北朝を中心として茶の製造技術・たて方・飲用意識・効用を明らかにし，薬との関連を検証したい。

二　製茶技術について[5)]

1.　『広雅』に反映した茶の概況

以下三国魏・張揖『広雅』（『爾雅』の体例に倣う辞書）の逸文は貴重な茶の史料である。

> 荊巴（現在の四川省から湖北省にかけての地方）の間では，茶葉を摘んで餅状にする。古い葉は餅状にするために重湯（おもゆ）を入れて作る。茗を煮て飲もうとするときは，まず炙って赤色にし，搗いて粉にし，磁器の中に入れ，湯をこれに注ぎ，ネギ・生姜・ミカンの皮をまぜる。
>
> 荊巴間採葉作餅。葉老者餅成以米膏出之。欲煮茗飲，先炙令赤色，擣末置瓷器中，以湯澆覆之，用葱・薑・橘子芼之(『茶経』巻下七之事)。

この文章は44文字しかないけれども，その内容はたいへん豊富であり，茶を巡っていろいろな側面に言及している。次のようにまとめることができよう。

第一，茶の産地。荊巴である。

第二，材料。もちろん茶の葉であるが，意外に新芽ではなく，成熟した葉を用いている。

第三，茶の種類。餅茶を加工する。

第四，製茶。成形剤を使用する。

第五，たて方。末茶のたて方をもっとも詳細に紹介している。

第六，茶器。磁器の茶碗を使用するとしている。

この『広雅』について矢野仁一は，

> 張揖の『広雅』は至って簡単なもので，そんな詳しい記事のあるものではない（矢野 1977，p.56）。

と指摘し，周樹斌氏は，「もともとそれが唐代以前の人の注釈であり，『広雅』の本文に混入して陸羽に誤引された可能性が極めて高い」と主張し，さらに隋・曹憲の注であると指摘している（周 1993，p.63）。しかし曹憲の注は音釈するだけで，この『広雅』の文の体裁と全く異なっているため，曹憲の注とは言えないと考える。しかし，この史料の出典についてはさらに明確な証拠がないので，明言を避けておく。とはいえ，陸羽以前の文献であることは確かであるから，本研究も依拠することができよう。

『広雅』によって茶を「餅」の形にすることは固形茶の「餅茶」であると分かった。唐・段公路『北戸録』（十万巻楼叢書本）巻2米麪にはいろいろな助数詞について述べられているが，そこでは「茗は薄であり，あるいは夾である」（茗為薄為夾）という。また唐・崔亀図は晋や南朝梁の史料を引いて，「温囗が茗百大薄を献上したこと，また『梁科律』に，薄茗が若干夾あるなどという」（温囗貢茗一百大薄，又『梁科律』，薄茗若干夾，云云）と注した。宋・寇宗奭『本草衍義』（十万巻楼叢書本）巻14には温嶠が茶を献上する記事がある。この「温囗」とは温嶠のことであると考えられる。温嶠によって献上された

5)　製茶技術については陳 1979 に大いに負った。

茗の助数詞は「薄」であり，南朝になると「薄茗」は専用名詞になり，その助数詞は「夾」であった。

晋代には「薄夜」という餅類の食品がある[6]。清・方以智は『通雅』（四庫全書本）巻39飲食に，

> 薄夜とは，薄餅のことである。（中略）荀氏の『四時列饌伝』には，夏の祭りは薄夜で饅頭の代わりにする，という。
>
> 薄夜，薄餅也。（中略）荀氏『四時列饌伝』，夏祀以薄夜代饅頭。

と解釈している。助数詞の「夾」は扁平状のものに用いる。元・脱脱他『宋史』（武英殿本二十五史，以下の正史は同じ）巻490外国伝・天竺には，

> 乾得3年（965年），滄州の僧侶道円は西域から戻り，仏舎利一水晶器と貝葉経40夾を得，献上した。
>
> 乾得三年，滄州僧道円自西域還，得仏舎利一水晶器，貝葉経四十夾来献。

とある。「薄」で「茗」を，「夾」で「薄茗」を数える違いはあるものの，いずれにしても晋代の「茗」と南朝の「薄茗」は固形茶の餅茶であることが確認できる。

2.　各種の茶の製造プロセスについて

以上晋代には固形茶の餅茶を飲んでいたと論じたが，『茶経』に記述された茶も餅茶であるため，それらの製茶技術は改進があっても根本的な変化がないことが考えられる。これを前提として，『茶経』の比較的詳細で系統的な製茶史料に基づき，以下各製茶プロセスについて検討したい。

『茶経』巻上三之造によると，製茶は「よく晴れた日に，摘み，蒸し，搗き，たたき，焙り，とおし，封じ，茶は乾いてできあがる」（晴，採之，蒸之，搗之，拍之，焙之，穿之，封之，茶之乾矣）などのプロセスに分かれている。晴天に採った茶を甑で蒸し，杵臼で砕いてから，型に入れて餅型になるようにたたき，串でそれを通し，焙って乾かしてから貯蔵する。

次は，製茶道具と結びつけ，製茶のそれぞれのプロセスを具体的に考察する。

製茶は茶摘に始まり，その規準は以下のとおりである。

> すべての茶摘みは，2月・3月・4月の間にする。竹の子のような茶は爛石の沃土に生え，長さ4－5寸，スズメノエンドウやワラビが始めて芽を伸ばしたようで，朝露のついたままで摘む。茶の芽は葉群の上に出て，3枝・4枝・5枝であったりするが，その中枝の特に抜きでたものを選んで摘む。
>
> 凡採茶，在二月三月四月之間。茶之筍者生爛石沃土，長四五寸，若薇蕨始抽，凌露採焉。茶之芽者発於蘖薄之上，有三枝四枝五枝者，選其中枝頴拔者採焉（『茶経』巻上三之造）。

茶葉の若さ，柔らかさ，色や大きさや茎の長さなどは，必ず摘む時に正確に把握しておかなければならない。新鮮さは摘み取った後の環境条件と切っても切れない関係にある。陸羽は茶摘について隅なく説明し，その上，『茶経』巻上二之具に茶を盛る竹箱さえも次のように規定している。

---

6)　晋・束晳「餅賦」，唐・虞世南『北堂書鈔』（南海孔氏三十有三万巻堂光緒14年刊本。現存する最古の類書）巻144餅篇十三，宋・李昉他『太平御覧』（四部叢刊三編本。宋代の代表的最大の類書の一）巻860飲食部十八・餅。なお唐・徐堅『初学記』（南海孔氏三十有三万巻堂光緒14年刊古香斎袖珍本。唐代の類書）巻26餅第十七は「薄荘」に，宋・歐陽脩『帰田録』（学津討原本）巻2は「薄持」に作る。

図1　「藍」
元・王禎『農書』巻14農器図譜八，易緯本

図2　「野外の竈」
1990年1月17日，クリスチャン・ダニエルス氏が日景洪県嘎棟郷曼傣村にて撮影。この竈は煙突がない。ダニエルス 1990，p.273

図3　「生活の竈」
清光緒年間「桑織図」蒸繭，中国農業博物館 1995，p.175

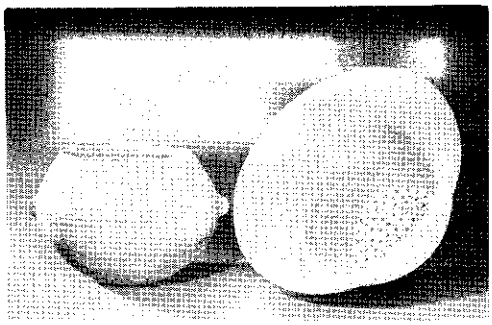


図4　「甑」
中国社会科学院考古研究所他 1980 図版83

籯は，一に籃といい，一に籠といい，一に筥という。竹で編み，5升入るが，或いは1斗・2斗・3斗入るものもある。茶摘みの人が背負って茶を摘む（図1「藍」）。

籯，一曰籃，一曰籠，一曰筥，以竹織之，受五升，或一㪷二㪷三㪷者，茶人負以採茶也。

竹製の容器は風通しが比較的良く，大きさも一定であるため，茶摘の過程で長時間積み上げられ，そして温度上昇に伴う化学変化を防ぐ働きがある。湿度を考慮してであろうか，

図5　「杵臼」
『農書』巻15農器図譜九

図6　「碓」
『農書』巻15農器図譜九

採茶にふさわしい天気についても以下のように厳しく規定している。『茶経』巻上三之造に「その日に，雨が降れば茶を摘まず，晴れても雲があれば摘まない」（其日有雨不採，晴有雲不採）とある。

次に，摘んだ新鮮な葉は甑で蒸す。『茶経』巻上二之具に，

> かまどは煙突があるものを用いず，釜はつばのあるものを用いる。
>
> 蒸籠は木製か素焼きで，腰帯をつけず泥で塗り固める。籃はすのこにし，竹の皮でこれを繋ぐ。蒸し始めると，すのこを入れる。蒸し終わると，すのこを取り出す。釜の水が涸れると，蒸籠の中に水を注ぐ（蒸籠は腰帯をつけず泥で塗り固める）。さらにカジの木の枝が3本交叉してすのこをとめ，蒸した芽や葉を広げ散らす。その精分の流れでるのを畏れるからである（図2「野外の竈」，図3「室内の竈」，図4「素焼きの釜と甑」）。
>
> 竈無用突者，釜用唇口者。
>
> 甑或木或瓦，匪腰而泥，籃以箄之，篝以系之。始其蒸也，入乎箄。既其熟也，出乎箄。釜涸注於甑中（甑不帯而泥之）。又以穀木枝三亜者制之，散所蒸芽笋并葉，畏流其膏。

製造工程中の酸化変色を防止するために，高温で処理することは「殺青」と言われ，高温蒸気を用いるのは「蒸気殺青」といい，「蒸青」と略称する。このプロセスで一方では酵素の活性を破壊し，多フェノール類化合物の酵素性酸化を抑え，茶湯を緑色にする。他方では可溶性糖・ペクチン・アミノ酸の含有量を増し，茶の特有な品質の基礎を固める。また，焙って乾燥させることを通じて香りを出すことができる。「殺青」は現在の緑茶・黒茶・黄茶の性質を決定する基本的なプロセスであるから，特有な色・香・味の形成に決定的な役割を果たすこととなる。

次に，「殺青」した茶葉は杵臼で叩き砕く。『茶経』巻上二之具に，「杵臼は，一に碓という。普段使用しているものでよい」（杵臼，一曰碓，惟恒用者佳）とある（図5「杵臼」，図6「碓」，図7「景洪市曼景法寨花腰傣の杵臼」）。このプロセスの目的は茶葉を叩き砕くと同時に，茶葉の細胞組織をも破壊することにある。その結果茶のエキスが抽出され，茶葉の表面に付着し，たてる時有効成分が湯にすぐ溶け出るようになる。これは現代製茶での「揉捻」（もみ）[7]というプロセスの目的

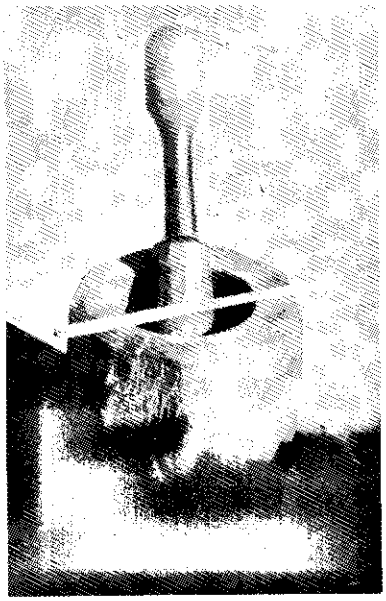


図7　「景洪市曼景法寨花腰傣の杵臼」
尹 1996，図1082　古今東西を問わず杵臼はほぼ同様の形である。

の一つに当たる。現代各種の茶葉加工の中には，たいてい「揉捻」というプロセスがある。「揉捻」は茶葉の形作りを決定する基礎的プロセスである。餅茶・散茶（葉茶）・末茶（餅茶もしくは散茶を粉末にしたもの）などは最終的に粉となるので，それゆえ古代においてはこのプロセスによる造形が美しいかどうかは問題にならない。だから現代の「揉捻」は古代のつき砕きに比べ，ずいぶん複雑で重要なプロセスになっている。

そして次に，つき砕いた茶は型――「規」の中におく。『茶経』巻上二之具に，

> 規は，一に模といい，一に棬という。鉄で作り，円や四角や花形などがある（図8「宋代団茶の型と模様」）。
>
> 規，一曰模，一曰棬，以鉄制之，或円，或方，或花。

とある。まずこのプロセスは，鉄製の「規」を「承」・「台」・「砧」などと名付けられた仕事台の上におき，「規」の中に茶を入れ，力強く叩いて成形する，ということである。

> 承は，一に台といい，一に砧という。石で作る。さもなければ，槐（エンジュ）や桑の木で半分地中に埋め，揺れ動かないようにする。
>
> 承，一曰台，一曰砧，以石為之，不然以槐桑木半埋地中，遣無所揺動（『茶経』巻上二之具）。

この仕事台は石製であれ，半分土に埋め込む木製であれ，ともにしっかりと固定させるために用いる。そのことから叩くときにかけた力の強さが分かる。また，金属製の型を使用するということからも，叩くときにかなりの圧力が加えられたということが窺える。現代では，プレス加工には全て機械を用い，その圧力は80tにもなる。唐・陸亀蒙の「奉和襲美茶具十咏・茶焙」（『全唐詩』巻620）の詩に「四角か円か型によって叩いて作り，順番は層によって取り出す」（方円随様拍，次第依層取）とあり，製茶用の型の多彩さが反映され，さらに「拍」という圧力をかける方法から見れば，現代の「鎚搗圧造」に近いということが見て取れる。いわゆる「鎚搗圧造」とは，棒やこぶしで型の中に茶をぎっしり詰め込むことである。湖南と四川の「辺茶（ちゃ）」[8]は，「鎚搗圧造」の製法を多く使用する。古代餅茶もきっと叩く道具を使ったのであろう。

加圧前，茶が仕事台に粘着することを防ぐために，「檐」を「承」に敷き，その上に型を置き，茶を入れしっかりと叩く。『茶経』巻上二之具に，

7)　揉捻とは茶の組織の破壊，形状，色沢，香気，水分などの調整を図る製造工程である。
8)　辺茶とは辺境地域に向けて加工された茶であり，そのほとんどは固形茶である。

図8　「宋代団茶の型と模様」
宋・熊蕃『宜和北苑貢茶録』，読書齋叢書本

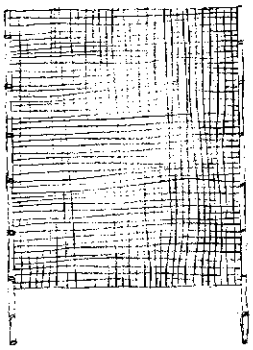


図9 「芘栓」
筆者絵

檐は，一に衣という。織り目の細かい滑らかな絹，あるいは雨衣や単衣の破れたもので作る。檐を承の上に置き，さらに規を檐の上に置いて，茶を作る。茶が出来上がると，持ち上げて取りかえる。

檐，一曰衣，以油絹或雨衫単服敗者為之。以檐置承上，又以規置檐上，以造茶也。茶成，挙而易之。

とある。現在の「茯茶」（湖南産の固形茶の一種）は「木戻」と呼ばれるあかくみを型として使い，茶と型の粘着を防ぐため，まず「木戻」の中に厚紙を敷いて茶を入れて棒槌で形作る。『広雅』では，重湯を用いて成熟した茶葉の成形を完成させると強調している。老葉は柔らかさに欠け粘度が低いので，高圧機械のない魏晋時代には補助的な材料を加えないと形作れなかったのである。

現代の緑茶の揉み工程の中には，柔らかさが程よく，粘度の高い若葉が固まり易くつき易いという現象がある。若葉は粘り気が強いため，米湯を使わなくても手軽に形作ることが出来る。

餅茶はむろん貯蔵に便利であるが，餅型に加工しなくても，乾燥した散茶でも貯蔵はできる。したがって，大量運輸にも便利であることが重要となる。

さて，ここまで出来上がった餅茶は「芘莉」の上に置く。「芘莉」について，『茶経』巻上二之具に，

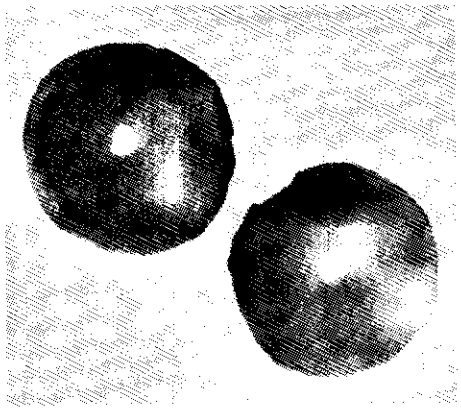


図10 「銭茶」
熊倉 1987，p.192

芘莉は，一に贏子といい，一に筹筤という。2本の細い竹で長さ3尺，そのうち胴体が2尺5寸，柄が5寸である。竹の皮で方眼に編む。農夫の土ふるいのようなものである。幅は2尺で，茶をならべる（図9「芘莉」）。

芘莉，一曰贏子，一曰筹筤，以二小竹，長三尺，軀二尺五寸，柄五寸，以篾織方眼，如圃人土羅，濶二尺，以列茶也。

とある。

その後，「棨」で餅茶に一つの穴をあける。

棨は，一に錐刀という。柄は堅い木で作り，それで茶に穴をあける。

棨，一曰錐刀，柄以堅木為之，用穿茶也（『茶経』巻上二之具）。

そして，穴をあけた餅茶を「樸」で通す。「樸は，一に鞭という。竹で作り，茶の穴に通して，ときほぐす」（樸，一曰鞭，以竹為之，穿茶以解茶也。『茶経』巻上二之具）。それはできたばかりの餅茶の粘着を防ぐためである。

穴のある餅茶はここでできあがる。ちなみ

に穴をあけることから，この餅茶は韓国でその存在が発見された「銭茶」と基本的な形は同じである（図10「銭茶」）。一言に餅茶と言ってもいろいろな形のものが存在しており，「銭茶」のような極めて簡単な形の餅茶は工夫しなかったものであると考えられ，庶民向けの餅茶であろう。

続いて餅茶を「焙炉」で焙る作業に入る。

> 焙は，地中に深さ2尺，幅2尺5寸，長さ1丈に掘り，上に低い塀を作り，高さは2尺，泥で塗り固める。
>
> 焙，鑿地深二尺，濶二尺五寸，長一丈，上作短牆，高二尺，泥之（『茶経』巻上二之具）。

「焙炉」の上に二層構造の棚を置く。『茶経』巻上二之具にある以下の文から，その様子が窺える。

> 棚は，一に桟という。木で焙の上に組み立て，木で両段にし，高さ1尺，それで茶を焙る。茶の半ば乾いたものを下の棚にのせ，すっかり乾くと上の棚に上げる。
>
> 棚，一曰桟，以木構於焙上，編木両層，高一尺，以焙茶也。茶之半乾昇下棚，全乾昇上棚。

「焙炉」に入れる前餅茶を串の「貫」で通し，棚に架けて焙るのである。

> 貫は，竹を削って作る。長さは2尺5寸，茶の穴に通して焙る。
>
> 貫，削竹為之，長二尺五寸，以貫茶焙之（『茶経』巻上二之具）。

焙って乾燥させることは製茶の最後の段階であり，貯蔵に適した状態にするだけではなく，前段階の基礎の上に，さらに茶の独特な色・香り・味を形成させる重要なプロセスである。現在，大規模生産されている固形茶は，陸羽が述べているように途中で上段と下段を置きかえることができなくなり，一回だけ的確に並べ，「焙房」（茶を焙って乾燥させる部屋）にて7～10日間ぐらい焙る。強調すべき点は，古代の餅茶あるいは団茶が元々緑茶であることに対し，現代の固形茶は大抵後発酵茶の黒茶であるので，簡単に同一視はできないということである。例えば，古代餅茶もかなり時間がかかると機械的に理解してはいけない。しかし，焙るのにはかなり時間がかかるということは言えても，具体的にどれぐらい時間がかかるかの詳細な史料は不足しているために，ここでその時間の長さを検証することは無理である。あるいは今後唐代後期及び宋元明時代の製茶技術史の研究から，参考もしくは啓発が得られるかも知れない。

三　炮炙技術からみる製茶[9]

前述の製茶技術は製薬技術に備わっていたかどうか。もし備わっていたとすれば，これらの技術の使用状況はどうであるか。ここでは当時の炮炙技術を検討しながら，製茶プロセスと比較したい。

1.　製薬と製茶の技術と目的

たとえ同じ植物であったとしても，部分の違いによって異なる薬に加工される。そこで，加工前に特定の部分を選択する必要がある。このプロセスを「浄選」という。唐・孫思邈『孫真人備急千金要方』（道蔵本）巻1医学諸論・論合和第七の中に，

> すべての草は根・茎・枝・葉・皮・骨・花・実があり，虫には毛・翅・皮・甲・頭・足・尾・骨がある。あるものは

9)　製薬学については徐 1985に大いに負った。中国伝統製薬学は炮炙学或いは炮製学と言う。

焼く・練る・炮る・炙る必要があり，生熟について決まりがあり，みな後の方法のようである。この方法に従うものは福があり，これにさからうものは災いがある。或いは皮を求めて肉を取り除き，或いは皮を取り除いて肉を求め，或いは根や茎を求め，或いは花や実を求める。処方によって加工し，念入りに洗浄してから，分量を計り，同じようにする。

凡草有根茎枝葉皮骨花実，諸虫有毛翅皮甲頭足尾骨之属。有須焼煉炮炙，生熟有定，一如後法。順方者福，逆之者殃。或須皮去肉，或去皮須肉，或須根茎，或須花実，依方煉治，極令浄潔，然後升合称両，勿令参差。

とある。製薬の「浄選」に相当する製茶のプロセスは「茶摘」と「精製」の二段階に分ける。茶摘が細心ではなければ，「精製」の段階に茶を選別する作業の強度が上がる。細かい茶葉は粗大な薬材を適当な大きさに切るプロセス――「飲片切製」を省き，炮炙プロセスに入る。

漢代の薬物の炮炙は蒸，炒，炙，炮，錬，煮沸，火熬，焼，咬咀，斬折，研，鏟，搗膏，酒洗，酒浸，酒煎，苦酒煮，水浸，湯洗，刮皮，去核，去翅足，去毛などの技術をすでに使用していた（徐 1985，p.2）。同時に，炮炙学の理論も発生し始めた。南朝宋・雷敎は前人の炮炙の経験をまとめ，『雷公炮炙論』3巻を書いた。現在の炮炙方法の分類によると，『雷公炮炙論』には，主に蒸，煮，炒，焙，炙，炮，煅，浸，飛などの炮炙方法がある。その中の蒸には清蒸があり，茶の「蒸気殺青」に使用した加熱方法である。

また馬王堆で豊富な医書が発見された。そのうち蒸の炮炙方法を用いる数は，『五十二病方』に8例，『養生方』に1例，『雑療方』に6例がある。蒸の加熱法が製薬に利用された歴史は長かったと言える（馬 1992）。

言うまでもなく，単なる蒸の加熱方法で薬の炮炙と製茶との何らかの関連性が証明できるわけではない。料理にも蒸の加熱方法が使用されるが，その目的とは，食品原材料を加熱して食べられるようにすることである。薬もしくは茶の利用目的は有形の素材ではなく，無形の有効成分にある。生薬の加工目的の一つ目は，有効成分を生じさせると同時に，酵素の活性物質を破壊して，薬の性質を定めることである。二つ目は，生じさせた有効成分を充分に溶かすことである。このように生薬内部の化学変化を促すと同時に，物理変化も生じさせる。高温での急速加熱により，原材料の水分を急速に蒸発させ，その後急速に冷却し，生薬の組織を膨張させる。そして生薬を脆くさせ，粉々にしやすくする。

薬の炮炙と製茶との目的は完全に同じである。生の茶葉は加工しなければ嗜好飲料になるわけがない。製茶技術は生の茶葉をいかに変化させ，嗜好飲料の茶を作り出したか，表1「龍井茶と熊本産釜炒り茶の香気主要成分の比較」を見れば一目瞭然である。

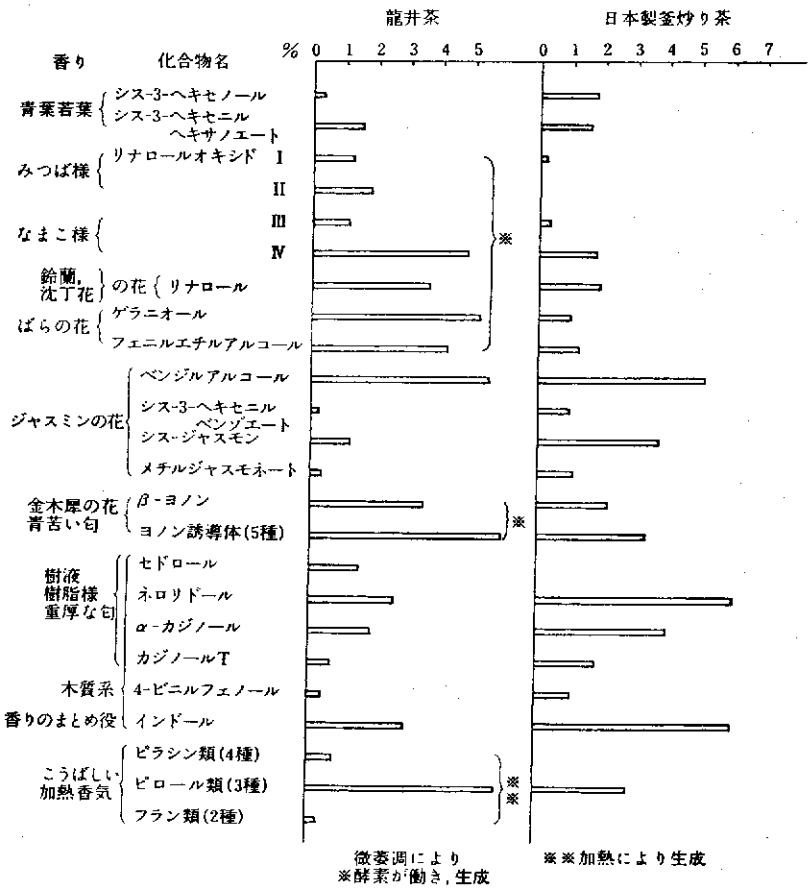
現在の茶の香り・旨味などの成分は嗜好飲料としての製茶技術の発展の結晶であり，長期に渡る茶の職人たちの懸命な追及の成果である。茶を嗜好飲料とした陸羽でさえも，これらの技術水準に到達できなかった。製茶は製薬と技術の基礎が同じであっても，茶の加工目的は茶の嗜好化が進むにつれ，薬物とは次第に大きく異なっていった。

2. 茶の形態と種類

『茶経』には餅茶のほか粗茶も散茶も末茶もあるが，『広雅』は餅茶を飲む情報しか伝えなかった。餅茶は散茶・末茶より加工のプロセスが増えたが，三者の間に根本的な区別はない。また，技術的に簡単なものから複雑なものに至る発展法則によれば，散茶・末茶の生産技術は餅茶より早く現れるはずである。

原産地の茶の消費者に比べると，原産地から遠く離れた消費者の方がより一層高い経済力を持つと言える。なぜなら，運送及び運送

表1　「龍井茶と熊本産釜炒り茶の香気主要成分の比較」



山西 1992，p.43

のための加工プロセスが増えるからである。皇帝をはじめ裕福な餅茶の消費者たちは，逆に餅茶の加工技術の向上を促し，餅茶を代表的な種類とした。この現象は少なくとも宋代まで続いていた。しかし宋代，特に南宋において，中国の経済・文化及び政治の中心は南方に移り，南方出身の文人官僚，裕福な庶民の地位も日ごとに高まってきた。彼らは，原産地で消費した散茶でもともと北方にいる皇帝・貴族の餅茶と対抗する。但し，餅茶もしくは団茶・散茶の盛衰についての具体的な研究はここでは深入りしない。次は再び製薬技術の考察に戻って，多種の茶が存在する技術上の可能性と多種の茶の実情を検討してゆく。

同じ種類の原料でも，異なる加工技術を使用すれば，形・性・味・質が違う薬材に加工できる。茶は一つの薬材として，臨床需要によって異なる加工方法が使用され，嗜好品になった茶もその豊富な加工方法が続けて用いられている。これは現在の豊富な製茶技術の原点であると思う。南北朝にはすでに多種の製茶法が成立していた。

晋・常璩『華陽国志』（四川研究の根本史料である）には「茶」と「香茗」という言葉がある。任乃強氏は，「巴国の時代には茶の製造技術がなかったので，摘み取った茶は，煮たあと汁を出してから飲む。この茶は「茶」と呼ぶ。そして，「香茗」は焙る茶である」（任

1987, pp.6-7)，と主張するが，論拠を全く示さなかった。

実は「香茗」と似た言い方はほかの晋南北朝の文献にも残っている。宋・李昉他『太平御覧』巻867飲食部・茗に引用された『桐君録』は「巴東には別に真香茗がある」（巴東別有真香茗）とし，南朝梁・任昉『述異記』（龍威秘書本）巻上にもほぼ同じ記事がある。宋・唐慎微『重修政和経史証類備用本草』（四部叢刊正編本）巻27菜部上品・苦菜に引用された『桐君録』には「真茶」となり，晋・張華『博物志』（指海本）巻4や劉琨の「与兄子南兗州刺史演書」（『茶経』巻下七之事）にも「真茶」という言葉がある。「真香茗」と「香茗」と「真茶」は同じものではないかと思われる。『桐君録』にはやや詳細な記録がある。

> さらに巴東の間に別に真茶があり，加熱して曲がる。飲めばまた人を眠らせないようにする。恐らくこれであろう。
>
> 又巴東間別有真茶，火煏作卷結，為飲亦令人不眠，恐或是此（『重修政和経史証類備用本草』巻27菜部上品・苦菜）。

「煏」ということは「真茶」の加工法の特徴である。南朝梁・顧野王『玉篇』（古逸叢書本。『説文解字』に次ぐ著名な字書）巻21に「煏は，皮逼の切，火で乾燥することである」（煏，皮逼切，火乾也）とある。すなわち「真香茗」或いは「真茶」は焙って加工された。しかし餅茶も焙って乾燥させるので，焙ることだけでは特徴になりえない。そしてここで言うところの焙るというのは「殺青」のことを言っていると思われる。続いて葉茶の形も特徴の一つである。巻結，つまり細くて縮れた形であるため，この「真茶」は現在の一般的な緑茶と同様である。そしてこの加工法と形からみれば，「真茶」は「炒青」（釜炒り）の茶であろう。

「香茗」・「真香茗」の言い方は「香」を強調している。それも「炒」の「殺青」の方法と繋がる。茶の葉にあるアミン酸と糖分を炒ることによって香ばしい加熱香気が出てくるからである。唐・劉禹錫は「西山蘭若試茶歌」（『全唐詩』巻356）に「しばらくして炒り終わり，室中に香が満ちる」（斯須炒成満室香）と，直接「炒」という文字を用いた上に，「炒青茶」の強い香りも強調した。但し明代以前には「蒸青」の茶が代表的種類であった。明代から製茶者はほぼ「炒青茶」を大事にするようになっている。清・汪灝他『広群芳譜』（康熙47年序刊本）巻21茶譜に，

> 諺に，上手く蒸すことは上手く炒ることに及ばないし，上手く日にさらすことは全部焙ることに及ばない，という。というのも茶は炒って焙るもののほうがよいからである。
>
> 語曰，善蒸不若善炒，善晒不若全焙。蓋茶以炒而焙者佳耳。

とある。炒る・焙るという製茶法を推賞していることがわかるが，「炒青茶」をとりわけ好む理由は詳しく語らなかった。そこで薬の炮炙技術に使用される「炒」の加熱法を考察してみる。

前述した通り「炒」の加熱法は長い歴史を持つ炮炙技術である。明・張仲岩は『修事指南』（清・嘉慶道光間刻本）に薬の炮炙技術をまとめた時，「炒るのは香りの性質を求めるためである」（炒者取芬香之性）と述べている。つまり，炒るという炮炙方法は香りがある薬の加工によりふさわしいという考えである。『孫真人備急千金要方』巻1医学諸論・論合和第七には，「桃仁（トウジン）（モモの種の中の肉）・杏仁（キョウニン）・葶藶（イヌナズナ）・胡麻などいろいろなあぶらを持つ薬はみんな熬（い）る」（桃仁・杏仁・葶藶・胡麻諸有脂膏薬皆熬）とある。元・王好古は『湯液本草』（古今医統正脈全書本）に，「方言に熬というのは，すなわち今の炒ることである」（方言熬者，即今之炒也）と解釈した。

表 2　「後漢から北宋にいたる代表的な臨床医学書にみえる各剤形の処方数」

書　名	湯	散	丸	煎	酒	膏	丹	計
傷寒論	97	7	5	1	—	—	—	110
金匱要略	130	30	20	2	—	—	—	182
千金要方	645	224	268	50	68	58	1	1314
千金翼方	597	251	222	21	53	107	—	1251
外台秘要	1761	747	717	83	245	156	—	3709
和剤局方	140	239	281	2	—	22	71	755
本書方	56	115	124	3	4	5	13	320
三因方	337	261	188	7	17	23	47	880

岡西 1963，p.291

表 3　「湯剤が全処方に占める百分率」

書　名	%
傷寒論	88.18
金匱要略	71.42
千金要方	49.08
千金翼方	47.72
外台秘要	49.39
和剤局方	18.54
本書方	17.50
三因方	38.29

山田 1985，p.81

植物の種を炮炙する時には，香りを増やすために，大量に炒る方法を使用する。さらに「種に逢えば必ず炒る」（逢子必炒）の諺もある。『集験方』に，「栝楼（カラスウリ）の実は，洗ってから水切りし，炒って香りを出して熟させる」（栝楼子，淘洗控乾，炒令香熟）とある（『重修政和経史証類備用本草』巻 8 草部中品）。

「炒青茶」が高く評価された理由も，炒るという方法が茶葉の多くの香りを引き出すからであろう。明・屠隆は『茶説』（万暦41年刊茶書本）に六安茶を評価する際，「品質はまた優れているが，薬用にすると最も効く。ただ炒ることに向いていないため，香りを起こすことができず，味が苦い。茶の性質は実によい」（品亦精，入薬最効，但不善炒，不能発香而味苦，茶性実佳）と述べ，六安茶の香りがない原因は，「炒」の殺青技術がうまく出来なかったからと考えていた。すなわち茶も薬も香りを増すために，同じ技術――「炒」を使用した。方以智は『物理小識』（四庫全書本）巻 6 飲食類・茶に各種の茶葉の製法をめぐって「名茶は皆炒るが，岕茶（浙江省長興県羅岕山の茶）だけ蒸して焙る」（名茶皆炒，岕以蒸焙）と総括した。「炒青」が一番よく使われる製茶法になるのは確実であった。現在中国茶の主流である「炒青茶」も薬用に始まり，しかも「蒸青茶」と同じぐらい長い歴史を持つと思われる。

中村喬氏は晋や隋唐時代に異なる茶のたて方と茶の湯の色があったことを指摘している（中村 1984，pp.4–9）。異なる茶のたて方を用いることや，たてられた茶の湯の色が違っていることは，使用された茶の種類が異なることを示すものと筆者は考えている。

四　製剤技術からみる茶のたて方[10)]

現代の薬剤学における主な研究内容は，臨床用薬の要求や生薬の性質，また生産，貯蔵，運輸，携帯，服用などの需要に応じて，薬を適宜な剤形に作ること，正確な使用を指導することである。ここで，製剤技術の角度から茶のたて方を考察したい。

1.　湯剤と茶湯

湯剤は最も早くて広範に使われる薬の剤形であり，後漢から普及し始め，現在に至るまで主な剤形である。漢・班固『漢書』巻30芸文志・方伎には32巻の『湯液経法』が著録されている。それは湯剤の専著で，しかも32巻という膨大な量である。しかしながら散逸したので，詳細に考証できない。岡西為人氏は後漢から北宋にいたる代表的な臨床医学書にみえる各剤形の処方数をまとめた（表 2「後漢から北宋にいたる代表的な臨床医学書にみえる各剤形の処方数」）。山田慶児氏はそれに

10)　薬剤学については曹 1986に大いに負った。

よって全処方のなかに占める湯剤の割合を計算した（表3「湯剤が全処方に占める百分率」）。

山田慶児氏が『武威漢代医簡』（後漢前期の文献）と『五十二病方』（西暦前3世紀半ばの文献）を研究した際，湯剤の数量及び湯剤処方に使った薬剤の数量について，以下の結論を出した。すなわち，『五十二病方』における三百事例余りの治療方法の中で，湯剤が10数例あり，しかも一つの湯剤に使用された生薬がわずか1，2種だけであった。これは後世の複方薬剤とかなりの差がある。『武威漢代医簡』には，1例しか湯剤の例がないのに，10種類ほどの生薬を使用している（山田 1985，p.83）。

以上の研究成果によれば，両漢の湯剤処方は単方から複方へ発展したことが特徴である。周一謀氏も「この簡単な複方（引用者注：2種の生薬しか使わない湯剤処方）は，単方から複方へ発展する中間形式であり，単方から複方へ発展するとき一つのプロセスを経ていると言える」と述べている（周 1994，p.151）。

布目潮渢氏は茶湯と薬の単方湯剤を同一視している。

> 前漢では，いまだ湯薬がさほど普及しておらず，後漢末になって，湯薬は『傷寒論』に見られるように急速に普及した。しかしその湯薬には，一種類だけで飲むものは少なく，少なくとも数種類，時には十種類以上も配合している。これに対して，喫茶は茶葉を加工したものを一種類だけで，湯の中に浸して飲む点では，かなり湯薬とは異なる点があることをここでは指摘するにとどめよう（布目 1995，p.37）。

しかしながら，氏は『五十二病方』での湯剤処方が1，2種類の生薬を使用することを見落としている。また単方の方は割合古いが，非合理なわけではない。処方は病状によって為されるので，複方湯剤を主とした『傷寒雑病論』のなかでも，1，2種類の生薬を使用する処方があるし，『隋書』巻34経籍志でさえ，単方専著の『王世栄単方』の記録がある。

たとえそのようであっても，後漢以降の単方の有無は喫茶が薬用に始まるか否かにとって，大した問題ではない。布目潮渢氏の立論が認められない主な原因は，洗練された茶のたて方を，複方湯剤と比較することである。陸羽の提唱によって茶のたて方は大きく変わった。唐・皮日休は「茶中雑詠序」に，

> 然れども季疵（陸羽）以前，喫茶というと，必ず混ぜてこれを煮る。かの野菜を煮て啜るものと同じである。
>
> 然季疵以前称茗飲者，必渾以烹之，与夫瀹蔬而啜者無異也（『全唐詩』巻611）。

と陸羽以前の茶のたて方について述べている。具体的になにを混ぜたか皮日休は言わなかったが，陸羽のほうは比較的に詳しく述べた。

> 或いはネギ・生姜・ナツメ・ミカンの皮・ゴシュユ・薄荷などを入れて長時間沸かし，或いは茶を揚げて滑らかにしたり，或いは煮て沫を取り除く。これらは溝川の間の棄て水になるだけなのに，このような習俗は止まない。
>
> 或用葱・薑・棗・橘皮・茱萸・薄荷之等煮百沸。或揚令滑，或煮去沫。斯溝渠間棄水耳，而習俗不已（『茶経』巻下六之飲）。

世の中に流行っている陸羽に見下げられたこの茶は「複方」と言えるのであろう。また『広雅』に紹介されている茶のたて方もネギ，生姜，ミカンの皮を使用したし，『新修本草』にも収録されている。言う所の「飲料にする場合はゴシュユ・ネギ・生姜などを加えるとよい」（作飲加茱萸・葱・薑等良。『重修政和経史証類備用本草』巻13木部中品）がそれで

ある。多様な補助材料を使ったことはこれらの茶湯の共通点である。この共通点によると，これらの茶湯は「複方」に属するのであろう。陸羽までこのたて方は広く使われていた。

茶以外の補助材料を加えない茶のたて方は，陸羽が強く提唱したおかげで，唐以降から普及してきた。少なくとも陸羽が『茶経』を著した頃には，まだ彼自身が努力して提唱した結果が広く行われることはなかった。

2.　製剤技術からみる茶器と茶のたて方

茶をたてる前に，粉に加工する。それは薬剤学の分類から見ると，湯剤の「煮散」に属するはずである。「煮散」とは叩き砕いた生薬を水に入れ，煮て，かすをこしてから飲むことである。湯剤を他の剤形と比べれば，「煮散」の方は生薬が粉々に砕け，さらに完全に且つ素早く生薬の有効成分を抽出し得るのである。生薬も節約できるし，服用にも便利である。漢・張機著，元・成無已注『注解傷寒論』（古今医統正脈全書本）巻2傷寒例第三にある「四逆湯」や巻6辨太陰病脈証並治法第十にある「半夏散及湯」などの処方は，生薬を粉々に砕いて湯剤を造る。すなわち「煮散」である。

伝統的な薬を砕く道具に，石磨や杵臼や薬研や沖鉢などがある。砕けた薬材は「篩析」のプロセスを経て，篩（ふるい）で適当な細さの薬粉に分けられた。

粉に加工しなければならない剤形は「煮散」に限らず，散剤・丸剤・膏剤なども生薬を粉に加工する。漢代では，様々な方法で生薬を粉に加工した。『五十二病方』の中に，

別方，芍薬を砕き，半杯の口で，3本の指先でつまみとって，これを飲む。

別方，冥蚕の卵1尺4方，衣魚（しみ）7匹，長足14匹を用いる。蚕の卵を熬って黄色くし，すりつぶして蚕の卵を砕き，白魚と長足もすりつぶし，3種を適当に取り，一緒に2升の酢を混ぜ合わせ，先に食事をしてこれを飲む。嬰兒は1升を飲む。

一，屑勺（芍）薬，以口半栝（杯），以三指捽（撮），飲之。

一，以冥蚕種方尺，食衣白魚一七，長足二七。熬蚕種令黄，靡（磨）取蚕種治。亦靡白魚，長足。節三，並以醯二升和，以先食飲之，嬰以一升（周1994，pp. 298, 304）。

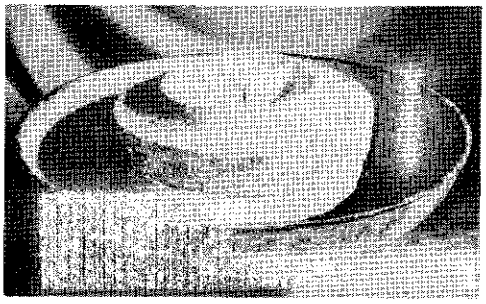


図11　「石磨及び銅漏斗」
中国社会科学院考古研究所他 1980，図版106

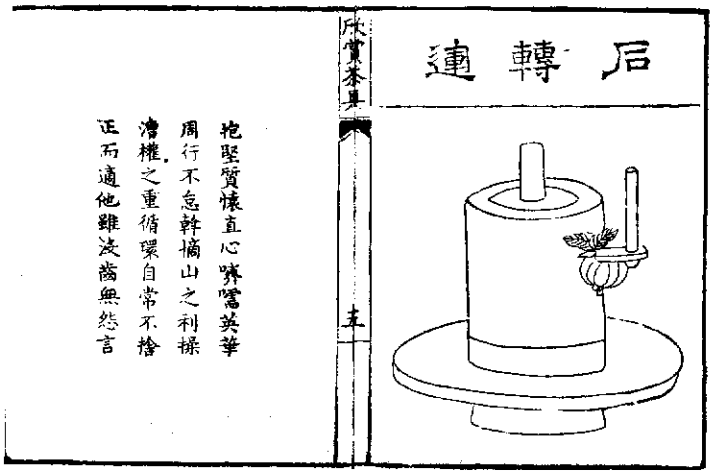


図12　「石転運」
明・茅一相『茶具図贊』，欣賞編本

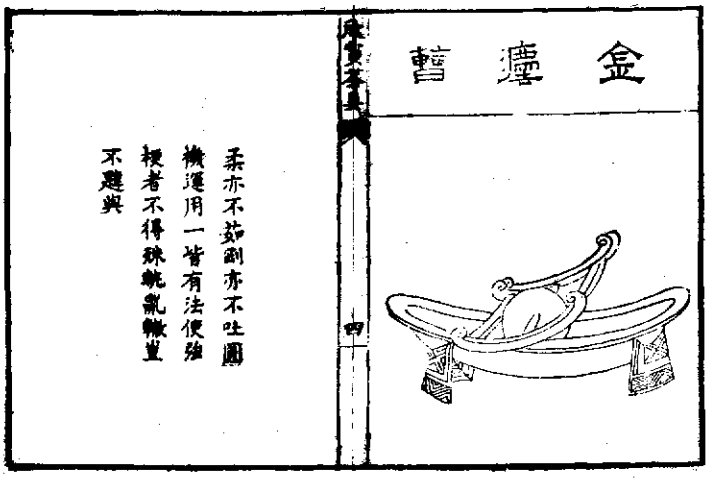


図13 「金法曹」
『茶具図賛』

とある。赤堀昭氏は，「屑と靡についての詳細はわからないが，靡は磨に通じると考えられる」と主張している（赤堀1985，p.134）。周一謀氏や馬継興氏も靡を磨と見なす。これらのことは，劉勝墓より出土した銅漏斗のついた石磨を思い出させる（図11「石磨及び銅漏斗」）。石磨で茶粉を加工する史料は宋代に大量に現れ，末茶の加工効率と細かさが大幅に高まった（図12「石転運」）。

植物の花や葉などの粉砕はもともと難しくない。さらに製茶過程で茶葉の繊維が膨張してくる。また水分が少なければ少ないほど，茶葉が脆く粉砕しやすいため，茶をたてる前に，餅茶を再び乾かす。魏晋南北朝時代に，どのような道具で餅茶をひき砕いたかについては記録が残されていない。恐らく，唐代のように茶碾（薬研）を使っていたのであろう。茶碾について，『茶経』巻中四之器は，

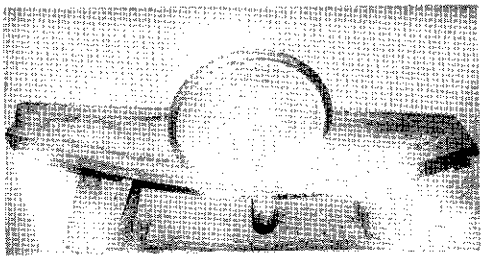


図14 「薬碾」
1997年8月21日，上海豫園童涵春薬房にて筆者撮影。現在では電動式の機械があるため，この「薬碾」はすでに長い間使われていない。

碾はミカンの木で作るが，次ぐものは梨・桑・アブラギリ・ハリグワで作る。内は円くして外は四角にする。内が円いのはよく廻るようにするためであり，外が四角いのは傾かないためである。内には墮を容れ，外に他の木はない。墮の形は車輪のようで，輻はなくて軸がある。碾の長さは9寸，幅は1寸7分である。墮の直径は3寸8分，中の厚みは1寸，ふちの厚さは半寸である。軸の中央部分は四角いが，取手の部分は円い（図13「金法曹」，図14「薬碾」）。

碾以橘木為之，次以梨・桑・桐・柘為之。内円而外方，内円備於運行也，外方

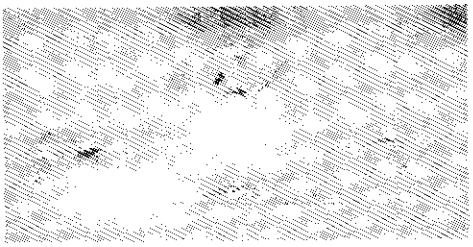


図15 「漢白玉石の茶碾」
徐 1994，図版

制其傾危也，内容
墮而外無余木。墮
形如車輪，不輻而
軸焉。長九寸，濶
一寸七分。墮径三
寸八分，中厚一寸，
邊厚半寸。軸中方
而執円。

という。

考古発掘成果によって，唐代において茶碾の実情が一層明らかになった。まず，河北晋県唐墓で漢白玉石の茶碾（図15）が出土し，続いて西安法門寺で「鎏金鴻雁流雲紋銀茶碾」（図16）が出土した。

宋代になってから，団茶の粉砕に「砧椎」の使用が記録されている。宋・蔡襄『茶録』（万暦40年刊茶書本）下篇論茶器に，

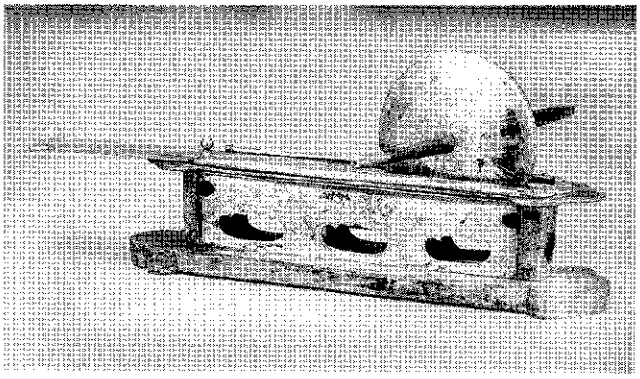


図16 「鎏金鴻雁流雲紋銀茶碾」
新潟県立近代美術館他 1999，p.90

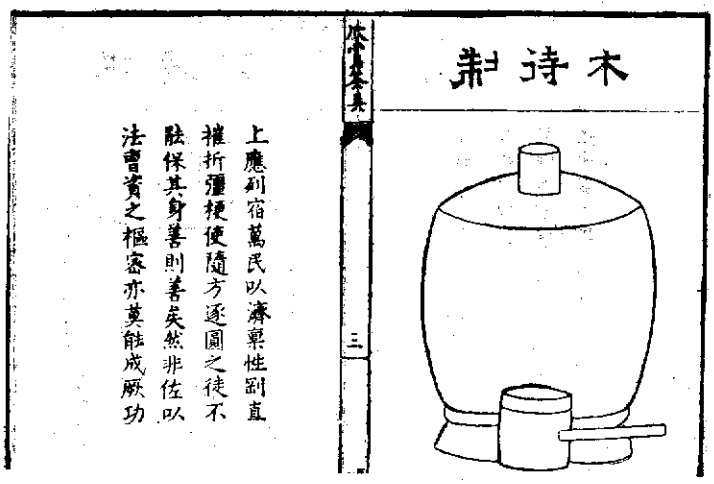


図17 「木待制」
『茶具図賛』

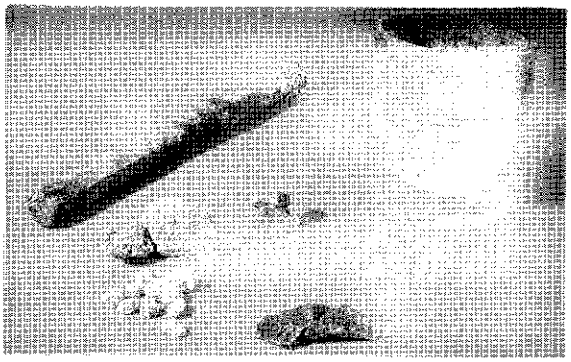


図18 漢代の「衝鉢」と薬石
光復書局他 1994，p.115

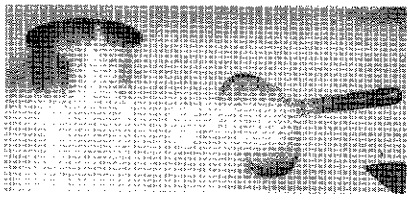


図19 「銅製衝鉢」
1998年９月，筆者は上海銅響器商店で購入，撮影。「衝鉢」の形は漢代からほとんど変わらなかった。

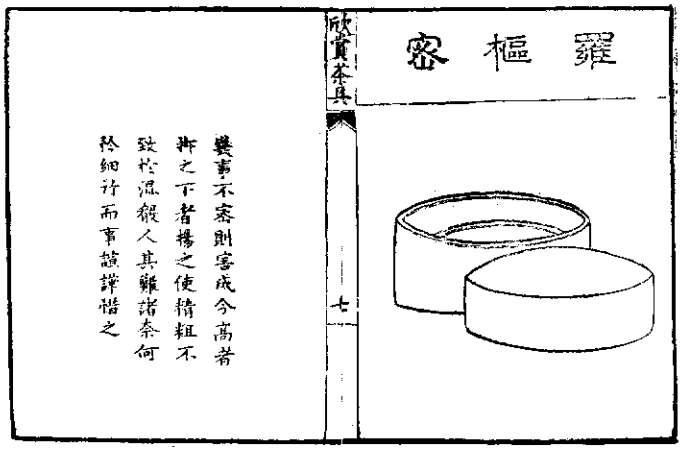


図20 「羅樞密」
『茶具図賛』

打ち台と槌は茶を打ち砕く道具である。打ち台は木で作り，槌は金また鉄で，具合のよいものを用いる（図17「木待制」，図18「漢代の衝鉢と薬石」，図19「銅製衝鉢」）。

砧椎蓋以砕茶。砧以木為之，椎或金或鉄，取於便用。

「砧椎」は製薬道具で言えば，現在は「沖鉢」と呼んでいるものに当たる。餅茶は「砧椎」を使用する必要がある。「『茶経』の茶——製茶法の復元」の討論会で，筒井紘一氏は「（餅茶を）くずす時には最初から碾（薬研）に入れるんじゃなくて，何かで搗かなきゃいけないんでしょう」と推論した（布目他 1979，p.38）。

宋代以前，**団茶の粉砕に使用する「砧椎」**に関する記述が見当たらなかったが，薬の製剤に用いられる道具を検討してみる。『孫真人備急千金要方』巻1医学諸論・論合和第七には「散」の加工について，

散は，まず碪槌で充分に打ち砕いて，臼に移す。そうしなければ十分に搗くことができない。

散者，先以碪槌極打令碎，乃入臼，不爾搗不熟。

とある。また『玉篇』巻22石部には，「碪は，知林の切，搗く石である。砧は，同上である」とある。これらの南朝と唐代の史料によると，「散」を加工する時，粉砕のために二つのプロセスがあり，また使用された加工プロセスと道具は宋代の末茶と同じである。

「煮散」の剤形は，宋代にかけてますます使用されるようになってきた。李興培氏の統計によると，『和剤局方』での288個の処方の中に，散剤は241例があり，その中に「煮散」は132例もある，という（李 1983，p.15）。「煮散」は散剤における相対的な比例が大きかった上に，絶対的な数量も多くて，非常に目立つ。この特徴について宋・沈括は『夢渓筆談』（学津討原本）巻26薬議に，

湯剤・散剤・丸剤はそれぞれ適するところがある。昔の処方では湯剤を用いることが最も多く，丸剤や散剤を用いることはとりわけ少ない。煮散（散薬を煮る）は昔の処方に用例はなく，ただ近頃の人だけがこれをする。（中略）近頃は湯剤を用いることが本当に少なくなり，湯剤にすべきものを皆煮散にしている。

湯散丸各有所宜。古方用湯最多，用丸散者殊少。煮散古方無用者，唯近世人為之。（中略）近世用湯者全少，応湯皆用煮散。

と指摘している。

ひき砕いた生薬の細さは，薬物の有効成分を抽出するスピードと抽出率につながる。煮

散が広く使用されたことによって，生薬の粉砕技術が進歩したと思われる。それと同時に，末茶の細かさも向上させた。同じ量の茶湯をたてる場合でも，茶の粉の使用量を減らすこととなった。非常に高価な宋代団茶にとって大切な技術革新であろう。

餅茶を適当な細かさの茶粉にする最後のプロセスは，薬の製剤にある「篩析」と同じ役目を果たす。このプロセスでは「羅合」を使用して，細かい茶末に分離する。『茶経』巻中四之器に，

> 羅や末茶は合子（蓋物）で蓋をして貯え，茶杓を合子の中に入れて置く。羅は大きな竹を割って曲げ，うすぎぬをこれにかぶせる。合子は竹の節で作り，或いはコウヨウザンを曲げて漆を塗る。高さ3寸，蓋は1寸，底が2寸，口径は4寸ある（図20「羅樞密」，『茶具図賛』）。
>
> 羅末以合蓋貯之，以則置合中。用巨竹剖而屈之，以紗絹衣之。其合以竹節為之，或屈杉以漆之，高三寸，蓋一寸，底二寸，口径四寸。

とある。

末茶の細かさについて，『茶経』巻下五之煮に，「粉末の上等なるものは，その粉が精米のようであり，粉末の下等なるものは，その粉がヒシの実のようである」（末之上者，其屑如細米。末之下者，其屑如菱角）とある。曖昧な比喩で末茶の細かさの認識にあまり役立たないが，加工方法から見れば，極細の粉を加工できるわけである。ただ，唐代には「滓方」という茶器があった。『茶経』巻中四之器に，「滓方は，すべてのかすを集めておくもので，製法は滌方のようで，5升を入れる」（滓方，以集諸滓，制如滌方，処五升）とある。これによれば，陸羽の末茶は多少のかすを濾したものであろうと推論できる。そうであれば，魏晋南北朝及び唐代前期に流行した末茶は，陸羽の末茶と比べると，餅茶の粉砕程度が同じであっても，ネギ・生姜などの補助材料を加えるため，かすの量が多いはずである。

したがって，末茶をたてるまでの加工技術は，薬の製剤技術の中にも完全に同じことが見出せる。末茶が嗜好化・娯楽化された宋代においても，末茶加工に使用する道具もやはり薬の製剤道具と同じである。製茶技術と製薬技術，そして末茶のたて方と薬の製剤方法，この二重の一致は，一層喫茶の薬用起源説を証明している。

五　本草学における茶の成立の経緯と原因

本草書は今まで茶の薬用の基本文献として，広く使用されている。といっても，薬用起源説の提唱者が本草学における茶の成立の経緯と原因に関して考察したわけではない。それに対して飲用起源説を主張する布目潮渢氏は，茶の『新修本草』に確立し始めた特徴を指摘して，喫茶の薬用起源説に反論した。以下では晋南北朝時代の薬学書を中心として，茶が本草書に確立する経緯を新たに考察する。

1.『神農本草経』の成立と薬品の三品の分類

魏晋時代には，多種の『神農本草経』が現れた。『重修政和経史証類備用本草』巻1序例・梁陶隠居序に，

> 魏晋以来，呉普・李当之等はさらに増減し，収録される薬材は595種や431種や319種などがある。三品の薬材が混同したり，冷熱の性質が間違っていたり，草石の分別がなくなったり，虫獣の区別がないものがある。また主な効能はおのおの多少の差があり，医者は皆知ることができないため，知識の程度の差ができた。
>
> 魏晋以来，呉普・李当之等更復損益，或五百九十五，或四百三十一，或三百一十九，或三品混糅，冷熱舛錯，草石不分，虫獣無弁。且所主治互有多少，医家不能

備見，則識致浅深。

とある。陶弘景のいわゆる「三品」は薬の評価分類法であり，その主旨は道教の養生観念である。同前掲に，

上薬は120種あり，君臣関係で言えば君であり，養命に効き，これで天に応じている。毒はなく，多く長く服用しても人を害せず，身を軽くし気を益し，老いずに寿命を延ばそうとするものは，上経をもととする。中薬は120種あり，臣であり，養性に効き，これで人に応じている。無毒と有毒を使い分け，病気をとどめ虚羸を補おうとするものは，中経をもととする。下薬は125種あり，佐使であり，治療に役立ち，地に応じている。有毒のものが多く，長く服用できず，寒熱の邪気を除き，積聚（病名）を治し疾病を癒そうとするものは，下経をもととする。

上薬一百二十種，為君，主養命以応天，無毒，多服，久服不傷人，欲軽身益気，不老延年者，本上経。中薬一百二十種，為臣，主養性以応人，無毒有毒斟酌其宜，欲遏病補虚羸者，本中経。下薬一百二十五種，為佐使，主治病以応地，多毒，不可久服，欲除寒熱邪気，破積聚愈疾者，本下経。

とある。ところで当時の本草書の編集者はこの三品の分類法を厳しく遵守しなかった。その原因は二つあると思われる。

一つ目は判断を間違って三品分類の原則に違反したのである。新しく導入され利用された大量な薬物に対して十分な認識が欠けていることから生じたミスである。

二つ目は方術・道教の養生意識と純粋な医学の間には相違があって，三品分類法をかなぐり捨てたことである。

こういう状況は南北朝時代まで続き，医者がこのような『本草経』によって正確に処方するはずがない。しかし新薬物が普遍的に使用されるにしたがい，薬学の知識と臨床の経験は日ごとに積み重ねられ，『蜀本草』や『南海本草』が次々と刊行された。そして，『神農本草経』を充実・改正する能力が備わり，以前の混乱した薬学著作を整理することが主張されてきた。そこで，道教徒で医薬学家の陶弘景が，この歴史的な使命を担うこととなった。彼は道教の養生の観点から出発し，やはり納められた薬物を三品に分けながら，薬物を細かく玉石・草木・虫獣・果・菜・米食・有名未用などの七類に分類した。彼以前の本草類医学著作をうまく整理し，現在の『神農本草経』を編纂した。

今いろいろの本草経を総合し，煩雑と簡易を調べまとめ，『神農本経』の三品あわせて365種を主にする。また『名医副品』の365種を加え，合わせて730種ある。精と粗皆取り入れ，またもれることがない。箇条書きに分別し，物類を区別し，ともに名称・時節・用度，産出の地方，及び仙経道術に用いることを注釈する。この序録と併せて７巻となす。先哲に追い従がうことはできないけれど，思うにやはり一派の撰著であろう。

今輒苞綜諸経，研括煩省，以『神農本経』三品合三百六十五為主，又進『名医副品』亦三百六十五，合七百三十種，精粗皆取，無復遺落。分別科条，区畛物類，兼注詔時用，土地所出，及仙経道術所須，并此序録合為七巻。雖未足追踵前良，蓋亦一家撰製（『重修政和経史証類備用本草』巻一序例・梁陶隠居序）。

さらに，陶弘景は『神農本草経集注』を編集した。『神農本草経集注』の体裁は唐宋時代の本草著作に継承され，千年後の明代になって初めて李時珍による新しい体裁に後釜を譲った。陶弘景の成功について，山田慶児氏

は，「三品分類が歴史的支持を得た要因には，薬物学的有効性のほかに社会的有効性とでもいうべきものがあった」と指摘したが（山田 1995，p.14），この意見に対して，筆者は薬学を道教の養生の思想と有機的に結びつけさせたものと理解している。

2.　晋南北朝の薬学書における茶

晋南北朝に茶が議論の対象として登場した。『神農本草経』の菜部の中で，五つの薬材が上品に位置づけられ，その中の一つに「苦菜（ニガナ）」が挙げられている。「苦菜」に対して陶弘景は，『桐君録』を援引して注釈している。

> 多分これがすなわち今の茗であろう。茗の一名は茶であり，また人を眠らせなくし，冬を凌いでしぼまない。□は益州にしか生えないが，益州には苦菜があり，まさに苦蔵である。上巻上品の白英の下ですでにこれを注釈している。『桐君録』にいう，苦菜は3月に扶疏で生え，6月に花は葉から出て，茎はまっすぐで黄色である。8月に実る。実が黒くなって落ち，根がまた生え，冬でも枯れない。今の茗はこれに極めて似ている。西陽・武昌及び廬江・晋熙の人々は皆好み，東人はつねに青茗を作る。茗は皆泡があり，これを飲めば身体によい。おおよそ飲物は，茗およびほかの木の葉，天門冬（クサスギカズラ）の苗とサルトリイバラなどがあり，すべて人に益をもたらす。余った物はみな性質が冷ですばやく効く。さらに巴東の間に別に真茶があり，加熱すると曲がる。飲めばまた人を眠らせなくなる。恐らくこれであろう。世の中にはサワフタギやクロツバラを煮て茶として飲んでいるが，みんな冷性である。また南方には瓜廬木があり，これも茗に似，苦くて渋く，その葉を取って屑にし，煮てその汁を飲むと夜通し眠れない。塩を煮る人はもっぱらこれを飲むことにたよっているが，交州や広州では最も重んじ，客が来るとまず設け，香りを加えてまぜるものである，と。

> 疑此即是今茗。茗一名茶，又令人不眠，亦凌冬不凋。而□其止生益州，益州乃有苦菜，正是苦蔵爾。上巻上品白英下已注之。『桐君録』云，苦菜三月生扶疏，六月華従葉出，茎直黄，八月実，実黒落，根復生，冬不枯。今茗極似此。西陽・武昌及廬江・晋熙皆好，東人正作青茗。茗皆有浮，飲之宜人。凡所飲物，有茗及木葉，天門冬苗并拔葜，皆宜人，余物並冷利。又巴東間別有真茶，火煽作巻結，為飲亦令人不眠，恐或是此。俗中煮檀薬及大皂李作茶飲，並冷。又南方有瓜廬木，亦似茗苦渋，取其葉作屑，煮飲汁即通夜不睡。煮塩人惟資此飲，而交広最所重，客来先設，乃加以香芼輩（『重修政和経史証類備用本草』巻27菜部上品）。

『桐君録』のこの文に録されている植物は茶樹だけでない。これらの植物はそれぞれ似ているところがあるが，茶を中心としていることは，茶に深い関心を寄せていたことを反映している。また，「俗中に檀薬及び大皂李を煮て茶を作って飲む」（俗中煮檀薬及大皂李作茶飲）に見て取れるように，茶は植物を加工した飲物の象徴になったようである。これは茶の普及程度を反映している。

実はほぼ同じ時代に，晋・郭璞は茶―苦菜と槚―苦茶とを分別した。彼が『爾雅』に注釈するとき，茶に関する記録を木類の「槚は苦茶である」の下に収めた。

> 茶の樹は小さく梔子（クチナシ）のようであり，冬に葉が生え，煮て羹を作って飲むことができる。今早く取るものを茶と，遅く取るものを茗と呼ぶ。茗は一名荈であり，蜀の人はこれに苦茶と名づける。

樹小如梔子，冬生葉，可煮作羹飲。今呼早采者為荼，晩取者為茗，一名茸，蜀人名之曰苦荼（『爾雅注疏』巻9釈木，清南昌府学刊本）。

また『爾雅注疏』巻8釈草に『詩経』を引用し，「荼は苦菜である」といい，野菜であることを明言している。茶樹の特徴について，陸羽も「茶の葉は梔子のようである」（『茶経』巻上一之源）といい，郭璞の喩えを踏襲した。陶弘景は茶の「眠らせない」の薬性や「冬にも枯れない」の習性，「益州」という産地などの要素に注意したが，あいにく植物の分類を心がけなかった。彼は先人のように「草や石を分けず，虫や獣をわきまえない」（草石不分，虫獣無弁）の誤りを繰り返した。陶弘景は茶を「苦菜」の条目にした時，「疑うらくは」と言い，確信のないことを表明した。陶弘景は実際新しい薬を『神農本草経』に増補したにも関わらず，茶についてはそうせずに，無理に「苦菜」条の下に属させた。勿論，茶と苦菜は似通っている所があるというのは原因の一つと見られるが，彼が見るところ，このように優れてよく飲用される茶は『神農本草経』の中にあるはずと確信していたのが主な原因であろう。

前掲『桐君録』を読むと，その著者が持っていた茶の情報は雑多であることがわかる。その混乱を生じる原因は「苦菜」「茶」の解釈にある。現在でも「茶」と「茶」の関係についての研究はまとまることができておらず，古人を責めることができない。陶弘景にとって茶や苦菜といえば，他の植物ではなく，まず茶が連想された。いわば当時の性・味・効果の類似した薬物の中に，茶は最も代表的なものであることを反映している。だからこの誤りは，茶に対する認識がまだ浅いことを表わしているのと同時に，南北朝時代における喫茶の普及状況も語っていると思われる。

陶弘景が茗を本草書に収めたことは，茶の薬物学研究が正式に中国薬学の領域に取り入れられたことを表している。彼の茶についての論述は，南北朝時代の認識水準を反映している。そして「服食」の立場から茶を評価し，茶を上品な薬物に見なすのは魏晋南北朝時代の特色を映している。

3. 『新修本草』に独立項目として登場する茶

陶弘景から1世紀余りの後，再び『神農本草経』を書き直すことが主張された。

唐の顕慶（656—660年）中，監門衛長史の蘇恭はまたその間違いをひろいとり，上表して不用の文字をけずり，誤りを正すようと要請した。そして司空英国公の李世勣等が蘇恭と是非をまじえ考えるよう命じられ，さらに114種を増やし，部類に分け，拡大して30巻とした。世にはこれを『唐本草』という。

唐顕慶中，監門衛長史蘇恭又摭其差謬，表請刊定。乃命司空英国公李世勣等与恭参考得失，又増一百一十四種，分門部類，広為三十巻，世謂之『唐本草』（『重修政和経史証類備用本草』巻1序例・嘉祐補注総叙）。

この『唐本草』はすなわち『新修本草』である。茶について，陶弘景による「茶」「苦菜」の誤解がまず改正された。

苦菜（ニガナ）について，『詩』に，「誰か茶を苦しと言う」といい，また，「董茶は飴のようである」という。皆苦菜の異名である。陶弘景はこれを茗という。茗は木の類であり，とりわけ菜の類ではない。茗の春に採るものは苦茶であり，音は遅遐の反，茶の音ではない。考えるに，『爾雅』釈草に「茶は苦菜である」といい，釈木に「槚は苦茶である」という。二つのものはまったく別であり，例にならない。また，『顔氏家訓』に，「按ずるに，『易通卦験玄図』に，苦菜は寒

い秋に生え，冬と春を経て，夏になってやっと成熟する。一名は游冬であり，葉は苦苣（ノゲシ）に似て細い。切断すれば白い汁があり，花は黄色で菊に似ている」という。これは『桐君録』とほぼ同じであり，今どこにでもある。苦蕺は龍葵（イヌホオズキ）であり，俗にまた苦菜と名づけられ，茶ではない。

苦菜，『詩』云，誰謂荼苦，又云，堇荼如飴，皆苦菜異名也。陶謂之茗。茗木類，殊非菜流。茗春採為苦荼，音遅遐反，非荼音也。按『爾雅』釈草云，荼，苦菜。釈木云，檟，苦荼。二物全別，不得為例。又『顔氏家訓』按『易通卦験玄図』曰，苦菜生於寒秋，経冬歴春，得夏乃成。一名游冬，葉似苦苣而細，断之有白汁，花黄似菊。此則与『桐君』略同，今所在有之。苦蕺乃龍葵尓，俗亦名苦菜，非荼也（『重修政和経史証類備用本草』巻27菜部上品）。

そして，陶弘景の誤りが指摘されると同時に，「木部中品」のなかに，茗という条目も新たに添えられた。

茗は苦槁である。茗の味は甘苦，性質はやや寒で，毒はなく，瘻瘡に効き，利尿作用があり，痰・熱・渇きを除き，人の睡眠を少なくし，春にこれを摘む。苦槁は下気に効き，体に滞った食物を消化する。飲料にする場合はゴシュユ・ネギ・生姜などを加えるとよい。

茗，苦槁。茗味甘苦，微寒，無毒，主瘻瘡，利小便，去痰熱渇，令人少睡。春採之。苦槁主下気，消宿食。作飲加茱萸・葱・薑等良（『重修政和経史証類備用本草』巻13木部中品）。

茶は『桐君録』から『神農本草経』，そして『新修本草』に至ってやっと独立した条目で本格的に本草書に取り入れられた。茶の薬物性能に対する研究にとっても，新しいスタートである。しかしながら，薬の品級は上品から中品に下がった。

南北朝時代に，茶が上品の薬物と見なされたことは，陶弘景の注や他の文献によって裏付けられる。それと相応して喫茶風習も貴族・文人の風流とされた。唐代になると喫茶風習がさらに普及したが，薬学の視点で茶の品級は中品に降格された。表面的には茶は医学の世界での発展と飲食の世界での発展と調和しないようであるが，実はそうではない。喫茶風習が日に日に普及するにつれ，茶の神秘的なベールが取り除かれた。茶の仙薬典故が詩文に繰り返し使用されたが，魏晋南北朝よりも唐代の喫茶はいっそう世俗化・嗜好化・娯楽化した。「服食」風習の衰微は人々が冷静に，理性的に様々な薬物の真実の性味を思考する環境を作り出した。薬学者はより客観的な薬学の観点から，茶に新しく薬の品級を定めることになった。

布目潮渢氏は薬用起源説を疑う際に，

茶はこの（引用者注：『新修本草』）新附品のなかで，茗として始めて中国の本草書に独立項目として登場するのである。中国の本草書ないし医書の数百年の伝統の後に，茶に関する記事が始めて正式に文献の中で独立して現われるのである。この事実を，喫茶は薬用から飲用に転じたと見る人はどのように考えられるのであろうか。私が本書執筆の主旨とは別の本草書の歴史を紙数を費やして述べてきたのは，茶に関する記事が，七世紀後半の，後に述べるような喫茶が普及してから独立項目として本草書に入ったということを指摘するためである。喫茶が薬用から飲用に転じたと考える人は，わが国の最初の茶書，栄西の『喫茶養生記』に養生の語があったり，イギリスにおける喫茶の普及の当初に，薬効のあることが宣伝された結果にまどわされたのでは

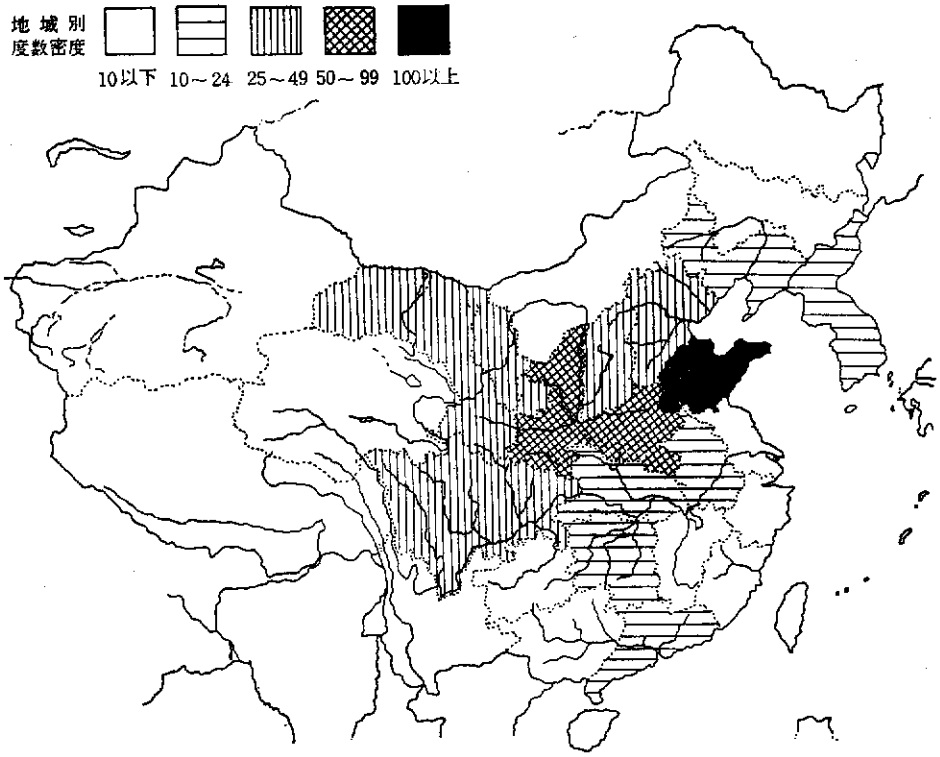


図21 「『名医別録』記載の薬物の産地・地域別密度図」
森村 1985, p.394

なかろうか（布目 1995, p.41）。

という。

氏に指摘された研究方法上の問題点は，確かに今日でも喫茶の薬用起源説の研究に存在している。喫茶の薬用起源説を論述するたびに，唐宋時代の茶が薬に用いられる実例を挙げて，自説を補強することがよくある。ところが布目潮渢氏によると，もし喫茶が薬用からであれば，最初の『神農本草経』或いは他の医書の中に茶が記録されるはずである。陶弘景もこのように考えて「苦菜」の下に茶を配ったと思われる。この推論に対して筆者はつぎのように考えている。

中原文化にとって茶は「舶来品」であり，『神農本草経』が書物になる時代に，茶はまだ中原文化の仲間入りを果たしておらず，中原の薬学家は茶を知らない状況にいた。だからこそ，彼らの手によって書かれた早期の本草書に茶が採録されなかったのであるまいか。

漢代には医書だけではなく，医書以外の文献にも確実な茶の史料が出ていない。茶の史料がしばしば見え始めるのは魏晋時代である。その中で『桐君録』はもっとも詳細である。そして南北朝に陶弘景のおかげで，茶は本草の世界に辿り着いた。よって「独立した項目」にこだわるなら，初唐になって初めて茶が『新修本草』に登場したことは遅かったと言えるかもしれないが，それにこだわらなければ茶は南朝梁の『神農本草経集注』にすでに登場しており，『新修本草』より一世紀以上遡ることができる。もしその源の『桐君録』を追

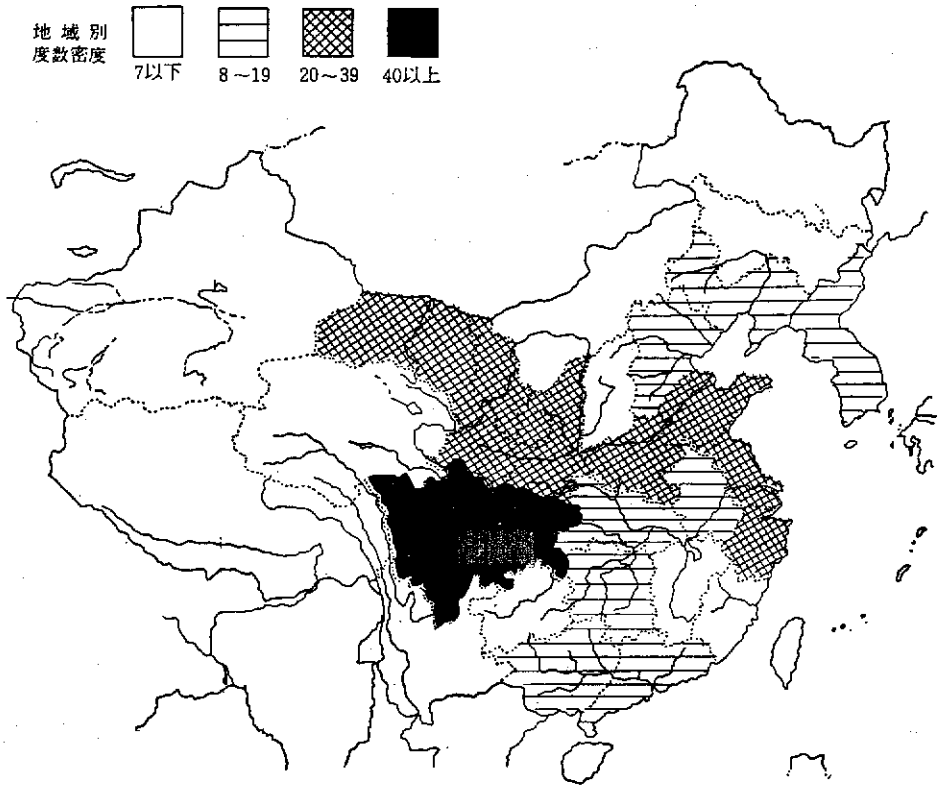


図22 「『神農本草経集注』についての陶弘景注による薬物の産地・地域別密度図」
森村 1985，p.395

究すれば，さらに遡ることができる[11]。

そして茶が医薬学著作に現れる時代は，医学以外の文献と比較しても，遅くはない。しかも，医学以外の文献でも，茶の薬用効果はよく強調されていた。茶が医薬学著作に現れる時代は遅くないが，あらゆる中国の文献と比べるとかなり遅く現れた。この特徴は，茶及び喫茶風習が比較的新しく，黄河文明に注目されたということを反映しているのである。

揚子江流域の文化や物産が北方に伝わるに従って，茶と喫茶風習も中原に入ってきた。『神農本草経集注』に収録された陶弘景の注と『名医別録』によって，この時代の中国薬物に関する南北産地構造の変化を知ることができる。森村謙一氏は『名医別録』と陶弘景の注に記録している薬の産地構造を比較した後，以下のようにまとめた。

> 陶弘景の当時すでに，『名医別録』やその他（例えば，幻の『神農本草』でも）の，成立事情からして北方系で，中原文物に中心を置いた「原本草体系」ではもう古く，医療に供する際の適合性もいくぶんぼけてきていたのであろう。いうまでもなく，本草でペアを組む医療のほうも，「別録」成立の時代から数百年を経

11) 矢野 1977，p.63：南北朝初期，宋斉のものであろう。布目 1982，p.256：晋代のものとしてもよい。

る間に著しく進歩した。『神農本草経集注』編纂の理由としてよく言われる，既存の本草書の簡の忘佚・錯綜甚しいといったことはもちろんあっただろうが，いっそう根本的に，こうした有名名物学の新書編集の必然性があったのである。もっと具体的に図二（引用者注：本文の図21）を眺めても，四川地域を上流に，江蘇・浙江地域を下流に，それぞれ両極とした，揚子江文化の一端を如実に示している（森村 1985，pp.401-402）。

「『名医別録』記載の薬物の産地・地域別密度図」（図21）は『名医別録』での薬物の分布状況を反映している。その中で密度が最も高いのは山東半島であり，次は河南と陝西である。みな黄河流域に位置する。「『神農本草経集法』についての陶弘景注による薬物の産地・地域別密度図」（図22）は陶弘景の注での薬物の分布状況を反映している。密度が最も高いのは四川であり，図21と比較すれば江蘇・浙江の薬物が広西と同じように，無から有に至り，より数量的に充実されてきた。また，西北の寧夏と甘粛も数量は，かなり上昇した。したがって，陶弘景の注での薬物分布の最大の特徴は，揚子江流域を主とした南方薬物が大量に充実してきたことである。いわば陶弘景は南方，特に四川と江蘇・浙江地区の薬物が次第に開発されてきたことを前提として，茶を本草書に取り入れた。茶の薬性についての研究はこれから中原の医薬学者を加えて，深く細かく展開される。喫茶風習はついで四川から揚子江まで広まった後，魏晋南北朝時代には，すでに黄河流域まで広がった。喫茶人口の増加も，茶の薬性をまとめるための十分なデータを提供した。茶は中国文化の中で，全面的に発展し始めた。茶の薬性の認識が喫茶風習の普及に従って精確になった。結果として，茶は終に堂々と本草の殿堂に席を獲得した。

六　喫茶と「服食」との意識の比較
——喫茶の成立における道教の影響

1　茶と宗教についての研究

中国社会に根を下ろす「服食」は，魏晋南北朝時代の代表的な文化現象の一つである。魏晋南北朝の文化史を研究する上で，道教の「服食」の影響を無視するわけにはいかない。魯迅の「魏晋の風度および文章と，薬および酒の関係」（魯 1973）や王瑤の「文人と薬」（王 1986）は，道教「服食」が魏晋南北朝文化に与えた影響に関する著名な研究である。

茶と宗教とのつながりについての研究に存在する最大の問題は，研究課題を精神化させ，情緒化させることである。茶と仏教とのつながりは早くから注目されたにもかかわらず，それを深く展開する者がごく少ないのは意外である。程光祐氏は「茶与唐宋思想界及政治社会関係」（程 1985）で，禅僧が喫茶風習の発展に果たした役割を論述した。方豪氏は「宋代僧侶対于栽茶之貢献」（方 1985）で宋代における寺で生産された名茶を詳しく考察した。日本においては，哲学の角度から研究する著作が多い。史学の分野から展開し，中国の茶と仏教に関する研究は，主に日本早期茶史あるいは中日茶文化交流史に集中している。例えば，古田紹欽氏の「入宋僧と茶」（古田 1984），今枝愛貞氏の「茶礼と清規」（今枝 1984）などがそれである。

茶と道家あるいは道教のつながりに関する研究はもっと少ない。傅鉄虹氏は「『茶経』中道家美学思想及影響初探」（傅 1992）において，老子の「道法自然」の観点から，陸羽が野生茶や越瓷を重視したこと，また陸羽の水や燃料についての選択基準，茶の泡についての言葉使いなどは「自然」に基づくと指摘し，陸羽は道教に影響されていると推論した。これは牽強付会であろう。

本研究とよく似た研究成果としては東君氏の『茶から茶道へ』がある。道教の金丹と茶との繋がりについて，

金丹説と茶の，このような求めあい，且つ頼り合うという関係と，それが成熟する過程こそが，茶が精神文化として成立していく過程であろうと筆者は考えたい（東 1998，p.176）。

という。氏の研究の特徴は日本茶道の立場から中国文献を念入りに読むことである。本研究の中国喫茶風習の形成に関する研究趣旨とは全く異なる。論述された時代について，本研究は中国茶史の全体に対する認識に基づき，魏晋南北朝初唐時期を考察するものである。氏は唐代，特に唐代中期以後に注目した。陸羽は我々の研究の時代的な分水界と言ってもよい。研究の目的が異なるし，いわば中国茶史に対する基本認識の差が大きいので，同じ文献を使うとしても異なった結論が出るわけである。例えば，氏は茶が『茶経』をきっかけとして仙薬化されたと考えるのに対して，筆者は『茶経』が茶の加工技術から飲み方まで薬を離脱し，完全な嗜好飲料となったシンボルであると考える。

次は喫茶と「服食」との意識を比較して，茶も養生の「薬餌」の一つとして取り扱われたと指摘したい。これは喫茶の薬用起源の証明になる上に，喫茶と道教との関係もより一層鮮明にさせる。

2.　喫茶の効果と意識

陶弘景が誤って茗を苦菜の条に収めたのは，両者の効果が同じだからである。つまり茶も苦菜も，

味は苦く，性質は寒で，五臓の邪気，食物を受けつけない胃のしびれに効く。長く服用すると，心臓の働きをおだやかにし，元気を益し，耳がよく聞こえて事物に明るくなり，寝ることが少なく，身体を軽くし，老いない。

味苦寒，主五蔵邪気，厭穀胃痺，久服安心益気，聡察少臥，軽身耐老（『重修政和経史証類備用本草』巻27菜部上品）。

という効果がある。『桐君録』も茶の「眠らせない」の効果を繰り返して強調している。それでは，具体的に魏晋南北朝時期における喫茶に対する認識を考察してみる。

『神農食経』に，「茶茗は長く服用すると，人に力をつけ，気分を楽しくさせる」（茶茗久服，令人有力悦志。『茶経』巻下七之事）とある。『神農食経』についてははっきりしないが，『漢書』巻30芸文志・方技・経方に『神農皇帝食禁』，『神仙服食経』，『老子禁食経』などがある。ただ『食経』のみを題目とした書物は『隋書』巻34経籍志・子部・医方に2巻本，14巻本，19巻本が各一種ある。この史料の出典は特定できない。

三国魏・張揖の『広雅』に，「それを飲めば酒の酔いを覚まし，人を眠らせない」（其飲醒酒，令人不眠。『茶経』巻下七之事）とある。

晋・張華『博物志』巻4食忌に，「真茶を飲めば，人の睡眠を少なくさせる」（飲真茶令人少眠）とある。

両晋の間の劉琨は「与兄子南兗州刺史演書」に，「私は気分がくしゃくしゃすると，いつも真茶を頼っています。あなたも置いた方がよい」と述べている（吾体中潰悶，常仰真茶，汝可置之。『茶経』巻下七之事）。

『華佗食論』によると「苦茶は長く服用すると頭の回転をよくする」（苦茶久食益意思。『茶経』巻下七之事）である。この書物も華佗の名に仮託したものに過ぎないと思われる。『隋書』巻34経籍志・子部・医方に『華佗方』が10巻ある。この2種の書物は全部散逸してしまっているので考証することはできない。

『壷居士食忌』に，「苦茶は長く服用すると羽が生える。ニラと一緒に食べると，人の体を重くさせる」（苦茶久食羽化，与韭同食令人体重。『茶経』巻下七之事）という。いったい壷居士と呼ばれるのは何者であるか。晋・葛洪『神仙伝』（増訂漢魏叢書本）巻9

壺公伝に，

壺公という人は，その姓名は知られていない。今の世間にある「召軍符」や「召鬼神治病玉府符」全20余巻は，皆壺公によって書かれたため，総して『壺公符』と名づけた。当時汝南に費長房というものがいて，町役人をやっていた。突然壺公が遠方からやって来て，市場に入って薬を売っているのを見かけた。人々は彼を知らない。薬を売る時，掛け値をせず，病気を治療すれば皆治す。買手に，この薬を服用すると必ずある物を吐き，ある日きっと癒える，という。言う事は必ず当たった。その代金は1日に数万の収入があり，それを市中の貧乏人や飢寒のものに施してやり，ただ30，50だけを残す。いつも一つの空の壺を屋上に掛けておき，日が暮れると，壺公は壺の中に跳びこみ，だれにも見えない。ただ長房だけが楼上からそれを見ていて，凡人でないことが分かったのである。

壺公者，不知其姓名也。今世所有『召軍符』『召鬼神治病玉府符』凡二十余巻，皆出自公，故総名『壺公符』。時汝南有費長房者，為市椽。忽見公従遠方来，入市売薬，人莫識之。売薬口不二価，治病皆愈。語買人曰，服此薬必吐某物，某日当愈。事無不効。其銭日収数万，便施与市中貧乏饑凍者，唯留三五十。常懸一空壺於屋上，日入之後，公跳入壺中莫能見，唯長房楼上見之，知非常人也。

とあり，壺公は人間界におとされた仙人である。壺居士を壺公と称するのはごく普通のことであり，また同じ道教の人物であるから，壺居士と壺公は同一人物であると思われる。『食忌』が『壺公符』の一部分であるか，別の本であるかは分からない。

釈道該説の『続名僧伝』に，南朝宋の釈法瑤，姓は楊氏，河東の人である。永嘉中に揚子江を渡り，沈台真に遇い，真君が武康の小山寺に戻ることを請われた。その時，法瑤は隠退の年に近く，食事のところで茶を飲むことにした。永明中，呉興に勅して，礼遇して上京させた。時に79歳であった，という。

釈道該説『続名僧伝』，宋釈法瑤，姓楊氏，河東人。永嘉中過江，遇沈台真，請真君武康小山寺，年垂懸車，飯所飲茶。永明中，勅呉興，礼致上京。年七十九（『茶経』巻下七之事）。

この史料が言わんとしていることは，茶が法瑤の長寿に役立つということのようである。すなわち，茶には「延年」の効果がある。

陶弘景の『雑録』に，「苦茶は身を軽くし，骨を換える。むかし丹丘子・黄山君がこれを服用した」（苦茶軽身換骨，昔丹丘子・黄山君服之）とある[12]。『楚辞補注』（宋・洪興祖注，四部備要本）巻5遠遊に，「丹丘で羽人に付き従がって，その不死の郷にとどまる」（仍羽人於丹丘兮，留不死旧郷）とある。陸羽は丹丘子・黄山君が漢代の神仙であると考えている。また，丹丘子は志怪小説にも現れる。

『神異記』に，余姚の人，虞洪が山に入って茗を摘み，1人の道士に遇った。その道士は3匹の青牛を牽き，洪をつれて瀑布山に至って言うには，「私は丹丘子だ。あなたはうまく茶をたてられると聞き，いつか茶をいただけると思っていた。山の中に大茗があり，贈ることができる。あなたに頼むのは，いつか柄杓の

12) 『茶経』巻下「七之事」。『太平御覧』巻867飲食部・茗にはこの文章を引用する際，『新論』を出典としている。

余りがあったら，やってほしいのだ」と。よって祠を建てた。のちあるとき家人を山に入れて，大茗を得た，という。

『神異記』，余姚人虞洪入山採茗，遇一道士，牽三青牛，引洪瀑布山，曰，予，丹丘子也。聞子善具飲，常思見惠。山中有大茗，可以相給，祈子他日有甌犧之余，乞相遺也。因立奠祀。後常令家人入山，獲大茗焉（『茶経』巻下七之事）。

少なくとも，丹丘子が道教の伝説の人物であることは確実である。

以上の医書・字書・史籍・伝記・雑著にある茶に関する評価をまとめてみると，茶の効果は二つに分けられる。一つは気分を楽しくする（悦志）・酒の酔いを覚ます（醒酒）・眠らせない（不眠）・力をつける（有力）・頭の回転をよくする（益意思）などカフェインによる興奮剤の効果である。それは茶が中国の代表的なノンアルコール飲料になる決定的な要因となり，中国医薬学に基づくものである。もう一つは羽が生える（羽化）・身体を軽くして骨を換える（軽身換骨）・老いずに寿命を延ばす（不老延年）など慰安剤の効果であり，言い換えれば，神仙道教思想に基づく仙薬効果である。感知された慰安剤の効果は，茶の中に確実に物質的に存在したものではなく，茶を通じて投影された影である。その効果を求める動機は「羽が生えて，天へ登って仙人になる」（羽化登仙）である。

陶弘景は「上薬」の服用の特徴と効果から，「多服久服不傷人，欲軽身益気，不老延年」とまとめた。ここまでの論述によると，茶は「上薬」，すなわち「服食」の「薬餌」の資格を持っていると言える。

3.　養生「服食」の「上薬」

陶弘景は，『神農本草経』に上薬が120種ある，という。『神農本草経』（孫史鈞沈本）によって統計すると，金石類18種，草類73種，木類20種，人類１種，獣類６種，禽類２種，虫魚類10種，果類５種，米穀類10種，野菜類５種，合計142種の薬材がある。養生の効果を論述する際，頻繁に使用される言葉は「軽身・耐老・延年・安心・益気・補中・聡明・強志・耐飢寒」などである。

薬物にはだいたい多種類の効果がある。例えば，

天門冬（クサスギカズラ）は，味は苦く，性質は平である。いろいろな暴風湿偏痺に効き，骨髄を強くし，三虫（道教の説で，人の体内にいるという三つの虫）を殺し，屍骸を除く。長く服用すると，身を軽くし気を益し寿命を延ばす。

天門冬，味苦平，主諸暴風湿偏痺，強骨髄，殺三虫，去伏尸。久服軽身益気延年（『神農本草経』巻上草上品）。

つまり天門冬には「軽身・益気・延年」という三つの効果がある。

陸羽は『茶経』において茶を北方薬物の代表と見られる人参と比較している。それでは，『神農本草経』巻上果上品での人参に関する記述を考察してみることにする。

人参は，味は甘く，性質は少し寒である。五臓を助けることに効き，精神や魂魄を安定させ，驚悸を止め，邪気を除き，目をよく見えるようにし，心を開き，智力を益す。長く服用すると身を軽くし寿命を延ばす。

人参，味甘，微寒，主補五藏，安精神，定魂魄，止驚悸，除邪気，明目開心益智，久服軽身延年。

以上にまとめた茶の効用を人参の効用と比較すると，両者は互角であると言える。茶は新薬であり，茶に対する認識がまだ浅かったが，人々は茶の効用に大きな期待を寄せていた。茶を飲むことによって「昇仙」の最高の境地に辿り着けると信じられた。それが魏晋

南北朝時代における喫茶に対する認識であった。

養生思想は神仙思想と医学との融合である。だから，養生の薬は治療の薬と同じ基準で評価される。顔延之も次のように言っている。

> 三品の薬性を解き明かす場合は『本草』を主にする。それは道家の経書・仙人の処方，丹薬の服用・穀物を食べないこと，寿命を延ばし老を退けることから，奇妙な飛丹・錬石（道家の丹薬），雲騰・羽化（神仙の行動）まで，全部薬の道を第一にする。薬を用いるわけが，『本草』とまったく同じであるが，ただ制御の方法は世の方法と少し違う。
>
> 詮三品薬性以『本草』為主，道経仙方，服食断穀，延年却老，乃至飛丹錬石之奇，雲騰羽化之妙，莫不以薬道為先，用薬之理，一同『本草』，但制御之途小異世法（『重修政和経史証類備用本草』巻1序例）。

要するに，道教の「服食」は同様に医薬学原理に基づき，同じ技術を用いる。ただ，服用の方法が異なるに過ぎない。「三品」の分類は，医療の薬と養生の薬を区別する方法である。その効用上の区別は「養命」・「養性」・「治病」という点にある。「久服」，すなわち日常的に大量に飲めるかどうかについては養生の薬であるかどうかの決定的な指標となる。茶は日常的に大量に飲める養生の「薬餌」であるからこそ，日常化・嗜好化への転換に可能性を与えた。したがって，「服食」風習の流行は喫茶風習の普及の社会文化的基礎となったのである。

国立民族学博物館で「茶の文化に関する総合的研究」というテーマの共同研究があり，1978年に開催されたシンポジウムで「飲物とナルコチックス」というテーマの研究報告があった。討論中，佐々木高明氏は以下の質問をした。

> お聞きしたかったのは茶の歴史を考えるなかで，たとえば東南アジアとか西南シナのどこかの地域で原始的なお茶が飲まれるようになった，そういう段階からナルコチックスとしての作用があったと考えるのか，お茶というものがある種の儀礼に用いられ，非日常的に用いられるようになりその道具立てなりとからまってナルコチックスとしての作用がみられるようになったのか，そのあたりのお考えはどうでしょう。

この質問に対して藤岡喜愛氏は次の意見を述べた。

> それほどの証拠があるわけではないですけれども，神農がお茶を薬として人に教えたという神話からいっても，それはやっぱりナルコチックスの効果があったから認めたんだと，私はごく素直に考えています（石毛 1981，p.231）。

藤岡喜愛氏は証拠史料を提供することができなかったが，医学家の鋭いセンスで佐々木氏の推測に対して賛成した。この節において，魏晋南北朝時代に「服食」としての喫茶意識がやはり残存していたことから，茶は興奮剤として慰安剤として使用されていたということを証明した。同時に，喫茶と「服食」との意識から再び茶と薬のつながりを証明し，喫茶の薬用起源説の一証とするものである。

山田慶児氏は道教・養生・医薬の三者の関係を簡明にまとめた。

> 道教は中国の民族宗教であり，民衆のみならず知識人のあいだにも深く浸透した。だが，それだけではない。薬物学と不可分の関係にあるのは医学だが，中国医学の基礎理論は道家思想の本質的ともいえる影響のもとに成立した。医学思想の根底にはつねに養生思想があった。三品分類が本草の強固な伝統となったのは，これらの要因の相乗作用によるものであ

ったといってよい（山田 1995，p.14）。

ここまでの論述によると伝統宗教，特に道教は技術上においては製薬技術を通して，イデオロギー上においては神仙思想を通して，科学の合理性と宗教の神秘性との両面から魏晋南北朝時代の喫茶風習の発展に重要な役割を果たした。

七　むすび

本稿では茶の薬から嗜好品への転換，すなわち喫茶の薬用起源をめぐって議論を展開した。

まず，「製茶技術について」の一節で喫茶の文化の成立期である魏晋南北朝には唐代と同じ固形茶の餅茶を飲んでいた事実を確認した上で，唐代の『茶経』にある完備した製茶史料を用い，製茶技術を解明した。魏晋南北朝時代には喫茶の風習が広まったばかりであるが，その時代の製茶技術は幼稚ではなかった。ということは茶が嗜好飲料になる前に十分に発展したことを反映しており，この発展は薬用領域において行われたと考えられる。

そして「炮炙技術からみる製茶」の一節で製薬技術と製茶技術と比較し，茶が初めは製薬技術によって加工されて薬効のみが追求されたことが分かった。薬の炮炙技術の角度から見れば，製薬と製茶は加工目的から技術に至るまで合致していた。その目的とは，ともに有効成分を十分に抽出し服用の効果を高めるためであり，原料が持つ性質の一部を変えて特定の要求に適応させるためであり，貯蔵や運送の便宜のためである。製茶は製薬技術を使用して以上の目的を遂げた。そして豊富な製薬技術は多種類の茶を作り出すことに貢献したとも考えられる。

さらに「製剤技術からみる茶のたて方」の一節で製剤技術と茶のたて方を比較し，それも同様の技術で薬効のみが追求されたことが分かった。湯剤は最も早くて広範に使われる薬の剤形であり，後漢から普及し始め，現在に至るまで主な剤形である。茶のたて方は喫茶が嗜好化・娯楽化されていくのにしたがって，変化してきた。陸羽以前のたて方には茶が嗜好飲料とされる前の原始的な要素が存在していた。そして製剤技術の角度から，魏晋南北朝及び初唐の茶のたて方，当時の薬の湯剤，唐代の『新修本草』に収められる茶の湯剤処方とを比較した結果，茶湯は簡単な複方であるという結論に到達した。このたて方は陸羽の茶の粉末だけを使用するたて方（現在日本の抹茶もそうである）と区別される。また，薬の製剤に使用される道具は茶器として多く用いられている。

茶の本草書に現れる時代が遅いという印象から，喫茶の薬用起源説に対して強い疑問がもたれているため，「本草学における茶の成立の経由と原因」の一節は本草学における茶の成立の経緯を明らかにした。薬物としての研究記録は晋代の医薬著作のみに現れただけでなく，文人の詩文雑著にも頻繁に現れている。南方，特に四川と江蘇・浙江地区の薬物が次第に開発されてきたことを前提として，南朝梁・陶弘景は茶を本草書に取り入れた。茶の薬性についての研究は，喫茶習俗が中原に広まりながら深く細かく展開され，唐代において茶は終に堂々と『新修本草』中に席を獲得した。中原文化が江南文化を受け入れたことを背景として，黄河流域の薬学著作が揚子江流域にある薬を受け入れることになった経緯を示していると考えられる。

「服食」の意識で喫茶を評価するのはこの時代の特徴であり，また茶の薬効についての記述も多かった。魏晋南北朝のわずかな喫茶の史料に，「服食」と繋がる事例はかなりの割合を占めていた。これは喫茶が一種の「服食」として社会に流行したことをより鮮明に物語っている。道教が喫茶風習の形成に及ぼした影響を考察すると同時に，飲用意識の視点から再び茶と薬との関連を確認した。それは「喫茶と服食との意識の比較」の一節で論

じている。

茶の製造技術，たて方，飲用意識，効用などの側面から薬と比較し，それらが一致するため，喫茶の薬用起源説を主張したい。その上で，道教は喫茶の成立に影響を与えたと指摘したい。

謝　辞

本稿は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所短期共同研究員時に，クリスチャン・ダニエルス教授のご指導を賜って作成した研究報告書を加筆したものである。また学位論文の一部として提出し，立命館大学文学研究科中村喬教授のご指導を頂いた。本稿の一部は京都大学人文科学研究所「中国技術史の研究班」（田中淡教授主宰）で発表し，貴重なご指摘を頂いた。また坂出祥伸（前関西大学文学部教授）と筒井紘一（京都学園大学教授）両先生から助言を頂戴した。なお日本語の校正に関して，村田進，兪丹楠両氏に大変お世話になった。この研究はトヨタ財団研究助成金を受けた。記して謝意を申し上げたい。勿論すべての責任は著者に帰する。

参　照　文　献

日本語文献（五十音順）

赤堀　昭　1985「冶法をめぐる問題」山田慶児編『新発見中国科学史資料の研究・論考篇』，pp.123–165，京都大学人文科学研究所。

石毛直道（座長）1981「討論　茶の役割・社会と生活」守屋毅編『茶の文化—その総合的研究—』第1部，pp.220–240，淡交社。

今枝愛貞　1984「茶礼と清規」，村井康彦責任編集『茶の湯の成立』（『茶道聚錦』2），pp.79–86，小学館。

岡西為人　1963「中国医学における丹方」藪内清編『中国中世科学技術史の研究』，pp.289–306，角川書店。

熊倉功夫　1987『茶の文化』，茶道聚錦1，小学館。

クリスチャン・ダニエルス　1990「雲南省西雙版納傣族の製糖技術と森林保護—現地調査に見るその歴史—」『就実女子大学史学論集』第5号，pp.233–302。

佐々木高明（座長）1981a「討論　中国の茶・文字とイメージ」守屋毅編『茶の文化——その総合的研究』第1部，pp.75–92，淡交社。

———　1981b「茶と照葉樹林文化」守屋毅編『茶の文化——その総合的研究』第2部，pp.3–32，淡交社。

中尾佐助　1976『栽培植物の世界』，中央公論社。

中村　喬　1984「茶贅言—中国の茶における食葉法と雑和法—」『立命館文学』463–465（1–3）pp.1–22。

新潟県立近代美術館，朝日新聞社文化企画局，博報堂（編集，発行）1999『中国の正倉院　法門寺地下宮殿の秘宝「唐皇帝からの贈り物」』展図録。

布目潮渢他　1979「茶経の茶—製茶法の復元—」『淡交』33–11，pp.26–39。

———　1982「唐代の名茶とその流通」小野勝年博士頌寿記念会『小野勝年博士頌寿記念東方学論集』，pp.255–285，龍谷大学東洋史学会。

———　1995『中国喫茶文化史』，岩波書店。

東　　君　1998『茶から茶道へ』，市井社。

広田君美他　1976『態度としての嗜好品嗜好—下位文化間の比較研究—』，たばこ総合研究センター。

古田紹欽　1984「入宋僧と茶」村井康彦責任編集『茶の湯の成立』（『茶道聚錦』2），pp.72–78，小学館。

宮崎道三郎　1902「唐代の茶商と飛錢」『東洋学芸雑誌』19–254，pp.493–503。

森村謙一　1985「中国古代の有用自然物」山田慶児編『新発見中国科学史資料の研究・論考篇』，pp.369–403，京都大学人文科学研究所。

守屋　毅　1987「喫茶の文明史」熊倉功夫責任編集『茶の文化』（『茶道聚錦』1），pp.225–235，小学館。

矢野仁一　1977（初出は1930）「茶の歴史に就て」井口海仙他『茶道全集』巻一茶説茶史篇，pp.32–114，創元社。

山田慶児　1985．鍼灸と湯液の起源——古代医学形成の二つの位相」山田慶児編『新発見中国科学史資料の研究・論考篇』pp.3–122，京都大学人文科学研究所。

———　1995「本草における分類の思想」山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界』上，pp.3–42，

思文閣出版。
山西　貞　1992 『お茶の科学』，裳華房。

中国語文献（ABC 順）

曹春林　1986 『中薬薬剤学』，上海科学技術出版社。
陳椽　1979 『製茶学』，農業出版社。
　　1984 『茶業通史』，農業出版社。
程光祐　1985 「茶与唐宋思想界及政治社会関係」呉智和主編『中国茶芸論叢』，pp.1–64，大立出版社。
方豪　1985 「宋代僧侶対于栽茶之貢献」呉智和主編『中国茶芸論叢』，pp.137–148，大立出版社。
傅鉄虹　1992 「『茶経』中道家美学思想及影響初探」『農業考古』2，pp.204–206。
光復書局，文物出版社　1994 『嶺南西漢文物宝庫：広州南越王墓』，光復書局。
李興培　1983 「一種古老而新興的中薬剤型——煮散」『陝西中医函授』5，pp.14–17。
魯迅　1973（初出は1927）「魏晋風度及文章与薬及酒之関係」魯迅『魯迅全集』第 3 巻而已集，pp.486–507，人民文学出版社。
任乃強　1987 『華陽国志校補図注』，上海古籍出版社。
王瑤　1986 「文人与薬」王瑤『中古文学史論』，pp.129–155，北京大学出版社。
徐楚江　1985 『中薬炮製学』，上海科学技術出版社。
徐殿魁　1994 「試述唐代的民間茶具」『農業考古』2，pp.127–136。
薛愚主編　1984 『中国薬学史料』，人民衛生出版社。
中国農業博物館　1995 『中国古代耕織図』，中国農業出版社。
中国社会科学院考古研究所，河北省文物管理処　1980 『満城漢墓発掘報告』，文物出版社。
周一謀　1994 『馬王堆医学文化』，文匯出版社。
荘晚芳　1989 『中国茶史散論』，科学出版社。

【資料・研究ノート】

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

中古漢語の不字句

北川修一
東海大学（台湾）

A Study of Fouziju in Middle Old Chinese

KITAGAWA, Shuichi
Tunghai University

本文主要从起源，演变和语义，用法两个角度来探讨中古汉语的不字句（即叙述句句末加以“不”或“否”而构成的问句）的特征。我们认为不字句是上古汉语的“Np（＋与）＋否”（“与”是连词，“否”是代替前面Np的否定形式，且“否”在此结构中作名词作用）演变为“Vp（＋与）＋不”（“与”是一种衬字，“不”是语气词）。中古汉语不字句中的“不”已经相当虚化，不再有与前面谓语对等的否定意义，因此我们认为中古汉语的不字句是是非问句而不是反复问句。

1. はじめに
2. 語音について
2.1. 副詞の‘不’と文末の‘不’
3. 起源と変遷について
3.1. 起源の2説
3.1.1. 商周起源説
3.1.2. 戦国起源説
3.2. 古代漢語の3つの疑問文
3.2.1. 太古漢語と中古漢語
3.2.2. 上古漢語と中古漢語
3.2.3. 中古漢語と現代漢語
3.2.4. 各時期の継承関係
3.3. ‘A否乎’型から‘A不’型へ
3.3.1. 上古漢語の文末否定詞の性質
3.3.2. 上古漢語の文末否定詞の変化
3.4. 出土文献「秦簡」
4. 意義，用法について
4.1. 単用する‘不’
4.2. 副詞と共起する不字句
4.2.1. ‘宁…不’について
4.2.2. ‘颇…不’について
4.2.3. ‘讵…不’について
4.2.4. ‘不…不’について
5. 文末の‘不’の性質
5.1. 否定意義の存否
5.2. 特指疑問文，選択疑問文に用いられた‘不’
6. おわりに

Keywords: yes-no question, A-not-A question, middle old chinese, “bu” “fou”
キーワード：是非疑問文，反復疑問文，中古漢語，“不”“否”

1. はじめに

先秦に起源をもち，漢代に始まり，六朝以降頻繁に用いられるようになった疑問文に次の様に叙述文のおわりに更に否定詞を置き作るものがある[1]。

棋者曰："汝欲停此否？"堕者曰："不愿停。"(《古小说钩沉・幽明录》)
泰云："唯杀力充以谢天下。"文王曰："可复下此不？"(《世说新语・方正》)
曹虎谓之曰："君是贼非？"(《南齐书・宗室传》)[2]
及魏武作司空，总朝政，从容问宗曰："可以交未？"(《世说新语・方正》)

坂井裕子 1992 によれば"非"は文中の動詞が"是"である場合に限られ，"未"は文中に時間副詞"已""尝"などを用いる文の文末に用いることが多いなど，文中の述語動詞との関連が強く意識されているのに対し，"不"や"否"は多種の動詞を持つ文の後に置かれるという。また太田辰夫 1999，坂井裕子 1992 によれば，中古時期の"不"と"否"は実際には同じ物であったと言われている。拙稿で検討するのはこれら文末否定詞を持つ疑問文のうち"不"或は"否"を文末に持つ疑問文であるが，拙稿ではこの種の疑問文を不字句[3]と呼ぶことにする。この不字句は牛島徳次 1967 によれば，既に漢代《史记》《汉书》に用例が見られるようである。

二世曰："丞相可得见否？"乐曰："不可。"(《史记・秦始皇本纪》)
……曰："公奴有病不？"舍人曰："奴无病，身无痛者"。(《史记・扁鹊公列传》)[4]

この他，《战国策》にも不字句が見られる。

曰："齐多知，而解此环不？"(《战国策・齐策》)[5]
我田忌之人也，吾三战而三胜，声威天下，欲为大事，亦吉否？(《战国策・齐策》)

その後，六朝時代になると極めて普遍的に見られる表現となるようであるが，これがこの時期の口語を反映したものであり，後に唐代には"无"に取って代わられ，"磨""摩"などの表

1) 拙稿では《世说新语》『淳化阁帖』《古小说钩沉》を基本資料とし，その他，特に史書等については先行研究によって知り得た用例も時に引用する。拙稿で挙げた資料は決して多いとは言えないが，用例として様々な現象は先行研究によって殆ど挙げられており，拙稿はこれら様々な用例に筆者なりの解釈をあたえるものであるので，用例も必要と見なす程度に止めた。
2) 坂井裕子 1992 による。
3) 拙稿でいう中古漢語は東漢魏晋南北朝時期の漢語を指す。拙稿で検討する不字句の文末否定詞は，他に"否"も用いられる。文型として単にいずれかの否定詞が用いられていることを示すには'A不'型，'A不A'型などと否定詞以外の成分をAで代表させ'' 括弧で括り，これとは別に実際に"不""否"を区別して表記する必要が或る場合"" 括弧で括った。また先行研究などから引用する場合，日本語の場合は「」括弧，中国語の場合は"" 括弧で括って表した。
4) 以上 2 例は牛島徳次 1967 による。
5) この 1 例は吴福祥 1997 による。吴福祥 1997 では《战国策》の例を拙稿でも後で挙げる《孟子》の例と共に先秦の例として挙げる。しかし《战国策》は漢の劉向の作と言われ，ここに挙げた不字句の用例も漢代の方法と共通し，先秦とは異なるので，拙稿では西漢の例として挙げた。また，同じく《战国策・齐策》に下の例も見られた。

記を経て現代漢語の“吗”へと発展したことは漢語史において定説となっているようである[6]。しかし変化の途中にある中古漢語におけるこの不字句とそれに用いられる文末否定詞‘不’の性質については研究者によって意見が分かれるようである。また西漢以前にもその萌芽と思われる用例も幾つか見出されるのであるが，先秦の上古漢語における文末否定詞の性質についても具体的な考察は出されていないようである。拙稿ではこれに関する問題を整理し，明らかにしようというものである。

現代漢語の疑問文は主に形式によって，是非疑問文，反復（正反）疑問文，選択疑問文，特指疑問文の4つに分けらる。これまで中古漢語の不字句は研究者によって反復疑問文，或は是非疑問文に分類されていたが，具体的に反復疑問文である，或は是非疑問文であるといった根拠は出されることが少なかった。そのうち，明確に不字句の性質に言及しているものに坂井裕子1992や，吴福祥1996がある。坂井裕子1992では不字句は是非疑問文であり，文末の否定詞‘不’は中古時期の新興語気助詞で，不字句は是非疑問文あるとする解釈で，吴福祥1996は先に述べたように反復疑問文と非反復疑問文の2種類の文の起源であるとする立場である。以下，坂井裕子1992や，吴福祥1996など先行研究で指摘された問題を含めて，語音，起源と変遷，意義と用法の3つの角度から中古漢語の不字句について検討し，更に不字句の文末否定詞‘不’の否定意義はどのようなものであったかなどを述べる。

2. 語音について

文末に用いられる‘不’字の語音については坂井裕子1992や辻星児1997で述べられているので，ここではこの先行研究を参考に述べておく。

2.1. 副詞の‘不’と文末の‘不’

まず，副詞として用いられた場合と文末否定詞として用いられた場合の語音の場合の違いについてであるが，これについては既に言及されている。

坂井裕子1992では不字句の様々な用法上の特色を挙げるが，‘不’を新興の語気助詞であると認定する直接の根拠は語音である。坂井裕子1992は《先秦汉魏晋南北朝诗》の音韻を調査し，文中で否定副詞として機能する‘不’の語音が「入声物韻」であるのに対し，文末の‘不’は「甫鳩切（平声尤韻）」或は「方久切（上声有韻）」であり，語音が異なることから，「両者は表記の上では同じであっても，語彙としては別であ」り，「句末の「不」は前代の「乎」などに替わって新しく登場した語気助詞であると考えたい」[7]と述べている。

辻星児1997では，文末に用いられる‘不’は唐詩の9例が全て「平声（尤・侯）」で押韻しており，また文中の副詞としての‘不’は近体詩の平仄では全て仄声で押韻されていること，また‘不’字は《切韻》の編集時期の異なる諸本では全て，非入声音として記録されており，梁代の梵漢資料や9・10世紀の蔵漢対訳資料（河西方言）でも，‘不’は非入声音として転写されていることから，唐代までは入声音は出てこないことにより，「「不」の非入声3声のうち，平声は句末助詞として，上あるいは去声は否定辞として用いられていた」[8]とする。

6) 太田辰夫1986，王力1988など。
7) 坂井裕子1992，p.128。
8) 辻星児1997，p.338。

辻星児 1997 で指摘されるように，唐代にはまだ入声音が現われていないとすれば坂井裕子 1992 で言う副詞としての‘不’が「入声物韻」であるという点は修正されるであろう。しかし，文末に置かれる‘不’と副詞として機能する‘不’が語音として異なったものを持っていることは六朝，唐代を通じて言えるようで，坂井裕子 1992 で言われるように「語彙としては別である」可能性は高い。

3. 起源と変遷について

現代漢語には是非疑問文，特指疑問文，選択疑問文，反復（正反）疑問文の 4 種があるが，上古漢語魯方言の《论语》《孟子》などでは，そのうち是非疑問文と特指疑問文の 2 種のみが存在する。選択疑問文については例えば“事齐乎？事楚乎？”（《孟子・梁惠王下》）などの表現が見られるが，これは是非疑問文の並列と見做せ，現代漢語のような“还是”という選択疑問専用の連詞はまだ存在しない。“抑（或）”などを用いる場合もあるが，これは疑問文だけでなく，叙述文にも用いることができるので，選択を表すとは言えるが，選択疑問を表すとは言えない。また一般的には上古漢語には反復（正反）疑問文も見られない。拙稿で検討する文末に否定詞を持つ疑問文が反復疑問文と見なせるかどうかが問題となるが，ここではこの問題を起源と変遷の面から述べる。

3.1. 起源の 2 説

文末の否定詞による疑問文の起源については大きく分けて，これまでに 2 説ある。一つは商周の甲骨文，金文に起源があるとするもので，もう一つは戦国時代《孟子》に見られる“…否乎”に起源があるとするものである。この甲骨文，金文と《孟子》を厳密に区別しない研究も見られるが，後で述べるようにこの両者の文末否定詞の性質は異なるようである。

3.1.1. 商周起源説

陈梦家 1956 では甲骨文[9]の“雨不雨”が“雨不”と省略され，“雨不”は後に“雨否”となったのであり，（現代の）口語に用いられる“罢”はこの“否”から変じたものであるとする[10]。藤堂保明 1967 でも甲骨文の“雨不雨”は現代漢語の“去不去？”に近く，“雨不”は“你去么？”に近く，後者は“吾舌尚在否？”[11](《史记・苏秦列传》) のような文末の“否”や“未”を経て近世の“么”へと変化したものであり，それぞれに継承関係があることを述べられる[12]。赵诚1988[13]，朱歧祥 1998 などでも甲骨文の例は後の先秦伝世文献に伝わるものであるとする[14]。

---

9) 甲骨文の用例については裘锡圭 1988 などに挙げられているものを参考。拙稿は直接，甲骨文の用例の解釈を検討することが目的ではないため，多数の用例は引用していない。
10) 陈梦家 1956，p.87。
11) 鼎文書局影印本では张仪谓其妻曰：“视吾舌尚在不？”とする。
12) 藤堂保明 1967，p.27。
13) 张诚 1988 では甲骨文に既に文末に用いられた“非”が見られ，これも先秦伝世文献の“否”などに通じるとする。
14) 先秦伝世文献との関連については言及していないが，甲骨文のこのような用例は部分的には《殷虚甲骨刻辞的语法研究》p.22などでも指摘されている。その他，これまでの研究は裘锡圭 1988 に詳しい。

裘锡圭 1988 では，これまで多くの研究者により疑問文であると考えられてきた命辞の“V 不”の“不”は実は験辞であり，疑問文ではありえないとする。但し西周銘文の“正乃询厉曰：汝贾田不？”[15]のような例も存在することから，甲骨文の“V 不 V”などとは別に，商周に反復疑問文が存在した可能性が高いことも指摘されている[16]。

これらの研究の多くは甲骨文，金文に，現代漢語の‘A 不’型反復疑問文と同じ形式の文が存在することを指摘するのみで，その性質が如何なるものであるかは殆ど述べられていない。甲骨文や金文の用例の用法，性質は更に検討されなければならないが，拙稿では後でこれらが後世の不字句の起源たりうるか，或は甲骨文の用例と先秦伝世文献の用例に継承関係があるのかという問題についてのみ考えることにしたい。

3.1.2. 戦国起源説

もう一つの説は太田辰夫 1987，坂井裕子 1992，江藍生 2000 などで説かれるもので，この種の疑問文の萌芽は《孟子》の“…否乎”などであるとするものである。

> 如此则动心否乎？《孟子・公孙丑上》
> 今病小愈，趋造于朝；我不识能至否乎？《孟子・公孙丑下》
> 孟子之平陆，谓其大夫曰：“子之持戟之士，一日而三失伍，则去之否乎？”《孟子・公孙丑下》

《孟子》の用例は甲骨文，金文に起源を求める説でも引かれ，甲骨文或は西漢以降の用例と区別なく並べられていることが多い。しかし時間的な隔たり，文献の性質の違いからも何らかの区別が必要であろう。次に上古のこれらの用例をどのように解釈するべきか述べる。

3.2. 古代漢語の 3 つの疑問文

ここで言う 3 つの疑問文とは‘不’字を用いた 3 つの疑問文で，文末に‘不’字だけを用いたもの（‘A 不’型と称する），文末に‘不’字と更に疑問語気助詞“乎”“与”“邪”などを持つもの（‘A 不乎’型と称する），動詞を‘不’の後にも用いるもの（‘A 不 A’型と称する）の 3 つである。これらが漢語史（特に古代漢語を中心として）において，各時期にどのように分布しているかを見，その継承関係を述べようと思う。

これまでに既に太古漢語[17](甲骨文，金文）の‘A 不 A’型，‘A 不’型，上古漢語（《孟子》）の‘A 不乎’型（“…否乎”），中古漢語の‘A 不’型については用例を挙げているので，それ以外から，上古漢語の‘A 不’型と中古漢語の‘A 不乎’型から例を挙げておきたい。

上古漢語の‘A 不’型

> 鲁君谓蒉也曰：“请受教。”辞不获命，既已告矣，未知中否，请尝荐之。（《庄子・天地》）

---

15) 裘锡圭 1988 から転引，もと《文物》1976年第 5 期，p.38。
16) 裘锡圭 1988, p.7。吴福祥 1997 でも西周の“正乃询厉曰：汝贾田不？”を最も早い例として挙げる。
17) 漢語史（語彙，語法）の時代区分では先秦を一括して上古漢語と呼ばれることも多い。しかし，夙に太田辰夫 1987 でも指摘されているように，《诗经》《书经》の語法は，《论语》《孟子》以降の語法と異なる部分が大きい。西山猛 2000 等で太古漢語を殷から西周，上古漢語を春秋戦国から前漢とするのにならった。

この例は朱歧祥 1998 で甲骨文の命辞のなかの‘A 不’型との関連として指摘されているのであるが，実は先秦でのこのような例は文末否定詞というよりも，「…であるかどうかを知らない」という意味で，“中否”が“未知”の賓語となっている（後述するが，先秦の‘A 不’型が全て単独で文となっていないのに対し，甲骨文では‘A 不’型が単独で文となっているという点で大きく異なる）。牛島徳次 1967 では文の一部になる‘A 不’型の用例を疑問文ではないものとして，漢代《史记》から用例を挙げる。

汤曰：“予有言，人视水见行，视民知治不。”（《史记・本纪》）
九年，欲修文王业，东伐以观诸侯集否。（《史记・齐太公世家》）
问其故，曰：“宦三年，未知母之存不，愿遗母。”（《史记・晋世家》）

前述のように《史记》には既に単独で疑問文として用いられる‘A 不’型も見られるが，牛島徳次 1967 では，更に「このような文中の否定詞を含む部分が，「単一判断」を表す述語成分として用いられた場合，これは「質問」を表すことになる」[18]として，疑問文でない用例と疑問文である不字句との関連についても言及している。拙稿でも，このような賓語の一部である“否”“不”も中古漢語の不字句の起源であると考える。

中古漢語の‘A 不乎’型
问其兄弟：“向以琴来不邪？”（《世说新语・雅量》）

以上が先行研究によって出されている不字句の句型であるが，これらに現代漢語での用法を加えて表にすると，次の様になる。

	太古	上古	中古	现代
A 不 A	○	×	△	○
A 不	○	○	○	○
A 不乎	×	○	○	×

○はこれまで指摘されているもの，×はこれまで指摘されていないもの，△はこれまで指摘された用例は極めて少数であると思われるものを表す。以下，この分布から各時代の継承関係について述べたい。

3.2.1. 太古漢語と中古漢語

まず，第一に太古時期には‘A 不 A’型と‘A 不’型のみ見られる。それに対して，上古の《孟子》では‘A 不乎’型が見られ，《庄子》《史记》に‘A 不’型が見られる。この 3 種の疑問文の分布から，まず第一には太古と上古には継承関係が見出し難いのではないか。甲骨文では“雨不雨”と“雨不”が併存しており，“雨不”は“雨不雨”の省略であると言われるが[19]，上古

18) 牛島徳次 1967，p.323。
19) 陈梦家 1956，p.87。

漢語では《孟子》をはじめその他先秦伝世文献にも‘A不A’型が存在しないことから，‘A不乎’型はその省略形，或は変種であるとは考えられない。太田辰夫1986で挙げる最も早い用例は隋代のものである。

借问行人归不归？（隋・无名氏诗）

この他に管見の限りでは次のような例もある。

讲竟不竟？（《淳化阁帖・终年贴》）[20]

しかし，これらは漢代以降の用例であり，先秦伝世文献には‘A不A’型は存在しないことはほぼ間違いない。甲骨文の‘A不A’型や‘A不’型がどのような物であるかは，意味，用法の面からも考察されなければならないが，形式の分布についてのみ見ても，太古と上古に直接的な継承関係を見出すことは困難であろう。

3.2.2.　上古漢語と中古漢語

次に上古漢語と中古漢語の関係であるが2つの特徴が見られる。第1に，中古では‘A不’型が常見されるのに対し，‘A不A’型は今のところ確認できているのは先に挙げた用例だけで，非常に希にしか見られない例外的な例であるといえる。よって‘A不A’型に関しては上古，中古のどちらの時期にも殆ど存在しないという意味で，共通していると言えよう[21]。

第2に《孟子》に見られた‘A不乎’型は中古では“乎”のほか“与”“邪”などが用いられ継承されている。“乎”を用いた形と“邪”等を用いた形が語彙は異なっても同一の形式であろうことは，先に挙げた《孟子》の用例に対する赵岐の注からも伺える。

如此则动心否乎？《孟子・公孙丑上》
如是宁动心畏难自恐不能行否邪？（赵岐注）[22]

相異は‘A不’型が中古では非常に増加していることである。‘A不’型は‘A不乎’型の“乎”が脱落してできたものであると思われるが，その脱落した原因については後で述べる。いずれにせよ，上古と中古の用例の分布は非常に近いもので，継承関係のある可能性が高いと思われる。

20)　この例は漢代，張芝の作とされる。
21)　王云路1999でも六朝詩を研究され，‘A不’型の疑問文は六朝時期には希であることに言及されているが（p.87），挙げられている例は太田氏が挙げた例と同じ1例のみである。更に王云路1999では‘A不A’型と‘A不’型の違いについて，‘A不A’型は単音節動詞に用いられ，多音節動詞は煩を嫌って“A不A”型は用いないというのであるが（p.87），実際には散文韻文共に六朝時期には‘A不A’型は極例外的な例であり，音節の違いによって使い分けられていたとは考えにくい。
22)　このような注の用例が存在することは魏伯特1990により知り得た（p.153）。

3.2.3. 中古漢語と現代漢語

最後に中古と現代の違いである[23]。中古では‘A不A’型が非常に希で例外的なものであることは述べたが，現代では反復疑問文として非常に多用される表現である。現代では‘A不乎’は勿論，それに相当する否定詞，疑問語気助詞を併用した形式は存在し得ない[24]。‘A不’型は中古，現代でも用いられるのであるが，これも太古漢語と上古，中古漢語との違いと同じように，現代の‘A不’型が‘A不A’型の省略と考えられるのに対し，中古では‘A不A’型が例外的なものであるので，これを省略と考えることは出来ない。また意義においても大きく異なるのであるが，その点については，後で述べる。太古と現代は共に‘A不A’型と‘A不’型が存在し一致を見せるが，時間的な隔たりを考えれば，太古に見られた現象が，どこかの方言に保存され現代にまた姿をあらわしたとは考えにくい。

3.2.4. 各時期の継承関係

このように，表面上は類似した形式を持ちながらも，太古に見られる現象，上古と中古に見られる現象，現代に見られる現象の3つはその継承関係からだけ見ても，同一のものであるとは考えにくい。

このような通史的な考察には上古と中古に見られる現象の中でも例えば“乎”が脱落していく過程なども推定する必要があるが，少なくとも，中古漢語の不字句が甲骨文に見られる現象，現代漢語に見られる現象とは，全く別のものであることは確認できるのではないだろうか[25]。

3.3. ‘A否乎’型から‘A不’型へ

前節で，中古漢語の‘A不’型は先秦《孟子》に見られる“…否乎”のような‘A不乎’型から変化したものであろうという点に言及した。これは，中古漢語でも‘A不’型と共に‘A不乎’型も多く用いられており，その継承関係は容易に推測出来るのであるが，ではどのような過程で‘乎’が脱落したのであるかという問題について考えなければならない。この問題は逆に言えば上古に見られる‘A不’型や‘A不乎’型の性質はどのようなものであったか，なぜ表面上は反復疑問文であるものに，語気助詞‘乎’を付ける必要があったのか，などの問題を探ることでもある。この問題を検討するために，上古で用いられる文末否定詞の特徴を検討し，次にその特徴がどのような理由で変化していったかを述べる。

3.3.1. 上古漢語の文末否定詞の性質

上古漢語に見られる“否”の特徴について次の4点から述べることにする。

(1) どうして“不”ではなく“否”が用いられているか

“否”と“不”は互いに通じ，実質的な違いはないといわれる。しかしそれは主に中古漢語

23) 中古漢語と現代漢語の間には近代漢語という漢語史上，非常に重要な時期を介するが，近代漢語の文末否定詞，或は各種疑問文の展開は今後の課題としたい。

24) 語気助詞“吧”による疑問文は，“不＋啊”と言われることがあるが，これは反復疑問の特徴である中性的な語気を持っておらず，“不＋啊”の合音とは考えられない。筆者は推測という語気は叙述文と疑問文に跨るため，本来叙述文に用いられていた推測を表す語気助詞が，疑問文にずれ込んでいったものであると考える。

25) 拙稿は甲骨文について論じるものではないが，少なくとも，先秦伝世文献の‘A不’型の用例を傍証に甲骨文の“雨不雨”や“雨不”が反復疑問文であるということは出来ないのではないかと思われる。

で文末否定詞として用いられる時であり，すべての場合に“不”と“否”が同じく用いられているわけではない。例えば，先秦で“否＋動詞”のように否定副詞として用いられる“否”の用法は見られない[26]。であるとすると先秦の《孟子》に見られた“…否乎”と中古のそれを同じく扱うことはできず，寧ろ“否”が用いられた理由を考える必要があろう。

上古漢語は否定詞を非常に多く持つが，その役割はそれぞれ異なっている。代表的な用例としては“不”は動詞，形容詞の否定，“非”は判断文（名詞文）の否定，“无”は“有”に対する否定などである。これらを肯定形と否定形を対照してみると，必ずしも決まった対応関係があるわけではない。例えば，“无”は“有”の否定で，動詞の役割を果たす。“不”は否定副詞として動詞，形容詞の前に置く。“非”は否定判断文をなす系詞である。“否”は単独で否定の述語の役割を果たす。また鈴木直治 1994 によれば甲骨文には“不”のみ見られ，“否”は見られないのであるが，“否”はもともと“唯”が“口”を添えることにより，唯諾の応答語であることを表したように，“否”も“口”を添えることにより否定の語気を表す応答語として作られたものであるとする[27]。応答語であるということは，それだけで返答の文になり得，そのためまた一語で述語たり得たと考えることができる。

これらを考慮すれば“…否”の“否”は述語のなかの一部分である動詞を否定しているのではなく，述語全体の否定であり，言い換えれば“…”部分と“否”は対等な並列であると考えられるであろう。その意味でも上古漢語に見える文末否定詞は太古漢語や現代漢語のように‘A 不 A’型（甲骨文と現代漢語の‘A 不 A’型の A は動詞フレーズであるのと異なる）と併存しているのと異なるのである。

(2) どうして“…否”の後に“乎”が用いられているか

《孟子》の 3 例はいずれも“…否”の後に“乎”を持っているが，その理由は上古漢語では‘A 不’型のみでは文となれなかったためではないかと思われる。一般に漢語では肯定と否定を並列すれば疑問文を作ることができると言われるが，それは古今一貫した現象ではないことは上古漢語，中古漢語に‘A 不 A’型が存在しないことをみても明らかであろう。

先に（1）で述べたように“…”と“否”が対等な関係で並列されて，否定と肯定の並列がそのまま疑問文となる句法を持っていなかった時代に，述語成分の並列は一つの文としては不安定な形で，それだけでは完全な疑問文となることが出来なかったからであると思われる。そのため，完全な疑問文と為すために“乎”を補ったのであろう。

ここでいう「完全な疑問文となることが出来ない」とは，例えば現代漢語の選択を表す“或者”で並べられた二つの成分（‘A 或者 B’）は，それ自体は疑問を表す作用がないために，A と B の並列にすぎず（現代漢語の“或者”の例はこれが並列に過ぎないことを述べるのみであり，必ずしも上古漢語の“…否乎”の“…”と“否”の関係が“或者”のような成分によって結ばれた関係であることをいうものではない），疑問文は言うまでもなく，単独では完全な文にはならない。それに対して“还是”はそれ自体疑問を表すので‘A还是 B’だけでも疑問文になる。このような選択疑問文，或はその下位分類に属するとされる反復疑問文が未発達であった時期の漢語で，例えば現代漢語の‘A 或者 B’などのように，単に並列された 2 つ以上

26) この点については俞光中，植田均 1999 でも中古時期の例について“饮酒否饮酒”という文が成立しないことにより，その起源が反復疑問文から派生したのではないことを述べている。但し“否”と“不”の差違，及び拙稿で次に述べるなぜ文末否定詞の後に“乎”を持つかという問題については，見方が筆者と異なる（P.98）。

27) 鈴木直治 1994，pp.476–477。

の項目から一方を選ばせる場合に疑問を表す“乎”を添えたものであろうということである。

“…否乎”は目下のところ《孟子》の3例のみであるが，《庄子》に次のような例が見られる。

天下有至楽无有哉？有可以活身者无有哉？（《庄子・至乐》）
诚有善无有哉？（《庄子・至乐》）
果有楽无有哉？（《庄子・至乐》）[28]

これらの用例では“有”と“无有”を並べた後にいずれも“哉”という語気助詞を採っているが，やはり，肯定と否定の並列では疑問文を為し得なかったためではないかと思われる[29]。

(3)《庄子・天地》《史记》の‘A不’型は何故“乎”を持っていないか

《孟子》の用法は“…否”が更に語気助詞“乎”を従えることにより疑問文足り得たが，《庄子・天地》では文末に疑問語気助詞を持っていない。先にも述べたが，これは《庄子・天地》の例が“中否”が“未知”の賓語になっており，単独で文になっているわけではないからである。このような賓語の一部分であったものが，その部分だけが独立し虚化し得たかという点については，更に説明が必要であるが（後述），実は《孟子》の“我不识能至否乎？”も“能至否”が“不识”の賓語になっている。“…否”はそれだけでは不安定な形であるが，文の一部と成せば安定できるのであろう。

(4) どうして‘A与否’型が後に‘A否’型と合流し得たか

中古漢語の不字句は“不”，“否”の前に“与”“以（已）”などの添え字を時に挟むことができるという特徴を持つ。

愿陛下検校，为称职与否？（《古小说钩沈・郭子》）
高祖曰：“营国之本，礼教为先。朕离京邑以来，礼教为日新以不？”澄对曰：“臣谓日新”（《魏书・中任城王传》）[30]

このような添え字は，梁代以前には“与”が多く用いられることから[31]，より古い形は“与”で，これは恐らく名詞と名詞を連接する連詞“与”から変化したものであると考えられる[32]。

---

28) この用例は冯春田2000により知り得た。但し，《孟子》の例が，否定の述語“否”であったのに対し，《庄子》のこの用例は明らかに文中の動詞“有”に対応したものである。恐らく‘A不’型のような形式から，“…未”“…非”を派生させる過程で生じたものであると思われる。“…未”“…非”及び“…无有哉”など，この時期の他の関連する形式については別稿を用意したい。

29) 俞光中・植田均2000では“乎”は“…否”が是非疑問文であるために付加されたものであるとする点，“乎”の機能について筆者の考えと異なる。

30) 以上2例は坂井裕子1992による。

31) 坂井裕子1992，pp.128。

32) このような一種の添え字（“与”“以（已）”“也”などと書かれる）の起源には諸説あった。梅祖麟2000は《颜氏家训》にある““邪”者未定之词，……《汉书》云：“是邪，非协？”之类是也。而北人即呼为“也”字，亦为误矣”とあるのに基き，“还知也无？”は本来“还知邪无？”であるとする（pp.13–14）が，“也”よりも前に“以（已）”，更に“与”が存在すること，また若し，本来“还知邪无？”のような形であれば語法的に“无”が不必要であること，更に《颜氏家训》では方言音であるというが，この種の“也”は地域差に関係なく見られることなどにより問題がある。坂井裕子1992では，「句末の「不」（または「否」）が二音節化してできた形」であるという（p.128）。しかし，このような文末否定詞の“否”の変化の過程を通して見ても，名詞を繋げる連詞から変化したものであると見るのが妥当であろう。北川修一2000参考。

上古漢語に次の様な例が見られるが，これらがその起源であろう。

三十年，春，晋人侵郑，以观其可攻与否。(《左传・僖公三十年》)
持老养衰，犹有善于是者与不。(《荀子・正论》)

もし不字句が動詞の正と反の反復から変遷したものであるとすれば，大きく形式の異なる名詞と名詞を繋ぐ“A与否”が不字句に合流するのは難しいのではないかと思われる。しかし“以观其可攻与否”，“犹有善于是者与不”ともに(3)で先に述べた《庄子・天地》“未知中否”，《孟子》“我不识能至否乎”の例のように“其可攻与否”が“观”の賓語，“善于是者与不”が“有”の賓語になっており，“…否”と“…与否”は構造上は同じで，連詞を持つか持たないかの違いに過ぎない。また“犹有善于是者与不”は否定詞が“不”となっているが，“与”で並列させていることを考えれば，副詞“不”が単独で用いられているとは考え難く，“否”の字体の省略された形であると思われる。

以上を考え合わせると，上古漢語の‘A不’型の“…否”には次のような特徴が挙げられる。

1，上古漢語の“…否”は動詞とその否定の省略形ではなく，“…”と“否”の対等な並列であること。
2，上古漢語の“…否”の肯定，否定は“…与否”という形式が存在することを考えると，本来は動詞成分であっても，名詞成分の並列として扱われているのであろう。
3，上古漢語の“…否”は単独では疑問文になり得ない。またそれだけでは疑問文だけではなく他のいかなる文にもなり得ず，後に“乎”を従えるか，文中に賓語として用いなければならない。

上古漢語の文末に用いられる否定詞には以上のような特徴を持っていたと言えよう。更に付け加えれば，このような特色は甲骨文の用例とは異なるものである。

3.3.2.　上古漢語の文末否定詞の変化

では，このような用法の否定詞“否”が，どのような理由で，単独で文末に用いられ疑問文を作る成分になり得たのであろうか。その変化のきっかけは“否”の性質の変化にあるようである。

魏伯特1990によれば“否”は述語の否定形であったが，《孟子》には“否”が単独の返答として22回用いられており，そのうち，4回が赵岐注で“否，不也”“否，不是也”“否，不然”などと注されていることから，東漢では既に“否”が一部の慣用的表現を除いては常用語彙では無くなっており，また“否”の本来の述語の否定形としての用法が，東漢の口語では一部，特に返答を表す場合などに失われつつあるという[33]。

こうした変化の中で文末に置かれた“否”は本来は対等の並列であった“…”と“否”の関係に変化が起き，“否”が曖昧なものになっていったのではないかと考えられる。つまり“…”が文の主要部分として維持し続けるのに対し，“否”は付属的な成分へと弱化していったと思われる（このような“…”と“否”が対等でないという現象は，意義にも見られるが，その点については次節で述べる)[34]。更に，この“否”の弱化により，先秦では“…否”の“…”部分は名詞化した動詞で，“Np（＋与）＋否”であったものが，“…”は述語の動詞としての性

33)　魏伯特1990，p.152。

質を取り戻し，“Vp（＋与）＋否”へと変化したのではないかと考えられる。

また，文法形式としては上古漢語では反復疑問文は存在していなかったが，‘肯定＋否定’という2つの正反対の項目を提出するということ自身が元々疑問を成す素質を含むものであり，疑問語気助詞を持った‘A不乎’型にしろ，賓語の一部となった‘A不’型にしろ，次第に疑問文と認識されるようになり，“乎”を持たなくても，或は賓語の一部とならなくても，単独で完全な疑問文となることができるようになったと推測できる。更に時代が下ると，先に述べたように“否”が弱化したために，これが疑問語気助詞の役割を担っていったのであろう。

以上のように形式的及び意義的な面で変化が起り，‘A不’型の不字句が生じたのであると推測される。

このように発生においても，不字句は反復疑問文とは全く異なった起源を持つものであろうと思われる。また本来は“否”であった物が，一種の簡略化によって，漢代以降，文末否定詞（語気助詞）としては，“不”と書かれたようである。

3.4. 出土文献「秦簡」

ただし，以上は甲骨文以外は，全て伝世文献によって考察したものであり，70年代以降発掘された出土文献をも考慮に加えると，大きく異なる結果を出さねばならない。というのは既にこれまでに冯春田 1987・2000，崔南圭 1994，魏徳胜 2000 等に指摘されているのであるが，先秦の「睡虎地秦簡」にも‘A不A’型が既に見られるのである。

求盗盗，当刑为诚旦，问罪当驾（加）如害盗不当？
把其仮以亡，得及自出，当为盗不当？
免告老人，以为不孝，谒杀 当三环之不？[35]

このような伝世文献と出土文献の差異をどのように考えるべきか，筆者には両者を同時代の言語として解釈するべき答えを導き出し得ない。伝世文献と出土文献のこのような問題は既に系詞“是”の出現時代を考察した大西克也 1999 に見られる。大西克也 1999 では，戦国末期のある方言では既に系詞“是”が活発に用いられいたであろうこと，両漢の伝世文献で系詞“是”があまり見られないのは書面語の反映であり，口語で系詞“是”が用いられていなかったわけではないという結論を出されている[36]。しかし，実際には拙稿で検討する‘A不A’型，‘A不’型，‘A不乎’型の3者の関係は方言としては解釈しにくい。第1に上古に仮に‘A不A’型が方言として存在したとしても比較的，口語が反映され易いとされる中古になっても殆ど現われないこと（系詞“是”は中古には伝世文献でも頻繁に用いられている）。第2に上古と中古に

34) 江蓝生 2000 では，既に例えば“晋人侵郑，以观其可攻与否。”（《左传・僖公三十年》）の例を挙げ，“否”は“称代性”を持つために，“不可攻”に相当しえ，そのため，“VP不”（拙稿で言う‘A不’型）は“VP不VP?”（拙稿で言う‘A不A’型）に相当するという。しかし，先にも述べたように，先秦の‘A不’型は単独では文になり得ない，実際には先秦には‘A不A’型は存在しないなどの問題を含む。江蓝生 2000 では先秦の“VP不”は反復疑問文であり，その後文末の“不”が“称代性”を失うことにより，是非疑問文に変化していったとする。中古漢語の不字句の起源として先秦の文末の“否”が，述語に代わるものであることという出発点においては，筆者と同じであるが，それに対する分析は異なっている。

35) この3例は魏徳勝 2000 による。

36) 大西克也 1999，pp.342–343。

共に‘A不乎’型が存在し継承関係が確認出来るのに対し，出土文献からはそのような用例は検出されていないこと。第3には次に述べるように，中古の“不”の語気が中性疑問文ではないこと。第4に会話である問答を記録した《论语》には‘A不A’型，‘A不’型，‘A不乎’型の3種が全て現われず，若干時代の下る《孟子》に始めて‘A不乎’型だけが見られるように《论语》と《孟子》にすら言語の時代差が見られること。第5に《论语》《孟子》等伝世文献の言語がどの程度口語を反映したものであるのかは実証が難しいが，少なくとも疑問語気助詞に関しては先秦の“乎”“与”が方言的な区別を持つといわれたり（異論もあるが），漢代以降に“与”の変化であると思われる“邪”などが現われるなど，口語の変遷を伝世文献で確認することができるのに対し，不字句（特に‘A不A’型）が上古，中古漢語を通して伝世文献に見られないのは不自然であること。

以上のような理由から，先秦伝世文献と出土文献が一つの言語内の方言差違であるとするならば，出土文献は非常に特殊な方言の口語の反映の仕方をしていたと言わざるを得ない。

出土文献の言語的特色は同時代の伝世文献との関わりなども含めて更に研究される必要があろう。しかし上記の理由により，不字句に関しては目下のところ，伝世文献のみによってこれを考えたい[37]。

4. 意義，用法について

先にも述べたように不字句の“不”或は“否”は多種の動詞を持つ文の文末に用いられる。たとえば，

> 问：“得转不？”答：“不得转。”（《古小说钩沈・裴子语林》）
> …呼来问；“公识我否？”答云：“不识。”（《古小说钩沉・俗说》）

のような例では文末“不”は例えば“得转”“识”を否定する副詞と考えても問題はなさそうである。しかし，中古漢語では動詞と対応しない例が多く見られることは既に坂井裕子1992で指摘されている通りである。例えば，

> 問：“是昔蔡邕不？”答：“非也！與之同姓耳。”（《古小说钩沉・齐谐记》）
> 道固顾之而言曰：“张融是宋彭城长史张畅子不？”（《南齐书・张融传》）[38]

この例では，系詞“是”を用いた判断文であるが，中古漢語で“是”に対応する否定は用例中に見られる答えのように“非”である。勿論「初めに」でも挙げたように“是…非”という疑問文は中古漢語にも存在するが，文末の‘不’の特殊性は，他の文末否定詞と違い，動詞に無関係であることが言えよう。このような例は非常に普遍的に見られる。

---

37) また具体的な語法現象は挙げていないが西山猛2000では，「こういった資料（出土文献を指す：引用者注）を「中古漢語」に含めるというのは私の個人的な解釈である」という。しかし，反復疑問文についてのみ言うならば，唐代以降の語法との類似性すら指摘できる。

38) この用例は坂井裕子1992による。

颇小觉损不？帖有应不？（《淳化阁帖・改朔帖》）
意谓王曰："圣人有情不？"王曰："无。"（《世说新语・文学》）

このような"有…不"は牛島徳次 1967 によれば，既に漢代《史记》にも見られる。

…曰："公奴有病不？"舍人曰："奴无病，身无痛者。"（《史记・扁鹊仓公列传》）
泄公劳苦如生平驩，与语，问张王果有计谋不？（《史记・张耳陈余列传》）

更に赵岐注には次の様な注釈の例も見られる。

有诸？（《孟子・梁惠王下》）
有是语不？（赵岐注）

もし，これが'A 不 A'型の省略であるならば，動詞"有"の否定は"无"であるから"有…无"という形を採るはずであるが，六朝までは"无"を文末に置き疑問文を作ることは少ない。

一般的にはこのような形式は本来は動詞部分も"不"で否定できる文の文末に置かれるのが本来的な用法であったが，後に用法が広がり（"不"の虚化が進み）"不"で否定できない動詞を持つ文の文末にも"不"が用いられるようになったと考えられがちであるが，先に述べたように，発生当初から文末否定詞は，文中の動詞に対応して用いられたものではなく述語全体の否定形であった。そのために"是…不"，"有…不"という形式が存在するのであり，動詞の否定形の虚化という過程を経たものではない。従って，当然，現代漢語から推測する反復疑問文の語気の中性的性格は必ずしも持っているとは限らない。以下，幾つかの角度から不字句の語気について述べていくことにする。

4.1. 単用する'不'

《淳化阁帖》に次のような用例が多く見られる。

向见钦云："小苦虐不？"（《淳化阁帖・异暑帖》）
比二日书暂未至，未更近问。问情不适。比可不？（《淳化阁帖・十八日帖》）
想今渐胜。食进不？（《淳化阁帖・九月七日帖》）
日凉，弟佳不？（《淳化阁帖・二十四日帖》）

《淳化阁帖》には個人的な書簡が収められているが，これらはその書簡の出だしで読み手を労る言葉として用いられている。

例えば，現代漢語で"吃饭了吗？"と言うのを"吃饭了没有？"と言っても語感上，大きな違いを感じないかもしれない。しかし"病好了吗？"を"病好了没有？"といえば，この違いが大きく意識される。これは反復疑問文が中性であるため，話し手には病気がもうよくなっているという意識もなければ，まだよくなっていないという意識もないのであり，そのため，相手を労る語気がないのである。このような判断を《淳化阁帖》の例に当てはめた時，これらは中性疑問文であると考えることは出来ないと考える。勿論これは現代漢語の基準から判断したもので，仮に中古漢語に反復疑問文が存在しても，それが中性疑問文であるとは断定できない。

以下副詞と共起される“不”によって，これを確認していきたい。

4.2.　副詞と共起する不字句

これまで副詞との共起は何度も指摘されてきた。しかし，現象の指摘に止まることが多く，その現象について解釈をされることは少なかった。吴福祥 1996 では，副詞と共起する問題について比較的詳細に論じているが，筆者はこれと異なる考えを持った。ここでは“不”と共起する，“颇”“宁”“讵”“不”などの副詞について，筆者なりの分析を行いたい。

4.2.1.　‘宁…不’について

吴福祥 1996 では副詞“宁”と共起する文を““F-Vp”式反复问句”とする。

皇天宁有天神乎？（《古小说钩沉・幽明录》）
今日肴羞，宁有所遗不？（《南齐书・列传第十八》）[39]

上古，中古漢語の“宁”は疑問代詞として“怎么”或は反語を表す副詞として“难道”に相当する意義を表すこともあるが，また多く中古漢語では反語を表さず，語気副詞として単純な語気を表す疑問文を作ることもある。現代漢語ではこのように語気副詞によりこのような疑問文を作ることは少ないが慣用的に用いられる“近来可好？”の“可”などの用法に近い。

このような語気副詞を用い作る疑問文を““F-Vp”式反复问句”と分類するのは朱德熙 1985 の現代吳語研究により出されたものであるが，歴史文法とも結びつけ論じられたため，方言文法，歴史文法の両分野で多く引用される説である。

しかし疑問文を，反復，是非，選択，特指の 4 種に分類するのは基本的にはその形式によるものであり，肯定否定を並べていない疑問文を反復疑問文と分類するには何らかの別の根拠が必要であろう。

朱德熙 1985 以降，例えば徐烈炯・邵敬敏 1999 では，上海方言で用いる“阿 V?”は形式上は是非疑問文に近いが，語気はどちらかに傾くことのない中性疑問文であり，機能的には反復疑問文に近いのであると言う[40]。李小凡 1998 では蘇州方言の“阿 V?”は“普通话”の是非疑問文に相当する場合も，反復疑問文に相当する場合もあるという[41]。また游汝杰 1999 では主に形式によりこれを是非疑問文であるとする[42]。最も早期の吳語文法研究である，赵元任 1992 でもこれを是非疑問文と見なしている。吳語研究では“阿 V?”をどのように解釈するかは未だ定説を見ておらず，それは反復疑問文の定義に微妙な差があり，また個々の用例の解釈に差異が見られるためであるようであるが，少なくとも，肯定否定の並列でない疑問文を反復疑問文であると見なす根拠は既にそれが中性であるかどうかという点であることは明確にされている[43]。

39) 以上 2 例，柳士镇 1992 による。
40) 徐烈炯　邵敬敏 1999，pp.88–97。
41) 李小凡 1998，pp.131–141。
42) 游汝杰 1999，pp.98–101。
43) 南方方言では北方方言の“吗”のような疑問語気助詞が発達しておらず（南方方言では付加疑問文の“是不”やその合音語が“吗”に相当すると誤解されがちであるが），文末に否定詞を置く疑問文が多用されるが，それと対応して北京語では殆ど廃れてしまった疑問語気副詞による疑問文がよく用いられる。吳語のほか，閩語などの“敢”があるが，各方言における疑問語気助詞と疑問語気副詞の関係については，閩南語などを中心に別稿を用意している。

中古漢語において‘宁…不’疑問文を““F-Vp”式反复问句”と分類するには，これが中性であることを述べなければならないが，“宁”は既に清朝の刘淇《助字辨略》で“今日罢倦甚，卿宁惫邪？”[44](《后汉书・傅俊传》）の例を挙げ“此言将无惫也”と解釈している[45]。

また《孟子》原文と赵岐注に次のような対比も見られる。

曰：“可得闻与？”（《孟子・梁惠王下》）
宁可得闻耶？（赵岐注）

このような対比を太田辰夫1999で「与＝宁…耶」と説き，このような場合，文末の語気助詞は“耶”に限らず“乎”でも“不”でもいいものとする。参考までに《孟子・梁惠王下》に度々見られる“可得闻与？”を注した他の個所では，

宁可得闻？（赵岐注）
岂可得闻与？（赵岐注）

等も見られるが，“可得闻与？”に対比する‘宁…不’は見られなかった。しかし更に先に挙げたような対比も見られる。

如此则动否乎？《孟子・公孙丑上》
如是宁动心畏难自恐不能行否邪？（赵岐注）

この例は「否乎＝宁…否邪」と解釈されている。

有诸？（《孟子・梁惠王下》）
有是语不？（赵岐注）

これらは戦国時期の是非疑問文を東漢の不字句で解釈している例である。これらは意味的な解釈であり，漢代の注釈家が現代にいう語法，文型にまで考慮して注を行ったとは思えず，意義の近い用例の便宜的な解釈である可能性も否定出来ないが，以上述べたような不字句の語気を考えれば，このような対比も傍証とはなるであろう。

4.2.2. ‘颇…不’について

中古漢語の不字句が反復疑問文であるかどうかを判断する用例としては先の‘宁…不’に言及されることが多いが，‘颇…不’なども多く見られる。

既去，谓左右曰：“颇曾见如此人不？”（《世说新语・赏誉》）
抚琴曰：“顾彦先颇复赏此不？”（《世说新语・伤逝》）

44) 鼎文書局影印本では“今日罢倦甚，诸卿宁惫邪？”とする。
45) 他“宁”の用例が2例挙げられているが，いずれも“将＋否定”で解釈されている。また“宁”の解釈に用いられている“将无”は「ある判断を下さんとして，しかも断定を躊躇し，判断に余裕をおいた際の言葉」である（吉川幸次郎1968）。

‘頗…不’についてはつとに吉川幸次郎1968，水谷真成1994，江藍生2000で言及されている。吉川幸次郎1968によれば“頗”のもともとの意味は「すこしは」であり，これを文にかぶせることにより「事態の確実さを，あらかじめ少し目に制限しておく」語気を持つものであるという。これも中性疑問文であるとは言い難いであろう。

“宁”“頗”の他にも，疑問語気副詞と共に用いる“不”字は非常に多く見られる。“为”“复”“当复”などである。

阁上人曰：“闻鱼龙超修进精，为信尔不？何所修行”（《古小说钩沉・幽明录》）
得近示为慰，余热，比复可不？（《淳化阁帖・秋月帖》）
但观以上国再毁之臣，望府一逐之吏，当复是天下才否？（《宋书・列传第四十二》）[46]

“宁”“颗”“为”“复”“当复”など疑問語気副詞はもともといずれも若干なんらかの語気を添えるものであり，これらを持つ不字句は反復疑問文であることよりも，寧ろ是非疑問の語気を持つことの裏付けとなるであろう[47]。

4.2.3. ‘讵…不’について

中古漢語の不字句の中で，最も明確に不字句の傾向や現代漢語の“不”との違いが分かるのが語気副詞“讵”と共起した時である。“讵”は現代漢語の“难道”に相当する反語を表す副詞である。この点についてはこれまで既に坂井裕子1992，柳士镇1992，吴福祥1996などをはじめ，しばしば指摘されている。

既还，王长史语刘曰：“伊讵可以形色加人不？”（《世说新语・方正》）
素雪任风流，树木转枯悴，松柏无所忧折杨柳，寒衣履薄冰，欢讵知侬否？（〈月节折杨柳歌・十一月歌〉）[48]

このような文について，吴福祥1996では，「反復疑問文の句法の意義の枠組みに組み入れられない」[49]と非常に簡潔に述べられている。吴福祥1996のこの一言を筆者なりに解釈すれば次の様になる。

現代漢語の反復疑問文はその形式が，肯定と否定を同時に提出し，聞き手に肯定，否定のどちらかを選ばせるものであるため，元々疑問文自体（或るいは話し手の意識）は肯定，或は否定のどちらか一方に片寄るものではなく，その意味で中性的な疑問文であると言える。従って，話し手の意識を加味し，肯定，或は否定に語気を傾かせる副詞“难道”等と共に用い，“＊难道你去不？”や“＊难道你去不去？”のようには言うことは出来ないのである。しかし現代漢語で“你去不去？”とほぼ同じ意味を表すことのできる是非疑問文“你去吗？”は中性的ではないので，“难道你去吗？”或は否定の面から“难道你不去吗？”と言える。

それに対して，中古漢語の文末の‘不’は表面的には現代漢語と同じく肯定，否定を同時に

46) この用例は柳士镇1992による。
47) 中古漢語の疑問文に用いられる疑問語気副詞については森野繁夫1975「六朝漢語の疑問文」などに詳しい。
48) この用例は坂井裕子1992による。
49) 吴福祥1996，p.485

提出するという形をとりながらも，中性的ではない語気を表す“讵”と共に用いることができるのである。

吴福祥 1996 ではこれら“讵”を持つ文を“反诘问句”としているが，“反诘问句”は意義の面から分類されたものであり，形式による是非，反復，選択，特指の 4 分類に追加されるものではない。范晓 1998 によれば“反问”には特指疑問文，是非疑問文，反復疑問文，選択疑問文のそれぞれの形式を借りて作ることができる。これらが表す“反问”の語気はそれぞれ異なるのであるが，現代漢語では“难道”と共起できるのは，是非疑問文の形を借りた“反诘”のみであり，そこから見ても‘讵…不’は是非疑問文の一種であると言うことができる。

4.2.4. ‘不…不’について

副詞は“宁”“颇”“讵”等の他に，“不”など否定副詞と共起する例が見られる。これについても柳士镇 1992，坂井裕子 1992，吴福祥 1996 などで指摘されている。

王尚书惠尝看王右军夫人，问：“眼耳未觉恶不？”(《世说新语・轻媛》)
桓南郡每见人不快，辄嗔云：“君得哀家梨，当复不蒸食不？”(《世说新语・轻诋》)

吴福祥 1996 ではこれも「反復疑問文の句法の意義の枠組みに組み入れられない」と述べられた例の一つであるが，これは先に述べた疑問語気副詞“宁”など，反語語気副詞“讵”と共用する例が反復疑問文ではないのとは若干異なった角度から説明することができる。

これは極単純に言えば，現代漢語では“*没有去过没有？”とは言えないということであるが，つまり述語動詞が既に否定形であるものを，更に文末に否定詞を添え疑問文を作る句法は現代漢語には無い，ということである。ただ，現代漢語に無いことが，そのまま中古漢語にないと言えるのかどうかについては検討の余地がある。

元来，反復疑問文は先にも述べたようなことから中性的な疑問文でなければならない。‘肯定＋否定’で中性的意義を持つのであるから，肯定，否定の提出の順序は問わないはずである。一般的には‘肯定＋否定’という肯定が先で否定が後の順序で表されるが，それは例えば“你去不去？”の肯定部分“去”と否定部分“不去”の順序を変え‘否定＋肯定’にすれば“＊你不去去？”となり，混乱を招きやすいからなどのためであり，肯定部分が先に提出されているからといって，語気（或は話し手の意識）が肯定に傾いているわけではない。そのため現代漢語では，わざわざ‘否定＋否定の否定（つまり肯定）’という形式で順序を変更して，例えば否定を強調するなどと言うことは不可能であり，不必要である。中古漢語で表面上，それが行われているということは副詞としての‘不’或は，文末否定詞の‘不’が現代漢語とは違った性質を持っていることを物語っている。これまでに述べてきた条件を考慮すれば文末否定詞の性質が異質であると考えるべきであろう。ここからも中古漢語の副詞の‘不’と共起する文末の‘不’は反復疑問の機能を持っていないことが分かる。

ここで問題となる，なぜ‘不…不’のような形式が可能であるかは次節で‘不’字の性質の問題として述べるが，以上《淳化阁帖》の“不”字や“宁”“颇”“讵”“不”と共起する“不”字の用例の全体を通して，これら全てが反復疑問文であると言うことは難しいであろう。先に述べたように，吴福祥 1996 では，六朝から唐代にかけての不字句を反復疑問文と非反復疑問文に分けて考えられるのであるが，《淳化阁帖》などに見られる，単用の例ですらも中性疑問文（＝反復疑問文）とは考えにくい。

筆者は中古漢語の不字句は全て反復疑問文ではなく，反語を表す副詞との共起などから，これを現代漢語の“吗”字句に近い是非疑問文であると考える。

5. 文末の‘不’の性質

以上，中古漢語の不字句は語音が副詞“不”と異なっているだけでなく，起源及び変遷，意義及び用法も，反復疑問文では有り得ないことを述べた。筆者は中古漢語の‘不’は既に現代漢語（共通語）の是非疑問文の“吗”に近い性質を持っていたと考えるが，現代漢語の“吗”は字面上でも否定意義持っていないのに対し，中古漢語の“不”は字面上では否定意義を持っているという違いがある。

5.1. 否定意義の存否

まず第1に問題となるのが果たして‘不’に否定意義が残されているのかという問題である。中古漢語の‘不’は既に現代漢語の“吗”に等しい作用を持っていると思われる。では‘不’は否定意義を既に失っていると見るべきであろうか。

先にも述べたが，現代漢語の反復疑問文は肯定と否定が対等に並列している。そのため，“难道”などという話し手の情意を表す副詞とは共起できない。ではなぜ中古漢語では形式的には肯定と否定を並列しておきながら，現代漢語の反復疑問文と語気が異なるのであろうか。

先に起源と変遷を述べた節で，先秦において“否”字が述語の性質を失い，“…否”の“否”は“…”と対等では無くなった可能性を述べた。それが意味にも反映しているのではないだろうか。つまり，中古漢語の不字句では，その肯定と否定が対等に提出されているのではなく，肯定が主で，否定が従として提出されており，それにより中性疑問文とは異なる性質を持つのではなのではなかろうかと推測されるのである。つまり，現代漢語のように中性的な意義であれば，先にも述べたように肯定，否定の順序を逆さにする必要がない。それに対して，中古漢語では中性ではなく，肯定が主，否定が従であるために，話し手の語気を否定を主として「…ではないですか」というような語気を表したい場合には，“不…不”のような形が生じたのではないかと考える。

或はこれらの是非疑問文としての用法は既に現代漢語の“吗”字句と等しいため，字面上は‘不’という否定詞を持ちながらも実際には否定意義は虚化していたと考えることもできよう。しかし中古漢語の疑問文には他に文末に“非”“未”が用いられる。先秦《孟子》，漢代《史记》などの例から見れば恐らくは“否”“不”等が始めに用いられ，その他“未”“非”は“否”“不”が否定詞であるという類推から生じた用法であると考えられるが，上記のような形で，中古漢語の“否”“不”も否定意義を残していれば，このような類推を促がすことも可能であったといえる[50]。

5.2. 特指疑問文，選択疑問文に用いられた‘不’

先に述べたように中古漢語における文末の否定詞は基本的には否定意義を残しているものと思われる。否定意義を残していれば，意義の重点が肯定に傾いていたとしても，疑問代詞と共

50) “未”などは《淳化閣帖》などでも，相手を労る挨拶の言葉として，“病转差未？（阿史病转差帖）”のように用いられるので，中性疑問ではないようである。中古漢語の他の文末否定詞“未”“非”については稿を改めて論じたい。

に用い特指疑問文を作ることは困難である。しかし非常に希ではあるが，次の様な例も見られた。

还此，今有书。何以至不？（《淳化阁帖・还此帖》）

この例は森野繁夫・佐藤利行 1988 の訓読で「何をもって至るや」と訓ずるように[51]文末の否定詞“不”は語気助詞として用いられている。

また，坂井裕子 1992 では選択疑問文に用いられた例が既に指摘されている。

谢因问殷：“眼往属万形？万形来入眼不？”（《世说新语・文学》）

これは「目が万物の方に行って触れる」のか「万物が目の方に入って来るのか」[52]を選択させるものであり，“不”を加味した「万物が目の方に入って来ない」ことは選択肢には入っていないことから，これも“不”は語気助詞として用いられていると見なさなくてはならない。

《世说新语》《淳化阁帖》の例はともに孤例であり，誤用の可能性も高いと思われるが，このような用例を生み出した理由は，中古漢語では文末の否定詞が弱化していることにあるのではないかと思われる。

6. おわりに

以上，歴史文法における是非疑問文と反復疑問文の起源，変遷の時代の違いとその意義，用法の違いにより，筆者は中古漢語の文末否定詞を語気助詞と見做し，それを持つ疑問文を是非疑問文であると考える。

また上古漢語の用例から，不字句は本来述語の否定形である“否”に源を持ち，漢代に至って“否”が述語の性質を失うことによって，語気助詞として成立し得たのであり，現代漢語の語気助詞“吗”の遠祖ともいえる中古漢語の“不”“否”はもともと反復疑問文とは全く異なったところで発生が準備されていたのである。

また不字句に関連して，幾つかの問題が残されている。

第 1 には中古漢語のその他の文末否定詞“未”“非”の用法と不字句との関連はどのようなものであるか。

第 2 には中古漢語では文末否定詞は“不”“否”が多く用いられたが，唐代になると“无”がそれにとって替わる。六朝までの“不”と唐代の“无”の関係はどのようなものであろうか。

第 3 に拙稿で中古漢語の不字句は反復疑問文ではないと述べたが，では中性疑問の語気をもつ反復疑問文（‘A 不 A’型，‘A 不’型）はいかなる条件で，いつ出現したのか。

これらの問題は今後の課題としたい。

51) 森野繁夫・佐藤利行 1988，pp.263。
52) 訳は坂井裕子 1992 による。

参 考 文 献

引 用 文 献

＊基本資料
《世说新语校笺》徐震堮1989文史哲出版社
《古小说钩沉》鲁迅校录1997齐鲁书社
『淳化閣帖　訳注篇』森野繁夫・佐藤利行1988，白帝社。
＊その他先行研究により知り得た用例は，以下に基いた。
《论语》《孟子》《左传》十三经注疏所収（艺文印书馆）
《荀子》《战国策》四部丛刊初编史部所收（台湾中华书局）
《庄子》四部备要（台湾商务印书馆）
《史记》《后汉书》《南齐书》《魏书》《宋书》（台湾鼎文书局）
＊日本語文献
専門書
牛島徳次　1967　『漢語文法論（上代編）』大修館書店
――――　1971　『漢語文法論（中古編）』大修館書店
太田辰夫　1986　『中国語歴史文法』朋友書店（初版は1958年）
――――　1987　『古典中国語文法』（改訂版）汲古書院（初版は1964年）
――――　1999　『中国語史通考』（普及版）白帝社（初版は1988年）
論　文
北川修一　2000　「閩南語“抑”の語源」『中国語研究』42，pp.74–83
坂井裕子　1992　「中古漢語の是非疑問文」『中国語学』239，pp.125–133
鈴木直治　1994　「古代漢語における否定詞について」『中国古代語法の研究』pp.465–518，汲古書院（初出は1975年）。
辻　星児　1997　「「不」の字音について―中国・日本・朝鮮―」『東洋学報』79，pp.342–326
藤堂保明　1967　『中国言語文化叢書1　言語』「序説・6殷代の言語」pp.21–27，大修館書店。
西山　猛　2000　「広東語の選択疑問と中古漢語の「定」」『言語文化研究』12，pp.137–144（但し拙稿ではhttp://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~nishi/kanton11.html掲載のもを用いた）
水谷真成　1994　「「頗」字訓詁小考」『中国語史研究』pp.42–50，三省堂（初出は1954年）。
吉川幸次郎　1968　「六朝助字小記」『吉川幸次郎全集』第7巻，pp.494–499，筑摩書房（「頗」の項の初出は1947年）。
＊中国語文献
専門書
陈梦家　1956　《殷虚卜词综述》中国科学院考古研究所编辑　科学出版社
范晓主编　1998　《汉语的句子类型》上海出版社
冯春田　2000　《近代汉语语法研究》山东教育出版社
管燮初　1953　《殷需甲骨刻辞的语法研究》中国科学院语言研究所编辑科学出版社。
李小凡　1998　《苏州方言语法研究》北京大学出版社
柳士镇　1992　《魏晋南北朝厉史语法》南京大学出版社
孙良明　1994　《古代汉语语法变化研究》语文出版社
王　力　1988　《汉语史稿》《王力文集》第九卷（初版は1957–1958年）
王云路　1999　《六朝诗歌语词研究》黑龙江教育出版社
魏德胜　2000　《《睡虎地秦墓竹简》语法研究》首都师范大学出版社
吴福祥　1996　《敦煌变文语法研究》岳麓书社
徐烈炯　邵敬敏　1999　《上海方言语法研究》华东师范大学出版社
俞光中・植田均　1999　《近代汉语语法研究》学林出版社
朱岐祥　1998　《甲骨文研究》里仁书局
张振德等　1995　《《世说新语》语言研究》巴蜀书社
赵　诚　1988　《甲骨文简明辞典》中华书局
论　文
崔南圭　1994　〈《睡虎地秦简》语法研究〉东海大学博士论文
大西克也　1999　〈试释“是是”〉『論集　中国古代の文字と文化』汲古書院
冯春田　1987　〈秦墓竹简选择问句分析〉《语文研究》1
江蓝生　2000　〈疑问副词“颇，可，还”〉《近代汉语探源》pp.65–94（初出は1992）

梅祖麟 2000 〈现代汉语选择问句的来源〉《梅祖麟语言学论文集》pp.3–27（初出は1978年）
裘锡圭 1988 〈关于殷虚卜辞的命辞是否问句的考察〉《中国语文》1，pp.1–20
魏伯特 1990 〈郑玄赵岐何休传笺中的一些语法特色〉台湾大学硕士论文
吴福祥 1997 〈从“VP—neg”式反复问句的分化谈语气词“么”的生产〉《中国语文》1，pp.44–54。
游汝杰 1999 〈吴语里的反复问句〉《游汝杰自选集》pp.97–121，广西师范大学出版社（初出は1991）。
赵元任 1992 〈北京，苏州，常州诸助词的研究〉《中国现代语言学的开拓和发展》pp.161–210，清华大学出版社（初出は1926年）。
朱德熙 1985 〈汉语方言里的两种反复问句〉《中国语文》1，pp.10–20。

Journal of Asian and African Studies, No. 62, 2001

[Source Materials and Remarks]

Authority in Language:
The Role of the Chichewa Board (1972–1995) in Prescription and Standardization of Chichewa

KISHINDO, Pascal J.
University of Malawi

Language prescription has had a long tradition in the West especially France. In medieval Europe institutions were set up to legislate the 'correct' usage of language and codify these legislations in handbooks. This task was not the preserve of institutions alone, individuals also set themselves up as self-styled experts in this domain. These individuals usually plied their trade in newspapers and magazines. The urge to prescribe was not peculiar to Western countries. African countries have also seen the need to prescribe the correct usage of their languages. This has been more urgent in those countries where African languages have been given official status, for example, use in education. The need to prescribe has been seriously felt in the domain of orthography. The desire to standardize the orthography has, therefore, been paramount. This paper discusses the attempts made by the Chichewa Board to prescribe the correct usage of Chichewa and to standardize its orthography. Chichewa is the national language of Malawi but it is also spoken in Zambia, Zimbabwe and Mozambique where it is known as Chinyanja. The paper examines the dominant role played by Dr. Hastings Kamuzu Banda, Malawi's first President and founder of the Chichewa Board, in its affairs. The strategies that the Board employed to ensure that standardization is achieved are discussed. Finally the Board's achievements are assessed.

Introduction
Historical Precedence
Dr. H. Kamuzu Banda and Chichewa
The Chichewa Board: a Synopsis
Functions of the Board
Prescription in Practice
Modernization of Chichewa
Evaluation
Conclusion

Keywords: Language prescription, language plannning, lexicography, orthography, standardization

It has come to our notice that the public at large regards the Board as a superior Body in matters concerning Chichewa as a national language. They therefore, expect to get answers to their questions about Chichewa written or spoken from the Board.

Secretary, Chichewa Board.

Introduction

Prescription, according to Milroy and Milroy (1984, p.1), depends on ideology (or a set of beliefs) regarding language which requires that language use as in other matters such as car driving things shall be done in the right way. However, language unlike car driving is a much more complex phenomenon. Besides it is a much more fundamental aspect of human experience. Whereas driving rules are codified in highway codes, "correct" use of language is codified in handbooks of usage. It is likely that all speakers of Chichewa and possibly speakers of most languages have a number of definite opinions as to what is "correct" or "incorrect" in the language they use. Nevertheless, they may often look to 'expert' opinions rather than to their own knowledge of language, or in Chomskyan terms, competence, to make a decision. In the English tradition there are individuals who set themselves up as experts on English language usage. These individuals usually write for newspapers or magazines. These language amateur/enthusiasts have rather unflatteringly been called language shamans (Bolinger 1980) or language mavens (Pinker 1994). As regards Chichewa, the national language of Malawi, people looked up to the shamans at the Chichewa Board for guidance on language usage.

Language being such a complex phenomenon, it is not easy to separate the nature of language prescription (i.e. imposition of norms of usage by authority) from a number of related issues, such as standardization of language. These are ordinarily interwoven. In this paper I shall explore the role of the Chichewa Board, the then language authority in Malawi, in imposing norms of usage and standardization of Chichewa. The paper will, among other things, discuss the influence of Dr. Hastings Kamuzu Banda on the Board's affairs and the strategies the Board employed to ensure standardization of Chichewa. Finally the Board's successes and failures will be assessed.

Historical Precedence

The sixteenth, seventeenth and eighteenth centuries were remarkable for a concern with language standards. Closely connected to the efforts of individual philologists, both amateur and proffessional, were those of formal institutions. The Italian experience set the scene for others. The first body devoted to language was the Academia Della Crusca of Florence, founded in 1572. Its first major task was the purification and codification of the Italian grammar and dictionary. The first never appeared, but the dictionary was published in Venice in 1612 (Edwards 1994, p.156).

The academia continues to work on lexicography to the present.

Similar interest groups existed in France, one of which was the Pleiade in the Sixteenth century, and another led by Marie de Gournay in the Seventeenth century. Since officialdom regarded such groupings as potentially troublesome, it moved to control them by bestowing recognition. Thus, for example cardinal Richelieu converted the gathering of Valentin Conrart (1603-75) into the Academie Francaise. The main concern of the Academie was to reinforce its conception of "clarity", "simplicity" and "good taste". The so-called forty "immortals" of the Academy were given "absolute power over language and literature", although only two men trained in lexicography have ever been members (Edwards 1994, p.156). Most members of the Academie were drawn from the church, nobility or military. These institutions would at least historically, have been inheritors of the best of French and the obvious arbiters of linguistic taste. In modern times, the Academie is best known for its attempts of trying to keep the French language free of foreign loans especially English ones. And also to create, where necessary, French terms for the products and processes of science and technology. The Academie has thus acquired a modernization function to supplement the original purifying objective.

With the same objectives as the Academie Francaise and much influenced by it, was the Real Academia Espanola founded in 1713 by the Bourbon king Philip V. Its royal motto, Limpia, fija y da esplendor emphasizes once more the desire to clarify, purify and glorify language. The Spanish academy produced a dictionary in 1730 and a grammar in 1771. The work of the Spanish academy is generally considered better than that of the Italian Academy and Academy Francaise.

In the English speaking world there hasn't been anything similar to the European tradition in terms of formal institutions. Quirk (1982, pp.67-68) has ascribed this to the Englishman's aversion to "linguistic engineering" of any sort. This, however, does not mean that the prescriptive urge is not there. The job of prescription has been left to teachers, publishers and individuals (See Milroy and Milroy 1985; Pinker 1994 and Edwards 1994).

Although the Chichewa Board had inherited the idea of its role in society from these European institutions, it looked up to the Kiswahili Institute of Research set up at the University College, Dar-es-salaam in Tanzania in 1964 as its model. The Institute was a metamorphosis of the East African Swahili Committee which had been established in 1930. This body, despite current efforts to play down its achievements, contributed greatly to the fact that by independence Swahili had had a standard orthography for more than a quarter of a century, had a fair number of grammars and dictionaries, and by African standards, a substantial body of written texts of one kind or another (Whiteley 1973). Similarly, the Association for the Advancement of Swahili (Jumiya ya Kustawisha Kiswahili) though re-founded in 1963, was in effect a continuation of a society set up in Tanga during the nineteen fifties with the aim, essentially, of rehabilitating Swahili from the rather inferior position it occupied to English.

The Kiswahili Institute of Research has continued work on new Swahili dictionaries, and periodically produces lists of words for official use. Other organizations, such as Radio Tanzania, have been appointed as an "observer" to keep an eye open for misuse and make corrections wherever and whenever possible. The Ministry of National Education, too, has an Inspector of Swahili who not only supervises work in the schools but initiates projects in the preparations of school texts (Whiteley 1973).

In a nutshell one may say that purification from English influences is one of the major objectives here, e.g. reducing code-switching, excessive use of loans and what are held to be Anglicisms in syntax and colloquialism (Whiteley 1973, p.19). More positively the use of words from other Bantu languages is encouraged. A model of written Swahili was provided by the journal of Lugha Yetu (Our Language) which was intended to serve as "good example of correct Swahili usage" (Whiteley 1973, p.20).

Dr. H. Kamuzu Banda and Chichewa

One cannot truly appreciate the workings of the Chichewa Board without understanding the towering authoritarian figure of Dr Hastings Kamuzu Banda, the first president of Malawi, the so-called Life President and the founder of the Chichewa Board. The story of Chichewa Board is the story of Dr Banda's interest in language. Dr Banda's interest in Chichewa can be traced back to his student days at the University of Chicago where he acted as an informant to Mark Hanna Watkins, an African-American scholar who was preparing a thesis on Chichewa, Banda's own mother tongue. At this stage Banda was an up-coming scholar who enjoyed the patronage and support of Professor Edward Sapir, a leading anthropological linguist who had an abiding interest in the development of African studies (Phiri 1995, p.2). In regard to his association with Dr Banda, Watkins (1937, p.7) observes:

> All the information was obtained from Kamuzu Banda, a native Chewa, while he was in attendance at the University of Chicago, from 1930–1932. Some of it, however, consists of letters which he received from home and kindly permitted me to study. He read the letters and aided with the translation. A portion of the material utilised in the revision was also obtained from him during 'spare moments' since 1932. Mr. Banda was a very excellent informant and without his cooperation this study would contain more defects than it does.

On the eve of the outbreak of the Second World War, Dr. Banda found himself in the company of his relation, Native Authority S. C. Mwase of Kasungu who the School of Oriental Studies (now School of Oriental and African Studies) of the University of London had invited to act as a Chichewa informant. With regard to this visit, a Dr. Bargery and a Cullen Young had previously arranged with the Colonial Office that Dr.

Banda should live with the Chief during the early days of his stay in England and show him around in return for a grant offered him for his medical studies. But beyond showing Chief Mwase around:

> (...) during the early part of the research Dr. Banda often accompanied the Chief and helped me explain the various phonetic and grammatical points I wished to investigate.[1)]

It could be argued that the period that Banda was a student was quite instrumental in the development of his views on language. One can discern the origins of his passion, at a later date, for the correct usage of Chichewa, and its development.

It was not surprising that when he became the President of Malawi, the party he led, the Malawi Congress Party, at its annual convention in 1968 endorsed his views of making Chichewa the national language in the interest of national unity. The delegates recommended that:

i. Malawi adopt Chinyanja as a national language;
ii. That the name Chinyanja (should) henceforth be known as Chichewa;
iii. That Chichewa and English (should) be the official languages of the state of Malawi and that all other languages would continue to be used in private life in their respective homes.[2)]

The reason for change of name from Chinyanja to Chichewa have been discussed in a number of works (Kishindo 1990, 1998; Mchombo nd). A number of scholars have been critical of the move to nationalize Chichewa because it apparently was done without adequate consultation and it suppressed "smaller" languages such as Chitumbuka and Chiyao (See Kishindo 1996, 1998; Phiri 1997 among others). The point these scholars seem to miss is that language plannning is far from straightforward. The work of linguists is certainly important requiring a great deal of skill, but they should not delude themselves that they are the prime movers in this exercise. The job of selecting languages for use at the national level does not occur in isolation, it is part of social engineering. Scholars should acknowledge the radically different magnitude between their contribution and that of the real planners — politicians, administrators and above all rulers. Also, it is abundantly clear that language planning, especially selection and implementation is not value-free; it is, in fact, a heavily value-laden exercise. It is subservient to the demands of non-academic interests with social and political agendas. Certainly any disinterested theorizing becomes compromised in practice. Language planning in 1968 in Malawi, just as elsewhere, was inevitably coloured by ideological imperatives — and the driving imperative was nation building.

1) See Guy Atkins, "Chinyanja Linguistic Research, General Report of Chief S.C. Mwase's visit to England," August 15, 1939 to February 10, 1940, Malawi National Archives File No.526/8/1/1.
2) See Malawi Congress Party, Annual Convention Resolutions 1965–1985, p.6.

So, what may have appeared as progress to some was seen as persecution to others. Language planning after all is prescriptivism.

It is common knowledge that the Banda years (1964–1994) were in linguistic matters and otherwise years of authoritarianism and prescriptivism.[3] During that period much of the work of codifying and standardizing Chichewa was carried out by the Chichewa Board. It was the engine that drove the standardization process of Chichewa. It is, however, doubtful whether without Dr. Banda language plannning would follow the path it did between 1968 and 1995 as the Board acknowledges:

> The Board noted with keen interest and profound gratitude that the return of His Excellency the Life President, Ngwazi Dr. Banda, in 1958 marked the start of the real concern with the development of Chichewa leading to the establishment of the Chichewa Board in 1972, as well as the Chichewa Working Group.[4] [Emphasis in original]

It was not surprising therefore that he was believed to be the ultimate authority on Chichewa matters. Hence unofficially he was referred to as the "Honorary Professor of Chichewa."

The Chichewa Board: a Synopsis

The Chichewa Board was established early 1972 when the then President, Dr. Banda directed its formation. But before the Board was formed there was a Chichewa Research Committee appointed and financed by the President which began work in 1970. The Committee which consisted of three members[5] was concerned with collecting Chichewa words from every Chichewa speaking district in preparation for compilation of a National Dictionary of the Chichewa Language. It was based in Lilongwe and operated under the auspices of the Ministry of Education. Every month the committee produced a list of words with their meanings, a copy of which was always submitted to the President.[6]

With fervent desire to get the Dictionary produced in a reasonable short span of time Dr. Banda stepped in personally and appointed a special group known as the Chichewa Working Group[7] under his own chairmanship to tackle the more difficult tasks connected with the preparations for the Dictionary compilation. The Research Committee was eventually absorbed by the Working Group. The Chichewa Working

3) The more glaring ones were legislations on dress, expression and censorship of the Arts.
4) See Minute 6/80 of the Meeting of the Chichewa Board held in the Conference Room of the MCE Board in Zomba on the 7th August, 1980. Ref. No.BM/2/2/5.
5) The committee members were S.J. Nthara, B. Mbuka Banda, (both retired teachers) and W. Chakwera (politician).
6) See "A Brief History of the Chichewa Board (1970–1977)." Circular Ref No.ADM/1/40.
7) See "A Brief History of the Chichewa Board (1970–1977)." Circular Ref No.ADM/1/40.

Group, as the name implies, was a working force and as such it had to serve under the supervision of a Board hence the Chichewa Board[8] was also appointed by Dr. Banda. The Board began its work in 1972.

The Board, however, found itself confronted with two immediate problems: (a) lack of universally acceptable grammatical terminology and (b) [lack] of universally acceptable orthography of Chichewa.[9] The latter was quickly resolved. A number of consultations were held on orthographic matters and a draft orthography was produced. The draft Orthography Rules were approved by Dr. Banda as New Chichewa Orthography Rules (1973).

In the same year 1973, Dr. Banda ordered that the Chichewa Working Group should take over Chichewa coordination from the Malawi Broadcasting Corporation (MBC).

In 1977 the Board was declared a statutory Board. Throughout its life the Board was very conscious of the overwhelming presence of its founder as it will become clear subsequently.

Functions of the Board

The stated functions of the Board were:

i. to provide the national dictionary of the Chichewa language,
ii. to provide Chichewa orthography rules, and
iii. develop the Chichewa language.[10]

In addition to the above named functions, the Chichewa Working Group was responsible for coordination of Chichewa in the country. Although this function was not very well defined, the coordination of Chichewa included:

i. checking Chichewa language and spelling in newspapers and magazines and other publications;
ii. advising the MBC on Chichewa usage and
iii. interpreting the Chichewa orthography.[11]

And as part of the standardizing efforts, the Board

i. answere[d] letters on "Tiphunzitsane Chichewa" on MBC;
ii. correcte[d] spoken Chichewa on "Tiphunzitsane Chichewa" on MBC;
iii. vet[ted] Chichewa materials e.g. books, papers and pamphlets; and

8) The first Board comprised politicians who were also Members of Parliament as well as cabinet ministers: J.D. Msonthi (Chairman), A.E. Gadama, P.L. Makhumula Nkhoma and A.M. Nyasulu.
9) See "Brief History..." The second claim though is rather curious because orthographic rules existed and they were published as the Publication Circular No.3. The Chairman of the Board acknowledges the existence of these rules in the Introduction to the 1973 Rules.
10) See "Chichewa Board 1984 Malawi Convention Exhibition Flier", Ref No.CD/4/25/104.
11) See "Chichewa Board 1984 Malawi Convention Exhibition Flier", Ref No.CD/4/25/104.

iv. translate[d] English materials into Chichewa.[12)]

From the functions of the Board mentioned above, it is clear that it was a prescriptive institution in the tradition of the medieval academies of Italy, France and Spain. In the following sections we examine the strategies the Board adopted to achieve its goals of standardization and Chichewa.

Prescription in Practice

Orthography

Although it is not acknowledged anywhere in the records of the Chichewa Board, their work in orthography was just a continuation of similar work done during the colonial period (Kishindo 1990). For example, a colonial orthographic committee was formed and two meetings were held: one in 1931, and the other in 1932. At the 1931 meeting, members of the orthography committee made several recommendations that were submitted to the language Board of that time. In 1945 the committee's proceedings were taken over by the Phelps-Stoke Commission.[13)] The committee reconvened two years later at the invitaion of the Central African Publications Bureau. The meeting involved members from Northern and Southern Rhodesia and Nyasaland bureaux. In 1953 the Federal Government (of the Rhodesias and Nyasaland) decreed that all languages with substantial number of speakers should be standardized. This decree led to a number of languages being broadcast on the radio. However, due to the state of emergency declared in 1959, which precipitated the disintegration of the Federal government, the activities of the orthography committee were interrupted. In 1963, the Northern Rhodesia and Nyasaland Publications Bureaux split. Subsequently, the Nyasaland Bureau was absorbed into the Ministry of Education.

It is not surprising, therefore, that when Dr. Banda initiated the Chichewa Research Committee it operated under the aegis of the Ministry of Education. Vernacular language matters had always been the concern of the said Ministry.

The Chichewa Board's own rules appeared in 1973 as New Chichewa Orthography. In the new rules it is very clear that the recommendations made by various scholars (Atkins 1950; Young 1949) on the orthography rules of 1931, and the 1947 agreement of the inter-territorial language reform conference were ignored. Below some of the more problematic rules will be discussed. Consider Rule 2 of 1973 which says:

i. l should be used after a, o, u, and r should be used after e and i
ii. at the beginning of a word only l and not r be used;
iii. when a prefix precedes a word which in another form would be written with l-, l does not change to r.

12) See "Chichewa Board 1984 Malawi Convention Exhibition fliers," Ref No.CD/4/25/104.
13) This was a charitable organization whose mandate was to assess the state of education in English-speaking Africa.

iv. nouns of the Mu-/Mi- class starting in ml- should be written with -l- in plural as well;

v. all stems should be written with -l- even if the prefix contains i.

vi. l should be used consistently in the emphatic pronoun ilo (in the singular of the Li-/Ma- class) and in the demonstratives ili and ilo (singular Li-/Ma- class).

In this rule the sub-rules are apparently posited to ensure consistency. However, in practice, these rules do not seem to be used consistently at all. As Mtenje (1980) points out, the boundaries of specification as to when to use them are subject to constant variation sometimes determined by the user's dialectal influence. The source of the problem, Mtenje claims, is that what is thought to be an r sound is actually a velarized lateral (l) which occurs before back vowels. And like Atkins before him, Mtenje advocates the abandonment of the use of r in the Chichewa orthography. It would appear therefore, that what may be called a pseudo-choice between l and r occurs because of the historical mistake that Chichewa has r as a sound and by implications as a symbol in the orthography.[14)]

The 1973 rules also reopened the debate on c and ch which was controverisal when it was first suggested in 1931, and a more curious rule is provided as Rule 14:

i. when h is in combination with c there is no aspiration, e.g. Chala not cala, chulu not culu.

ii. when aspiration is expected in a word beginning with ch- then t should be prefixed to the word, e.g. tchinga not cinga

iii. likewise where nch- or mch- appear t should be inserted between n and c or between m and c e.g. ntchito, ntchira.

Here again Atkins (1950) suggestion was not heeded. The rule also goes against the recommendation of Niamey Conference on African Language transcription that h should represent aspiration (see UNESCO 1978). One may question why kh, ph, and th are aspirated in Chichewa and not ch? The point is that the introduction of t as a marker of aspiration in tch eliminates c as an orthographic symbol in Chichewa. At the same time it increases the number of symbols representing the sound /č/, from one to two. The new rule lacks consistency and also advocates a proliferation of symbols. This is at odds with the need for clarity and simplicity advocated by the African Reference Alphabet (UNESCO 1978). Young's (1949) comment that there is "neither logic nor linguistic expediency discoverable behind such a rule" still holds today.

Apart from reopening old vexed problems, the 1973 rules also introduced a new symbol, ŵ, to represent the bilabial fricative /β/. This symbol is used to contrast with

14) Evidence shows that there are no roots in Chichewa beginning with /r/. For a detailed review of this issue see Young (1949) and Kishindo (1990) and Mtenje (1980).

the semi-vowel w. This is represented as Rule 15 which states:

i. -ŵ may be used interchangeably with the Mu/A- class as Mu/Ŵa e.g. munthu - ŵanthu

ii. to differentiate between 'split' - kuŵaza and 'sprinkle' - kuwaza;

iii. it should be used in all words pronounced as the following list (A list follows).

A similar observation about the existence of the bilabial fricative /β/ in some Chichewa dialects was made by Atkins (1950) but he hastened to point out that there was not enough literature to warrant its introduction. The use of ŵ, like l/r is also highly inconsistent. Apart from the clear cases such as the example given in the sub rule (ii), where ŵ is indeed a phoneme, one cannot predict where else it is used. Listing words which use ŵ as the rule does, does not help either. It is doubtful whether the majority of Chichewa speakers have /β/ in their phoneme inventory.

Another rule introduced in 1973 was Rule 6 which was supposed to standardize the use of the semi-vowels w and y. The rule states:

(a) Write -w- in all adjectives formed from verbs in the singular of Mu-A, Mu-Mi classes and the emphatic and demonstrative pronouns and whenever the -w- sound is heard in speech sound, as in the following cases:

Chiwongo
Kuwononga
Msewu
Mbewu
Ndiwo

Exceptions

(oo)	(uu)
kufooka	kuuza
kuboola	kuusa
kubooka	kuungulumwa

Also where -w- stand in between consonants, followed by -aku- (infix), the semi-vowel (w) is elided and replaced by its contracted form "o" e.g.

kwakugona	kogona
ndi wodwala	ngodwala
mwakuipa	moipa

But

munthu wodala
mudzi woipa
Emphatic pronoun iwo 'they'

Ndiwo (ndi iwo)

Demonstrative pronouns awo, omwewo. The third person, plural possessive stem.

(b) W is written in all root-words where the sound is at all recognized, i.e. before a, e and i:

e.g. kuwanda
kuwira
kusowa
usiwa

(c) Y is written in all root-words where the sound is at all recognized and in all derivatives:

e.g. siya - siyira

(d) In verb stems with a and e in the first syllable, w or y always to be written

e.g. kuwanda
kuwamba
kuwala
kuyenda
kuyamba
kuyera

(e) Y not to be written initially in root-words before -i-, neither in their derivatives

e.g. imfa
imvi
kuimba
kuima
kuika

(f) The object concord in the plural of the Mu-A, LI-MA and U-MA classes is to be written either as -wa- or -a-

e.g. timawaona	timaaona
timawapha	tinaapha
adzawauza	adzaauza

(g) The object concord in the plural of the MU-MI class and the singular of the I-ZI class is to be written -i- not -yi-

e.g. timaiona (midzi)
ndaitsiriza (ntchito)

In all Rule 6 had twelve subrules. When it was revised in 1980 the subrules were reduced to ten and in 1990 to nine. By any standards this is a very arcane rule. There are too many exceptions as to make it vacuous. It is doubtful whether any ordinary user of the language can master it.

The 1973 Rules were revised and refined. The result was the Chichewa Orthography Rules 1980 Edition. There were no major changes in this edition. No changes were made to the thorny issue of l/r, and the same is true of the distinction between ch- and tch-. The ŵ and w distinction is also maintained. The 1980 Edition was revised again and issued as Chichewa Orthography Rules 1990 Revised Edition. There are no major changes in this edition just a few refinements of some of the rules.

How then did the users of Chichewa respond to these rules? Did they interpret and use them correctly? As part of its Chichewa coordinating activities the Board had as one of its responsibilities "interpreting the Chichewa Orthography". Through contact with some magazines and newspapers both in person and writing the Board discovered that the rules of 1980 Edition were (i) not yet officially introduced to the teachers on a large scale, no seminars had been held to this effect; (ii) the Chichewa reading books were not in conformity with the revised orthography rules; (iii) teachers and other users of the orthography found difficulties in applying Rules 2 (on the l and r), 6 (semi-vowel: w and y) and 15 (bilabial fricative ŵ).[15] These rules could not mastered by most editors judging by the recurrent lament of the Chichewa Board. This is not surprising because the said rules, have no predictive power. Thus one cannot easily predict when they apply and when they do not.

The problems of the orthography were no restricted to the newspaper/magazine editors. They were also observed in secondary schools. In his report for the 1985 Malawi School Certificate Examination, the Chief Examiner for Chichewa observed that:

> Every year, a report is given on the performance of candidates. It has always been hoped that teachers of Chichewa would make use of these reports. In spite of these observations reported over the past years candidates this year still showed weaknesses in their competence to write good Chichewa. The Chichewa orthography booklet currently in use must be seriously adhered to, if the candidates are to produce a substantial material that would be acceptable to examiners.[16]

The chief examiners comment is self-explanatory. Not much was done in the schools in order to produce proficiency in using the new orthography rules. Explanations for this may be legion. However one thing is certain, some of the rules

15) See "General Report on Chichewa Coordination December 1982". Ref No.CD/1/25/11.

16) Chief Examiner's Report, the Malawi Certificate and Testing Board MSCE Examination 1985, Subject 09, Chichewa. Ref C/2/4/5/II/54.

themselves are rather unclear; they lack specificity.

Structure

The Board also sought to prescribe the correct usage of language in terms of grammar and vocabulary. A list of the incorrect forms were issued at regular intervals. Some of the incorrect forms are represented below:[17)]

1 (i) Andigwetsa or wamgwetsa not ndagwetsedwa or wagwetsedwa; andiuza or wamuuza not ndauzidwa or wauzidwa.

(ii) Amati not amati kuti.
Aphiri amati tichoke pano not - amati kuti.

(iii) Malinga not malingana.

(iv) Ndinu/ndiwe yani? not ndinu/ndiwe ndani? (Ref. Rule 10(11) of 1980)

(v) Kusamala not kubasopa

(vi) Kupita not kuvaya

(vii) Kukonza (njinga, galimoto, wailesi) not kufotokoza (njinga, galimoto, wailesi).

(viii) Kuotcha (mbatata, chinangwa etc) not kuotcha nyumba, njerwa, tchire etc. Kutentha (nyumba, njerwa, tchire, etc).

Under "Sentences and phrases" the following examples are presented:

2(a) (i) kutsuka (mbale, galimoto, nsengwa, etc) not kuchapa mbale, galimoto, nsengwa, etc)

(ii) Pamene mwaimitsa galimoto paja mpoipa not paja pamene mwaimitsa galimoto mpoipa.

(iii) Zimene wanena zija or zija wanenazi nzoona not zija zimene wanena nzoona

(iv) Mtsinje wadzala not wadzadza

(v) Ambuye wake not wache

(b) i mtundu wa Amalawi not fuko la Amalawi.

ii kuŵerenga not kuwerenga.
iii kuŵala dzuwa not kuwala.
iv kulaŵa not kulawa.
v usiŵa not usiwa.
vi ŵana not wana.
} Ref. Rule No.15 of 1980

Surpirisingly, there is also a section called "Over Used Word", and a suggestion is made

17) See Chichewa Board's presentation at the Workshop on Production and Editing of Chichewa Materials for New Readers in Rural Areas from 1st to 9th September 1985 at the Parliament Buildings.

for alternatives:

(3) (i) Bambo why not tate
ii Azimayi why not Amayi
iii mtsikana why not msungwana
iv kuswera why not kutandala
v malume why not mtsibweni
vi ngongole why not chikwerete

In a section called "Singular and Plural (pl)" nouns there is the following prescription:

(4) (i) sipuni zambiri (pl) not masapuni
(ii) sitima (pl) not masitima
(iii) sitolo (pl) not masitolo
(iv) sikono (pl) not masikono
(v) sipanala (pl) not masipanala
(vi) sekondale (pl) not masekondale

What is interesting about this list is that no explanation is given as to why these forms are incorrect. In fact, they can be easily explained. In 1(i), for example, the form that has been ruled out is simply a passive form of the acceptable one. 1(ii) the supposed 'incorrectness' arises from the fact that the verb form -ti is homophonous for 'say' and 'that' 'Amati' (s/he said) 'amati kuti (s/he said that); (iii) malinga and malingana are dialectal variations so, too, is 1(vii) and (viii). The so-called incorrect forms in (v) is a loan from Zulu, and 1(vi) is a slang word for 'go' borrowed from English/Italian via.

The incorrect forms in 2(i), (iv) and (v) are dialectal variation. The variation is the one that is commonly used in Southern Malawi. 2(ii) and 2(iii) are issues of word order. Chichewa being a relatively free word order language, the legislation is here intended to fix the form. Those in (2b) are apparently violations of Rule 15 of the Chichewa Orthography Rules of 1980. Unfortunately this rule, as already pointed out, is so woolly that it is difficult to predict when it can be used.

Section (3) "Over Used Words" is curious in the sense that the Board does not say that the words are over used because they are more popular than the ones it thinks should be used. One would surmise here that members of the Chichewa Working Group are pushing their own variety of the language as the standard. All the preferred alternative forms are those used in the Central region, the home of the members of the Working Group i.e. Ntchisi, Dowa, Kasungu and Lilongwe.

In (4) one witnesses a desire to force all loanwords beginning with s into class 9/10 (the so-called I-ZI class). Loan words are notorious for their recalcitrance. They are not easily fitted in specific classes. The forms that are being rejected are the commonest

forms people use. Why class 9/10 then and not any other class? The Board itself explains this: "fortunately for us, about nouns beginning with s, there is no problem now because His Excellency the Life President directed in his lectures (1974 and 1975) that such nouns should be taken under I-ZI class".[18] This is an example of a linguistic problem being resolved by a presidential fiat. As for those areas where no such fiat is given then matters could be resolved by a "committee of some kind".

The fact that these rules have been largely ignored by the public suggests that prescriptive rules are, at best, inconsequential little decorations. The very fact that they are drilled shows that they are alien to the natural workings of the language system. As Pinker (1994, p.372) points out in his inimitable way, one can choose to obsess over prescriptive rules, but they have no more to do with human language than the criteria for judging cats at a cat show have to do with Mammailian biology.

The Radio[19]

The radio used to employ both didactic and entertainment programmes to encourage the use of Chichewa. An example of didactic programme was "Tiphunzitsane Chichewa" (Let us teach each other Chichewa) prepared and presented by members of the Chichewa Board. Listeners used to write to this programme to express their views about a particular expression, word or syntactic structure. Their views were then discussed by a panel headed by a member of the Chichewa Board. At the end of the programme a conclusion/solution was suggested and recommended to the listener. The tone of these discussions was legislative, setting out how the language ought to be used, not necessarily how it actually was used by the majority of the people. A solution apparently resented by many who saw the Board as having virtual veto power on vocabulary and syntactic innovations in Chichewa.

"Tiphunzitsane Chichewa" was supplemented by "Chichewa cha kumudzi" (Chichewa of the village). In this programme recordings from typical village situations were explained with the aim of broadening the scope of other Chichewa users especially those in the cities where multi-lingualism is the norm.

In brief then, Chichewa programmes could be categorised into purely musical (entertainment), didactic (non-formal education) and educational (schoool programmes). Thus every opportunity was exploited to bring standard Chichewa into every Malawian home. Even with this array of programmes, the Board was still not satisfied with the presenters' use of the language. Misuse of words was one area of concern for the Board. One word that the Board felt was misused was zakhali. The Executive Secretary of the Board was forced to write to MBC to explain, "the word is sometimes misapplied by some of the MBC announcers. They apply it in addressing a male. It should be noted that zakhali cannot be male; the word refers to a female (sic) only, my

18) See "General Report on Chichewa Coordination..."

19) At the time of Dr. Banda's (1964–1994) rule there was only one radio station controlled by the government.

father's sister and not my mother's brother (...). Please advise the announcers on correct usage."[20]

This admonition notwithstanding Chichewa in the eyes of the Board did not improve at the radio station. The wings of the spoken word proved hard to clip. By 1991 the Board was close to admitting that it had failed in this endeavour. In one of its meetings

> The Board expressed concern over the deteriorating situation of bad Chichewa on MBC by some announcers. The Board therefore requested management to exercise authority to correct the bad Chichewa since it was the responsibility of the Chichewa Board to do so. [Emphasis in original][21]

In order to play this role it was also agreed in the same meeting that examples of bad Chichewa usage should be "collected and those concerned informed to correct the bad Chichewa." However, the Board also realized that it was not enough to tell a native speaker of the language that his Chichewa is bad when he/she has been using it all along. As such the Board,

> expressed the need for training of Chichewa announcers in respect of correct pronunciation and good Chichewa usage which appear to be the biggest problems. There was a tendency for a casual and carefree outlook on the use of Chichewa on MBC. [Emphasis in original][22]

From these "concerns" of the Board it can be concluded that standardization through prescription has not been successful in the oral channel.[23] In everyday conversation, it is clear, it has been less effective. Indeed, the norms of colloquial, as against formal, Chichewa have not been codified in anyway.

The Print Media

The mandate of coordinating Chichewa in the country was interpreted as including "checking Chichewa language and spelling in newspapers and magazines and other publications". The Chichewa Working Group dealt with nine publications and the following is a sample of their comments.[24]

---

20) See "Letter from the Executive Secretary, Chichewa Board to the General Manager, MBC [Malawi Broadcasting Corporation]" dated 23 December, 1992, Ref. No.CD/4/25/11/49.

21) See minute 82/91 of 33rd Meeting of the Chichewa Board held on Friday 20th September, 1991 at the Board Secretariat, Ref. No.BM/2/2/17.

22) See minute 85/91 of 33rd Meeting of the Chichewa Board...

23) It is interesting to note that at the peak of legislation on the spoken word the interviewers at the radio station used to correct their interviewees even on live broadcasts.

24) See "A Brief Report on Progress of work to the Chichewa Board by the Chichewa Working Group". Not Referenced.

a. Moni Magazine (Montfort Press)
Both Chichewa language and spelling have improved a great deal in this magazine after contacting them both in writing and in person.

b. Kuunika (Nkhoma Synod Press)
This magazine has also improved in both Chichewa language and spelling. The editor had a problem; lack of the letter ŵ but this is now solved after we had approached the editor.

c. Za Achikumbi (Extension Aids)
This magazine has also improved in both Chichewa language and spelling after the Working Group had held a two day seminar with the Extension Aids officers in Lilongwe at their request.

The comments for the other publications are similar: improvement after the Working Group's visit. It would appear that the efforts of the Chichewa Group helped the print media to improve their language and spelling a great deal. It could be argued that standardization through prescription has had a modest success in this area.

The Dictionary

The dictionary was the raison d'etre for the Chichewa Board. When the Chichewa Working Group was constituted it was with the sole aim of compiling a dictionary. It may be asked why the dictionary was so overwhelmingly important to the President. There are a number of reasons. Linguistically, there was no doubt that a new Chichewa dictionary was needed. The extant ones, compiled by missionaries, were unsatisfactory, because they did not properly take into account the present day vocabulary of speakers of the language, both in the cities and villages. More important, however, was the political reason. Strictly speaking there was no Chichewa dictionary. All the existing dictionaries were Chinyanja dictionaries since Chichewa was considered a dialect of Chinyanja (see Kishindo 1990; Mchombo nd). Since Banda had elevated the dialect over the language to the status of national language, a dictionary would legitimize the dialect. As Banda had often said, Chichewa is not a dialect but a language with its own rules and grammar. Thus a lot of resources and effort went into the dictionary making exercise.

Apart from collecting material in every Chichewa speaking district in the country, study visits were made abroad. For example, in 1982 a team of two went to visit Oxford University Press' Oxford English Dictionaries Department. There they were attached to the world renown lexicographer Robert Burchfield and his colleagues "observing our methods of work, describing their own project the Chichewa dictionary — and discussing with us how best to proceed."[25] In 1985 another trip was undertaken to the Institute of Kiswahili Research, University of Dar es Salaam.[26] Here again they

were briefed on how dictionaries are compiled.

The dictionary, the flagship of the Board's work was ironically its own Achilles heel. In its twenty five years the Chichewa Working Group failed to complete the dictionary. The obvious question is why? A number of reasons avail themselves. First there was a shortage of staff. At the time of the Oxford visit only two people were engaged on it full time. Perhaps more importantly the two were not lexicographers per se neither were they trained in linguists. One of them described his academic qualifications thus, "my simple education qualifications range from 1949 standard 6 Government Certificate through JC [Junior Certificate] studies with Trans-Africa Cor. Col [correspondence college] in S.A. [South Africa], to GCE. 'O' level with distinction (pass) in NYANJA (now Chichewa in 1964)." As if to explain why then with this limited education he was thought to be qualified to be a member of the Board he opined; "[t]hroughout my career as a teacher, administrator and inspector, my particular interest was and still is "CHICHEWA". It is for this interest, I hope, that I was specially appointed by H. E. [His Excellency the President] in 1975 to be a Chichewa Worker in a position of Deputy Secretary.' [capitals in original].[27] The members of the Working Group were just retired primary school teachers ill equipped for the task at hand but full of enthusiasm for the language. As Burchfield pointed out in a letter to the Board Chairman:

> It seemed to me that they [the Board] would certainly need three young graduate students to assist them. These would be junior members of staff but they would need to have suitable qualifications in phonetics, and would also acquire a working knowledge of the fieldwork that would be necessary and techniques of drafting entries for the dictionary.[28]

Apart from the lack of expertise in the field of lexicography and linguistics, the editors did not have clearly defined powers to make necessary appointments, to determine policy and working procedure. At every stage they had to await explicit approval from the Board. The Board itself did not have the necessary powers either. The real power rested with Dr. Banda, the founder. Without his approval there would be no movement. For example, when the first draft of the dictionary was completed, the Board recommended that "[a] fair copy be submitted in due course to His Excellency the Life President for his approval and directive."[29] Much time and energy

25) See Robert Burchfield's letter to the Chairman of the Chichewa Board, A.E. Gadama, MP dated 29 October 1982. Ref. Biling. Gen/RWB/kcev.

26) See "Comprehensive Report on the Study Visit to the Institute of Kiswahili Research, University of Dar-es-salaam — Tanzania". Ref. No.VT/9/3/33.

27) See G.B. Kagona Banda (then Chichewa Board's Deputy Executive Secretary) letter to Sam A. Mchombo dated 6th April, 1982. This letter was the CV that the leader of the delegation (S.A. Mchombo) was to send to the Oxford Dictionaries Department.

28) See "Robert Burchfield's letter to the Chairman of the Board..."

was wasted in this procedure of referring to the President all the time.

It is perhaps with much frustration, exasperation and soul-searching that one of the compilers of the dictionary who was also the Board's Executive Secretary reported to the Board thus:

> Chichewa research for the purpose of the Dictionary compilation, therefore, is really a complicated task although unfortunately, it does not seem so to ordinary people. The staff is doing its best but the remaining part of the task is incalculable. The Board, therefore, will have to do something in order to achieve its goal. It will have to reinforce its staff.[30]

However, even when graduate staff were recruited as recommended by Burchfield the old guard was reluctant to let go of the dictionary. It viewed the dictionary as its own preserve to be jealously guarded.[31] The young graduates were channeled into other chores.

Perhaps with hindsight, it was realized that dictionary making does require some skill, and it comes as no surprise to learn that the Board's draft dictionary was rejected by the President, a man known for his insistence on high standards, as manifestly an inferior job as expected from a group of dilettantes.[32]

Modernization of Chichewa

The Chichewa Board was also interested in modernizing Chichewa. This process was tempered with the desire to purify the language. As a result borrowed forms from English which had been "Chichewaized" were frowned upon in favour of indigenous forms. For example a subcommittee agreed on the following alternatives for the borrowed forms.[33]

---

29) See Minute 8/80c of the Meeting of the Chichewa Board held in the Conference Room of the MCE Board in Zomba on 7th August, 1980. Ref. No.BM/2/2/5.

30) See "A Report on Chichewa Language Research" dated December 1982. Ref. No.VT/9/3/17.

31) The present author recalls the reluctance the Working Group showed when Prof. Charles Bird of the University of Indiana then visiting the University of Malawi offered to help with the dictionary.

32) The complexity of dictionary-making was acknowledged when a sub-committee of the Board "noted with regret that authoritative tonal analysis as a precondition for the Chichewa dictionary production was unwise and impracticable for until then there was nobody (...) who could undertake the task." [Emphasis in original]. See Minute 9/84 of the Minutes of the Meeting of the Appointments sub-committee of the Chichewa Board held at Chancellor College on 17th December, 1984. Ref No.MC/7/8/3.

33) See Minute 32/91 of the 3rd Meeting of the Chichewa Grammatical Terms, Orthography Rules, Translation and Chichewanization sub-committee held on Monday, 2nd September, 1991 at the Chichewa Board Secretariat. Ref. No.MC/7/4/Vol. 11/10.

English/Origin	Chichewaized Form	Alternative
apron	epuloni	chiphimbi
bandage	bandeji	mlezo/m'bambe
basin	beseni	chimbale
bed	bedi	kama
bread	buledi	chingwa/mkate
blanket	bulangete	gombeza/chimbwi
broek (Afrikaans)	buluku	mgandapansi
cup	kapu	komichi
curry	kale	chikasu
passport	pasipoti	chitupa/chiphaso
programme	pologaramu	dongosolo
spoon	sipuni	chikombe
telephone	telephone	lamya

Although the alternative forms were the Board's Working Group's preferred froms they were never in popular parlance. In fact, in certain cases borrowing has been motivated by the need to differentiate terms that were not differentiated before, or the desire to be more precise by avoiding vague terms. Usually, shades of meaning between the terms used are distinguished and a choice is made between the native and the loan word. The general trend appears to be that the indigenous term refers to an "indigenous" object, and the loan to an "exotic", or imported type.

For example, buledi (English "bread") has a local variant mkate. Mkate is used to refer to the locally made type of bread (i.e. bananas mixed with maize flour and steamed) while buledi refers to the type made of wheat. Supuni ("spoon") is the imported metal type and chikombe refers to the traditionally made wooden spoon. The word pasipoti ("passport") refers to the official government travel document while chitupa/chiphaso is any kind of permit, dongosolo is a list of events while pologaramu is thought of in terms of a radio or television programme. Thus what is offered by the Board as the alternative does not have the exact identical meaning as the loan.

As part of the modernization process the Chichewa Board also embarked on developing Chichewa grammatical terms. Hitherto, Chichewa used to use English Chichewaized forms. Thus a noun was "nauni", verb was "verebu", adjective was "adijeketive" and so on. After much work and consultations the Chichewa Board isssued the Chichewa Grammatical Terms 1991 Edition. These are the terms currently used in teaching Chichewa Grammar. The Chairman of the Board in the introduction to the text has this to say:

> The Chichewa Grammatical Terms contained in this booklet reflects a clear and definite translation from the Chewanized English Grammatical terms which have gone under revision and refinement. In translating the grammatical terms

effort has been made to shorten them for ease of application. The grammatical terms also incorporate aspects of common usage of Chichewa. A Chichewa book explaining all the grammatical terms will also be published in due course.[34]

Unfortunately the Chichewa book was never published.[35] Be that as it may, the publication of the Chichewa Grammatical Terms was a major breakthrough in the efforts to modernize Chichewa. It illustrates the point that given the resources and the political will African languages can indeed be developed and modernized. As was the practice these terms were submitted to the President and they were approved.

However, the area which the Board signally failed was that of scientific terminology. There is an influx of borrowed scientific terms from English. When one turns to the Chichewa sections of newspapers or listens to radio programmes, one notices a preponderance of loan words in issues dealing with science, technology, economics, etc. In these areas the writer, the radio announcer and the teacher was and still is left to his own devices. The Board remained uncharacteristically silent in this area; perhaps silently accepting its limitations. To the non-bilingual speaker though this plethora of loan words can be bewildering. The unfortunate thing is that this indiscriminate borrowing obstructs communication (see Kishindo 1987 for details).

In addition, efforts to translate or Chichewaize titles, official ranks and professions also came to nothing. Thus English terms are still being used today.

Evaluation

The Chichewa Board was dissolved in 1995 following the failure of Dr. Banda to win the elections of 1994. In its place the new United Democratic Front government established the Centre for Language Studies, a research Centre of the University of Malawi. With hindsight it can now be asked, what were the achievements of the Board? One could argue that its achievement was to establish, through codification, a much more widespread consciousness of a relatively uniform "correct" Chichewa than had been possible before. Subsequent modest advances in education have continued to ensure that the public have looked to the relatively standardized written form as the model of correctness, despite the fact that spoken Chichewa has continued to change. What was established in the words of Milroy and Milroy (1984, p.36), was the ideology of standardization to which virtually every speaker now subscribes to in principle. Clearly, the Board was answering the need of a developing nation for reliable communication. And in this it was generally successful.

The Board was, however, much less successful in preventing changes in the spoken language as the criticism of the MBC announcers has shown. The spoken language

34) See the introduction to the Chichewa Grammatical Terms, p.i.

35) It is a glaring irony that publications meant to assist Chichewa writers/speakers were invariably published in English.

continues to be the subject of quite extensive variation and change. There are distinct difference for example, between the Chichewa spoken in the cities and those of the villages, that of the youth and that of adults.

The language planning activities at this stage were largely part of the political agenda and prescriptive in intent conforming to what Whiteley (1972) has called the ideological component of planning which required minimum technical expertise. While these activities had undoubtedly been attended with some success; the rhetoric was not balanced by any detailed plan for the development of Chichewa (see Kishindo 1996, 1998). In fact, if there were any plans at all then they were in the mind of the Founder which ordinary mortals could not access. The personnel involved in planning, like their colonial predecessors, were largely non-linguists, who for one reason or another had some reputation for being native speakers of the language, by virtue of zeal, occupation, or commitment, were held to be suitable agents. This is not to say that these were not suitable qualifications at the time, or that some people had not, at some stage or other, received some linguistic training, but rather that linguistic considerations were rarely involved in what was after all, largely a political operation.

Conclusion

This paper has, among other things, discussed the role of Dr. Banda in the development of Chichewa. The interest he had in the language led him to champion Chichewa as a national language and found the Chichewa Board. It has also examined the ideology of standardization which the Chichewa Board pursued through prescription. The paper has observed that standardization through prescription has clearly been more successful in the written form than the oral one. Indeed, the norms of colloquial, as against formal Chichewa, have not been codified to any extent. The Chichewa Board also failed in the modernization process particularly in the area of scientific terminology. Chichewa is still inundated with English scientific terms. However, the ideology of standardization has been inculcated and the idea of "correct" usage is well embedded in the users of the language. This could be the lasting contribution of the Chichewa Board.

References

Atkins, G. 1950. Suggestions for amended spelling and word division in Nyanja. *Africa* 20: pp.200–218.

Bolinger, D. 1980. *Language: The Loaded Weapon*, London: Longman.

Chichewa Board. 1973. *New Chichewa Orthography Rules*. Mimeographed.

———. 1980. *Chichewa Orthography Rules* (1980 Edition). Zomba: Government Printer.

———. 1990. *Chichewa Orthography Rules* (Revised Edition). Zomba: Montfort Press.

———. 1991. *Chichewa Grammatical Terms* (1991 Edition). Zomba: Montfort Press.

Das Gupta, J. 1970. *Language Conflict and National Development*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Edwards, E. 1994. *Multilingualism*. Harmondsworth: Penguin Books.

Haugen, E. 1966. Linguistics and Language Planning. *Sociolinguistics: Proceedings of UCLA Sociolinguistics Conference*, Los Angeles and Lake Arrowhead, California, 1964 ed. W. Bright, The Hague: Mouton. pp.50–71.

Heyd, U. 1954. *Language Reform in Modern Turkey* (Oriental Notes and Studies, 5) Jerusalem: The Oriental Society.

Kishindo, P.J. 1987. The State of Scientific Terminology in Chichewa. *International Symposium on Professional Terminology in African Languages. Theory and Practice. Logos* 7, 2, pp.103–113.

———. 1990. An Historical Study of Spontaneous and Planned Development of Chichewa. In I. Fodor and C. Hagege (eds) *Language Reform History and Future* Vol 5. Hamburg: Helmut Buske, pp.59–82.

———. 1996. Dr. H. Kamuzu Banda's Language Policy: A Study in contradictions. *AAP48* universitat zu Koln: Insitut fur Afrikanistik, pp.55–79. Also in *UFAHAMU: Journal of the African Activist Association* XXV 1997, 1, pp.84–106.

———. 1998. Politics of Language in Contemporary Malawi. In K.M. Phiri and K. Ross (eds) *Democratization in Malawi. A Stocktaking*. Blantyre: CLAIM. pp.252–280.

Mchombo, S.A. (nd). Chichewa/Chinyanja. Ms. Department of Linguistics, University of California at Berkeley.

Milroy, J. and Milroy, L. 1985. *Authority in Language: Investigating Language Prescription and Standardization.* London: Routledge and Kegan Paul.

Mtenje, A.D. 1980. Aspects of Chichewa Derivational Phonology and Syllable Structure Constraints. Unpublished MA thesis, University of Southern Illinois-Carbondale.

Phiri, K.M. 1995. Dr. H. Kamuzu Banda: His cultural Philosophy, and its Implications for the "new" Malawi, Seminar on Social Change in Malawi, Chancellor College, University of Malawi, Zomba, 24–25 March.

Pinker, S. 1994. *The Language Instinct*. New York: William Morrow and Co. Inc.

Quirk, R. 1982. *Style and Communication in the English Language*. London: Edward Arnold.

UNESCO. 1981. *African Languages: Proceedings of the meeting of experts on transcription and harmonization of African Languages*. Niamey (Niger), pp.17–21 July 1978.

Whiteley, W.H. 1973. *To Plan is to Choose: Hans Wolf Memorial Lecture, 7 April 1972*. University of Indiana, Bloomington: African Studies Program.

Watkins, M.H. 1937 [1996]. *A Grammar of Chichewa*. Supplement to *Language 24*. New York: Kraus Reprint Corporation. Philadelphia.

Young, C. 1949. A Review of *A Practical Approach to Chinyanja with English-Nyanja Vocabulary* by T.D. Thomson. *Africa* 19: pp.253–254.

【ERRATA】

COVER: CONTENTS	Incorrect=	Linguistics in the Corridor: A Review of Research on the Bantu Languages of South-west Tanzania, North-east Zambia, and North Malawi ....SWILLA, Imani N. & WALSH, Martin T.
	Correct=	Linguistics in the Corridor: A Review of Research on the Bantu Languages of South-west Tanzania, North-east Zambia, and North Malawi ....WALSH, Martin T. & SWILLA, Imani N.

Page 275 Title: Authors	Incorrect=	SWILLA, Imani N. University of Dar es Salaam WALSH, Martin T. University of Greenwich
	Correct=	WALSH, Martin T. University of Greenwich SWILLA, Imani N. University of Dar es Salaam

The JAAS Editorial Committee sincerely apologize to Dr. Martin T. Walsh and Dr. Imani N. Swilla for any inconvenience caused by the above errors on our last issue (JAAS No.61, March 2001).

執 筆 要 領

1. 原稿には,「ジャーナル原稿」と朱書し,論文,資料・研究ノート,書評・紹介の区別をしるす。
2. 原稿はプリントアウトしたものを正本とする。用紙はA4を用いる。
   日本語(中国語)の場合,手書きによる投稿も認める。その場合,横書き原稿用紙(20字×20行)を用いること。
3. 投稿にあたっては,パソコンのフロッピーディスクを同封することが望ましい。
   *ディスクを送る場合は,IBM 9 sector format の 2HD 1.44 MB (High Density), 2DD 720 KB (Double Density) または Macintosh Format (2HD 1.44 MB, 2DD 800 KB) にし,ディスクのラベルに「IBM Format」あるいは「Mac Format」と明記する。
   *文書はテキストファイル (plain text file, ASCII file) を原則とし,MS Word や TeX ソースは認めない。
4. 欧文の場合,タイプライターによる投稿も認める。その場合,ダブルスペースでタイプし,イタリック体の箇所には下線をほどこすこと。
5. 表題,執筆者名及びその所属は,別紙に一枚にまとめる。その他の箇所には,執筆者名及び所属を記載しないこと。日本語及び中国語の原稿については,表題の下に欧文訳を必ず添えた上,執筆者名及びその所属を日(または中)欧両文で明記する。
6. 写真,図表などにはキャプションを添え,希望の挿入箇所,大きさを指定すること。
7. 特殊字母・符号使用の原稿については,特殊字母・符号の一覧表を別に添えること。
8. 日本語の論文,資料・研究ノートには,500語以内の外国語(英語,フランス語,ドイツ語,中国語)のレジュメを附して,同時提出すること。日本語以外の言語を用いた場合は,500語以内の英文レジュメを附すること。
9. 日本語の論文,資料・研究ノートには,キーワード(日本語と英語それぞれ5語)を附して同時提出のこと。日本語以外(英語,フランス語,ドイツ語,中国語)の場合には,英語5語のキーワードを附すること。
10. 論文,資料・研究ノートの場合は,章,節などの目次を本文冒頭にしるす。
11. 注は通し番号にし,番号順にまとめて別冊にする。注の番号は一字分の肩に n) の形で入れる。
12. 他著作を引用・言及する場合,注には〔例〕のように著者名,年数,ページ数のみをしるす。
    〔例〕 Sapir 1925, pp.40–41.
    今西 1972, p.25
    *同一著者の著作物が1年に2点以上ある場合 1975a, 1975b のように a, b で区別する。
13. 文献名は稿末にまとめて参考文献の一覧をつける。その場合,著者の姓のアルファベット順に列記するか,または文献を言語別に分けてわかりやすく並べる。記載方法は,下記の〔例〕にしたがう。
    〔例〕単行本
    Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Henry Holt & Co.
    〔例〕雑誌
    前嶋信次 1966「テリアカ考—文化交流史上から見た一薬品の伝播について」『史学』38–4, pp.1–39.
    Sapir, Edward. 1925. "Sound Pattern in Language." *Language*, 1, pp.37–51.
    〔例〕論文集掲載論文
    Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process." *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi, C.W. Arensberg and H.W. Pearson, eds.), pp.243–270, Chicago: The Free Press.
    白鳥庫吉 1944「拂菻問題の新解釈」『白鳥博士記念論文集(東洋学報29–3・4)』pp.407–500, 東洋協会学術調査部。
    *同一論文集中の論文を多数引用している場合,その論文集自体を単行本の扱いで見出しとして出し,各論文には次のような要領で論文集を示す方式を取ってもよい。
    Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process." *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi *et al.* eds.), pp.243–270.
14. 書評・紹介の場合は,本文冒頭に本,論文についてのデータをなるべく詳しくあげる。
    〔例〕
    Joseph H. Greenberg: *Anthropological Linguistics: An Introduction* (Random House Studies in Anthropology, AS8). New York: Random House, 1968, 212pp., US$3.95.
    Muḥammad 'Abd al-Qādir: *Ta'rīkh al-Yaman al-Qadīm*〔古代イエメン史〕, Beirut: al-Mu'assasāt al-'Arabiyya li'l-Dirasāt wa'l-Nashr. 1973, 291pp., Lira 8.
    西田龍雄『緬甸館譯語の研究—ビルマ言語學序説』(華夷譯語研究叢書Ⅱ) 京都 松香堂 1972, 394pp. 6,000円。
15. 校正は最低限,初校を著者校正とする。なお,校正時の手直しは,誤植及び字句の修正にとどめること。

Journal of Asian and African Studies

Published by the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

The Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, a national government research institution affiliated with the Tokyo University of Foreign Studies (TUFS), has worked to implement and stimulate research on the languages, linguistics, history, cultural anthropology and ethnology of Asia and Africa since its foundation in 1964. It was the first Inter-University Institution to be designated in the Humanities and social sciences in Japan, and has been engaged in the computerization of data in Asian and African languages and cultures since the 1970s. This area of speciality has been strengthened further by the establishment of the Information Resources Center in 1997, the main purpose of which is to process information resources pertaining to the languages and cultures of Asia and Africa.

The ***Journal of Asian and African Studies*** welcomes contributions in Japanese, English, French, German and Chinese that fall within the following three categories; Articles, Source Materials and Remarks, and Reviews. Articles should be based on original research, those devoted to new interpretations and new questions are particularly encouraged as are substantial review articles on particular areas of scholarship. For more details on our publishing requirements see Guidelines for Authors.

Manuscript Review Procedure: All articles, contributions received are sent to referees. Favorably evaluated submissions are generally published six to twelve months after the final manuscript has been received.

Guidelines for Authors

To submit a manuscript for consideration, send one copy to: The Editorial Committee, Journal of Asian and African Studies, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 4 chome, Nishigahara, Kita-ku, Tokyo, 114-8580, Japan*. Articles are selected by peer review. Authors sending manuscripts to the journal should not simultaneously submit them to another journal, nor should manuscripts have been published elsewhere in substantially similar form or with substantially similar content.

Manuscripts must be either printed or typewritten, on standard A4 size paper, on one side only with wide margins all around. Double space everything, including block quotations, footnotes, Bibliography and figure captions. Those who write with computers or word processors are encouraged to send a disk version together with the manuscript (disk format is given below). Authors should clearly indicate on the first page of the manuscript to which category their submission is intended, by writing in red ink one of the following, Article, Source Materials and Remarks, or Reviews. For manuscripts indicated as Articles and Source Materials, contributors should supply a table of contents to go before the text. The title of the submission, author's name and institution of affiliation should be given only on a separate title page, and should not appear anywhere else.

Footnotes: Footnotes should be numbered consecutively throughout the manuscript, and printed or typewritten on separate sheets from the main text. They should be indicated by raised numbers in the text. Citations to publications should be placed in the footnotes as follows:

Taylor 1976, pp.189–190.

Full references should be given in a separate bibliography which follows the text. Entries should be made as shown below:

Taylor, Robert H. 1976. "Politics in Late Colonial Burma: The Case of U Saw." *Modern Asian Studies*, 10, pp.161–193.

Abstracts: Authors of manuscripts designated as Articles and Source Materials and Remarks must supply an abstract in English of not more than 500 words. All manuscripts, no matter to which category they belong or which language they are written (except Japanese), must include a list of five keywords in English.

Tables and Figures: Authors should indicate the sizes of tables and figures with clear instructions to show where they are to appear in the text. Captions for all tables and figures should also be provided.

Special Scripts: Any special linguistic or other scripts/signs should be listed on separate sheets.

Reviews: Full data of books or articles to be reviewed should be indicated in the following style:

Benedict Anderson: *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition). London: Verso, 1991, 224pp.

Disk Format: We only accept disks that contain plain text-files of the manuscript. The file should not contain any private/corporate defined characters. Characters that cannot be represented by the standardized character sets should be so marked, or simply left blank. Software-dependent file formats such as MS Word or TeX sources are not accepted. Disks should be in IBM 9 sector format (2HD 1.44MB [High Density], 2DD 720KB [Double Density]), or Macintosh Format (2HD 1.44MB, 2DD 800KB).

Proofs: Authors are requested to read the first proofs. Corrections should be limited to typographical errors only.

Any manuscript that does not conform to these guidelines may be rejected. As a rule, manuscripts submitted will not be returned to the authors. Also, the Editorial Committee reserves the right to reproduce and transmit by electronic and other means (e.g. on www pages) all contributions that are published in the ***Journal of Asian and African Studies***. The ***Journal of Asian and African Studies*** (ISSN 0387-2807), is published twice a year in March and September by the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 4 chome, Nishigahara, Kita-ku, Tokyo, 114-8580, Japan*.

Back Issues: Information about availability of back issues may be obtained from the Editorial Committee (address below).

Address changes, manuscripts for publication, inquiries, and all other communications should be sent to the following address: The Editorial Committee, Journal of Asian and African Studies, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 4 chome, Nishigahara, Kita-ku, Tokyo, 114-8580, Japan* FACSIMILE: 81-3-5974-3838 URL: http://www.aa.tufs.ac.jp

---

*Please note the following two changes:

(1) On April 1, 2002, the Institute will be renamed as: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Its abbreviated name continues to be ILCAA.

(2) In January 2002, ILCAA will move to the following new address: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan.

Its new contact phone number will be 81-42-330-5111.